

京都府遺跡調査報告書

第 16 冊

千代川遺跡

1 9 9 2

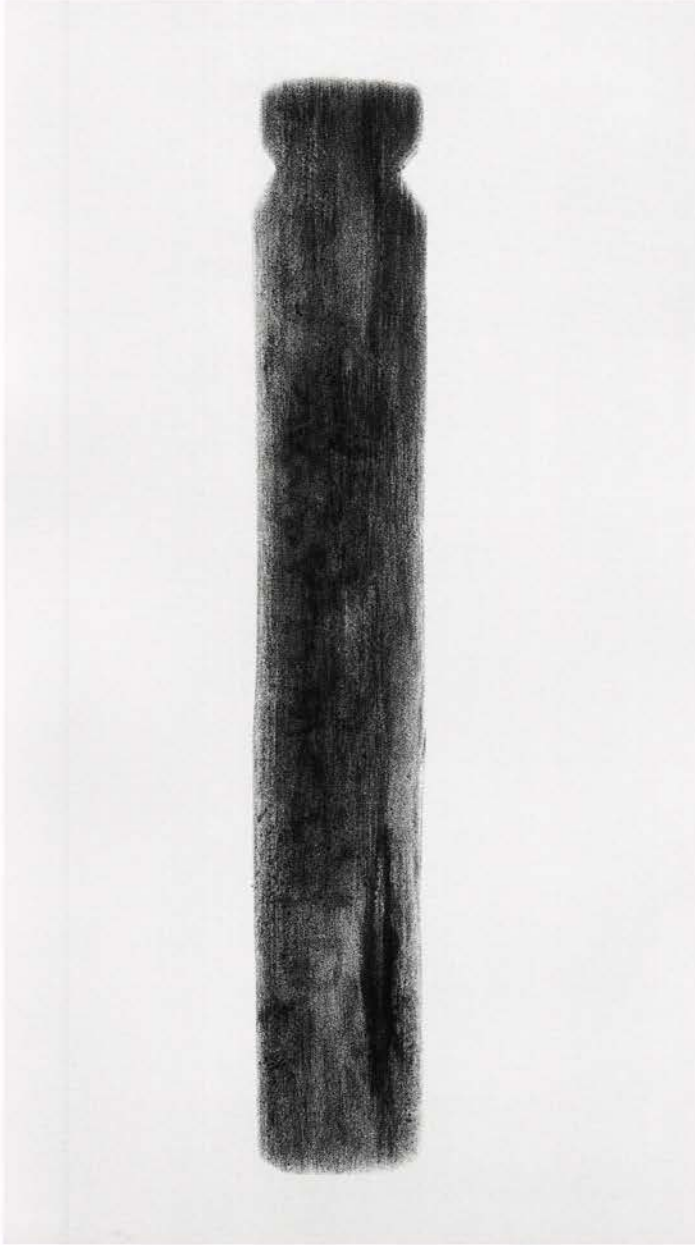
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1



千代川遺跡丹波国府推定地全景（空中写真）
建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所撮影

卷頭図版 2



承和七年銘木簡

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この報告書に収められた千代川遺跡も、国道9号バイパスの建設に伴い発掘調査を行った遺跡で、千代川町一帯に広がる広範囲な千代川遺跡の一画で、丹波国府推定地の西端をかすめる、約20,000m²について調査を行いました。この調査では、弥生時代から鎌倉時代にかけての様々な遺構や多数の遺物が見つかりましたが、とりわけ奈良・平安時代の建物跡や石帯・緑釉陶器・墨書土器など、官衙跡に関連した遺構・遺物を多数検出しています。

これまで、当調査研究センターでは、『京都府埋蔵文化財情報』・『京都府遺跡調査概報』を通じて、この遺跡の調査成果を紹介してまいりました。これらの刊行物とあわせまして、本書を関係各位の参考に供され、地域の文化の発展に少しでも寄与すれば幸いです。

千代川遺跡の調査にあたりましては、発掘調査を依頼された建設省近畿地方建設局をはじめ、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会などの関係諸機関の御協力を受けただけでなく、極暑・極寒の中で多くの方々が熱心に各作業に従事していただきました。ここに記して、感謝したいと存じます。

平成4年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

例 言

- 1 本書は、京都府亀岡市千代川町に所在する千代川遺跡丹波国府推定地の発掘調査報告書である。
- 2 千代川遺跡丹波国府跡の調査は、国道9号バイパス関連遺跡として、建設省近畿地方建設局の依頼を受け、昭和59年から昭和63年まで、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって実施した。
- 3 発掘調査にあたっては、当調査研究センター調査第2課調査第2係長水谷壽克、同調査員森下 衛、小池 寛、鶴島三壽が担当して行った。
- 4 本書に掲載した写真は、遺構を主に森下 衛、小池 寛、鶴島三壽が撮影し、遺物写真は高橋猪之介氏に委託したものと、田中 彰が撮影したものがある。空中写真は、株式会社朝日航洋・アジア航測株式会社・写植エンジニアリング株式会社に委託した。また、遺構平面図の一部は、空中写真をもとに委託した。
- 5 本書の執筆は、水谷壽克、森下 衛、鶴島三壽、中川和哉、柴 暁彦が分担し、末尾に明示した。編集は、後藤尚規の協力を得て、鶴島三壽・土橋 誠が行った。

本文目次

はじめに	1
第1章 地理的環境と歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査経過と概要	8
第1節 調査に至る経緯	8
第2節 調査の概要	12
第3章 遺構・遺物	30
第1節 縄文時代の遺構	30
第2節 縄文時代の遺物	31
第3節 弥生時代の遺構	34
第4節 弥生時代の遺物	37
第5節 古墳時代の遺構	42
第6節 古墳時代の遺物	45
第7節 奈良～平安時代の遺構	51
第8節 奈良～平安時代の遺物	63
第9節 鎌倉時代の遺構	78
第10節 鎌倉時代の遺物	85
第11節 鎌倉時代以降	94
第4章 考察	99
第1節 時期別総括	99
第2節 緑釉陶器	106
第3節 墨書土器	109
第4節 丹波国府の移転―「丹波国吉富荘絵図写」をめぐって―	112

挿 図 目 次

第1章	
第1図 調査地位置図	3
第2図 調査地周辺遺跡分布図	4
第2章	
第3図 千代川遺跡調査地位置図	8
第4図 土層断面図	13
第5図 調査区配置図	14
第6図 遺構平面図(1)	21
第7図 遺構平面図(2)	23
第8図 遺構平面図(3)	25
第9図 遺構平面図(4)	27
第3章	
第10図 溝S D12123実測図	30
第11図 弥生時代遺構配置図	33
第12図 竪穴式住居跡S H10099実測図	34
第13図 掘立柱建物跡S B10163実測図	34
第14図 古墳時代(Bブロック)遺構配置図	42
第15図 6区土坑群実測図	43
第16図 Aブロック遺構配置図	51
第17図 Bブロック遺構配置図	53
第18図 掘立柱建物跡S B15004実測図	55
第19図 溝S D22100・22101土層断面図	57
第20図 Cブロック遺構配置図	57
第21図 井戸跡S E22001実測図	58
第22図 Dブロック遺構配置図	60
第23図 Bブロック出土墨書土器実測図	67
第24図 石帯実測図	75
第25図 木簡実測図	76

第26図	Aブロック(4区)遺構配置図	78
第27図	掘立柱建物跡S B10167実測図	79
第28図	Bブロック(15区)遺構配置図	80
第29図	Cブロック遺構配置図	81
第30図	柱穴P037遺物出土状況	82
第31図	Dブロック(35区)遺構配置図	83
第32図	掘立柱建物跡S B35002実測図	83
第33図	井戸S E11019出土木製品実測図	93
第34図	Aブロック(1・4区)素掘り溝実測図	94
第35図	Bブロック(15区)素掘り溝実測図	95
第36図	Cブロック(12区)素掘り溝実測図	95
第37図	Cブロック(13・29区)素掘り溝実測図	96
第38図	Dブロック(34・35区)素掘り溝実測図	97

第4章

第39図	弥生時代遺構概観図	99
第40図	古墳時代遺構概観図	100
第41図	奈良・平安時代遺構概観図	102
第42図	鎌倉時代遺構概観図	104
第43図	施釉陶器出土地区分布図	106
第44図	緑釉陶器底部実測図	108
第45図	吉富荘絵図写	114
第46図	吉富荘比定図	115
第47図	丹波国府推定地小字図	116
第48図	屋賀・池尻周辺条里図	117
第49図	池尻地区小字図	118

図 版 目 次

- 卷頭図版 1 千代川遺跡丹波国府推定地全景(空中写真)
- 卷頭図版 2 承和七年銘木簡
- 図版第 1 亀岡盆地古地図(明治21年；京阪仮製地図)
- 図版第 2 掘立柱建物跡 S B 10169・S B 10170・S B 10172、柵列 S A 10172実測図
- 図版第 3 掘立柱建物跡 S B 12071～12074、柵列 S A 12080実測図
- 図版第 4 掘立柱建物跡 S B 12104～12106実測図
- 図版第 5 掘立柱建物跡 S B 12107～12110実測図
- 図版第 6 掘立柱建物跡 S B 14001・S B 14002実測図
- 図版第 7 掘立柱建物跡 S B 15005・S B 15006・S B 32001～32003実測図
- 図版第 8 溝 S D 21001土層断面図・断ち割り土層断面図
- 図版第 9 掘立柱建物跡 S B 34001・S B 34002実測図
- 図版第 10 掘立柱建物跡 S B 34003・S B 34004実測図
- 図版第 11 掘立柱建物跡 S B 10166・S B 10168・S B 10171実測図
- 図版第 12 井戸跡 S E 10116実測図
- 図版第 13 掘立柱建物跡 S B 15001～S B 15003・S B 15007・S B 15008実測図
- 図版第 14 掘立柱建物跡 S B 11001・S B 12002実測図
- 図版第 15 掘立柱建物跡 S B 12001実測図
- 図版第 16 井戸跡 S E 11019・S E 11039実測図
- 図版第 17 掘立柱建物跡 S B 35001・S B 35003実測図
- 図版第 18 井戸跡 S E 35040実測図
- 図版第 19 縄文土器実測図
- 図版第 20 竪穴式住居跡 S H 10099出土遺物実測図
- 図版第 21 溝 S D 12131出土遺物実測図(1)
- 図版第 22 溝 S D 12131出土遺物実測図(2)
- 図版第 23 溝 S D 12134出土遺物実測図
- 図版第 24 溝 S D 12121出土遺物実測図(1)
- 図版第 25 溝 S D 12121出土遺物実測図(2)
- 図版第 26 自然流路跡 S R 16001出土遺物実測図(1)

- 図版第27 自然流路跡 S R 16001出土遺物実測図(2)
- 図版第28 自然流路跡 S R 16001出土遺物実測図(3)
- 図版第29 自然流路跡 S R 16001出土遺物実測図(4)
- 図版第30 自然流路跡 S R 16001出土遺物実測図(5)
- 図版第31 6区土坑出土遺物実測図(1)
- 図版第32 6区土坑出土遺物実測図(2)
- 図版第33 5～7区出土遺物実測図
- 図版第34 Aブロック(4区)出土遺物実測図(1)
- 図版第35 Aブロック(4区)出土遺物実測図(2)
- 図版第36 Aブロック(1・4区)出土遺物実測図
- 図版第37 Bブロック出土遺物実測図(1)
- 図版第38 Bブロック出土遺物実測図(2)
- 図版第39 溝 S D 21001出土遺物実測図
- 図版第40 井戸跡 S E 22001、溝 S D 22100・S D 23010出土遺物実測図
- 図版第41 Cブロック(23区)出土遺物実測図
- 図版第42 Dブロック出土緑釉・灰釉陶器実測図
- 図版第43 Dブロック(32区)出土遺物実測図
- 図版第44 Dブロック(33・34区)出土遺物実測図
- 図版第45 Aブロック(4区)出土遺物実測図
- 図版第46 Bブロック出土遺物実測図
- 図版第47 Bブロック(16区)出土遺物実測図
- 図版第48 Cブロック(11・12区)出土遺物実測図
- 図版第49 井戸跡 S E 11019出土遺物実測図
- 図版第50 井戸跡 S E 11039・柱穴出土遺物実測図
- 図版第51 Cブロック(23区)出土遺物実測図
- 図版第52 Dブロック(23・27区)出土遺物実測図
- 図版第53 Dブロック(35区)出土遺物実測図
- 図版第54 石器実測図(1)
- 図版第55 石器実測図(2)
- 図版第56 石器実測図(3)
- 図版第57 石器実測図(4)
- 図版第58 石器実測図(5)

- 図版第59 木器実測図(1)
- 図版第60 木器実測図(2)
- 図版第61 木器実測図(3)
- 図版第62 木器実測図(4)
- 図版第63 木器実測図(5)
- 図版第64 墨書土器実測図(1)
- 図版第65 墨書土器実測図(2)
- 図版第66 墨書土器実測図(3)
- 図版第67 (1)千代川遺跡調査地遠景(南からの空中写真；12次)
(2)同上(北からの空中写真；14次)
- 図版第68 (1)千代川遺跡調査地遠景(北からの空中写真；13次)
(2)国府推定地北辺全景(西からの空中写真；13次)
- 図版第69 (1)10次調査地全景(南からの空中写真)
(2)同上(北からの空中写真)
- 図版第70 (1)12次調査地全景(東からの空中写真)
(2)同上(南からの空中写真)
- 図版第71 (1)1区全景(北から)
(2)1区掘立柱建物跡S B 10163完掘状況(北から)
- 図版第72 (1)2区全景(南から)
(2)2区溝S D 10038遺物出土状況(西から)
- 図版第73 (1)3区全景(南から)
(2)3区土坑S K 10106完掘状況(北から)
(3)3区土坑S K 10087完掘状況(北から)
- 図版第74 (1)3区竪穴式住居跡S H 10099遺物出土状況(南から)
(2)同上 完掘状況(南から)
- 図版第75 (1)4区全景(北から)
(2)4区掘立柱建物跡S B 10169完掘状況(北から)
- 図版第76 (1)4区井戸跡S E 10116完掘状況(北から)
(2)4区井戸跡S E 10116瓦器椀出土状況(東から)
- 図版第77 (1)5区弥生時代遺構面全景(東から)
(2)5区奈良時代遺構面全景(北東から)
- 図版第78 (1)5区掘立柱建物跡S B 12074検出状況(西から)

- (2) 5区掘立柱建物跡 S B 12071・12072、柵列 S A 12080 検出状況(西から)
- 図版第79 (1) 6区全景(南東から)
(2) 6区掘立柱建物跡 S B 12107 検出状況(西から)
- 図版第80 (1) 6区掘立柱建物跡 S B 12104 検出状況(南から)
(2) 6区土坑 S K 12087～12098 検出状況(南から)
- 図版第81 (1) 6区土坑 S K 12076 検出状況(北から)
(2) 6区土坑 S K 12076 完掘状況(西から)
- 図版第82 (1) 7区全景(南から)
(2) 7区溝 S D 12119・12123、土坑 S K 12084 検出状況(南東から)
- 図版第83 (1) 7区溝 S D 12123 完掘状況(西から)
(2) 7区溝 S D 12121 遺物出土状況(西から)
- 図版第84 (1) 7区土坑 S K 12118 検出状況(南から)
(2) 同上 完掘状況(南から)
- 図版第85 (1) 8区全景(西から)
(2) 9区全景(南から)
- 図版第86 (1) 10・11区全景(上方が西；空中写真)
(2) 11区全景(北から)
- 図版第87 (1) 11区掘立柱建物跡 S B 11001 完掘状況(北から)
(2) 11区木製鏝出土状況
- 図版第88 (1) 11区井戸跡 S E 11019 全景(北から)
(2) 11区井戸跡 S E 11019 遺物出土状況(南から)
- 図版第89 (1) 12区掘立柱建物跡 S B 12001 検出状況(南から)
(2) 13区素掘り溝完掘状況(北から)
- 図版第90 (1) 14区掘立柱建物跡 S B 14001 検出状況(南東から)
(2) 15区掘立柱建物跡 S B 15002・15003 検出状況(南西から)
- 図版第91 (1) 15区掘立柱建物跡 S B 15005・15006 検出状況(北から)
(2) 16区自然流路跡 S R 16001 完掘状況(西から)
- 図版第92 (1) 18区全景(北から)
(2) 21区 S D 21001(東から；13次)
- 図版第93 (1) 21区溝 S D 21001 完掘状況(西から；14次)
(2) 22区井戸跡 S E 22001 遺物出土状況(東から)
- 図版第94 (1) 23区全景(北から)

- (2)29区全景(南から)
- 図版第95 (1)30区全景(上方が西；空中写真)
(2)30区断ち割り部土層堆積状況(西から)
- 図版第96 (1)32区全景(南から)
(2)32区掘立柱建物跡 S B 32001～32003完掘状況(北から)
- 図版第97 (1)32区島状部分南端完掘状況(東から)
(2)32区石帯出土状況
- 図版第98 (1)33区溝完掘状況(西から)
(2)34区全景(上方が北；空中写真)
- 図版第99 (1)34区掘立柱建物跡群完掘状況(北から)
(2)34区柱穴柱根・礎石配置状況(南から)
- 図版第100 (1)35区全景(上方が北；空中写真)
(2)35区掘立柱建物跡 S B 35003完掘状況(南から)
- 図版第101 (1)35区井戸跡 S E 35040検出状況(北から)
(2)35区井戸跡 S E 35040遺物出土状況(南から)
- 図版第102 (1)縄文土器
(2)有舌尖頭器
- 図版第103 (1)石器(1) 石鏃・玦状耳飾り
(2)石器(2) 石斧・敲石
- 図版第104 弥生土器・古式土師器
- 図版第105 (1)石器(3) 石鏃・石匙・剝片・鏃形石製品ほか
(2)石器(4) 石棒・石庖丁・石錘・紡錘車
- 図版第106 古式土師器(1)
- 図版第107 古式土師器(2)
- 図版第108 6区土坑群出土遺物(1)
- 図版第109 6区土坑群出土遺物(2)
- 図版第110 木器(1)
- 図版第111 木器(2)
- 図版第112 須恵器・緑釉陶器(奈良・平安時代)
- 図版第113 緑釉陶器(1)
- 図版第114 緑釉陶器(2)
- 図版第115 緑釉陶器(3)

図版第116	灰釉陶器
図版第117	墨書土器(1)
図版第118	墨書土器(2)
図版第119	瓦
図版第120	(1)土師器皿 (2)石帯
図版第121	黒色土器・瓦器椀
図版第122	白磁
図版第123	青磁

付 表 目 次

付表1	調査組織一覧表	1
第1章		
付表2	周辺遺跡一覧表	5
第2章		
付表3	千代川遺跡発掘調査一覧表	10
第3章		
付表4	弥生時代後期土坑一覧表	35
付表5	6区土坑群一覧表	43
付表6	奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表	61
付表7	鎌倉時代掘立柱建物跡一覧表	83
付表8	石器一覧表	98
第4章		
付表9	施釉陶器の底部形態	108
付表10	墨書土器出土地区一覧表	109
付表11	出土墨書土器一覧表	110
付表12	地名比較表	113
付表13	文献記載国府所在地名	119

千代川遺跡丹波国府推定地発掘調査報告書

はじめに

千代川遺跡は、亀岡盆地のほぼ中央、亀岡市千代川町に所在する。遺跡周辺は、方格地割が整然と残っており、条里制を考える上から考古学的のみならず、歴史地理学的にも注目されている。

丹波国府推定地は、大正年間頃より、亀岡盆地内のさまざまところがその所在地として比定されてきたが、1963年木下 良氏が国府を千代川に比定してから初期国府は千代川に存在したことがほぼ定説とな^(注1)っている。

千代川遺跡丹波国府推定地の発掘調査は、建設省近畿地方建設局が計画した国道9号バイパス予定路線の事前調査として昭和59年度から始められ、その成果をもとにその翌年から年度ごとに面的に区切って調査を継続した。現地調査は昭和59年度(第9次調査)から平成元年度(第15次調査)にかけて行った。また、平成2・3年度は、整理作業及び報告作業を行った。調査に伴う組織は以下のとおりである。

付表1 調査組織一覧表

年度	調査責任者	調査担当責任者	事務局	調査担当者
昭59	事務局長 荒木昭太郎	調査課長 堤圭三郎	総務課長 白塚 弘	主任調査員 水谷壽克 調査員 森下 衛
昭60	事務局長 荒木昭太郎	調査課長 堤圭三郎	総務課長 白塚 弘	主任調査員 水谷壽克 調査員 森下 衛
昭61	事務局長 荒木昭太郎	調査課長 堤圭三郎 (6月まで) 調査課長 中谷雅治	総務課長 白塚 弘 (6月まで) 総務課長 中西和之	主任調査員 水谷壽克 調査員 森下 衛
昭62	事務局長 荒木昭太郎	次長 中谷雅治 調査第2課長 杉原和雄	総務課長 田中秀明	調査第2係長 水谷壽克 調査員 森下 衛 鶴島三壽
昭63	事務局長 荒木昭太郎	次長 中谷雅治 調査第2課長 杉原和雄	総務課長 田中秀明	調査第2係長 水谷壽克 調査員 小池 寛 鶴島三壽
平成元	事務局長 荒木昭太郎	次長 中谷雅治 調査第2課長 杉原和雄	次 長 山本 勇	調査第2係長 水谷壽克 調査員 鶴島三壽

なお、調査中及び本書の執筆にあたって次の方々から御教示をいただいた。

足利健亮、上原真人、川上 貢、木下 良、黒川孝宏、高橋誠一、館野和己、田中哲雄、寺崎保広、永光 尚、橋本清一、樋口隆久、本中 真、森 公章、山中敏史、渡辺晃宏、奈良国立文化財研究所、京都府教育委員会、京都府立山城郷土資料館、亀岡市教育委員会、亀岡市文化資料館

発掘調査参加者

青井 敏 榎 康史 菅沼和行 富田 宏 内藤正裕 西村健司 山口文吾 加藤隆也
佐竹 孝 横山憲郎 山室 繁 中西靖則 西田 覚 村山一弥 山下健一郎 西垣真史
竹岡光男 大西智也 大西啓喜 西井淳也 中西 宏 本城洋一 吉田昌巳 西 弘二
田中 了 木村又一郎 新井陸男 井上哲司 牧野淳司 藤井 敦 州崎 浩 竹田文登
中島和彦 山口信彦 中島皆夫 岩津博文 高野陽子 松田靖史 藤本城次 船越正美
鈴木永子 郡司佳代子 中橋孝之 笹井 信 高野ほずみ 高橋易史 近藤康彦 下川床
清治 西世津子 浜崎浩司 吉田秀生 森佳奈子 一ノ本弥生 吉田裕子 松村章代 入
野祐子 大坪孝一 武内かおり 安井美香 伊藤尚美 千葉智子 入船弘幸 石川 令
宇野淳夫 牛尾充宏 大西秀和 河田正明 佐藤寛巳 白井真澄 武田和哉 滝川ひとみ
谷向英人 内藤淳二 西村欣也 田村 悟 苗田正裕 広瀬由美子 平野淑子 三谷浩司
山田和美 湯浅研司 吉田茂男 鷺田哲秀 大宮和恵 澤田みどり 熊倉知江子 杉森美
佐紀 川勝 修 八木初次 美馬幸大 八木感一 並川義次 渡辺春三 福田亘孝 高橋
一義 田中寛治 松浦寛一 宇野三雄 石野正男 山本 誠 木村 峻 野々村修 田畑
光雄 俣野ふじを 俣野利江 俣野よ志江 俣野静子 山内さくの 八木まさ子 八木美
重子 八木よし子 八木千代江 山内タカ子 原田敦子 松山晃子 野々村礼子 野々村
美さを 八木淑子 山本美代子 松本菊枝 松本はつゑ 黒田茂子 黒田美代子 松本末
野 中垣民子 八木さみ子 谷口明子 中西ふみ子 西田初恵 小槻小福 八木すて 中
沢和美 田畑みどり 木場淳子 大槻益子 石原俊子 並川智美 桂 洋子 田中智子
牧野當子 田代美穂子 村田澄恵 岡本美代子 岩田且子 松尾幸枝 岡本美和子 荻野
富紗子 村上典子 庄林真弓 松下道子 西川悦子 劉 和子 小田栄子 疋田季美枝
吉井雅代 姫路真保 中島恵美子 田中文美 堀 源一 宮崎紗知子 三沢繁忠 吉岡孝
博 横山成巳 佐々木 理 見須俊介(順不同)

第1章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

亀岡盆地は、京都市の北西にあり、いわゆる丹波山地の一面に位置する。大きさは、北西から南西に長軸を持つ5km×20kmである。丹波山地は日本海に注ぐ由良川水系と瀬戸内海に注ぐ大堰川、加古川水系によって開かれるが、大堰川が亀岡盆地のほぼ中央を南に流れている。この盆地の高度は、標高80～110mである。周囲の山は、砂岩・頁岩などで構成され、丹波帯と呼ばれる秩父古生層からなる。一部には石英閃緑岩・花崗岩類も分布している。亀岡地方は、古生層を基盤とするが、盆地東端は、北西から南東にかけて亀岡断層により直線的な形状をしている。西縁では、中世代末期に貫入した花崗岩の岩体が分布し、境界が複雑に入り組んだ断層角盆地となっている。盆地の南は、大阪層群上部に相当すると考えられる篠町層が顕著である。また、盆地北縁の瓜生野や温井などの標高150～170mの段丘面を構成する高位段丘構成層、盆地南半部には標高100～120mの広い平坦面を構成する低位段丘構成層や沖積層なども見られる。

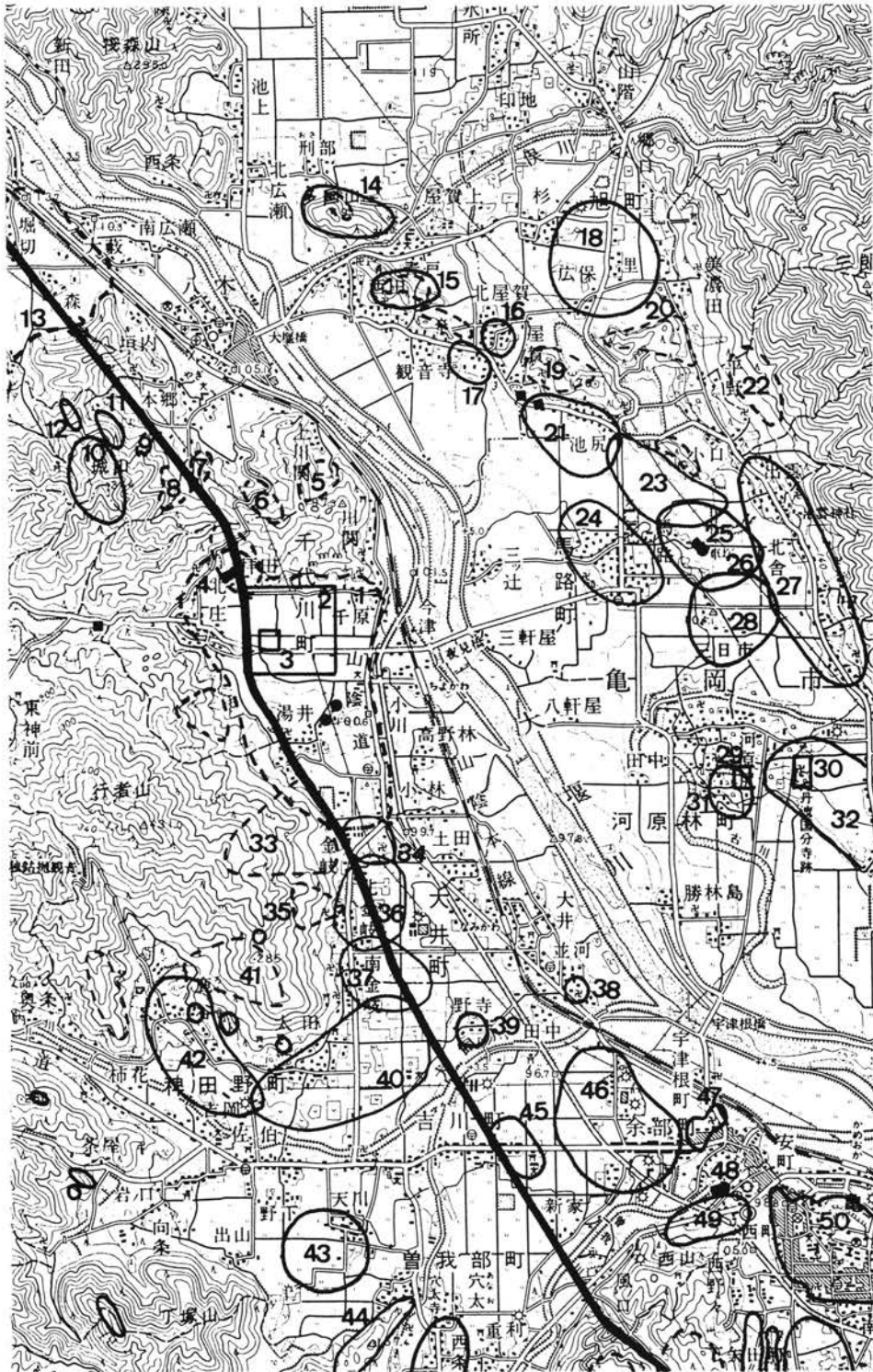


第1図 調査地位置図

第2節 歴史的環境

亀岡盆地は、近年国道9号バイパス・都市計画道路・宅地開発などに伴う発掘調査が増大しており、それに伴って古代の様相が明らかになりつつある。

縄文時代の遺跡では、以前から三日市遺跡が知られていたが、発掘調査の回数が増えるたび各地点で報告されている。千代川遺跡丹波国府推定地では、有舌尖頭器といった草創期に遡るものや、押型文土器などの縄文時代早期の遺物も確認されている。国府推定地南辺部の千代川遺跡10次及び16次調査や南約500mの11



第2図 調査地周辺遺跡分布図

付表2 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の概要
1	千代川遺跡	集落	平地 縄文～中世
2	丹波国府 推定地	官衙	平地 奈良～平安時代
3	桑寺廃寺	寺院	平地 飛鳥後期～平安時代
4	拝田古墳群	前方後円墳 ほか	17基・横穴式石室
5	上川岡古墳群	円墳	32基・横穴式石室
6	大法寺古墳群	円墳	12基・横穴式石室
7	内山古墳群	円墳	5基・横穴式石室
8	小谷古墳群	円墳	16基・横穴式石室
9	西所古墳群	円墳	2基・横穴式石室
10	八木城跡	山城	丘陵頂 東西300× 南北350m 大型複 合梯子 本丸・天守 台・石垣 城戸口・ 東・抜穴 内藤備前 築城 室町時代
11	古谷窯跡	須恵器窯	丘陵腹 登窯 平安時代
12	堂山窯跡	須恵器窯	丘陵腹 1964年発掘 登窯、古墳後期
13	八木嶋遺跡	集落跡	古墳～鎌倉時代
14	刑部城跡	山城	丘陵頂 中型梯郭式
15	西田城跡	山城	丘陵頂 小型小判郭 式
16	屋賀城跡	平城	平地 城址荒木山城 守または内藤氏、室 町時代
17	観音寺遺跡	散布地	平地 東西300m× 南北200m
18	里遺跡	散布地	平地 東西800m× 南北800m
19	池尻古墳群	円墳	27基 丘陵腹
20	美濃田古墳群	円墳	33基 丘陵稜
21	池尻遺跡	散布地	平地 東西750m× 南北400m
22	平野古墳群	円墳	51基 横穴式石室
23	時塚遺跡	散布地	平地 弥生時代
24	馬路遺跡	散布地	平地 東西500m× 南北600m
25	千歳車塚古墳	前方後円墳	平地 北北西向 全 長79m 後円部 径41m 同高7.5m 前方部幅45.5m 同高6m 3段築成 葺石 埴輪 周濠 古墳中期末 国史跡
26	車塚遺跡	散布地	平地 東西750m× 南北700m
27	出雲遺跡	散布地	台地 東西500m× 南北1700m 弥生 ～中世 旧版では出 雲神社境内遺跡
28	三日市遺跡	散布地	平地 東西500m× 南北500m 縄文時 代集落 奈良時代 寺院？官衙？
29	御上人林廃寺	寺院	丹波国分尼寺跡 奈良～平安前期
30	丹波国分寺跡	寺院	平地 奈良～中世 国史跡
31	河原尻遺跡	集落	平地 御上人林廃寺 下層 弥生前期～ 古墳後期
32	蔵垣内遺跡	集落	平地 国分寺下層 竪穴式住居跡 弥生 前期～古墳後期
33	小金岐古墳群	円墳	112基・横穴式石室
34	馬場ヶ崎遺跡	集落	平地 弥生後期の竪 穴式住居跡・溝
35	北金岐古墳群	円墳	9基・横穴式石室
36	北金岐遺跡	集落	平地 竪穴式住居跡 ・溝・掘立柱建物跡 弥生後期～中世
37	南金岐遺跡	集落	平地 弥生中・後期 方形周溝墓・溝 奈良～中世の溝
38	並河城跡	平城	平地 城主並河掃部介易家
39	野寺廃寺	寺院	平地
40	太田遺跡	集落	平地 大溝・溝・土 坑・柱穴 縄文後期～中世
41	鹿谷古墳群	円墳	18基 横穴式石室
42	鹿谷遺跡	散布地	平地 弥生～鎌倉時代
43	天川遺跡	散布地	平地
44	穴太城跡	平山城	丘陵頂 城主赤沢加 賀義政 室町時代
45	穴川遺跡	集落	平地 弥生後期～鎌倉時代
46	余部遺跡	散布地	平地 弥生前期～中世
47	余部城跡	平城	台地 城主福井因幡 守貞政 室町時代
48	加塚古墳	前方後円墳	平地 現墓地全長60m
49	安加塚遺跡	散布地	平地 旧版 伊達 神社遺跡
50	龜山城跡	平城	台地 明智光秀築城 中世の龜山城と重複

次調査地点からは、縄文時代晩期の土器がまとまって確認された。千代川遺跡以外でも、北金岐遺跡や太田遺跡でも縄文時代晩期の土器がまとまって確認されており、行者山の沿辺部には縄文時代後期・晩期の集落があったと考えられる。

弥生時代になると、亀岡盆地周辺に遺跡が散在する。その中でも主要なものは、蕨田野町太田遺跡・大井町北金岐遺跡・千代川町千代川遺跡などである。

太田遺跡は、弥生時代前・中期の遺跡として重要である。遺構としては、推定直径160mを測る環濠や溝・土坑などが確認されている。出土遺物には、土器・石器・木器などが大量に出土している。土器では第Ⅰ～第Ⅱ様式の摂津・播磨の影響を受けたものが顕著であり、地域間交流を考える上で貴重である。北金岐遺跡は後期～布留式併行期の遺跡である。遺構として、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑などが確認されている。この時期の遺物の80%は、溝内からの出土である。土器や木器が大量に出土し、土器では、近江系土器の出土が顕著であることから近江地域の影響が考えられている。

千代川遺跡は、府道の拡幅に伴う6次調査で、弥生時代中期第Ⅲ～第Ⅳ様式の方形周溝墓、溝状遺構などが検出された。出土した土器は外面にタタキ目を残す壺・甕が主体をなし、太田遺跡と同様、摂津地域との関連性がうかがえる。

古墳時代になると、丹波地域の盟主墳と考えられる全長80mの前方後円墳である千歳車塚古墳をはじめとして、多くの前方後円墳が築かれる。古墳時代前期のものははっきりしないが、古墳時代中期になると千歳車塚古墳や野条古墳・保津車塚古墳・案察使古墳などの前方後円墳が盆地内に点在して造営される。また、いわゆる丹波地域の中でも福知山・亀岡盆地では、方墳が2基独立して平地に築かれるという特色を持っている。古墳時代後期になると、多いところで100基を越え、府内でも有数の群集墳地帯となる。ほとんどの古墳は、横穴式石室を内部主体に持つものである。石材の豊富な行者山一帯は、花崗岩の巨石を利用した古墳が多い。小金岐古墳群は100基を越える古墳群であるが、76・77号墳は石柵を持つ古墳として特徴的である。同様な古墳として、全長40mの前方後円墳である拝田16号墳や鹿谷古墳などがある。また、石室内を分割する石障を持つものに、拝田9号墳・小金岐1号墳などがある。同じ行者山西麓にある拝田古墳群と小金岐古墳群は、こういった意味からも注目されるものであろう。

古墳時代の集落遺跡については、まとまって確認されたものがなく、部分的な確認に留まり、検出例が少ない。そのため亀岡盆地においては、ムラと墓の関係で考察できる資料に欠けている。しかし近年、亀岡盆地北方の船井郡八木町八木嶋遺跡で、古墳時代の豪族居館跡が確認された。遺構としては、大規模な掘立柱建物跡が合計37棟をはじめとして、溝・土坑・竪穴式住居跡などが確認された。一番大きな建物跡は四面廂を持つ東西棟の建

物跡で、敷地面積は140m²を越える大きなものである。この居館を造営した人々の墓地としては、南西1kmにある坊田古墳群を考えるのが妥当である。ムラと墓の関連をつかむ貴重な資料と言えよう。

奈良時代の遺跡としては、千代川町の丹波国府推定地、河原林町にある丹波国分寺や国分尼寺である御上人林廃寺が重要である。こういった律令国家による重要遺跡のみならず篠町観音芝廃寺・曾我部町与能廃寺・千代川町桑寺廃寺など白鳳期に入る古寺も亀岡市内に所在している。これら遺跡の存在から、丹波国の中でも亀岡盆地の歴史的重要性の一端がうかがえる。

平安時代にはいると、都に隣接するという利点もあって篠窯跡群が本格的に生産を開始する。ここでは、須恵器以外に緑釉陶器なども作られており、その一部は、国道9号バイパスに伴って発掘調査も行われた。その結果、平安時代を通じて、篠窯跡群は京に供給する土器の一大生産地であったことが判明している。近年、篠遺跡で篠窯跡群の生産に従事したと思われる人々の住居跡や、墨書土器などが発見され集積場所と思われる遺構も確認^(注2)されている。

平安時代以降、近世に至るまで都に隣接するという地理的重要性から各時代の遺跡が盆地内各地に点在し、今日に至っている。

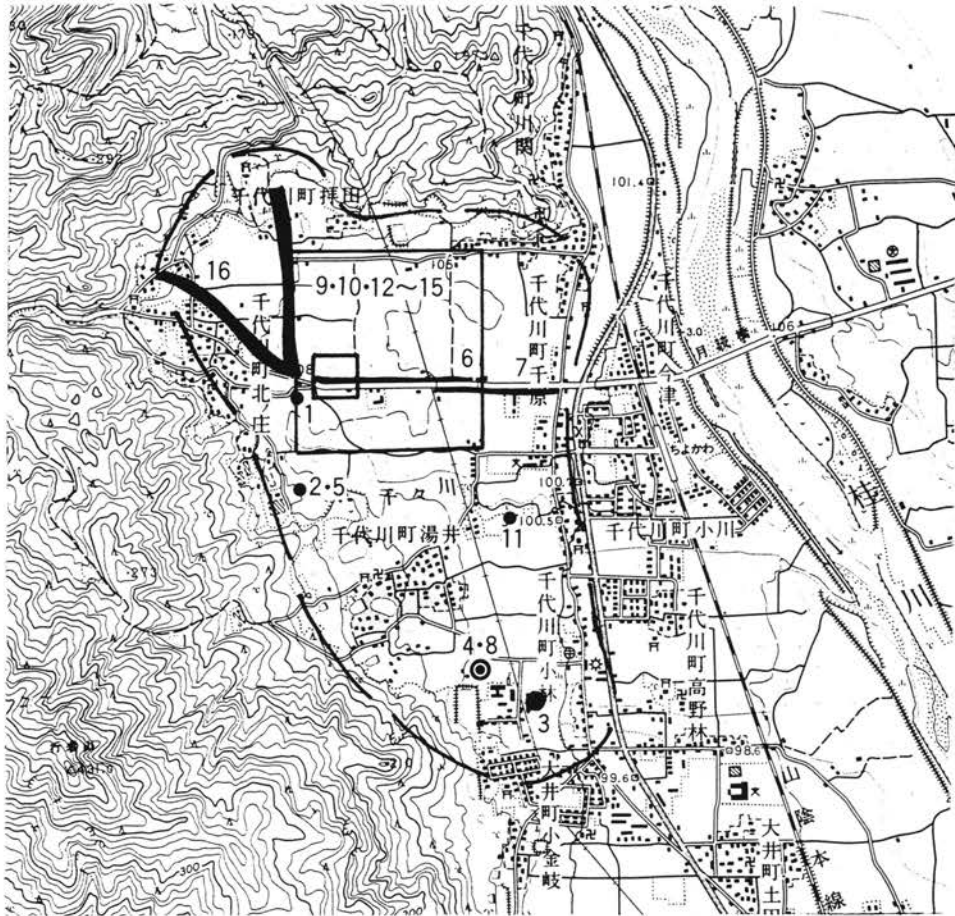
(鶴島三壽)

第2章 調査経過と概要

第1節 調査に至る経緯

過去の調査

千代川遺跡が、重要な古代遺跡として注目されたのは、1963年に木下 良氏が丹波国府推定地の一つとして紹介されたことにはじまる。その後、1970年に発行された『京都府遺跡地図第1版』^(註3)では、遺物の散布状況から、この丹波国府推定地を含む、千代川町拜田・同桑寺・同千原等の一帯が行政的に「周知の遺跡」として千代川遺跡(桑寺廃寺を含む)と認識されるに至った。しかし、この時点では、水田部における大雑把な遺物散布をもとに



第3図 千代川遺跡調査地位置図(1/25,000)

した把握にすぎなかった。というのも、この段階での把握は、現在の千代川遺跡の北半部を示しているにすぎず(南半部の一画には湯井遺跡などが存在していた)、拝田丘陵裾の谷筋等も遺跡としては認識されていなかったのである。

しかしその後、亀岡市教育委員会などによって行われた再度の遺跡詳細分布調査や、諸々の開発に伴う一帯での発掘調査(国道9号バイパス予定路線にかかわる一帯の詳細な分布調査、発掘調査をはじめとする諸々の考古学的な調査を含む)によって、遺構・遺物の分布範囲は次第に拡大し、遺跡の範囲は現在の千代川町一帯の平地部(扇状地上)のほぼ全域に及ぶこととなった。もちろん、その広大な遺跡の範囲内には、丹波国府推定地をはじめ、長期にわたる複数の集落遺跡を含み込んでいることはいうまでもない。千代川遺跡という名称は、こういったさまざまな遺跡の集合体の総称であり、府内でも有数の大複合遺跡といえることができる。

この千代川遺跡の様相が徐々に明らかになってきたのは、昭和56年頃から活発化した遺跡内でのさまざまな開発行為に伴う発掘調査によってである。以下、これらを大まかに整理し、後述する今回の発掘成果の把握の一助としたい。

さて、過去の千代川遺跡の発掘調査地点は、広大な遺跡範囲の中で、大きく3つのブロックに分けることができる。南半部の千代川町湯井一帯での調査(千代川遺跡第3・4・8・11次調査；Ⅰブロック)、南西部の丘陵裾部での国道9号バイパスに伴う発掘調査(第2・5次調査；Ⅱブロック)、北半部における丹波国府跡推定域及びその周辺部の調査(第1・6・7・9・10・12～16次調査；Ⅲブロック)である。各調査の調査地点と調査年次については、第3図・付表3を参照されたい。ここでは、各ブロックごとの概略をまとめて述べることにする。

Ⅰブロック(第3・4・8・11次調査地点)

ここは、かつて1970年に発行された『京都府遺跡地図』によると湯井遺跡として認識されていた。これは、西方の山間部から流れ出る千々川の流路によって、現在の千代川遺跡の北半部とは区分するためであった。しかしその後、千代川町一帯に広がる扇状地上が千代川遺跡として整理されたため、本遺跡内に取り込まれることとなった。西から東方へ緩やかに下る地形を呈しているが、現状でも水田部を歩くと非常に多くの遺物(弥生時代～鎌倉時代)が散布していることに気づく。

過去、このブロックでは4回の発掘調査が行われている。各調査地点は比較的近接しており、いずれも遺跡の東端近くである。調査成果としては、いずれの調査地でも、鎌倉時代の遺構(素掘り溝群)・遺物(瓦器椀・土師器皿)が確認されたのをはじめ、第3次調査で

付表3 千代川遺跡発掘調査一覧表

年度	回数	原因	調査主体	調査の概要
1980	1	9号BP	京都府教育委員会	国府推定域の南西隅部の調査。しかし、千々川の氾濫のため顕著な遺構・遺物は確認されなかった。
1981	2	9号BP	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	千代川遺跡南西隅部の台地上の調査。弥生時代後期～古墳時代の竪穴式住居跡5基、奈良～平安時代の掘立柱建物跡6棟などを検出するとともに、大量の土器が出土した。
1982	3	日吉ダム関係～83	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	千代川遺跡南東端近くの調査。古墳時代前期の流路跡や竪穴式住居跡2基を検出。
1983	4	丹波養護学校	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	第3次調査地の西側に接する部位の調査。奈良時代～鎌倉時代の素掘り溝群を検出。
1983	5	9号BP	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	第2次調査の追加調査。第2次調査に引き続き、弥生時代後期～古墳時代前期、奈良～平安時代の掘立柱建物跡を検出。
1983	6	府道拡幅	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	国府推定域を東西に横切る調査。桑寺廃寺関連の遺構・遺物や弥生時代中期の集落跡、方形周溝墓などを検出。
1984	7	府道拡幅	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	第6次調査の東側延長部の調査。弥生時代中期の水田跡を確認。
1984	8	丹波養護学校	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	第4次調査の追加調査。奈良～鎌倉時代の素掘り溝群を検出するとともに、奈良時代の掘立柱建物跡1棟を検出。
1985	9	9号BP	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	今回報告。
1986	10	9号BP	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	今回報告。
1986	11	日吉ダム関係	亀岡市教育委員会	国府推定地の南東端に接する地点(字名は国守ヶ森)の調査。奈良時代の遺構・遺物は確認されなかったが、縄文時代晩期の遺物が大量に出土するとともに、弥生時代中期の方形周溝墓1基を確認。
1987	12	9号BP	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	今回報告。
1988	13	9号BP	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	今回報告。
1989	14	9号BP	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	今回報告。
1990	15	9号BP	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	今回報告。
1990	16	府道拡幅	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	千代川遺跡北東部の調査。奈良時代～鎌倉時代の掘立柱建物跡13棟を検出するとともに、大量の遺物が出土。

は古墳時代前期(布留式併行期)の集落跡、第4・8次調査では奈良時代の掘立柱建物跡や溝など、第11次調査では縄文時代晩期の遺物が多量に出土するとともに、弥生時代中期の方形周溝墓などがそれぞれ確認され、貴重な成果が得られている。時代の移り変わりにともない、人々が広範囲な微高地上で場所を変えながら集落を営み続けた痕跡を明瞭に示していると言えよう。

II ブロック(第2・5次調査地点)

本部位は、千代川遺跡の中では南西の隅に相当する行者山東麓の舌状の台地上で、南北約80m・東西約100mの平坦面をなしている。

調査の結果、弥生時代後期～古墳時代後期の竪穴式住居跡8基、掘立柱建物跡4棟や奈良～平安時代の掘立柱建物跡9棟などが検出された。いずれの時期も、先のIブロックの第3・4次調査地でも検出されている遺構に同時期のものが認められる。山裾の狭い台地上にも人々の居住が及んでいたことを確認すると同時に、千代川遺跡には同時期に複数の集落が密集して営まれていたことが確認されたのである。

III ブロック(第6・7・9・10・12～16次調査地点)

千代川遺跡の北半部、丹波国府推定域を中心とする地区である。第9・12～15次調査については、今回報告しているので、その他の調査をみると、第6・7次調査では、本部位を東西に横切る格好で調査が行われている。この調査によって桑寺廃寺や弥生時代中期の集落跡・方形周溝墓・水田跡などが確認されている。また、遺跡の北西部に相当する部位では第16次調査が行われているが、やはり奈良時代～鎌倉時代の集落跡が確認されている。広範囲に微高地状を呈する本遺跡北半部が、かつては比較的起伏に富む地形であったことや、その起伏に合わせて過去の集落跡が営まれ続けていることが明らかとなってきている。

(森下 衛)

第2節 調査の概要

本章では、調査地全体の土層の状況、地形的な特色、各年次の調査状況及び各調査区の進行状況などについて、その概略を述べておきたい。

(1)基本層序

まずはじめに、概括的な土層の状況を述べ、細かな各調査区ごとの状況は、それぞれの調査区ごとに詳しく述べることとする。調査地全体での基本層序は以下のとおりである。

第1層 耕作土

第2層 淡灰色土(細片となった近世の遺物を若干含む；近世の耕作土と考えられる)

第3層 灰褐色土(12・13世紀頃の遺物を含む；中世後半期の耕作土と考えられる)

第4層 黒褐色土(弥生時代～平安時代の遺物を含む)

第5層 黄褐色粘土ないし青灰色粘土(無遺物層；地山土)

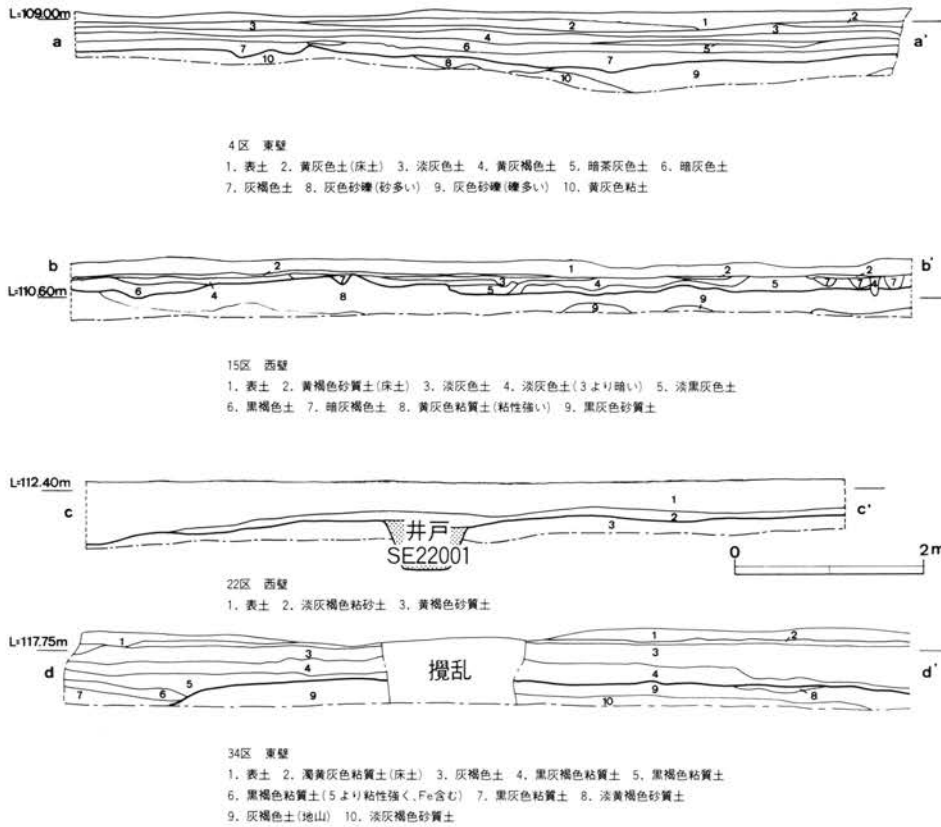
亀岡市内では、大堰川右岸の行者山周辺では9号バイパスに沿って、さまざまな調査が実施されているが、土層の堆積はおおむね上記のような状況が確認されている。

今回の調査地の土層は、基本的には以上のとおりであるが、微高地上では、後世の削平によって、このうち幾つかの土層が認められない場合が多い。また、各微高地を区切る谷状地形以外にも微高地上では幾筋もの小さな谷状地形部が認められ、そこには無遺物の黒灰色粘質土の堆積が確認された。さらに、拝田谷部では、黄褐色粘土ないし青灰色粘土が認められる部分がきわめて少なく、丘陵を構成する花崗岩の風化土の再堆積土としての黄褐色砂質土がベース土として認められた。

なお、弥生時代～平安時代という長期にわたる遺物を包含する黒褐色土は部分的に数層に細分される部位を認めた。これは、弥生時代の遺物を含む部分が粘質であり、古墳時代以降の遺物を含む部分から区分されたという状況であった。詳しくは各調査区の調査経過の項で述べる。

(2)地形の状況

現地形の観察や調査の結果からみて、調査地は大きく5つの地区に区分することが可能である。すなわち、南北に長い調査地はその西方の谷筋から流れ出る千々川の堆積作用によって形成された扇状地上から、北方の拝田丘陵南麓の小谷筋へと伸びている。そして、現在は比較的平坦に見える地形も、千々川の旧流路から枝分かれしたと思える小河川や拝



第4図 土層断面図

田の谷部から流れ出る流路跡などによって大きく5か所の平坦面(微高地)に分断されている。以下、各平坦面(微高地)の概略を述べる。

微高地1

調査地南端の1～4区で確認した微高地である。西方から調査地へとのび、調査地はその先端付近に相当する。ただし、正確には調査地近辺で、一旦のびる方向を南東方向へと変え、さらに東方へと続いていく。ちなみに、千代川遺跡第6次調査で確認された弥生時代中期の遺構群や桑寺廃寺関連遺構などはこの微高地の延長上に立地することになる。なお、本微高地の南側は現在の千々川によって区切られ、北側は5・9区及び14区南半部で確認した低地(谷状地形部)により区切られることとなる。

微高地2

微高地1の北側、6・14～16区で確認した微高地である。北西方向から調査地内へのびてくるもので、調査区が微高地の先端近くとなる。南側は、先の微高地1の北を区切った

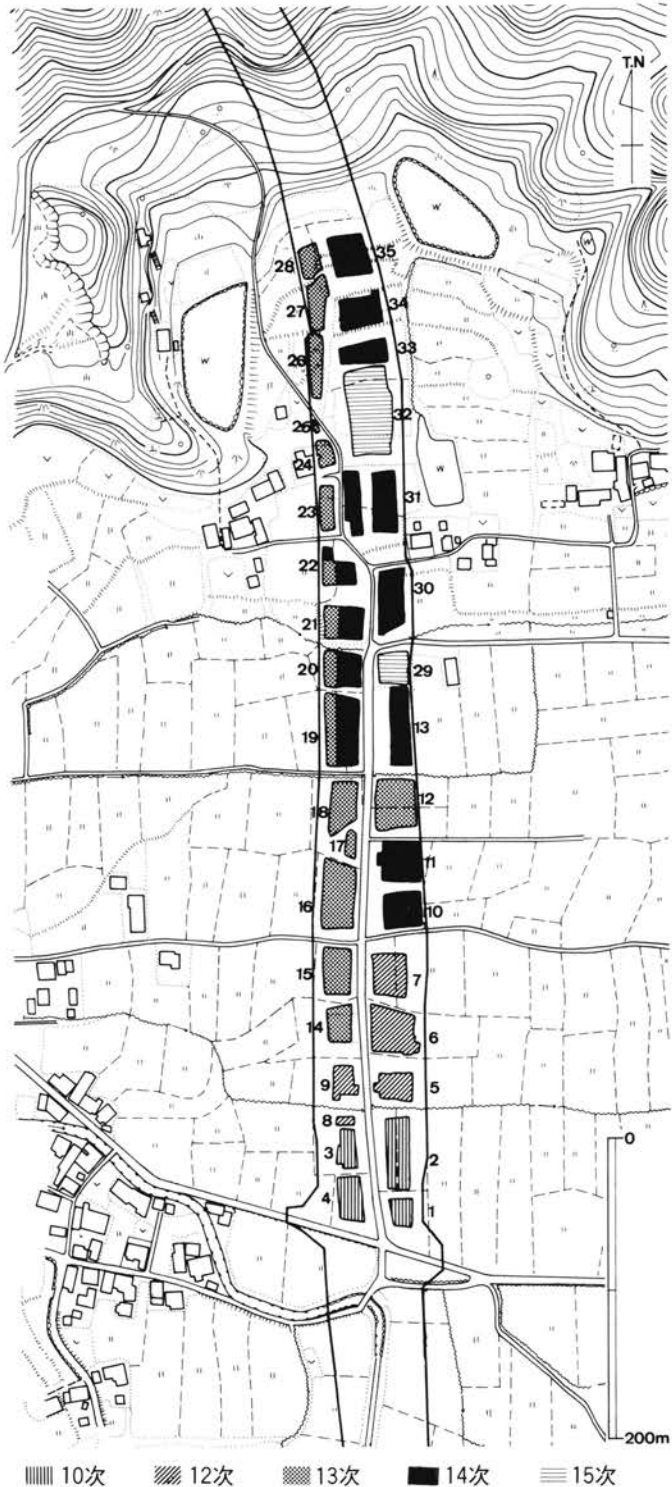
谷状地形によって区画され、北は10・16区の北半部から、11・17区にわたって検出した旧流路状の河道跡によって区切られる。ちなみに、方六町の国府域を当地に想定した場合、西辺部上の中心付近に相当するのが本微高地となることから、藤岡謙二郎氏はここに国府域を想定した^(注4)。この想定については調査成果を踏まえ、改めて述べることにしたい。

微高地 3

微高地 2 の旧河道の対岸部に相当する12・13・18区で確認した微高地である。正確には19区の南端部をも含んでおり、西北方向から調査地へと伸びてくる。南側は先の旧河道によって、北側は13・20区で確認した自然流路跡によって区切られている。

微高地 4

扨田丘陵から派生する枝丘陵の先端部に形成され、22・23・29区の扨田谷部の入口部で確認し



第5図 調査区配置図

た微高地である。南側は先の13・20区の自然流路跡によって区切られ、北側は26・30～32区で確認した旧流路跡によって区切られる。

微高地 5

拝田谷部の最奥部、32区の東辺から35区にかけて確認した微高地である。北は拝田丘陵によって、南は26・30～32区で確認した旧流路跡によって区切られる。

(森下 衛)

(3)調査経過

昭和59年度以降、国道9号バイパス関係遺跡の発掘調査は、千代川遺跡を対象として実施することとなった。しかし、遺跡(調査対象地)が広範囲に及ぶことや、調査対象地が千代川遺跡の中でも丹波国府推定地として想定される、六町四方区画の西辺上に相当していたことなどから、十分な年次計画を立てて調査に着手すべきと判断された。このため、建設省、京都府教育委員会、当調査研究センター等の関係機関で協議を行った結果、まず、対象地全域にわたって試掘調査を実施し、遺構・遺物の埋没状況及びその広がりを確認した上で、改めて各年次ごとの計画を立て調査を進めることとなった。

試掘調査は、千代川遺跡第9次調査として実施し、その成果を踏まえて、以後10・12～15次調査として本格的な調査を進めた。各年次ごとの調査担当は先に記したとおりである。

以下、各年次ごとの調査経過及び成果の概略を記す。

第9次調査(昭和59年度；昭和59年8月27日～12月12日)

第9次調査は、試掘調査として実施した。延長約600m(40,000㎡)に及ぶ予定地内に16か所のトレンチを入れ、土層の状況及び遺構・遺物の埋没状況、その広がりなどの確認に努めた。調査は昭和59年8月27日から開始した。まず、12か所のトレンチ設定を行ったあと、重機によって各トレンチの表土を除去した。その後、各トレンチを人力によって順次掘り下げた。掘削・精査は、南から順に北のトレンチへと進めた。トレンチ名も南から順に1～12の番号を付した。各トレンチの掘削は、ほぼ10月下旬には終了したが、さらに遺構・遺物が北方(拝田谷部)へと広がることが判明したため、改めて協議を行い、13・14トレンチを追加で設定した。また、上記の各試掘トレンチが、国府推定域を意識し、調査対象地でもその東半部を中心に設定していたことから、西半部の状況をも確認する目的で15・16トレンチを追加設定した。これらの掘削・精査については、ほぼ12月初旬に終了し、以後は各トレンチについての記録を作成し12月12日にはすべての現地作業を終了した。

第10次調査(昭和60年度；昭和60年8月25日～昭和61年1月14日)

第9次調査の成果をもとに、調査は南端部から年次ごとに継続実施することとなった。第10次調査は、南端部付近の約4,000㎡を対象とし、4か所の調査区を設定した(1～4区)。掘削は3-4-1-2区の順に進めた。各調査区とも耕作土及びその下の淡灰色土を重機によって掘削し、その下の暗灰色土及び黒褐色土を人力によって除去した。遺構はその下、黄褐色土の上面で検出した。なお、2区では北半部で黒褐色土下に黒灰色粘土層が認められ、1・4区では黒褐色土が認められず、南半部を中心に灰色砂層が検出された。

第12次調査(昭和61年度；昭和61年5月19日～昭和62年1月26日)

第12次調査は、第10次調査地の北側約3,000㎡を対象として実施した。対象地内に5か所の調査区(5～9区)を設定し掘削を進めた。第9次調査の成果によって、対象地の中央にあたる6区付近が微高地となり、その南北両側(5・7・9区)が緩やかな凹地状部をなすこと、この微高地上には古墳時代の土坑や奈良時代の柱穴群の存在することを確認していた。調査の結果、やはりこの微高地を中心に奈良時代の掘立柱建物跡群、古墳時代の土坑群、そして、その両側凹地部で弥生時代後期・古墳時代の溝、流路跡などを検出した。調査では、耕作土及びその下の淡灰色土を重機によって除去し掘削を進めた。

第13次調査(昭和62年度；昭和62年4月19日～昭和63年2月21日)

第13次調査は、第12次調査の北側約6,200㎡を対象として実施した。対象地内に、16か所の調査区(12・14～28区)を設定し掘削を進めた。調査区によっては今年度は西側のみを調査したところもある。14・15区に広がる微高地からは、掘立柱建物跡などの遺構を確認した。また、10・11区と16～18区にまで及ぶ幅約20mの自然流路跡を確認した。流路上層は鎌倉時代の遺物を含み、最下層の黒褐色粘質土からは古墳時代の古式土師器が大量に出土した。この流路から千代川遺跡では初めて木簡が出土した。また、19・20区においては微高地を区切る自然流路跡を確認した。21区では従来より提唱されていた国府推定北限溝の延長部を検出した。24～28区は拝田の谷部であるが、ここからも奈良・平安時代の遺物が出土し、国府推定地の周辺にも遺構の広がりが想定された。

第14次調査(昭和63年度；昭和63年4月19日～平成元年3月3日)

第14次調査は、約6,300㎡を対象に実施した。対象地内に12か所の調査区(10・11・13・19～22・30・31・33～35区)を設定した。19～22区は昨年度は西側を調査したため、今年度はその東側を対象とした。10・11区では表土を掘削すると、すぐに昨年度検出した自然

流路跡の延長部を検出した。13区でも昨年19・20区で検出した自然流路跡の延長を確認した。30区では、国府推定北限溝の延長上にあったS D21001が屈曲し、現在の掘状落ち込みに続くことがわかった。31区では、耕作土の下は、灰褐色土・黒褐色土がぶ厚く堆積し、さらにその下層は青灰色砂層がラミナ状に堆積していた。34区は、表土掘削後、中世遺物包含層である灰褐色土が堆積し、それを数cmずつ掘削していくと黒褐色粘質土上面で掘立柱建物跡を検出した。35区では、表土の下は、うすく灰褐色土が堆積し、その下は地山である黄灰色土で、ここで鎌倉時代の掘立柱建物跡や井戸跡を確認した。

第15次調査(平成元年度；平成元年4月17日～平成元年9月5日)

第15次調査は、残る29・32区の2,200㎡を対象に実施した。29区は部分的にかなり攪乱を受けていた。表土の下は薄く灰褐色土が堆積し、部分的に黒褐色粘質土が現われたが、大半は地山である青灰色粘質土であった。32区は、東辺は地山である黄灰色土がすぐに現われたが、調査地の大部分を自然流路が流れ、黒褐色粘質土が厚く堆積していた。

各調査区の調査状況

1区 重機掘削後すぐに黄褐色土(地山土)があらわれ、この上面で中世素掘り溝群、弥生時代の土坑、奈良・平安時代の溝等を検出した。

2区 淡灰色砂質土の下(重機掘削後)、黒褐色土の掘削を進めたところ、南半部では黄褐色土が現われ、この上面で弥生時代～中世の溝・土坑・柱穴(建物跡としてのまとまりは確認できず)などを検出した。北半部では、黒灰色粘土が認められ、土色の変化を確認するのに困難を極めたが、結果的に弥生時代の溝や土坑を検出した。

3区 黒褐色土の掘削後、黄褐色土上面で弥生時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土坑等を検出した。

4区 調査区南半部では、暗灰色土(中世の遺物包含層)の除去後、灰色砂層を認めたが、ほぼ調査区の全域ですぐに黄褐色土が現われた。この上面で中世の遺構群(素掘り溝・掘立柱建物跡・井戸・溝など)や奈良～平安時代の遺構(掘立柱建物跡・溝など)を検出した。

5区 耕作土の除去後掘削をはじめたところ、まず黒褐色土上面で中・近世に属する素掘り溝を検出した。続いて黒褐色土の掘削に移ったが、試掘調査(第9次調査)の成果からこれが数層に細分しうる可能性も考えられたため、約5cmごとに掘削を進め精査を繰り返した。その結果、下方へ行くに従い粘質土へと変化し、包含する遺物も奈良～平安時代のものから弥生時代、古墳時代のものへと徐々に変化した。また、上方の奈良～平安時代の遺物を中心に包含する部分もさらに2層に細分しうることも確認した。なお、黒褐色土

の下は黒灰色粘質土(無遺物層)・黄灰色粘土層(地山)であった。遺構面はこれら遺物包含層に対応した状態で、黒褐色土中で奈良～平安時代の遺構面を2面、その下方の黒灰色粘土上面で弥生時代後期の遺構面を確認した。

6区 ここは微高地状を呈していることから、大半の部分で耕作土除去後すぐに地山面を認めた。ここで精査を行ったところ、古墳時代後期の土坑群・奈良～平安時代の掘立柱建物跡群・土坑などを検出した。

7区 5区と同様に耕作土除去後、淡灰色砂質土・灰褐色土を掘削し、黒褐色土上面で精査を行ったところ、やはり中・近世の素掘り溝を検出した。その後、黒褐色土を掘削したが、奈良～平安時代の遺構は認めえず、最終的に黄灰色土上面まで掘り下げたところで古墳時代の溝・土坑などを検出した。

8区 5・7区と同様、黒褐色土上面で素掘り溝を検出した。その後黒褐色土を掘削したがそれほどの厚みはなく、すぐに黄灰色粘土上面へ至った。そして、ここで弥生時代後期の溝を検出した。

9区 本区では耕作土下に厚さ約20～30cmの盛り土を認めた。その下方に灰褐色土を認め、これを除去して黒褐色土層に至り、この上面で中世の柱穴を数か所認めた。さらにその下方に黒灰色粘土を認め、5区と同様この上面で弥生時代後期の溝・土坑を検出した。

10区 耕作土・床土を除去すると、すぐに地山である黄灰色土を認めた。この上面で自然流路跡(S R 16001)の南側肩部が現われた。柱穴も確認したが建物跡としてまとまって確認するには至らなかった。

11区 表土・床土を除去すると、鎌倉時代後半の遺物を含む灰褐色土が現われた。北辺では後世の削平により黄灰色粘土が現われた。この面で東西方向に走る中世素掘り溝を検出した。さらに掘削を進めると、南に向かって地形は落ち込んでおり、自然流路跡(S R 16001)の北辺を検出した。ここで、鎌倉時代の掘立柱建物跡や井戸を検出した。

12区 耕作土の除去後、灰褐色土を掘削し、青灰色砂質土の上面で精査を行ったところ、中・近世の素掘り溝を多数検出した。また、これらと重複した状態で鎌倉時代の掘立柱建物跡を検出した。

13区 耕作土の除去後、灰褐色土を掘削していくと、調査地北辺は地山である青灰色土が現われた。この面で、中世素掘り溝及び自然流路跡を確認した。この自然流路跡は、19・20区で確認されたものと一つのものとして考えることができる。

14区 耕作土の除去後、北東部ではすぐに地山を認めた。この北東部から南西部に向かっては、緩やかに傾斜する旧地形を呈していた。この部分に堆積している黒褐色土には、奈良時代(8世紀中葉)の遺物が多量に包含されていた。なお、この黒褐色土には、土層中

に遺構面の存在する可能性が高いと考えられたため、数cmずつ掘り下げたところ、やはり掘立柱建物跡を検出した。

15区 耕作土を除去した後、まず暗灰褐色土上面で精査を行ったところ、多数の中・近世の素掘り溝を検出した。続いて、黒褐色土上面まで掘削し精査を行った結果、調査区の南東部を中心に、鎌倉時代の掘立柱建物跡5棟を検出した。さらに、地山である黄灰色粘土まで掘削したところ、調査区南西部を中心に奈良時代の掘立柱建物跡を、北西部では古墳時代前期の溝の一部を検出した。

16区 耕作土・淡灰色砂質土を除去すると、南半部ではすぐに地山を認めた。近世頃の著しい掘削により、何ら遺構を確認することはできなかった。なお、北半部では自然流路跡(S R 16001)を検出した。現地表面から流路の底まで約2mの深さを測るが、地山である砂礫層の上に堆積する黒灰色粘質土中からは、整理箱約30箱ほどの古式土師器及び木器が出土した。

17区 掘削を進めていくと、16区で検出した自然流路跡の北半部を確認した。自然流路跡は、16区と同様の土層堆積状況が認められた。

18区 耕作土の除去後、薄く堆積する灰色砂質土及び灰褐色土の掘削を進めると、すぐに砂礫からなる地山を認めた。一部で、一辺約30cmを測る隅丸方形の柱穴などを確認したが、調査区周辺はかなり削平を受けているようで、建物跡としてのまともには確認できなかった。

19区 耕作土の下には、黒褐色土を認めた。この土層中は、弥生時代後期の遺物を若干包含していた。調査区中央部のやや凹地状部に、この黒褐色土の堆積の厚い部分を認めたが、それ以外、顕著な遺構は認められなかった。

20区 耕作土の除去後、淡灰色砂質土・灰褐色土などの堆積を認めこれを掘り下げたが、顕著な遺構は認められなかった。

21区 耕作土の除去後、淡灰色土を掘り下げたところ、一部では黒褐色土が現われた。北端では東西にのびる大溝の一部を検出した。これは、後述するように推定国府説によれば、国府北限の溝の西への延長上に相当する部分にあたる。

22区 ここは、微高地を呈し、緩やかに西から東へ傾斜する旧地形を確認した。地山である黄灰色粘土の上面で精査を行うと、奈良時代の井戸跡や溝を検出した。

23区 22区と同様、西から東へ傾斜する旧地形を呈していた。耕作土及び近世段階の盛り土と見られる黄色砂質土を除去すると、地形に沿って堆積する灰褐色土・黒褐色粘質土の堆積を認めた。近世段階の井戸跡や土坑のほかには、溝を1条認めたのみであった。ここからは、奈良～平安時代の土器が大量に出土した。

24区 ここは、拝田16号墳に隣接する調査区であるため、16号墳に関連する遺構・遺物の存在に期待がもたれた。表土を除去すると、黄褐色土及び中世の遺物を包含する灰褐色土を認めた。さらに、その下層の暗灰色砂質土上面で精査を行ったところ、南北にのびる溝を1条検出した。

25区 24区と同様、拝田16号墳隣接地区である。耕作土及び床土と思われる暗灰色砂質土を除去すると、すぐに地山の青灰色砂質土を認めた。遺物はほとんど出土しなかった。

26区 ここから、拝田丘陵へと続く斜面地形の調査区になる。耕作土を除去すると、20～40cmほどの灰褐色土の堆積が見られた。さらに掘り下げていくと、奈良～平安時代の遺物を包含する黒褐色土が80～100cmほど堆積した後、青灰色砂質土の地山となることを確認した。灰褐色土・黒褐色土から、非常に多くの遺物が出土した。

27区 26区と同様黒褐色土が厚く堆積していた。この調査区も多くの遺物が出土した。

28区 耕作土及び床土と思われる黄灰色土を除去すると、淡灰色土を認めた。さらに掘削を進め、暗灰褐色土上面で精査すると中・近世の素掘り溝を検出した。

29区 ここには民家が建てられていたため、場所によってかなり攪乱を受けていた。表土を除去すると灰褐色土が現われた。この灰褐色土を少しずつ掘り下げると中世素掘り溝が検出された。調査区北半は北側に向かって落ち込み溝状を呈していた。

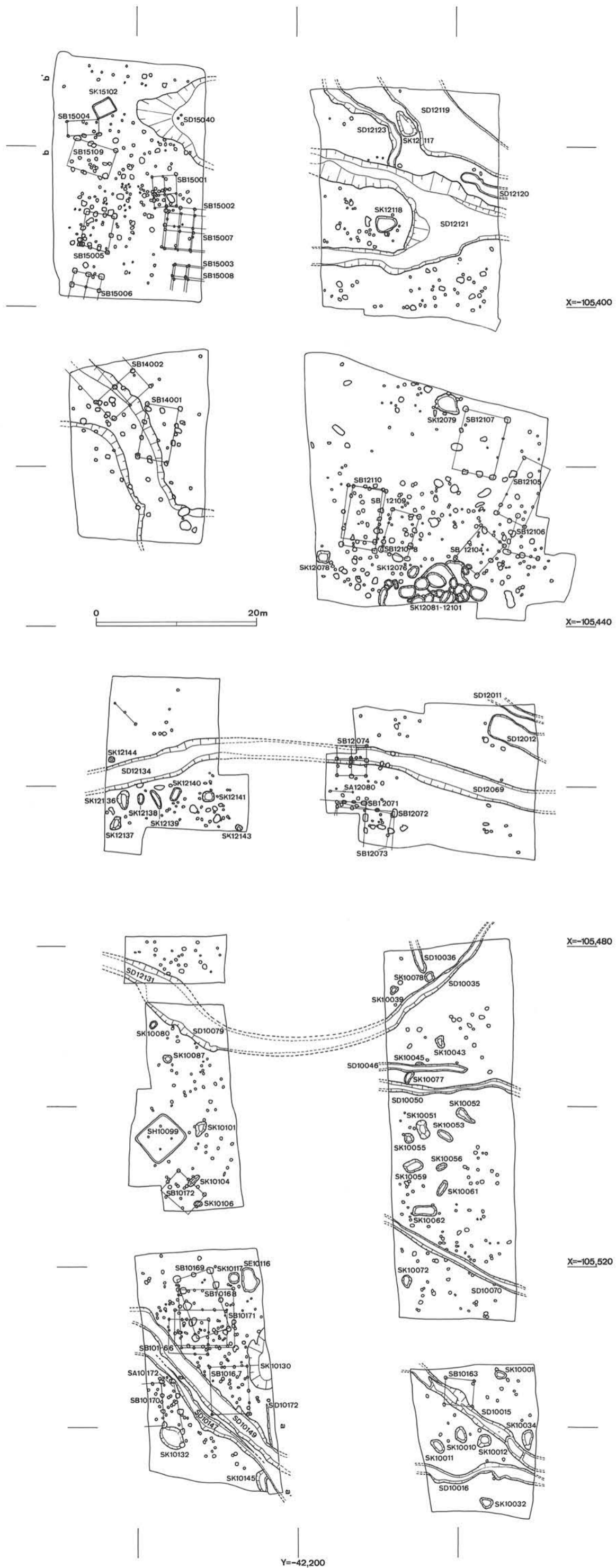
30区 表土を除去すると、褐色砂や灰褐色土が現われた。それを掘り進めると、黒褐色粘土や灰褐色砂利によって埋没した自然流路跡を確認した。また、南側では、21区で確認した溝の延長部を検出した。この溝は東辺で屈曲し堀状の落ち込みに続いている。この溝の中からは奈良・平安時代の須恵器などとともに石帯も出土した。

31区 表土を除去すると、中世遺物を包含する灰褐色土が現われた。鎌倉時代の遺構の存在が想定されたため、数cmずつ掘り下げたが何ら遺構は確認しえなかった。ここは、谷地形のため、堆積作用が強く、黒褐色粘質土や青灰色粘砂土が複雑に堆積していた。

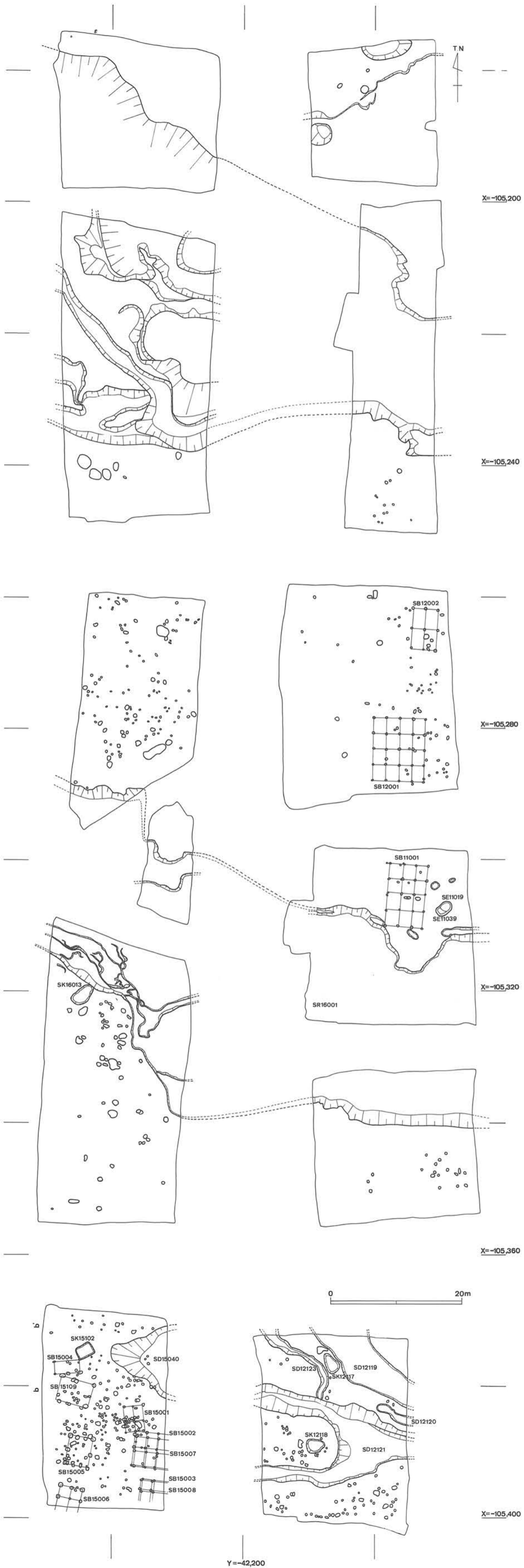
32区 31区と同様であるが、調査区東半部では灰褐色土上面であまり遺存状況はよくないものの、中世素掘り溝を確認した。その後掘削を進めると、黄灰色土からなるベース面を確認した。ここでは、平安時代の掘立柱建物跡を3棟、調査区中央から西辺部は複雑な島状地形を呈し、自然流路跡を確認した。

33区 調査区の東南隅では、耕作土・床土の除去後、地山である青灰色砂質土上面で溝を検出した。この溝の北側は、近世の耕作に伴う著しい削平を受けており、柱穴などは確認したもの、建物としてまとまって確認するには至らなかった。

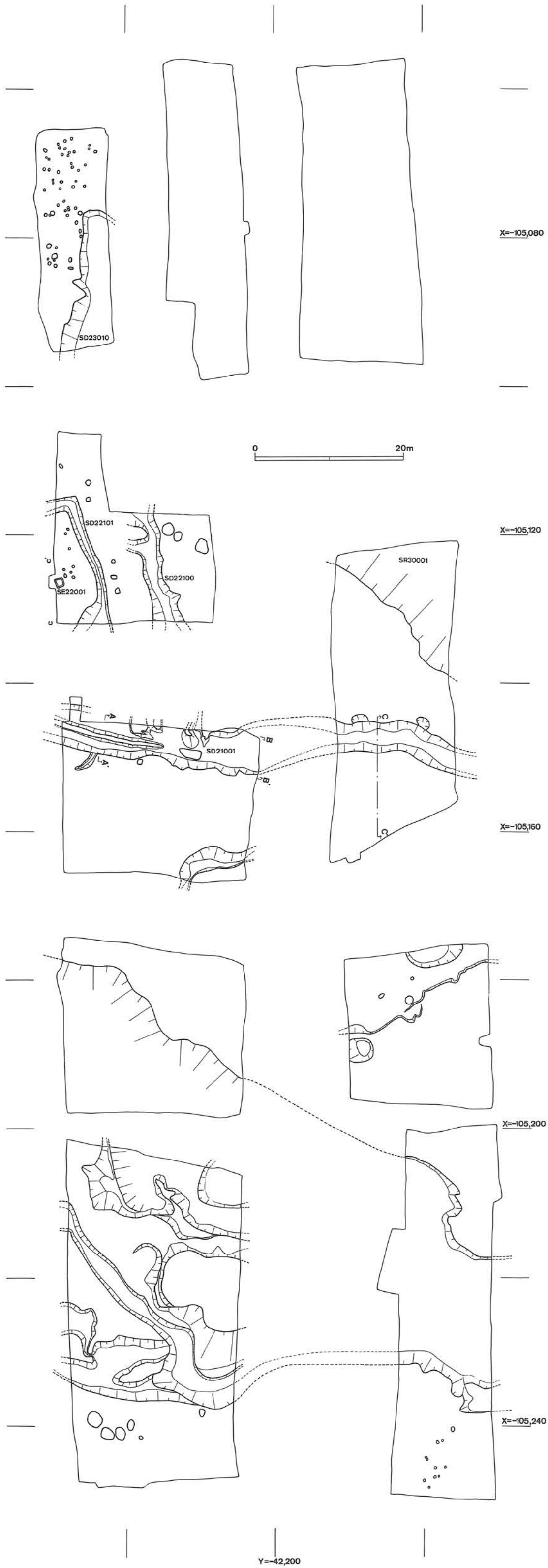
34区 耕作土の除去後、薄く灰褐色土が堆積していた。さらに掘り進めると、黒褐色粘質土が現われた。ここで、大半の掘立柱建物跡を確認した。調査区東側では、建物は地山



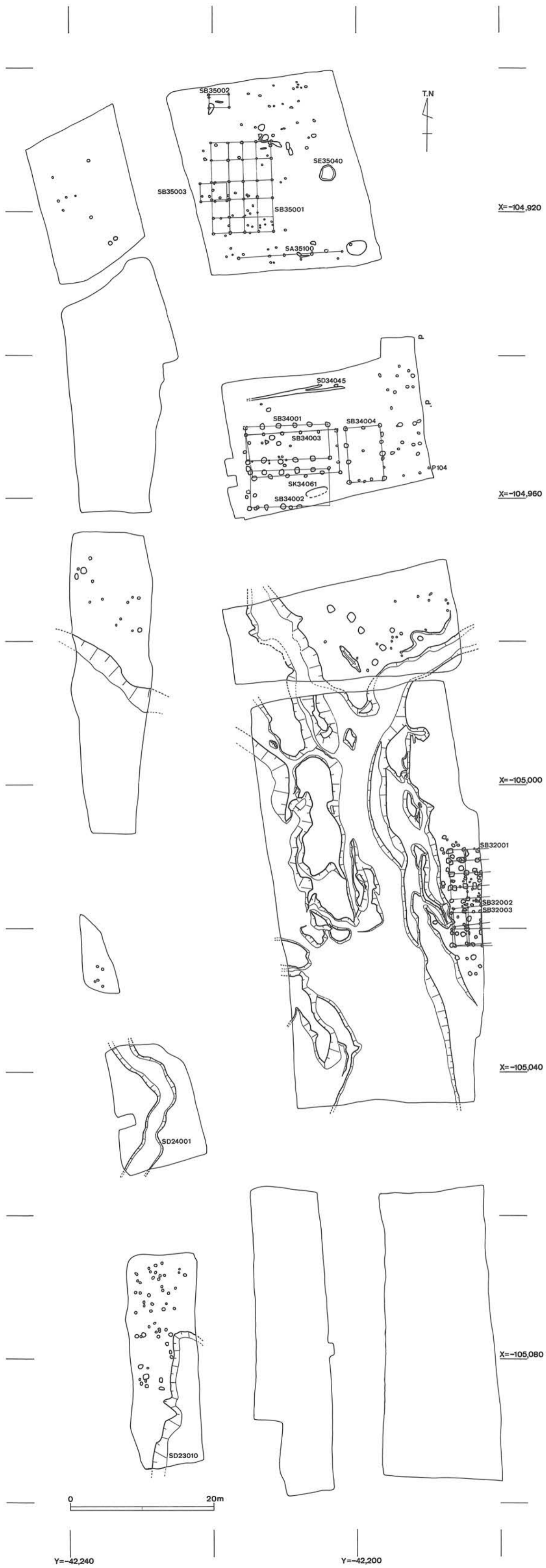
第6図 遺構平面図(1)



第7図 遺構平面図(2)



第8図 遺構平面図(3)



第9図 遺構平面図(4)

である灰褐色砂質土に建てられていた。ここの旧地形は、西に向かって緩やかに傾斜し、特に西辺部では急激に落ち込む谷地形を呈していた。そのため、建物を造るにあたって、黒褐色粘質土を10～70cmほど搬入し、平坦な地形に整地していることがわかった。

35区 調査地は、35か所の調査区の中でも、最も高所に位置しており、亀岡盆地を見渡せる場所である。地形は北から南に向かって緩やかに傾斜しており、調査地内では南北の高低差は約2mある。耕作土を除去すると、すぐにベース面である黄褐色土が現われ、ここで鎌倉時代の掘立柱建物跡や井戸などを確認した。

(森下 衛・鶴島三壽)

第3章 遺構・遺物

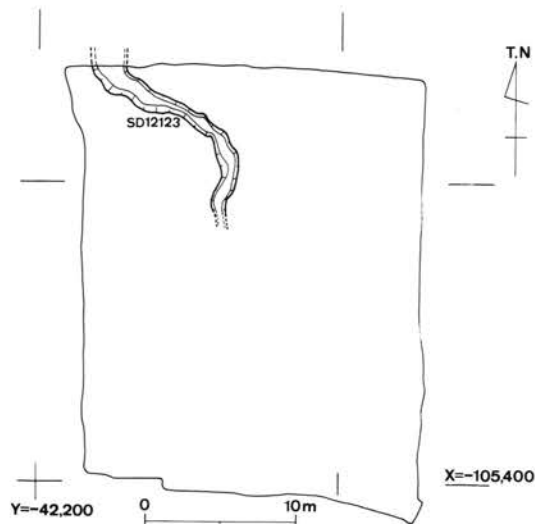
調査では、遺構としては、縄文時代後期から鎌倉時代にわたる時期の掘立柱建物跡・竪穴式住居跡・溝・土坑・自然流路跡などを検出した。また、遺物として、これら遺構に伴う時期のもののほか、縄文時代草創期の有舌尖頭器から近世の陶磁器類にいたるまでのものが大量に出土した。以下、これらを縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代・鎌倉時代・鎌倉時代以降に分け、時代ごとに遺構・遺物を報告する。

第1節 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構としては、7区北辺部で溝を1条(S D 12123)を検出したにすぎない。遺物は、量的にはわずかであるが調査地の全域から出土している。しかし、純粋な縄文時代の遺物包含層が確認されたわけではなく、そのほとんどは弥生時代～奈良・平安時代の遺物包含層である黒褐色土中から、少量の細片として出土した。ただし、今回の報告対象地に隣接する16次調査では、大量の縄文土器が出土しているので、周辺には遺構が確実に広がっていると思われる。

溝1 (S D 12123) 7区の北西隅付近から中央部へ蛇行しつつのびており、約14m分を確認した。その先は古墳時代に埋没した溝(S D 12121)によって切られていた。おそらく、S D 12121部分がこの時期から窪地状となっており、ここへ流れ込んでいたと考えられる。北側の延長部については、北接する10区では検出することはできなかった。溝は遺存状況が比較的良好、幅約50cm・深さ約40cmを測り、断面は「U」字形をなす。埋土は暗茶褐色粘土であった。埋土中からは、縄文後期初頭頃に位置づけられる土器片が数点出土した。

(森下 衛)



第10図 溝 S D 12123 実測図

第2節 縄文時代の遺物

(1)土器(図版第19)

今回、掲載した土器は大別すると後期初頭及び中葉・晩期後葉に位置づけられる。しかし、資料は包含層からの出土土器が大半で一括性はない。以下、主な特徴を述べる。

1は、早期の黄鳥式あるいは高山寺式初期段階になると思われる胴部破片である。外面の楕円粒の大きさは約7mm×5mmを測る。内面の調整は小片のため定かではないが、斜行沈線を施していると思われる。色調は外面が明褐色、内面は淡褐色を呈する。2・4・7・8は、後期初頭中津式に比定できる口縁部資料である。2・7・8は端部内面を肥厚させ、2を除き波状口縁になると思われる。3は、口縁端部に平行して4条の横走沈線を施し、2条目と3条目の沈線間にLRの縄文を充填する。外面には炭化物が大量に付着する。9は、口縁端部外面に二条の横走沈線を施し、端部と沈線間に縄巻縄文を施文する。10は、9と同様、口縁端部外面に二条の沈線をめぐらせているが、沈線間にRLの縄文を充填する。11は、口縁端部をやや内部に屈曲させ、外面に撚糸文を施す浅鉢と思われる。12は、内外面とも地文に縄文を施し、外面はヘラ状工具による連続刺突文、内面は口縁部内面に「C」字の刺突を施す。器壁は約9mmと厚手で、胎土に繊維を含んでいる。13は、中津式磨消縄文土器の胴部である。14は、LRの縄文地に横走沈線を施し、その沈線を画するように蛇行沈線を垂下させている。これは北白川上層1式に比定でき、京都府舞鶴市桑飼下遺跡の第4群磨消縄文系土器に類例が見られる。15は、結節縄文を施した胴部破片である。後期中葉の一乗寺K式にあたると思われる。17は、外面を横方向の条痕を施した後突帯を貼り付け、さらに突帯に細かなキザミを入れた半截竹管状工具で連続する刺突を施文している。東海系の土器の可能性があろう。19は、三文沈線を基調とした磨消縄文系の土器である。一部に上下から絡み合う渦巻文が見られる。文様は全体に縄文施文後、沈線を配し沈線の外側の縄文を磨消しているが、部分的に再び縄文を施文している。復原底径は、約10.5cmを測る。文様構成から浅鉢になると思われ、時期は福田K2式に併行もしくはそれ以前であろう。20・21は、滋賀里4式になると思われる深鉢と浅鉢である。

(柴 暁彦)

(2)石器(図版第54～58)

千代川遺跡出土の石器では、縄文時代のものが種類・点数とも最も豊富である。

1～3は、有舌尖頭器で、いずれもサヌカイト製である。1の先端部の欠損面は新しい。両面の槌状剝離は中央の稜を越えて剝離が及ぶものは少なく、多くの剝離面の末端はステップ状を呈している。2は、槌状剝離が石器の中軸に対し斜め方向に比較的整然と並ぶ。

3の先端部の欠損面の風化は他の剝離面と同じである。片面には、サヌカイト原礫面の一部が残存している。

4～12は、石鏃である。4・5・7・8・11はチャート、6・10はサヌカイト製である。7は、水色のチャートを用いた石鏃で返し部分が丸く、トロトロ石器に似ることから縄文時代早期のものと考えられる。8は、赤褐色のチャートを用いたもので、2次調整は周縁部のみ施し、両面に素材剝片時の背面及び主要剝離面を大きく残している。9は、風化面が白い硬質頁岩を用いた石鏃である。10・11は、石鏃の未製品と考えられる。

12は、青灰色の縞の入るチャート製の石匙である。1面には素材時の剝離面を大きく残す。13は、サヌカイトを素材とし、風化は比較的浅い。欠損部が多く、すべて新しい。

14は、剝片素材の石核から剝離されたサヌカイト製の横長剝片を用い、剝片の末端部には角度の浅い2次加工を両面から施し、打点側は背面から主に加工する。

15・16は、いずれもチャートを用いた楔形石器である。

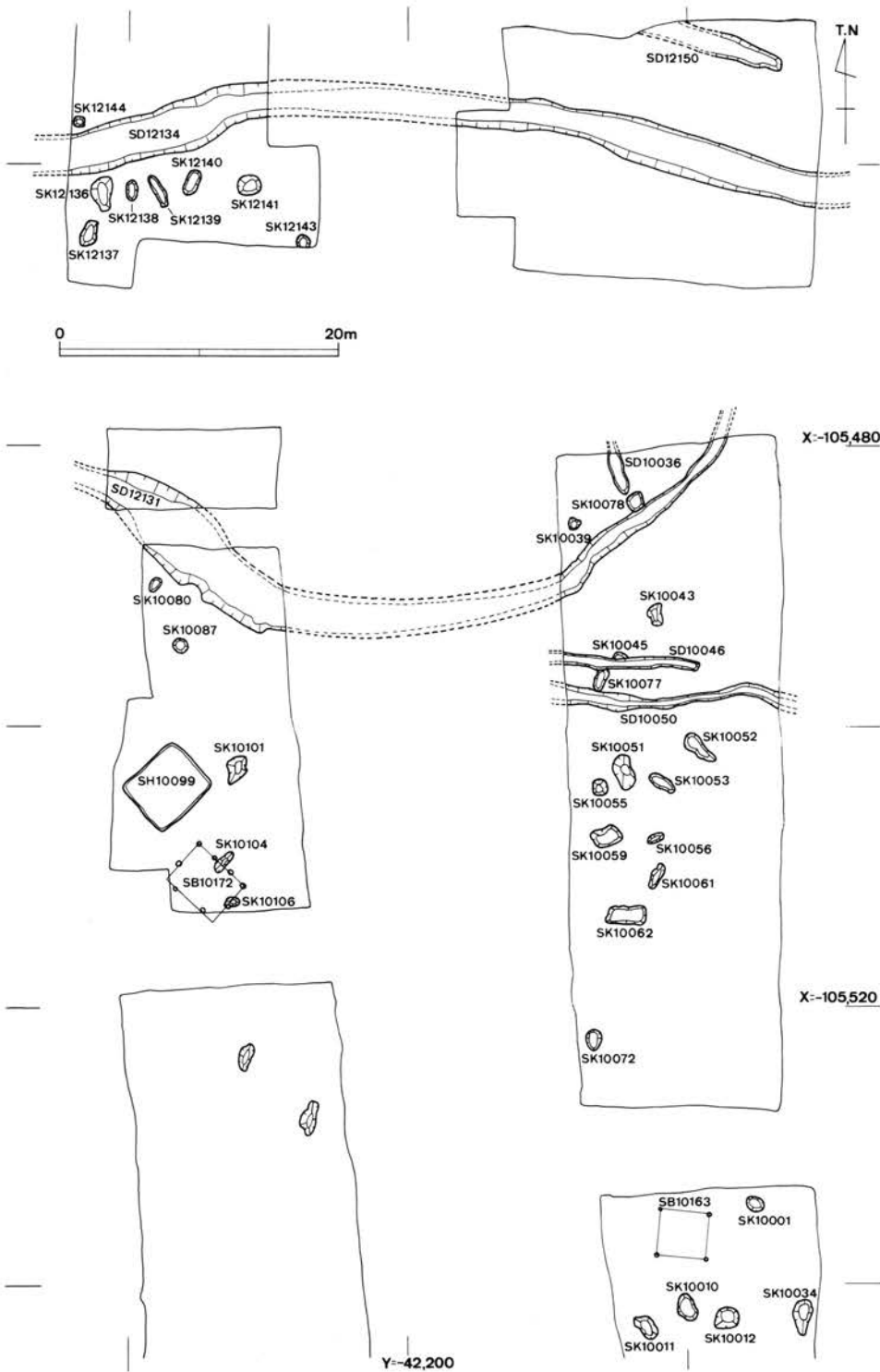
17は、2次加工のある剝片で、チャートの円礫の自然面を打面に用い、剝片の末端部にも自然面が認められることから、円礫素材の石核から剝離されたことがわかる。背面及び主要剝離面の打撃方向は固定されている。2次加工の部位は剝片の末端及び側片の一部である。

18は、サヌカイトの角礫あるいは亜角礫の自然面を打面に用い剝離した縦長剝片である。

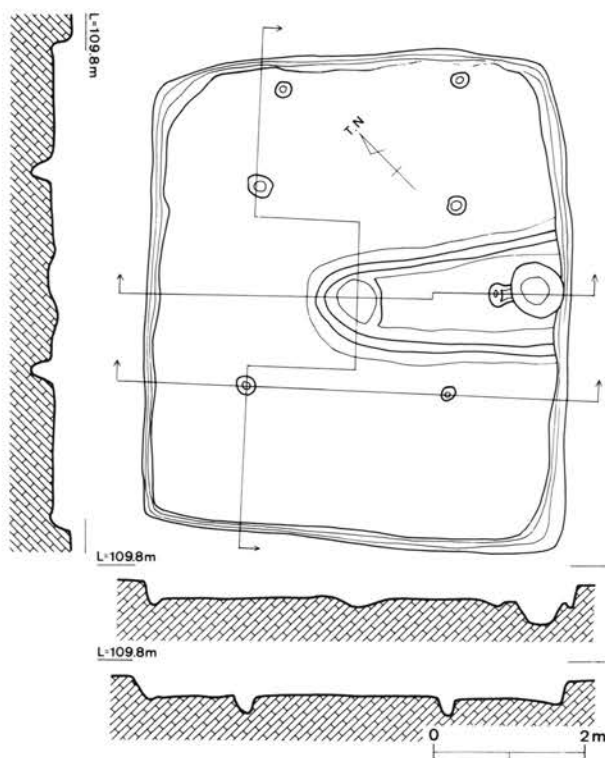
(中川和哉)

19・20は、塊状耳飾りである。20は、良質の茶褐色の滑石を用い、厚さ1～2mmを測る。両方とも破片資料であるが、図のように復原した。30～32は、打製石斧である。比較的良好に磨耗痕が看取できる。35は、石錘である。薄い楕円石の短軸両端を敲打し、表面には砥石にでも使われたようなくぼみがある。34は、握りやすい楕円礫の一端に敲打による使用面が認められる。また、これは台石としても使用されており、円礫中央部の両面に深さ5mmほどのくぼみがある。36も35と同様、薄い楕円形の自然石を用いている。短軸の一端に敲打による痕跡がある。38は、石斧である。長楕円礫の長軸の一端に敲打による使用面が認められる。上方は欠損する。39は、台石である。上部の平坦面には敲打の集中によるくぼみが中央に大きく残る。くぼみは最も深いところで約7mmを測る。下部は安定するように平坦に作る。40・41は、磨製石斧である。いずれも上部が欠損する。40は、断面がほとんど正円形を呈する。43・45は、磨製石斧である。43は、両面をくまなく研磨して蛤刃に仕上げる。45の刃部端には、使用時の細かい刃こぼれが認められる。断面は長楕円形を呈する。

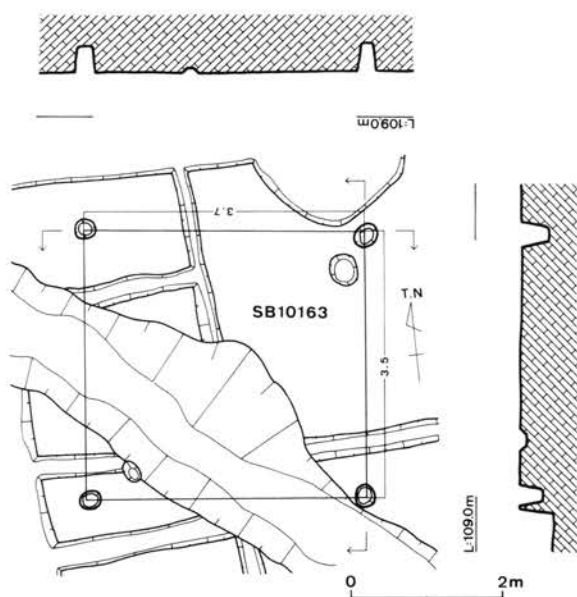
(鶴島三壽)



第11図 弥生時代遺構配置図



第12図 竪穴式住居跡 S H 10099実測図



第13図 掘立柱建物跡 S B 10163実測図

第3節 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、調査地南端付近の1～5・8・9区において確認した。検出した遺構には、竪穴式住居跡1基・土坑群・溝4条がある。これらは、西方から調査地へのびてくる微高地上を中心に分布する。竪穴式住居跡は1基のみを検出したにすぎないが、微高地が西方からのびてくることを考えれば、集落の中心は調査地の西側へ広がると考えられる。土坑群はその縁辺部に、そして溝はさらに縁辺の微高地端に位置していることになろう。遺物は、竪穴式住居跡や溝の埋土中からまとまって出土したほか、黒褐色土中から細片が出土している。

各遺構の検出面は、微高地上に立地する竪穴式住居跡などは、地山土と判断される黄褐色土上面であったが、縁辺部に位置する溝(S D 12131)や土坑の多くは、微高地縁辺に堆積した黒灰色粘土層(無遺物層)上面から穿たれており、遺構の検出は困難をきわめた。

付表4 弥生時代後期土坑一覧表

遺構番号	規模	形態	遺構番号	規模	形態
S K 10001	1.4 m×1.1 m	楕円形	S K 10010	2 m×1.3 m	楕円形
S K 10011	1.9 m×1.3 m	楕円形	S K 10012	1.6 m×1.5 m	隅丸方形
S K 10032	1.6 m×1.3 m	楕円形	S K 10034	2.6 m×1.5 m	楕円形
S K 10039	1 m×0.8 m	楕円形	S K 10043	1.6 m×1 m	楕円形
S K 10045	1.2 m×1.1 m	円形	S K 10051	3.5 m×1.2 m	楕円形
S K 10052	3.2 m×1.6 m	楕円形	S K 10053	2.1 m×1.1 m	楕円形
S K 10055	1.2 m×1.1 m	隅丸方形	S K 10056	1.3 m×0.6 m	楕円形
S K 10059	2.1 m×1.4 m	隅丸方形	S K 10061	2 m×0.8 m	楕円形
S K 10062	2.6 m×1.1 m	隅丸方形	S K 10072	1.6 m×1.2 m	楕円形
S K 10077	1.6 m×0.8 m	長方形	S K 10078	1.2 m×1.2 m	隅丸方形
S K 10080	1.1 m×0.8 m	楕円形	S K 10087	1.1 m×1 m	円形
S K 10101	1.9 m×1.4 m	方形	S K 10104	1.8 m×0.7 m	楕円形
S K 10106	1.1 m×0.7 m	楕円形	S K 12136	2.5 m×1.4 m	楕円形
S K 12137	1.8 m×1.4 m	楕円形	S K 12138	1.6 m×0.9 m	楕円形
S K 12139	2.5 m×0.8 m	楕円形	S K 12140	1.9 m×1 m	楕円形
S K 12141	1.6 m×1.5 m	円形	S K 12143	不明	不明
S K 12144	0.8 m×0.6 m	方形			

竪穴式住居跡(S H 10099) 3区の西辺中央付近で検出した。一辺約5mの隅丸方形を呈し、深さ約30cmが遺存する。住居跡床面では、周壁溝・支柱穴4か所・貯蔵穴状ピット・中央ピット、さらに中央ピットと貯蔵穴状ピットを取り囲む土状の高まりを検出した。周壁溝は、幅約14cmを測り、四壁に沿ってめぐる。支柱穴はやや小さく各々直径20cm前後・深さ約20cmを測る。また、中央ピットは直径60cmを測る円形で、深さ約10cmを測り、丸底をなす。貯蔵穴状ピットは一辺55cmの隅丸方形を呈し、深さ約25cmを測る。この両者を取り囲む土状の高まりは高さ約10cm・幅約10cmを測る。住居内での特別な部位を区画するものであったと思われる。両者が、住居内で食料の調理に関する施設として理解されるならば、この高まりは、食物に関する何らかの区画をなしていた可能性が考えられ、注目すべき資料である。さらに、住居跡東辺部で浅いピットを2か所確認した。入口に関する遺構の可能性も考えられよう。

掘立柱建物跡1(S B 10163) 1区の北半部中央で検出した。検出面は、濁灰色砂層上面である。桁行1間(3.7m)×梁間1間(3.5m)の小規模なもので、主軸はN-5°-Eである。柱掘形は円形で、大きさは直径25cm・深さは約30cmを測る。

土坑(S K 10001~12144) 弥生時代の土坑と判断されるものは、1~3・9区を中心に総数33基を検出した。ただし、明らかにこの時期に属する土器等の遺物が出土したものは皆無に等しい。そのほとんどは埋土の状況(やや粘性を帯びる黒褐色土)をもとに、この時期の遺構と判断した。各土坑は、その規模はそれぞれで異なるが、形態的には大きく2タイプに分かれる。なお、各土坑の詳細な規模・形態については付表4に示した。

Aタイプ 平面形は長楕円形、断面形は舟底状をなす。埋土は黒褐色土の単一層である。

Bタイプ 平面形は楕円形を呈し、壁がほぼ垂直に立ち上がり、断面形は緩やかな「U」字形をなす。埋土は、黒褐色土に若干の地山土ブロックを含む。

溝1(S D 12131) 2・3・8区にわたって検出した。8区の南西隅から、3区の北辺、そして2区の北辺へと続くと考えられ、総延長約50mを確認した。この溝は、弥生時代の集落跡が立地する微高地の端を東西に流れる。3・8区では、幅約2.5m・深さ約0.7mを測り、断面は逆台形に近い。ただ、この下流部に相当する2区では、黒灰色土上面が検出面となったため非常に検出が困難で、溝の底部付近をкаろうじて確認したにすぎない。このため、確認しえた幅・深さとも3・8区と比べると小規模となり、幅約1.6m・深さ約20cmを測る。ただ、埋土中からの遺物は、2区検出部で古式土師器壺・甕の大形の破片が多く出土した。埋土は暗黒灰色粘質土の単一層である。形態から人工的に穿たれた溝と考える。

溝2(S D 12134) 5・9区で検出した。溝1の北側約30mの部位に当たる。東西に若干弧を描くように湾曲しつつのび、総延長約55mを確認した。幅約3m・深さ約1.2mを測り、断面は「U」字状を呈する。埋土は溝1と同じ暗黒灰色粘質土の単一層で、埋土中からは弥生土器片が出土した。土器は溝1に比べ、小破片が多い。溝1と同様、集落構造に関連して人工的に穿たれた溝と考えられる。

溝3(S D 10046) 2区の中央付近を東西に流れる。幅約1m・深さ約10cmを測る。遺存状況は極めて悪く、2区の中央付近でとぎれる。埋土は黒褐色土で、弥生時代後期の土器片が少量出土した。

(森下 衛)

第4節 弥生時代の遺物

(1)土器

①竪穴式住居跡(S H 10099)出土遺物(図版第20)

S H 10099出土の遺物は、比較的床面近くからまとまって出土した。しかし、小片となったものが多く、また良好に器種構成等を検討しうる資料とは言いがたい。ここでは、各破片資料のなかでも図示しうるものを提示した。

広口壺(1～3) 1は、口径12.8cmを測る小形の広口壺の口縁部片である。「ハ」の字状に開く口縁部は、その端部が玉縁状に外側に肥厚する。遺存部分は内外面ともナデ調整によって仕上げられる。2は、上外方へ緩やかに外反する口縁部を持つ。口径14.8cmを測る。口縁部外面及び口縁端部付近をナデ調整で仕上げるほか、遺存部分では、内面に横方向のハケ目、頸部外面に縦方向のハケ目調整を認める。3は、球形の体部から屈曲して上外方へ短くのびる口縁部を持つ。口径13.9cmを測る。口縁部の内外面及び体部内面に横方向のハケ目、体部外面に縦方向のハケ目調整を認める。

甕(4～7) 4は、体部から一旦外反したあと上方へ立ち上がり、受け口状をなす口縁部片である。端部付近は外反し、口縁部付近はナデ調整で仕上げられ、2条の擬凹線文が確認される。口径15.3cmを測る。5は、唯一完形に復原され、口径17.4cm・器高22.4cmを測る。体部は上半部に最大径を持つ。口縁部は、短く外反したあと上方へ立ち上がり、受け口状の形態をなす。ただし、先の4に比べると器厚がありシャープさに欠ける。器壁の磨滅が著しいが、口縁部付近はナデ調整で仕上げられており、体部外面には縦方向のハケ目が確認される。6は、丸みのある体部から緩やかに外反し、再度上方へわずかに屈曲する口縁部を持つ小形の甕である。口縁部の形態は、やはり受け口状に近いが、その屈曲は非常に緩やかである。口径14cmを測る。口縁部付近から体部内面にはナデ調整によって仕上げられ、体部外面にはタタキ目が確認される。なお、口縁部内面にはナデ調整の前段階に施された横方向のハケ目調整の痕跡がわずかに残る。7は、体部から「く」の字状に外反する口縁部を持つ。口径15.3cmを測る。口縁端部は上方へつまみ上げる。口縁部内外面及び体部内面はナデ調整によって仕上げられ、体部外面はタタキ目が認められる。

壺・甕底部片(8～13) 8は、球形の体部を持つ小形の壺の底部片と考えられる。内面はナデ調整、外面はハケ目調整が認められる。9～13は、甕の底部片と思われる。9・10は外面にタタキ目、内面にハケ目を残す。また底部の形態は中央がややくぼみ、底部輪台技法の痕跡をとどめる。これに対し11～13は平底で、内外面ともハケ目調整をとどめる。

鉢(14・15) 14は、やや扁平気味の体部と短く外反する口縁部からなる。口縁端部は上方へつまみ上げて終わる。体部外面にはタタキ目、そのほかはナデ調整を認める。15は、

小形の台付き鉢の上半部と思われる。内外面ともヘラ磨き調整によって仕上げられる。また、一部遺存する鉢底部付近(16)は、外面にハケ目のあとナデ調整、内面にハケ目調整を認める。脚台部径6.6cmを測る。

高杯(17) 17は、小形の高杯の脚台部である。外面はヘラ磨きによって仕上げられる。円形の透かし穴を1か所認めた。

器台(18~20) 18は、口縁部片で、大きく「ハ」の字状に開き、端部は下方へ拡張する。端部には4条の沈線(擬凹線)をめぐらす。口径20.6cmを測る。内外面ともヘラ磨きで仕上げられる。19も口縁部片で「ハ」の字状に開き、端部は屈曲して斜め上方へ短くのびる。端部外面に2条の擬凹線がめぐる。内面は磨滅して調整が明瞭でないが、外面はヘラ磨きがみられる。20は、口縁部下端から柱状部の破片である。柱状部内面を除きヘラ磨きを認めた。

蓋形土器(21・22) 21・22はともに口縁部を欠くが、中央がくぼむ把手と笠形に開く体部とからなり、直径約1cmの透かし穴を1か所認めた。

②溝(S D 12131)出土遺物(図版第21)

溝(S D 12131)は、2・3・8区にわたって検出したものであるが、遺物の大半は2区の溝底部付近から出土したもので、3・8区では小片が埋土中からわずかに出土したにとどまった。ここでは、2区出土資料(図版第21・22の24~47)と、それ以外(図版第22の48~63)に分けて主な資料を報告する。

ア. 2区出土遺物

壺(23~31) 24は、口縁部近くの破片で、緩やかに短く外反する口縁部を持つ。口径約14cmを測る。口縁部は内外面とも横方向のナデ、体部は内面に横方向の、外面は縦方向のハケ目調整を施す。25・26とも24と同形・同大をなす。いずれも器壁の磨滅が著しいが、26には体部外面に縦方向の、内面に横方向のハケ目調整が観察される。27は、ほぼ完形に復原され、球形の体部から大きく「ハ」の字状に開く口頸部を持ち、口縁端部はわずかに上下に拡張される。口径約17cm・器高約27cmを測る。口縁部はナデ、頸部は外面上端に横方向のハケ目、その下部は縦方向のハケ目を施し、内面は縦方向のハケ目のあとナデ調整によって仕上げる。体部外面は、上半部にヘラ磨き、中位に縦方向のハケ目、底部付近にタタキが観察される。内面はヘラ削りのあと横方向のハケ目を行い、上端付近にはヘラ削りを一部認める。28は、口縁部付近を残す小片である。「ハ」の字状に開く口縁部と下方へ拡張する端部とからなる。口径約12.5cmを測る。磨滅のため、調整・文様等は明確に観察できないが、口縁端部に数条の沈線の痕跡を認める。29・30は、いわゆる受け口状口縁をなす壺口縁部片である。そのうち29は、肩部外面に櫛描き波状文、口縁端部の屈曲部

外面に列点文を施し、頸部外面に縦方向のハケ目が観察される。また、31は丸みのある体部と、短く外反したあと端部が上外方へ屈曲して立ち上がる二重口縁からなる。器壁の磨減は著しいが、口縁部は内外面ともナデ、体部外面にはタタキが認められる。また、体部内面には頸部付近に横方向のハケ目の後ナデ、それ以外に横方向のヘラ削りを観察した。

甕(32～35) 32・33は、ほぼ同形・同大で、体部から緩やかに屈曲し、短く外反する口縁部を持つ。口径約15.5cmを測り、体部内外面ともハケ目調整で仕上げる。34は、口縁部が緩やかに外反し、端部は下方へ摘み出される。内外面ともハケ目調整によって仕上げる。35は口縁部の小片であるが、「く」の字状に短く外反する口縁部片である。端部に近づくにしたがって器厚を増し、端部は外側に面をなす。ここに2条の擬凹線を施す。

壺・甕底部片(36～39) いずれも平底をなす。36は、体部から底部の破片である。外面にタタキ、内面は体部にヘラ削り、底部付近にハケ目調整を認める。37も同様な破片で、内外面ともハケ目調整を施す。36・38はともに、外面にタタキのあとハケ目調整を施す。

鉢(40～45) 40・41は、短く外反する口縁部を持つ。口径は40で約11.2cm、41で約11.2cmを測る。40は体部外面、及び口縁部内面にハケ目調整、41は全体にナデ調整が認められる。42は、斜め上方へ口縁部が直線的に立ち上がり、底部を穿孔する。口径約13.6cm・器高約9.8cmを測る。体部外面にタタキ、内面にハケ目調整を認める。43も42とほぼ同様の形態を持つと考えられるが、底部に穿孔はなく、小さく台状に下方へ突出する。44は、内湾気味に斜め上方へのびる口縁部を持ち欠損するが、脚台部が付随していたことが確認される。口径約13.0cmを測る。45は、口径25.0cmの大形品で、緩やかに屈曲して外反する口縁部を持つ。体部外面にハケ目、内面にヘラ磨き調整を認める。

器台(46) 46は口縁部片で、「ハ」字状に開いた後、端部は屈曲し斜め上方へ短くのびる。端面に2条の擬凹線を配する。口径約21.4cmを測り、内外面ともヘラ磨きで仕上げる。

蓋形土器(47) 口縁部を欠くが、中央がくぼむ把手と笠形に開く体部とからなるものと考えられる。なお、形態から、台付鉢の脚台部の可能性もある。

イ. 3・8区出土遺物

壺(48～51) 48は、直立気味に立ち上がる頸部とわずかに外反する口縁部とからなる壺口頸部片である。口径14.0cmを測る。口縁端部は、外側に面を持つ。頸部の内外面にハケ目調整を認める。また、頸部下端に円弧状のヘラ記号を配する。49は、口径約14.8cmを測る小形の壺口縁端部付近の小片である。端部は、下方へ拡張し面をなす。端面には上端にヘラ状工具の刺突による列点文及び3条の沈線を配する。50は、直立気味に立ち上がる頸部とわずかに外反する口縁部を残す破片である。口径約14cmを測り、口縁部はナデ、頸部は内外面ともハケ目によって仕上げる。また、頸部下端に円弧状のヘラ記号を施す。50・

51は、丸みのある体部から、短く外反して立ち上がる口縁部を持つもので、口縁端部は上外方に面をなす。いずれも口径約14.5cmを測り、口縁部内外面ともハケ目が観察される。なお、この2点は甕とするべきかもしれない。

甕(52・53) 両者とも、一端外反してのびる口縁部が緩やかに屈曲して、上方へ立ち上がる二重口縁を持つ。いずれも口径約14.5cmを測る。器壁の磨滅が著しいが、52では体部外面及び口縁部下端にタタキの痕跡を認める。

鉢(54～57) 54は、杯状の体部に短く外反する口縁部を持つ。口径約23.8cmを測り、遺存部分には横方向のハケ目調整が観察される。55は、丸みのある体部に「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部は上方に摘み上げられ外側に面を持つ。口径約10cmを測る。56・57は、椀状の体部を持つ小形の鉢である。外面は磨滅が著しく調整は不明だが、内面には縦方向のハケ目が観察される。56は口径約13.0cm・器高約6.4cm、57は口径約13.6cm・器高約5.4cmを測る。

壺・甕底部片(58～63) 58・59が壺、60・61が甕の底部片ではないかと思われる。58はナデ、59はタタキ、60・61はハケ目調整によって仕上げられる。また、62・63は底部に穿孔を施す甌で、外面にタタキ、内面にハケ目調整が観察される。

③溝(S D 12134)出土遺物(図版第23)

溝(S D 12134)は、5・9区にわたって検出した。遺物は両調査区とも遺構埋土中から小破片となって出土した。ここでは、両調査区から出土した資料を一括して、主なものについて報告することとしたい。

壺(64～67) 64は、丸みのある体部から直線的に上方へ立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部はやや内湾気味に終わる。口径約12cmを測る。口縁端部はナデ、体部から口頸部外面に縦方向のハケ目、口頸部内面に横方向のハケ目を施す。65は、外反気味に立ち上がる口縁部片で、口径約12cmを測る。器壁は磨滅が著しいが、口縁端部付近内面に横方向のハケ目、頸部外面にハケ目のあとヘラ磨きが施されている。また、口縁部外面に円弧状のヘラ記号が施されている。66は、丸みのある体部から短く外反して立ち上がる口縁部を持つもので、口径約14cmを測る。口縁部にナデ、頸部から体部上端部外面にヘラ磨き調整を認める。67は、「ハ」の字状に広がる口縁部を持つもので、口径約16.8cmを測る。端部は上下にわずかに拡張され面をなし、そこに5条の擬凹線が配される。

甕(68～70) 68は、ほぼ完形に復原されたもので、胴長の体部と、短く外反したあと屈曲して斜め上方へ立ち上がる口縁からなる。口径約16cm・器高約25.4cmを測り、体部はほぼ中位に最大径(19.6cm)を持つ。口縁部はナデ、体部は上半部にハケ目、下半部にハケ

目のあとヘラ削りを施す。69も、短く外反したあと屈曲して上方へ立ち上がる口縁部を持つものであるが、屈曲部は比較的鋭く、いわゆる受け口状の口縁となり、口縁端部はやや外反気味に終わる。口径約17.6cmを測り、口縁部内外面とも横方向のハケ目調整が観察される。70は、鋭く外反したあと、端部付近をわずかに上方に屈曲させる口縁部を持つ。端部外面に4条の擬凹線文を配する。口径約17.4cmを測る。

鉢(71~74) 71・72は、椀状の体部と短く外反する口縁部とからなる鉢である。器壁の磨滅が著しいが、72には、体部内外面ともハケ目調整が観察される。口径は、71が15.4cm、72が18.4cmを測る。また、73・74は二重口縁状に一端鋭く屈曲してのびたあと、斜め上方へ立ち上がる口縁部を持つものである。口縁部外面には、2ないし3条の擬凹線文を配する。口径は、73が21.2cm、74が26.2cmを測る。

壺・甕底部片(75~78) 底部片は4点を図示したが、75が壺、76・77が甕と思われる。また、78は底部に穿孔があり、甕の底部である。

高杯・器台(79~81) 79は、高杯の脚部片で、3方向に透かし穴を認める。外面にヘラ磨きを施す。また、80・81は、「ハ」の字状に下がる高杯か器台の脚底部片である。いずれも、外面にヘラ磨きが観察される。

(森下 衛)

(2)石 器(図版第55)

弥生時代の石器は、縄文時代のものと比べると少なく、約5点を数えるにすぎない。

22・23は、サヌキトイド製の打製石鏃である。22は無茎式で、一部欠損するものの、ていねいに調整が施されている。23は、凸基有茎式で、両面ともていねいに調整加工が施される。24は、凸基有茎式の磨製石鏃である。大きさは先端部が欠損するが、長さ6.2cmを測る。石材は、頁岩ないしは粘板岩を用い、ていねいに磨かれる。28・29は、石庖丁である。29は、半月形直線刃形態を取り、刃部は石目により角度を変えている。両方とも頁岩ないしは粘板岩を用いており、16区の自然流路跡から出土した。

(鶴島三壽)

第5節 古墳時代の遺構

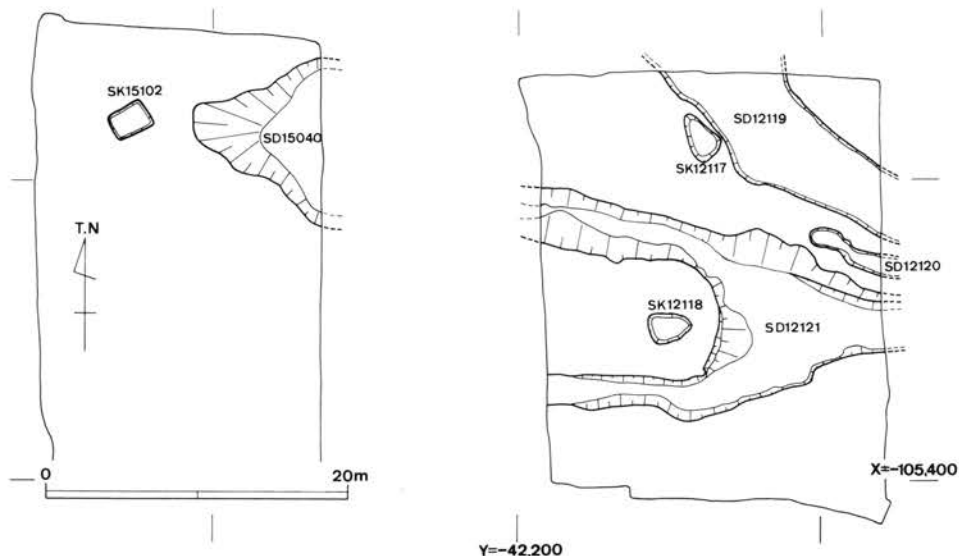
古墳時代の遺構・遺物は、調査地の南半部に集中して認められた。検出遺構には、溝・土坑・自然流路跡などがあり、掘立柱建物跡・竪穴式住居跡は確認していない。古墳時代の遺構の分布密度は後世の削平を考慮しても、全体的に稀薄である。

土坑は、6・7・15・16区で検出した。特に、6区南端部では、後期に属する21基の土坑が重複して検出された。溝は、4・7区で後期の溝(S D 10147・S D 12120・S D 12119)を検出した。また、7区で検出した溝(S D 12121)、11・16区を中心とする自然流路跡(S R 16001)の堆積土中には、古墳時代前期～中期の遺物(土器や木製品)が多量に含まれていた。こういった状況から考えると、古墳時代の集落跡は、6区から15・16区方面(北西方向)へ続く微高地の延長上の調査地隣接地に存在したものと想像される。このことは、千代川遺跡第16次調査においても自然流路中から同時期の遺物がまとまって出土していることから裏付けられよう。

土坑 1 (S K 15102) 15区北寄りの部分で検出した方形の土坑である。長辺約2.5m・短辺約2mを測る。遺存状況は極めて悪く、深さ約10cmを残すにすぎない。埋土は黒褐色土であり、わずかに布留式併行期の甕口縁部小片が出土した。

土坑 2 (S K 16013) 16区北端の自然流路1(S R 16001)の肩部で検出した長楕円形の土坑である。長径約3.7m・短径約2.2m・深さ約40cmを測る。埋土は黄褐色土のブロックを含む黒褐色土で、埋土中から後期の須恵器杯身・杯蓋・高杯などが出土した。

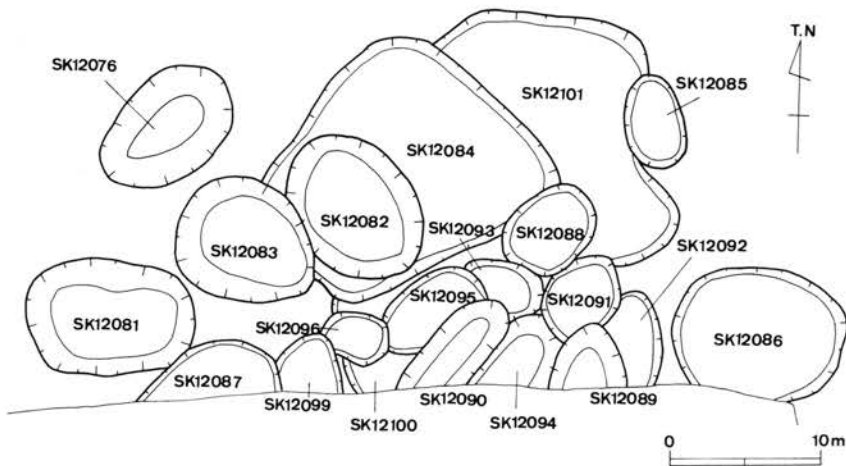
土坑 3 (S K 12118) 7区中央で二又に分かれていた溝(S D 12121)が一本に合流するが、



第14図 古墳時代(Bブロック)遺構配置図

付表5 6区土坑群一覧表(出土遺物は第15図参照)

遺構番号	規模	形態	出土遺物	遺構番号	規模	形態	出土遺物
S K 12076	2.1m×1.4m	楕円形	120～126	S K 12089	不明	不明	
S K 12081	2.4m×1.6m	楕円形	100～104・114 115・119	S K 12090	1.6m×0.9m	楕円形	110
S K 12082	2.2m×1.7m	楕円形	105～107・109・ 129～132・135～ 138	S K 12091	1.1m×1m	円形	
				S K 12092	不明	不明	96・113
				S K 12093	1.2m×0.9m	楕円形	
				S K 12094	不明	不明	
S K 12803	2.1m×1.7m	楕円形	96・118	S K 12095	1m×0.7m	楕円形	95
S K 12084	3m×3.2m	隅丸方形	94・111・112・ 127・128・133～ 134・139～146	S K 12096	1.7m×1m	楕円形	
				S K 12097	不明	不明	
				S K 12098	不明	不明	
S K 12085	1.3m×0.8m	楕円形	97	S K 12099	不明	不明	99
S K 12086	2.4m×2m	楕円形		S K 12100	不明	不明	93
S K 12087	不明	不明	108	S K 12101	不明	不明	
S K 12088	1.4m×1m	楕円形					



第15図 6区土坑群実測図

その合流点付近で検出した。楕円形の土坑で、長径約2.8m・短径約2m・深さ約40cmを測る。埋土は黒褐色土で、埋土中から須恵器杯身・杯蓋・木製品などが出土した。

土坑群(S K 12076・S K 12081～12101) 6区の南端部において、ほぼ同一地点に穿たれた総数22基の土坑を検出した。土坑の大半が同一か所に切り合って存在し、各土坑の規模・形態、出土遺物の確認は困難を極めた。かろうじて、土層断面でその存在を確認したものもある。平面形態は隅丸方形に近いものや楕円形のものなどがある。断面形態は丸底状になるものが多い。以下、個々の形態・規模については、付表5で報告する。土坑の性格については、出土遺物の中に大形の杯身片や滑石製の双孔円盤などが認められたことから、集落近辺での祭祀にかかわるものであったと考えられる。

溝1(S D 10147) 4区の中央を斜めに横断するように検出した。ただ、後述する奈良時代の溝1(S D 10149)と一部重複していることなどから、遺存状況は極めて悪く、延長約24mを確認したにすぎない。検出部では、幅約2m・深さ30cm(いずれも最大値)を測り、断面は緩やかな「U」字形を呈する。埋土は灰色砂礫で、6世紀初～7世紀前半に属する須恵器片が出土した。

溝2(S D 12119) 7区の北東隅付近で検出した。後述する古墳時代前期の溝3(S D 12121)が一旦埋没した後に、この窪地の延長部へ向かって流れていたものと考えられる。検出部では、幅約4.5m・深さ0.3m(いずれも最大値)を測り、断面は緩やかな「U」字形を呈する。埋土は黒灰色土で、6世紀後半～末葉に属する須恵器片が出土した。

溝3(S D 12121) 7区の中央を東西に流れるもので、その延長部と思われるS D 15040を15区の東辺部で確認した。溝は西から東へ流れており、かつ7区中央で2条の流れが合流する状況である。ただし、南側の支流はおおむね本調査区内で終結し、西側の15区へ続くのは北側の支流のみである。幅は、支流部で約3m・深さ約40cm、合流点以東で幅約10m・深さ約40cmを測る。断面は、緩やかな「U」字形を呈する。埋土は黒灰色砂質土で、布留式併行期の土器群とともに木製品が出土した。出土土器が古墳時代中期のものに限られていることから、比較的短期間で埋没した溝と考えられる。

自然流路1(S R 16001) 10・11・16・17・18区で検出した。幅約25m・深さ約2mを測り、旧河道跡とも呼ぶべき大きな流れの跡である。堆積土は、大きく4層に分かれる。上から、黄褐色土(地山土)のブロックを含む淡灰色土(近世の遺物包含層1；整地土)、淡灰褐色土(中世の遺物包含層2；堆積土)、黒褐色粘質土(奈良・平安時代の遺物包含層)、黒灰色粘質土(弥生時代後期～古墳時代の遺物包含層)である。これらの状況からは、比較的緩やかな流れによって徐々に埋没したものと考えられる。上流部に、早い段階から堰関のような施設が造られており、これによって一定の緩やかな流れが確保されていた可能性が高い。出土遺物は、最も下層の黒灰色粘質土から弥生時代末から古墳時代前期に属する土器や、盤・槽をはじめとする木製品が大量に出土した。自然流路肩部の形状は11区において、調査区中央で大きく南へ向かって張り出している。流路の肩部から底にかけての傾斜は緩やかであり、傾斜面や傾斜変換点に土器・木器・流木が多数検出された。流路の底は平坦で灰褐色砂利層が堆積している。この最下層の砂利層からは、弥生時代後期の土器や古式土師器とともに農耕具と思われる木製品も出土した。この上層には、黒灰褐色粘質土がぶ厚く堆積している。この土層中に間層として灰褐色砂利層があり、大まかにこれより上が鎌倉時代、下が奈良・平安時代以前と分けられる。

(森下 衛)

第6節 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物の大半は、弥生時代末から流れる溝(S D 12121)及び自然流路跡(S R 16001)出土の遺物である。ここの遺物は古墳時代前～中期の遺物が最も多く、弥生時代の遺物も含むが、古墳時代の遺物の中にまとめて取り上げた。遺構出土の遺物では、6区を中心とした土坑出土の遺物があるが、数量的には圧倒的に溝・流路跡出土の遺物が多い。

(1)土 器(図版第24～33)

①溝(S D 12121)出土遺物(図版第24～25) 7区の溝では、埋土である黒褐色土中から整理箱約20箱にのぼる大量の古式土師器が出土した。破片となっているものが大半であったが、小形丸底壺(図版第24の1～4)、壺(5～7)、甕(8～21)、高杯(22～27)などを認めた。なお、内訳としては、いわゆる布留式甕がそのほとんどを占めることとなる。

これら資料は、流路内出土という性格上、良好な単一時期の一括資料として認識しうるものではない。実際、やや時期幅を認めるものの混入も認める。ただ、主体をなすのは、やや粗雑化した小形丸底壺と口縁端部内面に幅広の内傾する面を持つ布留式甕などであり、布留式併行期でも比較的新しい段階に位置づけられることを示している。

以下、主な資料を図示し、その概略を報告することにした。

小形丸底壺(1～4) いずれも、球形の体部から上外方へと伸びる口縁部を持つ。1・2は、口径が腹径をわずかに上回る。3・4は、口径・腹径がほぼ同じである。1は口径10.7cm・器高11cm、2は口径9.2cm・器高8.9cm、3は口径8.5cm・器高9.1cmを測る。

壺(5～7) 5は、ナデ肩の体部から口縁部は「く」の字に屈曲し、端部は内面に肥厚する。口縁部・体部外面は横ナデ、体部内面は横方向のケズリを施し、頸部付近には指頭圧痕が見られる。口径16.8cmを測る。6は、張り出した肩部から口縁部が直立気味に外反して高く立ち上がり、端部は尖り気味に終わる。口径9.5cmを測る。7は、ナデ肩の体部から口縁部が直立気味に立ち上がり、端部は内側にやや肥厚する。口径14.3cmを測る。

甕(8～21) いずれも口縁部が「く」の字に外反する。8は、丸底の底部に長胴形の体部を持つ。口径17.1cm・器高25.3cmを測る。体部外面はハケ調整、内面は横方向のケズリを施す。9は、口縁部がややぶ厚く、10は口縁端部上方に面を持っている。11～19は、口縁端部が内側に肥厚する。11は、口縁端部が上方に丸く肥厚し、古式を呈する。口径16.9cmを測る。14は体部中央がふくれ、球形を呈さないと考えられる。19は、口径15.7cm・器高25.2cmを測る。20・21は、ナデ肩の体部から、口縁部が「く」の字に屈曲した後、斜め外方に立ち上がり、複合口縁形を呈する。

高杯(22～27) 22は、斜め上方に緩やかにひらく杯部を持ち、口縁端部はややとがる。口径17.4cmを測る。23は、高杯の脚部で、体部外面はタテ方向のミガキ、内面には削りを

施す。25・26は、椀状の杯部を持つ。26の脚部外面はミガキを施した後、部分的にナデ調整を施す。脚部裾付近は横ハケ調整を施す。23・26・27は、裾が緩やかにひらくが、24は他の高杯の脚部とは異なり、ラッパ形にひらく。

②自然流路跡(S R 16001)出土遺物(図版第26～30) 溝S D 12121と同様、大量の古式土師器が出土した。出土状況・遺物組成も類似している。なお、遺物の分類は、近接する北金岐遺跡を参考とした。

小形丸底壺(40～45) 小形丸底壺の体部外面にはハケ調整、ケズリを施すものの両方があり、内面はヘラ削りを施すものが多い。45は、須恵器の甗を模倣した土師器である。

壺(46～48・57・58) 46の口縁部は、下方に拡張し、口縁端部外面には5本単位の櫛描き列点文を施す。胎土はチョコレート色で、角尖石を含む。生駒西麓産の土器であろう。口径22cmを測る。47・48は、口縁が真上ないし斜め上方に立ち上がり、内外面ともハケ調整が施される。48は、口径27.2cmを測る。57は、複合口縁形を呈し、口縁部外面に4～5条の擬凹線文を施す。頸部から口縁部の屈曲は丸みを持つ。58は、いわゆる山陰系の二重口縁を持つ。外反した擬口縁部からさらに外反する口縁を付加して口縁部を作る。

甗(28～30・49～56・59～84) 28～30は、口縁部が斜めあるいは直立気味に短く立ち上がり複合口縁形を呈する。体部外面にはハケあるいはナデ、内面にはヘラ削りあるいはハケ調整を施す。28の口縁部には擬凹線文、29は、不明瞭な擬凹線文をめぐらす。28～30の口径は、約30～37cmを測る。49は、口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部をわずかに上方へつまみあげる。体部外面は細かなタタキが施され、器壁は薄く仕上げられる。胎土は、46と同じである。口径25.7cmを測る。50～56は、ナデ肩の体部からいずれも口縁が緩やかに「く」の字形にひらくもので、50は頸部に稜を持たない。体部外面には肩部にタタキを残すもの(52)があるものの、多くはナデあるいはハケ調整で仕上げる。61～63は、口縁部がいずれも上方に直立気味に短く立ち上がり、複合口縁形をとる。62は倒卵形の体部から、「く」の字に屈曲する頸部に続き口縁部に至る。体部外面は横ないしは斜め方向のハケ調整を行い、内面もハケ調整が施される。64～66は、口縁部が外反しながらもわずかに複合口縁形の傾向が看取できる。65は外面は縦方向に、内面は横方向のハケ調整が施される。66は、外面が肩部にタタキの痕跡を残すものの、ていねいなハケ調整を施す。両者とも体部は長胴形である。67は、「く」字に屈曲した頸部から口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。69～71は、口縁端部上方に面を持つ。69は、上方に面を持ちつつも、中央がわずかにくぼむ。70は、口縁端部が肥厚する。71は、体部中央付近まで遺存し、完形に復原はしえないが、体部下半に体部最大径を持つと考えられ、他例と体部の形態が異なるようである。72～78は、いずれも口縁端部が肥厚するいわゆる布留式甗である。72～75は、や

や直立気味に上がり、76～78はそれよりも斜め上方に上がる。いずれも、体部外面はナデ及びハケ調整、内面はナデ及びケズリを施す。79・84は、完形に復原しえた。79は、口径13.5cm・器高22.7cm・最大腹径20.9cmを測る。84は、口径15.6cm・器高25.0cm・最大腹径23cmを測る。

壺・甕底部片(31～39) 31は、底部にしほりこみの痕跡がみられ、33は、底部に焼成前に円孔を穿つ。34は、台付鉢の可能性がある。35～39は、平底あるいは突出ぎみの平底を持つ。35～37は、体部外面にはタタキが施され、38・39は、ハケが施される。39は、底部にもハケ調整が施されている。

高杯(85～92) 85の杯部は緩やかに立ち上がり、やや内湾気味に終わる。86・87も杯部は緩やかに立ち上がるが、口縁部は若干外反気味に終わる。87は、杯底部外面に稜線がめぐっている。89～91は、杯底部に擬口縁を作り、外面に明瞭な稜線をめぐらす。杯の口縁部はやや外反気味に開き、90・91は端部をやや上方につまみ上げる。91は、内外面ともヘラ磨きが施されている。

(森下 衛・鶴島三壽)

③6区土坑出土遺物(図版第31～32) 6区南端部で検出した土坑群は、ほぼ同一ともいえるか所に22基の土坑(検出しえていないものを含むと30基を越えると思われる)が次々と穿たれたものであり、複雑な切り合い関係を有していた。ここでは、比較的まとまった資料として、S K 12084資料(図版第31の94・111・112、図版第32)とS K 12076資料(図版第31の120～126)を中心に報告し、その他の土坑資料としては、遺構に伴うことを確認した須恵器杯身・杯蓋類を提示するにとどめたい。また、明瞭に遺構に伴うことが確認できなかった資料(本部位の黒褐色土中から出土した資料)でも、土坑群の穿たれた時期を検討する資料として一部を図示した(図版第33の149～161)。

S K 12084資料としては、須恵器杯身(111・112・133～139)、杯蓋(94・127～132)、甕(140・141)、土師器碗(142・143)、土師器鉢(144)、土師器甕(147・148)、甗(145)、高杯(146)、そして石製品として双孔円盤(図版第55の21)などが認められた。これらのなかでは、大形の須恵器杯身(139)や双孔円盤の存在が注目される。いずれも祭祀遺構に伴う遺物として認識されているものであり、これら土坑群の性格を示唆するものといえるだろう。なお、形態などから129～132や137・138は、明らかに土層の不明瞭さのため、他の土坑(S K 12082)から混入したものと考えられる。

S K 12101資料としては、須恵器杯身(120～125)と土師器甕(126)のみを確認しえたにとどまる。この点では、S K 12084と比べて遺物の組成に差異を認めるが、土坑の規模・形態に差がある点や時期的な隔たりといった問題を含め、今後の検討課題としておきたい。

遺物の示す時期としては、遺構に伴うものでは、S K 12100資料(93)が最も古いものとしてMT 15に比定でき、また、S K 12101資料などが最も新しい資料としてT K 209に比定できる。その他は、T K 10からT K 209の時期に納まると思われ、これら土坑群が6世紀前半から7世紀初頭頃の間、順次穿たれたものとして理解される。以下、各遺物の概略を報告する。なお、各遺物の出土遺構については、付表5を参照されたい。

須恵器蓋(93～110・127～132) 93・94は、口縁部に稜を持つが、95～110は、もたない。95～101は、口径15～16cm・器高4.2cmを測る。101は口縁端部がやや尖り気味で、104は、体部中央で屈曲し、稜を持つ。口径14.2cmを測る。96・98は、天井部にヘラ削りが施される。127は、天井部から体部中央付近までヘラ削りを施し、口縁部には稜を持ち、真下におりる。口径14.5cm・器高4.5cmを測る。132は、笠形の天井部を持ち、口縁部で屈曲し真下におりる。口径15.6cmを測る。

須恵器杯身(111～125・133～139) 111は、口縁部が上方に立ち上がり、口径11.5cm・器高4.9cmを測る。口径の割に器高は低いものが目立つ。120は、口径8.8cm・器高3cmと他の杯身に比べると低い。125は、口径13.4cm・器高5.1cm以上を測り、口径の割に器高は高い。ヘラ削りは底部から体部中央付近まで施される。139は、大形の杯身で、口径20cmを測る。

須恵器甕(140・141) 球形の体部から直立した頸部を持ち、口縁部は外反する。外面はタタキ後横方向のナデ、内面は当て具の痕跡が明瞭に残る。

土師器杯(142・143) 142は、平坦な底部から斜め上方に立ち上がる口縁部を持つ。外面にはナデ及び指押さえの痕跡が残る。

土師器鉢(144) 外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が施される。口縁部外面には指押さえの痕跡が明瞭に残る。

土師器甕(145) 調整は、144と同じように、外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が施される。口径16.6cmを測る。

土師器高杯(146) 脚部片である。外面は縦方向のミガキ、内面はケズリ後ナデ及び指押さえである。底部はラッパ形に開く。

土師器甕(126・147・148) 126は、外面は縦ハケ、内面は縦方向にヘラ削りが施され、口径15cm・器高18.5cmを測る。やや長胴形の体部から「く」の字に開く口縁を持つ。147は内外面とも縦方向のハケを施す。口径14cmを測る。148は外面は縦ハケ、内面はヘラ削り、口縁部は横方向のハケを施す。

④5～7区出土遺物(図版第33) 古墳時代後期の遺物としては、上記の土坑群資料のほか、7区の溝S D 12119(164・166～170)や土坑S K 12118(165)、さらに5区の黒褐色土出

土資料(162・163)を一部図示した。

須恵器蓋(149～154・164) 149・164は、高杯の蓋である。150は、口縁部に稜をもっており、口縁端部はやや尖る。151～153は、天井部から緩やかに口縁部へ至る。154は、平らな天井部から口縁部で稜を持ち、斜めにおりる口縁部を持つ。154は、口径13.6cm・器高2.9cmを測る。164は、体部中央と後部に稜を持ち、口縁端部は尖り気味に終わる。口径12.4cm・器高5.4cmを測る。

須恵器杯身(155～163・165) いずれも口径13cm前後を測る。162は、体部中央付近までヘラ削りが施される。6区の土坑群出土の遺物と同じ型式の遺物である。

須恵器高杯(166～169) 166は、他の杯身と同じ杯部に脚部がつく。167は、ラッパ形に開く脚部を持ち、長方形の透かしを持つ。168・169は、長脚二段透かしを持つもので、168の透かしは、幅1mmほどの狭いものである。

須恵器甕(170) 口縁部は2段の波状文を施す。口縁端部外面は突起がめぐる。口径29.6cmを測る。

(森下 衛)

(2)石 器(図版第55)

古墳時代の石器の出土は少なく、3点を数えるにすぎない。

21は、双孔円盤である。6区の土坑から出土した。亀岡市内では初めての出土である。滑石製で、直径約2cmを測る。25・26は、磨製石鏃である。いずれも頁岩ないしは粘板岩を素材とする。25は、平基無茎式で、中央部に直径2mmの穴をあけている。ていねいな研磨で鋭い刃部を形成している。溝S D15040から出土した。26は凸基無茎式で、これもていねいな研磨で鋭角的な刃部を作る。34区の遺物包含層から出土した。27は、紡錘車である。表面は直弧文が線刻され、裏面にも線刻が施される。31区の遺物包含層から出土した。

(鶴島三壽)

(3)木 器(図版第59～61)

1～6はS D12121、7～16はS R16001出土遺物である。したがって、土器と同じように弥生時代末～古墳時代中期を中心とする時期のものと考えられる。

1は、槌状木製品である。槌部は方形に、握部は長楕円形に作る。成形途中の未製品であろう。2は、刀形木製品である。半月形の刃部に長さ5cmの握り部を持ち、上部は欠損する。握部の基部は削り込まれている。天地逆の可能性があり、用途は不明である。3は、杭状木製品である。先端は上から下に削り込まれている。4は、不明木製品である。全体

に仕上げは荒く、未製品と思われる。農具の柄の可能性があろう。5は、ナスビ形木製品である。ていねいに面取りされ、全体的に平滑に仕上げられる。長さ66.8cm・厚さ1.5cmを測る。出土時より大きく湾曲している。6は、代搔きである。長さ74.3cm・幅6.4cm・厚さ2.5cmを測る。3~4cmごとに方形の切り込みが合計13個施される。両端から約4cmのところには、幅2cmの摩滅が認められる。

7は、直径約26cm・高さ1.8cmを測る。挽物であるが、具体的な用途は確定しがたい。8は、蓋板と思われる。直径17.2cm・厚さ0.6cm、円盤の中央に穴をあけていることから蒸し器のサナに比定することもできよう。9は、槽である。平面形が隅丸長方形を呈する。長さ23.7cm・幅13.7cm・底部厚1.7cmを測る。心去りの割材を削り抜き、ていねいな調整加工で仕上げる。平坦な底部から斜めに立ち上がる口縁部を持ち、端部は面取りがされている。内面は火を受け、炭化した部分が大半をしめる。10は盤の破片である。平坦な底部から口縁部が斜めに立ち上がる。破損が著しく、全体ははっきりしない。11は、鏃形木製品である。広根式の身に茎を作り出し、実用の鉄鏃を忠実に模している。長さ14.2cm・幅3.2cm・厚さ0.7cmを測る。鏃形木製品は、7世紀後半から9世紀前半までの資料が知られており、その形態は古墳時代の鉄鏃と基本的には変わらない。本来鏃は武器として使用されるが、これは木製品であり、流路出土ということから考えて水辺の祭祀との関係が強いと思われる。12は、火鑽板である。長さ18.6cm・幅1.9cm・厚さ1.1cmを測る。細い角棒の側面に、2.5cm間隔に切り欠きを入れ、火鑽杵を回転させた火鑽臼を上面にとどめる。3か所に未使用の切り欠きがある。裏面は黒く焦げる。13は、糸巻き状木製品である。両端は欠損する。表は加工するが、裏は平坦に作る。14は、槌状木製品である。棒状部は最大長23.7cm・最大幅12.7cm・最大厚6.7cmを測り、全体に面取りされ、先端部は斜めに切られ面を持つ。ほぞ部は長さ11cm・幅4cm・厚さ3cmを測る。ほぞ部も面取りされ、先端までていねいに仕上げる。ほぞ部の基部から4.4cmのところ、縦1.4cm×横1.9cmの大きさのほぞ穴があいている。棒状部やほぞ部の切り込みからはいずれも使用痕は看取できない。本例は、使用痕がないことや、主軸線に対し棒状部の先端が角度を持っていることから、先端を使用することを目的にした可能性もあるし、あるいは未製品ということも考えられる。類例がないことから名称、用途などは今後の課題であろう。15は、板状木製品である。長さ65cm以上・幅14.8cm・厚さ1.2cmを測る。中央部に長さ10cmの長楕円形の穴が開く。16は、鋤である。長さ43.1cm・幅15.4cm・軸部の直径3cmを測る。刃部上端面は軸部と同様一段厚く、先端部は細かな面取りを施す。

(鶴島三壽)

第7節 奈良～平安時代の遺構

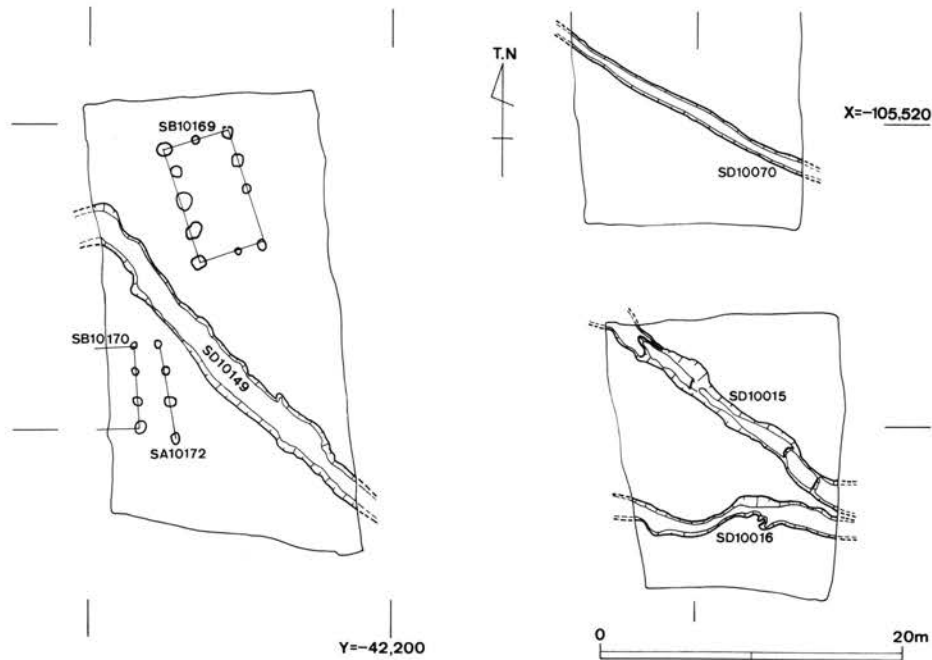
ここで奈良～平安時代の遺構・遺物として報告するのは、7世紀後半から11世紀までのものである。検出遺構には、掘立柱建物跡25棟・溝・土坑などがある。出土遺物は、各遺構埋土から出土したものは少ないが、遺構検出面直上に認めた黒褐色土層などから比較的多く出土している。

これら奈良～平安時代の遺構・遺物は、南北に長い調査地のなかで地形に左右された状態で、大きく4地区に分かれて分布している。以下ではこれをA～Dの4つのブロックと呼称し、各ブロックごとに遺構・遺物を報告する。

①Aブロック

調査地南端の1・2・4区をAブロックとした。弥生時代の遺構の項でも述べたように、西方から続く微高地の先端近くに相当している。正確には、この微高地は本地点あたりで南東方面へ一旦方向を変え、現在の千々川沿いに東方へのびる。ちなみに、千代川遺跡第6次調査で確認した桑寺廃寺や弥生時代中期の集落跡・方形周溝墓群はこの微高地の延長上に立地することとなる。

調査では、この微高地上で、奈良時代の溝4条、平安時代の掘立柱建物跡2棟、柵列1などを検出した。もちろん、微高地の本体は調査地の西方にあり、弥生時代後期の遺構と同様に、本時期の遺構群も調査地の西側へ広がりを持つと考えられる。



第16図 Aブロック遺構配置図

掘立柱建物跡1(S B 10169) 4区の北半部中央で検出した。検出面は、奈良時代の遺物を大量に含む灰色砂層上面である。桁行4間(8.3m)×梁間2間(4.1m)の南北棟で、主軸はN-16°-Wである。柱掘形は方形で、大きさはそれぞれで差異があるが、北西隅部のもので一辺約90cm、南東隅で約60cm、深さ約50cmを測る。

掘立柱建物跡2(S B 10170) 4区の西辺部中央付近で検出した。検出面は、建物跡1と同じ、灰色砂層上面である。南北3間(5.6m)×東西1間(1.4m)以上の規模を有すると思われるが、西方へのびているため、全体の規模は不明である。確認した柱掘形は方形で、一辺約60cmを測る。

柵列1(S A 10172) 建物跡2の東側に接して、南北に3間分(6.6m)を検出した。検出面は、やはり灰色砂層上面である。建物跡2の方向とはやや振れ、N-11°-Wである。確認した柱掘形は方形で、一辺約70cmを測る。

溝1(S D 10149) 灰色砂層の下面、黄灰色粘土上面で検出した。4区を北西から南東方向に横切る。幅約4m・深さ約30cmを測り、断面は非常に緩やかな「U」字状をなす。溝底部のレベルは、北西から南東へ下がっており、地形の傾斜に沿って流れていたものと考えられる。溝内には、この上層にも認めた灰色砂が堆積する。この灰色砂は、溝の埋土となるばかりでなく、4区の全体に薄く堆積している。これは洪水などによって、上流の北西部から流入したものと考えられる。なお、砂中には大量の須恵器片が含まれていた。

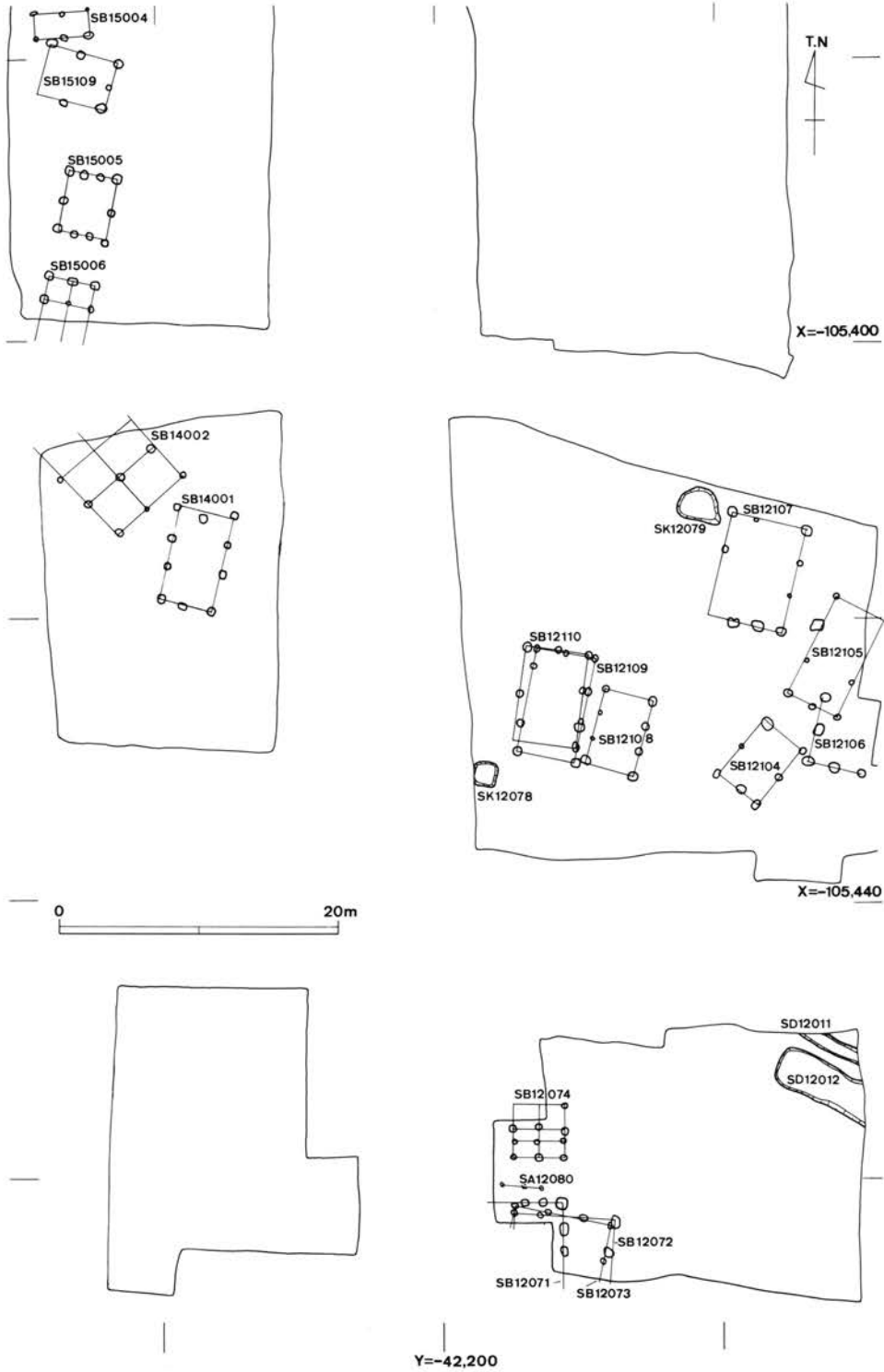
溝2(S D 10016) 1区の南端付近を蛇行しつつ東西に横切る。溝1と同様、上部に堆積した灰色砂層下面の黄灰色粘土上面で検出した。埋土も、灰色砂層である。遺物は須恵器片をわずかに認めたにとどまる。幅約1.5m・深さ約20cmを測る。底部のレベルから、西から東へ流れていたものと考えられる。

溝3(S D 10015) 1区を北西から南東方向に横切る。検出面は、黄灰色粘土上面である。幅約1.5m・深さ約70cmを測り、断面は「U」字形をなす。溝底部は、北西から南東へ向かって階段状に段差をもって下がる。溝内には暗灰黄色砂が堆積する。遺物は須恵器の小片がわずかに出土した。

溝4(S D 10070) 2区の南端近くを北西から南東へ向かって直線的に横切る。検出面は、黄灰色粘土上面である。幅約1m・深さ約10~20cmを測り、断面は、「U」字状を呈する。埋土は、黒褐色土で、遺物はほとんど出土しなかった。

②Bブロック

Aブロックの北方の微高地を中心とする5・7・14・15区をBブロックとした。Aブロックとは2区北端から5・9・14区へとのびる窪地部によって区画される。やはり、西方



第17図 Bブロック遺構配置図

からのびてくる微高地の先端近くに位置するが、調査ではこの微高地を6・14～16区にわたって検出した。ただし、遺構を検出し得たのはこのうち6・15区と微高地縁辺の窪地となっている5区であり、16区では後世の削平のため、遺構は遺存していなかった。調査では、この微高地を中心に掘立柱建物跡17棟・溝2条・土坑などを検出した。

掘立柱建物跡3 (S B 12074) 5区西辺で検出した。検出面は黒灰色粘質土上面である。桁行2間(3.8m)×梁間2間(3.8m)の南北棟の総柱建物跡で、倉庫跡と考えられる。主軸はN-2°-Eである。柱穴は、一辺約50cmの方形で、深さ10cmを測り、遺存状況はよくない。西辺中央の柱穴内から須恵器杯身片が出土した。上記したように窪地状部の軟弱な基盤上に建てられたためか、確認した柱穴内にはいずれも根石が挿入されていた。

掘立柱建物跡4 (S B 12071) 5区の建物跡3の南側で検出した。検出面は黒灰色粘質土上面である。桁行2間(3.5m)以上×梁間2間(2.6m)以上の規模を持つ。これも倉庫跡の可能性が高い。主軸はN-2°-Wであり、ほとんど建物跡3と同じである。柱穴は方形で、大きさはそれぞれで差異があるが、北西隅で一辺約60cm、南東隅で約60cmを測る。遺存状況は悪く、深さ約10cmを測るにすぎない。

掘立柱建物跡5 (S B 12072) 建物跡4と一部重複して検出した。検出面は黒灰色粘質土上面である。桁行3間(7.3m)×梁間1間(2.8m)以上の規模を持つ東西棟の建物跡と考えられる。主軸はN-94°-Eである。柱穴は、一辺約45cmの方形で深さ約10cmを測る。

掘立柱建物跡6 (S B 12073) 建物跡5とほぼ同一地点に若干方向を違えて建てられている。検出面はやはり黒灰色粘質土上面である。検出状況も同じ、桁行3間(6.9m)以上×梁間1間以上(2.4m)で、規模もほぼ同一と考えられる。主軸はN-102°-Eである。柱穴は一辺約50cmの方形で、深さ約10cmを測る。

掘立柱建物跡7 (S B 12104) 6区東側で検出した。検出面は黄灰色粘土上面である。桁行2間(5.2m)×梁間2間(3.7m)の南北棟で、主軸はN-40°-Eである。柱穴は、方形で一辺約45cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡8 (S B 12105) 6区東辺で検出した。検出面は黄灰色粘土上面である。建物の西側約半分を検出したにとどまるが、桁行3間(7.6m)×梁間2間(4.0m)の南北棟と考えられる。主軸はN-26°-Eである。柱穴は、方形で一辺約50cm・深さ約15cmと浅く、遺存状況は悪い。

掘立柱建物跡9 (S B 12106) 6区東辺、建物跡8の南側で、一部を重複して検出した。検出面は黄灰色粘土上面である。桁行2間(4.8m)以上×梁間2間(3.8m)以上の南北棟の建物跡と考えられる。主軸はN-10°-Eである。柱穴は、一辺約60cmの方形で、深さ20cmを測る。

掘立柱建物跡10(S B 12107) 6区北側で検出した。検出面は黄灰色粘土上面である。遺存状況が極めて悪く、確認し得ない柱穴もあったが、桁行3間(7.6m)×梁間3間(5.5m)の南北棟の建物跡と考えられる。主軸はN-13°-Eである。柱穴は、方形で一辺約80cm・深さ約10cmを測る。

掘立柱建物跡11(S B 12109) 6区西側で検出した。検出面は黄灰色粘土上面である。桁行3間(7.5m)×梁間2間(4.4m)の南北棟で、主軸はN-11°-Eである。柱穴は方形で、大きさはそれぞれで差異があるが、北西隅で一辺約50cm、南東隅で約75cmを測る。遺存状況は悪く、深さ約20cmを測るにすぎない。なお、本建物跡は、同一か所で建て替えが行われているようで、北辺及び東辺の柱穴列が、若干方向を違えた建物跡12(S B 12110)と重複している。

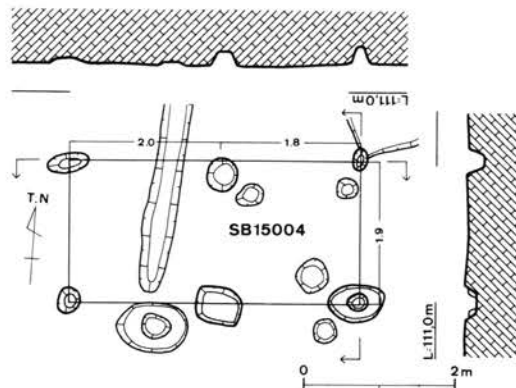
掘立柱建物跡12(S B 12110) 建物跡11と重複して検出した。桁行3間(6.8m)×梁間2間(4.6m)の南北棟で、主軸はN-9°-Eである。柱穴は方形で、大きさはそれぞれで差異があるが、北西隅で一辺約50cm、南東隅で約70cmを測る。遺存状況は悪く、深さ約10cmを測るにすぎない。

掘立柱建物跡13(S B 12108) 6区中央の建物跡11・12の東側で検出した。検出面は黄灰色粘土上面である。桁行3間(5.4m)×梁間1間(3.6m)の南北棟の建物跡である。主軸はN-17°-Eである。柱穴は、一辺約60cmの方形である。遺存状況は悪く、深さ約20cmを測るにすぎない。

掘立柱建物跡14(S B 14001) 14区中央付近で検出した。検出面は黒褐色粘質土上面である。桁行3間(7.4m)×梁間2間(3.6m)の南北棟の建物跡である。主軸はN-15°-Eである。柱穴は、方形で一辺約60cm・深さ約20~40cmを測る。

掘立柱建物跡15(S B 14002) 14区北辺で検出した。検出面は黒褐色粘質土上面である。桁行2間(6.2m)以上×梁間2間(5.8m)を測る南北棟の総柱建物跡と考えられる。主軸は、N-48°-Wである。柱穴は方形で、一辺約60cm・深さ約20cmを測る。

掘立柱建物跡16(S B 15004) 15区北側で検出した。検出面は黄灰色粘土上面である。桁行2間(3.8m)×梁間1間(1.9m)の小規模な建物跡である。主軸はN-87°-Eである。柱



第18図 掘立柱建物跡16(S B 15004)実測図

穴は円形で、直径約60cm・深さ約20cmを測る。

掘立柱建物跡17(S B 15109) 15区中央部で検出した。検出面は黄灰色粘土上面である。桁行2間(5.0m)×梁間2間(3.4m)の東西棟の建物跡である。主軸はN-104°-Eである。柱穴は、方形で一辺約50cm・深さ約20cmを測る。

掘立柱建物跡18(S B 15005) 15区南側で検出した。検出面は黄灰色粘土上面である。建物跡19とは柱筋を合わせている。桁行2間(4.4m)×梁間3間(3.5m)の規模を持つ建物跡である。総柱建物跡ではないが、規模や柱間隔が狭いことなどから倉庫跡とも考えられる。主軸はN-11°-Eである。柱穴は、一辺約75cmの方形で、深さ約20cmを測る。

掘立柱建物跡19(S B 15006) 建物跡18の南側に位置する。検出面は黄灰色粘土上面である。桁行2間(3.5m)×梁間1間(1.8m)以上の総柱建物跡である。建物跡18とは柱筋を通しており、企画的に配置された倉庫群と考えられる。主軸はN-12°-Eである。柱穴は、方形で一辺約60cm・深さ約25cmを測る。

土坑1(S K 12079) 6区の北辺中央付近で検出した円形に近い土坑である。径2m・深さ約60cmを測る。埋土は、黄褐色土のブロックを含む黒褐色土である。

土坑2(S K 12078) 6区の南西隅で検出した方形の土坑である。一辺約1.5mを測り、深さは約30cmである。埋土は、土坑1と同様黄褐色土のブロックを含む黒褐色土である。

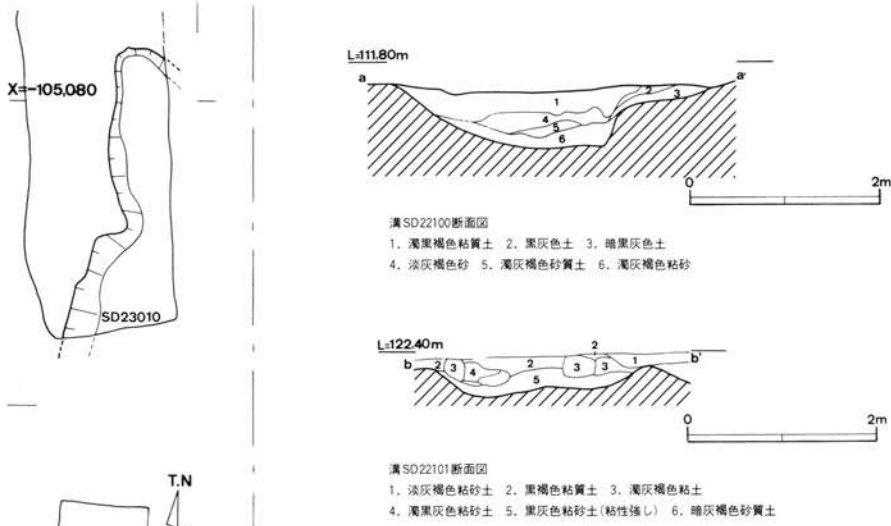
素掘り溝群(S D 12150~12166) 5区では、建物跡を検出した黒灰色粘質土上面で、これと切り合う状態で東西方向の素掘り溝群を検出した。遺存状況は東半部が良好で、幅約30cm・深さ約10~20cmの溝が16条検出された。切り合い関係やその方向性などから、建物跡に先行すると考えられる。また、方向性からみると明らかに2時期にわたるものが存在する。方向をみると、たとえば南部では真東西から北へ約10°振る群と、中央部では約15°振る群に分かれる。西半部では真東西から北へ約10°振るものと約30°振るものがある。これらはともに切り合い関係があり、30°の方が先行していることがわかる。さらに、これらほぼ同一の規模形態をなす素掘り溝群の北端で規模の大きな溝を2条検出した。わずかな幅での確認にとどまり、その正確な方向性は不明な点が多い。

溝5(S D 12012) 5区北東隅で検出した。検出面は黒灰色土上面である。調査区内でとぎれるが、南東方向へのびていくことを確認している。幅約3m・深さ約20cmを測り、断面は緩やかな「U」字形を呈する。

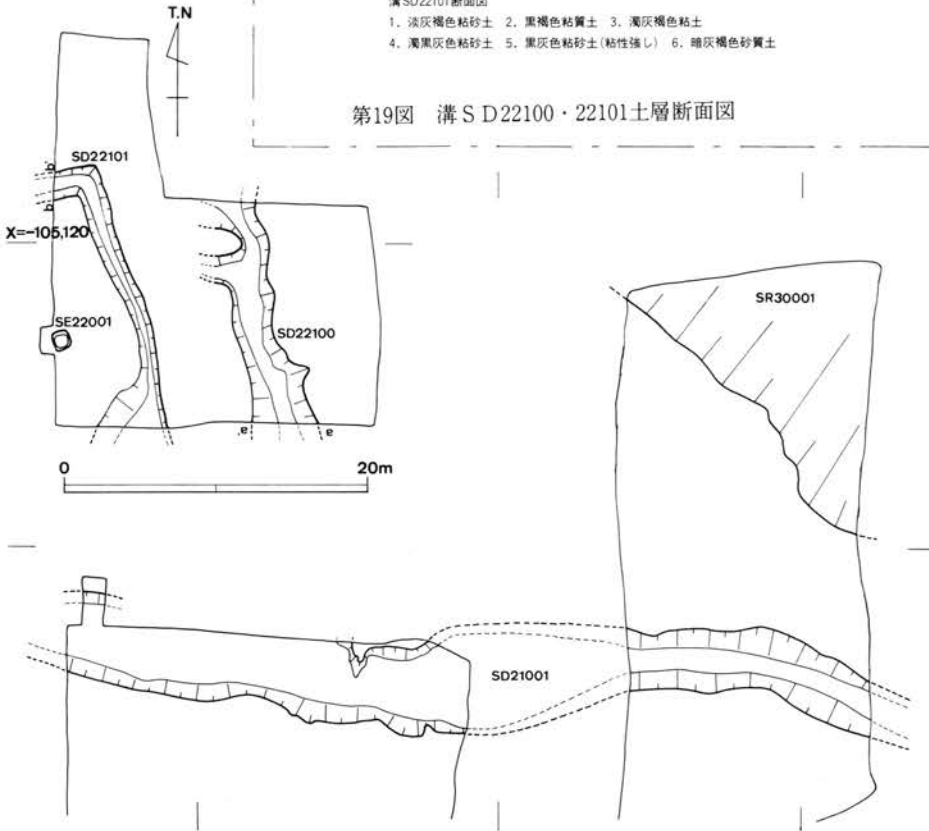
溝6(S D 12011) 5区溝5の北側で検出した。検出面は黒灰色土上面である。一部分の確認にとどまるが、溝5とはほぼ同一方向へのびている。幅約1.2m・深さ約20cmを測り、断面はやはり緩やかな「U」字形を呈する。

③Cブロック

拜田の谷の入口部に入れた21~23・30区をCブロックとした。先のBブロックとは約200m離れる。この間に微高地や谷が確認されているが、顕著な遺構は検出できなかった。



第19図 溝SD22100・22101土層断面図

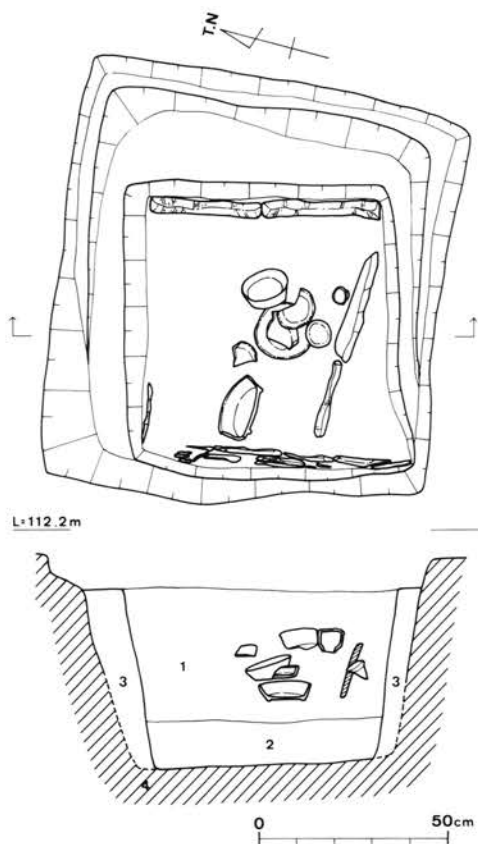


第20図 Cブロック遺構配置図

しかし、立地条件としては極めて良好な部位もあり、後世の削平のために消滅してしまった可能性が高い。これを示すように、10・11・16～18区で確認した自然流路跡の埋土内からは多くの奈良～平安時代の遺物が出土した。基本的にこれらは西方で投棄されたものと考えられるが、遺物の出土範囲が広範囲に及ぶことから、遺構の広がりを示唆しているものと考えられる。なお、弥生時代末からの遺物を含む自然流路跡の埋土内出土遺物については、本時代の遺物の項で述べることにする。

さて、本ブロックでは、人工的な溝3条及びそれに流入する自然流路跡・井戸跡1基などを検出した。また、顕著な遺構を検出しえたわけではないが、23区では奈良時代の遺物が大量に出土したことから、西側隣接地に何らかの遺構の広がりが确实視される結果を得ている。

井戸跡1(S E 22001) 22区西辺で検出した。小規模なもので、一辺約1mの方形の掘形の中に、一辺約60cmの方形に板材を組み合わせている。深さは約60cmと浅い。埋土は



第21図 井戸跡 S E 22001 実測図

- 1.黒灰色粘質土 2.淡黄灰色砂 3.黒褐色土
4.黄灰色粘土

黒灰色粘質土で、墨書土器2点を含む、6点の土器(須恵器5点・土師器1点)が出土した。また、使用されていた板材の中には、ほぞを持つ扉材を再利用したものもあった。本井戸は、黄褐色粘質土上面で検出したが、底部はその下の砂質土へ至っている。これによって一定量の湧き水が確保されたものと考えられる。

溝7(S D 21001) 21区と30区にわたって検出した東西にのびる溝である。最大幅約4m・深さ約60cmを測る。南側肩部は、一部盛り土によって構築されている部位を認め、明らかに人工的に構築された溝と考えられる。21区西側では溝の底部が盛り上がった状況であった。堆積土には黒褐色土、黒灰色土、灰色砂層が認められ、奈良～平安時代の須恵器片や石帯などが出土した。30区東辺で蛇行し、その延長部は従来

から国府推定域北限の堀の痕跡とされる東西にのびる窪地へと続き注目される。断ち割りによって、この溝が構築される以前は東西方向に自然流路が流れていたことが判明している。したがって、堀の痕跡といわれるものは推定地よりも西へ広がるが、そもそも自然流路が流れていたところを利用して溝を構築したのであろう。

溝 8 (S D22100) 22区東半部で検出した。南北方向にのびるが、調査区中央より北半部でとぎれる。北から流れてきて、溝 7 に合流する溝である。幅約 3 m・深さ約 50cm を測り、断面は緩やかな「U」字形を呈する。

溝 9 (S D22101) 22区西側で検出した。南北方向にのびるが、調査区東辺で西へほぼ直角に曲がる。この溝も、溝 8 と同様、溝 7 に流れ込む。幅約 2 m・深さ約 20cm(最大部)を測り、断面は「U」字形を呈する。

自然流路 1 (S R30001) 30区の北端部に認められる地形の落ち込みである。本来の拝田谷部を形成した自然流路であろうと思われる。遺物はほとんど認められず、わずかに縄文土器片や須恵器片が出土した。なお、詳細については、この延長部が D ブロックの南半部を北西から南東へと横切る状態で検出されているため、後述することにする。

④ D ブロック

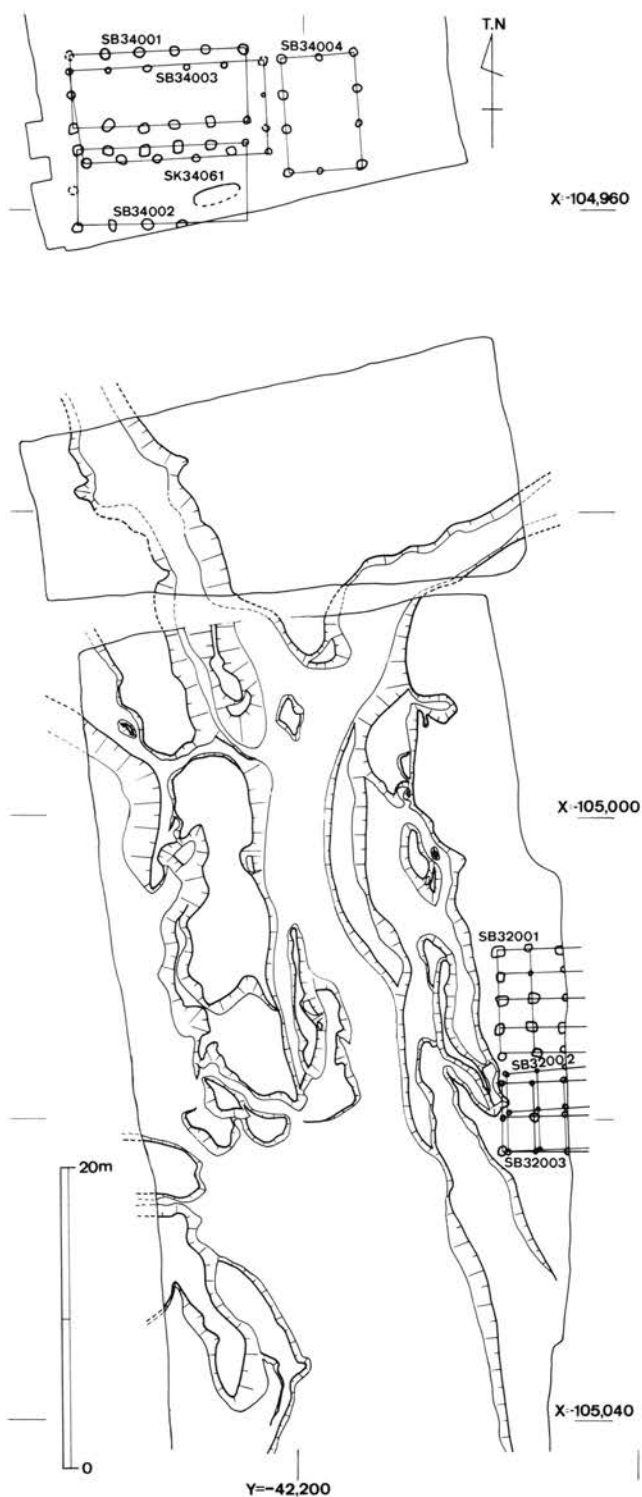
拝田谷部内に入れた 26・31～34区を D ブロックとした。先の C ブロックとの境は明瞭でないが、拝田の谷部を形成した谷状地形、ここでは自然流路跡が谷部を北西から南東方向に横切る状態で検出されており、これを C ブロックと D ブロックの境とした。

本ブロックでは、上記の自然流路跡のほか、掘立柱建物跡 7 棟などを検出した。地形が示すとおり、自然流路によって形成された谷部に、拝田丘陵を形成する花崗岩の風化した砂層が多く堆積していた。遺構は、この谷内部に認められる微高地上に散在する状態で確認されたが、部分的に整地を行っているか所も認められた。

掘立柱建物跡 20 (S B32001) 32区東辺で検出した。桁行 4 間(7.4m)×梁間 2 間(4.0m)以上ある総柱建物跡であるが、東側調査地外へのびており、全容は不明である。主軸は N-2°-W である。柱穴は、方形と円形のものがあり、方形のものは一辺約 60cm・深さ約 20～40cm を測る。

掘立柱建物跡 21 (S B32002) 建物跡 20 と同様、32区東辺で検出した。規模は、桁行 2 間(5.2m)×梁間 2 間(4.0m)以上の建物跡であるが、やはり東側調査地外へのびており全容は不明である。主軸は N-3°-W である。柱穴は、一辺約 30cm の隅丸方形で、深さ約 20～30cm を測る。

掘立柱建物跡 22 (S B32003) 建物跡 21 と重複して検出された。やはり、桁行 2 間(4.6



第22図 Dブロック遺構配置図

m)×梁間2間(4.0m)以上の建物跡である。主軸は $N-3^{\circ}-W$ である。柱穴は、方形と円形のものがある。方形のものは一辺約40cm、円形のもの直径約30cm、各柱穴は深さ約25cmを測る。建物跡20~22の西側からは9~10世紀代の須恵器がまとまって出土していることから、これらの建物跡は平安時代のものと考えられる。

掘立柱建物跡23(S B 34001) 34区の中央部で検出した。桁行5間(11.4m)×梁間2間(4.9m)を測る東西棟の建物跡である。主軸は $N-88^{\circ}-E$ である。柱穴は、一辺が約60~80cmの隅丸方形で、深さ20~40cmを測る。直径20cmを測る柱根の残存するものもあった。

掘立柱建物跡24(S B 34002) 34区の南半部、建物跡23の南側で検出した。桁行5間(11.2m)×梁間2間(5.0m)を測る東西棟の建物跡で、建物跡

23とほぼ並列している。主軸はN-87°-Eである。柱穴の大きさ・形状・深さ、残存していた柱根の大きさも建物跡23とほぼ同様である。

これら2つの建物跡とも、柱穴の中から平安時代に属する須恵器・土師器・緑釉陶器の小片が出土した。出土遺物の検討からは明確な時期差は認められないため、2棟の建物跡はほとんど同時期に存在したと考えられる。しかし、建物跡間の距離は約80cmを測るにすぎないので、2棟の建物跡が並立して存在していた可能性は低い。したがって、二棟の建物跡の前後関係は不明である。

掘立柱建物跡25(S B 34003) 34区中央で建物跡23・24と重複して検出された。桁行5間(11.8m)×梁間3間(6.2m)を測る東西棟の建物跡である。主軸

付表6 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	調査区	規模	柱間寸法				主軸
			2	2	2.1	2	
S B 10169	4区A	4間×2間	2 2.5	2 2.3			N16° W
S B 10170	4区A	3間×1間	1.8 1.5	2	1.8		N5° W
S B 12074	5区B	2間×2間	1.8 1.9	2 1.8			N2° W
S B 12071	5区B	2間×2間	2.1 1.4	1.7 1.2			N2° W
S B 12072	5区B	3間×1間	2.1 2.4	2.3	1.9		N94° E
S B 12073	5区B	3間×1間	2 2.7	2.7	2.5		N102° E
S B 12104	5区B	2間×2間	2.4 1.9	2.6 1.6			N40° E
S B 12105	6区B	3間×2間	2.4 1.9	2.6 1.9	2.6		N26° E
S B 12106	6区B	2間×2間	2.4 1.9	2.3 1.9			N10° E
S B 12107	6区B	3間×3間	2.6 1.8	2.5 1.8	2.6 1.9		N13° E
S B 12108	6区B	3間×1間	1.8 3.6	2	1.6		N17° E
S B 12109	6区B	3間×2間	2.5 1.9	2.6 2.5	2.6		N11° E
S B 12110	6区B	3間×2間	2.7 2.2	2.3 2.3	1.9		N9° E
S B 14001	14区B	3間×2間	2.3 2.2	2.2 1.7	2.8		N15° E
S B 14002	14区B	2間×2間	3.4 2.8	2.8 3			N48° W
S B 15004	15区B	2間×1間	1.8 1.9	2			N87° E
S B 15005	15区B	2間×3間	1.2 2.2	1.1 2.2	1.2		N11° E
S B 15006	15区B	2間×1間	1.7 1.7	1.8			N12° E
S B 15109	15区B	2間×2間	2.4 1.7	2.6 1.7			N104° E
S B 32001	32区D	4間×2間	1.9 1.9	1.7 2.1	1.5	2	N2° W
S B 32002	32区D	2間×2間	2.6 2.1	2.6 2.1			N3° W
S B 34001	34区D	5間×2間	2.2 2.4	2.6 2.5	2	2	2.3 N88° E
S B 34002	34区D	5間×2間	2.3 2.6	2.2 2.4	2.1	2	2.2 N87° E
S B 34003	34区D	5間×3間	2.4 2.3	2.4 1.9	2.4 1.9	2	2.3 N87° E
S B 34004	34区D	3間×2間	2.4 2.4	2.4 2.6	2.9		N3° W

はN-87°-Eであり、建物跡26と対応する。しかし、建物跡25と26の距離はやはりこれも約80cmほどであるため、並立していた可能性は低い。柱穴は不整形な円形で、直径約50cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡26(S B34004) 建物跡25に並列する建物跡である。桁行3間(7.7m)×梁間2間(5m)を測る南北棟の建物跡である。主軸はN-3°-Wである。柱穴は円形で、直径40cmを測り、建物跡25とほぼ同様である。調査区東半部で検出した、建物跡26の東側の桁行は地山である灰褐色砂質土に建てられている。調査区西半部は、西へ向かって緩やかに傾斜し、西辺部において急激に落ち込む谷地形を呈する。そのため、建物跡26の西側半分からは黒褐色粘質土を10~70cm程度搬入し、平坦な地形に整地後、構築している。前述した建物跡23~25の柱穴のほとんどは、この整地層上面で出土した。整地層である黒褐色粘質土中からも須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。これらの遺物は、建物跡の柱穴内より出土した遺物と比較しても、ほとんど時期差は認められない。したがって整地された後、すぐに建物が構築されたと考えられる。

自然流路2(S R30001) 26区から32-31-30区へと、調査地を北西から南東へ横切る自然流路跡である。幅は推定で約25m、深さは最も深いところで約3mを測る。複雑に堆積を繰り返しており、堆積土には黒灰色土や灰色砂がラミナ状に堆積しているところもある。遺物は縄文時代の土器・石器から鎌倉時代の瓦器を中心とするものまでが出土したが、中でも、32・31区では平安~鎌倉時代の遺物が主体に出土した。また、33区では、これに流入する溝2条を検出した。

(森下 衛・鶴島三壽)

第8節 奈良～平安時代の遺物

遺構と同じく、各ブロックごとに報告する。この時期の出土遺物には、全体に遺構に伴うものは少なく、遺構から出土したのも、図示して細かな時期を検討できるものは非常に少ない。比較的まとまったものとしては、4区(Aブロック)の溝1の埋土である灰色砂層や、10・11・16～18区(Cブロック)の自然流路跡埋土(黒褐色粘質土)中から出土したものなどがある。しかし、これも単一時期の資料とは考えられず、問題が残る。遺物の出土状況としては、各遺構の検出面直上の各土層(主に黒褐色土)から、非常に多くの遺物が出土している。

以下、これらを中心に報告し、各遺構の帰属時期について検討することとしたい。

①Aブロック

Aブロック出土の遺物としては、1区の南半部に堆積し、なおかつ溝2・3(SD10016・10015)の埋土であった灰色砂層、4区の大半に堆積し、かつ溝1(SD10149)の埋土であった同じく灰色砂層及びその上面から出土した土器群を報告する。灰色砂層は洪水などで堆積したと考えられ、溝等の遺構埋土として認識できる状況ではなかった。したがって、ここでは溝の埋土及び遺物包含層として認識した灰色砂層出土遺物、さらにその直上から出土した遺物を一括して抽出し図示した。

灰色砂層出土遺物は、破面があまり磨滅していないため、それほど遠距離から流れてきたものではないだろう。したがって、西側の隣接する地区にこれら遺物を伴う遺構群が存在すると思われる。このことは、東寄りの1区で灰色砂層中に包含されている遺物が少ないことからわかる。

また、砂層直上の遺物は、灰色砂層出土遺物に比べ量的には少ない。ただ、わずかに土師器・施釉陶器を認めるものの、そのほとんどが須恵器である点は共通する。時期的には、灰色砂層遺物に対して、大幅に下り9世紀後半頃と考えられる。これらに伴う遺構としては、砂層上面から切り込まれていた方形掘形の柱穴を持つ掘立柱建物跡1(SB10169)などがある。

さて、遺物は、その9割以上を須恵器、中でも杯身・杯蓋類が占める。これらの形態は、おおむね8世紀中葉を中心とする時期のものである。この遺構を含め、西方に存在が想定される遺構群はこの頃まで機能していたが、洪水などの理由で一気に埋没したと考えられる。なお、遺物群中には、注目すべき資料として製塩土器がある。口縁部の破片がほとんどであるが、およそ37個体が確認され、比較的まとまった量と言える。西方に推定される遺構群の性格を示す資料と言えるだろう。

以下、各出土遺物の概略を報告する。

(1)土 器

①Aブロック

ア. 4区出土遺物(図版第34~36)

須恵器杯蓋(1~22) 4~6は、天井部から口縁部へ緩やかに下がり傘形をなすもので、両者のあいだに明瞭な屈曲を認めない。7~12は、平らな天井部から直線的に斜め下方へさがる口縁部を持つ。13・14は、全体的に平らな形態をなし、平らな天井部と短く斜め下方へのびる口縁部を持つ。15~18は、平らな天井部から口縁部が明瞭な屈曲点をもって下がり、口縁部付近が再び水平気味に屈曲する。なお、16~18はその形態からみて、天井部につまみを持たないと考えられる。19~22は、口径20cm前後の大形品である。杯蓋というより盤状の製品の蓋の可能性が高い。19は、天井部からなだらかに笠形に口縁部がのびて宝珠形のつまみを持つ。口径21.0cmを測る。20は、平らな天井部から屈曲してのびる口縁部を持つ。21・22は、口縁部付近が再度水平気味に屈曲する。20~22は環状のつまみを持つと考えられる。

須恵器杯身(23~52) 23~34は、高台を付さない杯である。25は、口径約9.8cmのやや小形品で、厚めの底部と外反する口縁部からなる。27・28は、口径13cm前後、29~31は、12cm前後を測り、いずれも平らな底部と、緩やかに屈曲して斜め上方へ立ち上がる口縁部からなる。口縁部は外反気味に終わる。32・34は、これらとは若干形態が異なる。32は、平らな底部から鋭く屈曲し、上外方へ直線的に立ち上がる口縁部を持ち、口径12.0cmを測る。34は、平らな底部から上外方へ立ち上がる口縁部を持つが、口縁部は大きく外反する。また器壁は約0.8cmと他に比べて厚い。

35~52は、高台を付す杯である。35~40は、口径13~16cm・器高3.5~4.0cmを測る一群であるが、口縁部の形態や、高台の位置及びその形態などから6タイプに分けられる。

35~40は、底部と口縁部の屈曲部からやや内側に外側へ踏ん張るように付された高台を持つ。35・38は口縁部が外反するのに対し、他は上外方へ直線的に立ち上がる。35は、口径13.7cm・器高3.4cm、36は口径15.6cm・器高3.6cm、38は口径14.3cm・器高3.7cmを測る。

41~52は、上記3点に比べ、高台の位置が底部と口縁部の屈曲点へ近づく。高台の形態は、やはり外下方へ下がり外側へ踏ん張る。口縁部は上外方へ直線的に立ち上がる。さらに41は、高台が底部と口縁部の屈曲点に付される。口縁部は、上外方へ大きくひらきながら立ち上がる。口径14.4cm・器高3.6cmを測る。43は、口径13.5cm・器高5.1cmと、器高がやや高い。口縁部は上外方へ直線的にのび、高台は断面逆台形をなす。49・51は、43に比べさらに、口径の縮小化に対し、器高の割合が増す一群である。

47・48は、口径が20cm以上を測る盤状の大形品である。47は口径20.3cm・器高4.2cm、

48は、口径22.3cm・器高5.1cmを測る。52は、口径11.5cm・器高3.9cmを測る小形品で、口縁部は大きく上外方へひらき、口縁部と底部の屈曲部に小さな高台を付す。53は、高台を持つ杯身の底部片である。遺存状況が悪く判読は困難であるが、底部外面に墨書を認める。

須恵器高杯(54) 口径約10.6cmを測る小形で深みのある杯部に「ハ」の字状にひらく脚を付す。杯部は内湾気味に口縁部が立ち上がり、端部付近で内側へ屈曲して終わる。

須恵器短頸壺(55) 体部は中位やや上方に最大径を持ち、口縁部は短く直立する。体部下半にヘラ削りを施す。口径5.6cm・器高6.4cmを測る小形品である。

緑釉陶器(56～63) 56は皿である。円盤高台から斜めに開く口縁部を持ち、口縁端部は外反気味に終わる。色調は黄緑色を呈する。58・59は円盤高台、60は碗の底部であるが、高台を台形に削り出す。61は断面長方形の高台を張り付ける。色調は、黄緑色を呈する。

須恵器鉢(64・65) 64は、口縁部付近の破片であるが、尖った底部をなすと考えられる。内湾気味にのびる体部～口縁部を持ち、口縁部は内傾して終わる。口径17.4cmを測る。65は、丸みのある底部から内湾して立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部には内傾する面を持つ。口径16.0cmを測る。底部外面にはヘラ削りを施す。

須恵器甕(66～69) いずれも「ハ」の字状に短く開く口縁部を持つ。66は、口径9.7cmを測る小形品である。68は、口縁端部を上下に若干拡張する。口径19.6cmを測る。69は、口縁端部を上方へ若干つまみ上げる。口径19.8cmを測る。

須恵器風字硯(70) 向かって右側の側縁付近の一部を残す小片である。遺存長約7cm・幅5.5cmを測る。底面には、高さ約1.5cmの脚を認める。小片のため全体の規模・形状については明確ではないが、側縁部の立ち上がりの状況、脚の高さなどから、大きさは幅約10～15cm程度の製品であったと考えられる。全体にヘラ磨きによって仕上げられており、硯面はかなり使いこまれている。

土師器甕(71～73) 71・73は、短く外反する口縁部を持つ。71は、口縁部は内外面とも横方向のハケ目、体部は内面に横方向のハケ目、外面に縦方向のハケ目調整によって仕上げられ、口径30cmを測る。73は、口縁部内面を横方向のハケ目、外面をナデ調整、体部は内面に横方向のハケ目、外面に縦方向のハケ目調整によって仕上げられ、口径22cmを測る。72は、丸みのある体部から、口縁部が大きく外反し、口径23.6cmを測る。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は縦方向のハケ目、内面は上端を横方向のハケ目、以下をナデ調整によって仕上げる。

製塩土器(74～80) いずれも口径10cm前後であまり大きくない。78は、直立した体部から口縁部はやや外方に開き、器壁も厚い。内外面とも、ナデまたは指押さえの痕跡が残る。

土錘(81・82) 手づくねで成形し、不成形な円柱状を呈する。直径2mm前後の穴があく。

イ. 1区出土遺物(図版第36)

本調査区からの出土遺物は、非常に少ない。ここでは、灰色砂層中及びその直上から出土した遺物を図示した。2・4が灰色砂層、その他が灰色砂層直上からの出土遺物である。

須恵器杯蓋(83) 平らな天井部から屈曲して口縁部がのび、端部付近で再び水平気味に屈曲する。口径19.2cmを測る。

須恵器杯身(84～86・94) 85・86は、高台を付さない杯である。85は、底部から緩やかに屈曲し外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。口径13cm・器高3.5cmを測る。86は、底部からシャープに屈曲し、直線的に立ち上がる口縁部を持つ。口径11.9cm・器高3.7cmを測る。84は、高台を付す杯である。底部から緩やかに屈曲して立ち上がる口縁部は、端部付近で外反気味に終わる。高台は、口縁部と底部の屈曲点からやや内側に付され、下外方へ短くのびる。口径16.8cm・器高4cmを測る。94は杯身の底部片である。底部の中央付近に墨書を認める。遺存状況が悪く、判読は不可能である。

須恵器耳杯(87) 口径は、長径7cm以上・短径約5cm・器高1.6cmを測る。平高台を持ち、底部は糸切りである。

緑釉陶器椀(88) 底部小片で、遺存状況はよくない。削り出しの輪状高台を持ち、色調は黄緑色を呈する。

須恵器壺(89) 長頸壺の底部付近と思われる。底部と体部の境に輪高台を付す。高台径7.9cmを測る。

須恵器甕(90) 遺存状況はよくないが、張り出した肩部から「く」の字に外反する口縁部を持つ。

土師器甕(91) 長胴形の体部から斜め上方に開く口縁部を持つ。体部外面はナデ調整、内面は横方向のハケ調整を施す。

土錘(92・93) 不成形な円柱状で、あまり大きくない。長さ4～5cm・幅1～2cmを測る。

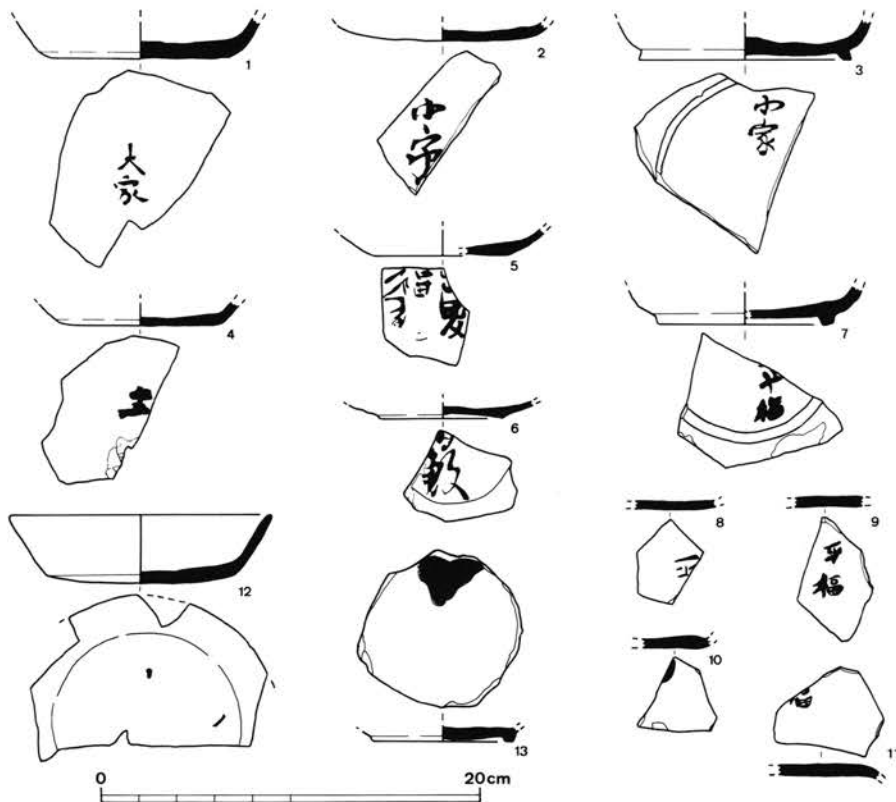
②Bブロック

Bブロックとした5～7・9・14・15区から出土した遺物である。多くは、5～7・14区の黒褐色土中から出土したものである。なお、各遺構に伴う遺物は、わずかでしかも細片化しており、ここで細かな検討は行えない。ここでは、これら遺構に関連すると思われる黒褐色土出土遺物を、各調査区出土品と一括して報告し、遺構の年代について検討する材料としたい。

本ブロック出土遺物も、須恵器が非常に多く9割以上を占める。中でも杯身・杯蓋類がその中心を占める。図示したのものも、自らこれらが中心をなすこととなった。時期的に中

心をなすのは8世紀前葉～中葉であり、この中に7世紀末葉まで遡るものや、8世紀後半まで下るものをわずかに含んでいる。再度検討を行うが、遺構群の中心をなすのがこの時期と考えられる。以下、各遺物の概略を述べる。

須恵器杯蓋(95～115) 95は、天井部からなだらかに下がって口縁部に至り、口縁部内面にかえりを持つ。口径15.5cmを測る。96は、天井部から明確な屈曲をなさず口縁部へ至り、笠形の器形をなす。口縁端部はシャープに下方へつまみ出される。口径15.8cm・器高2.1cmを測る。97～100は、平らな天井部から緩やかに屈曲して下がる口縁部を持つ。口縁端部はシャープに下方へつまみ出される。口径16cm前後を測る。101は、天井部までの高さが約1.5cmと扁平である。104～107も同様の形態をなすが、全体に丸みを帯び、天井部の中央がくぼむような器形をなす。口縁端部も下方へわずかにつまみ出されるにすぎない。口径15cm前後を測る。109～115は、平らな天井部から一旦屈曲して下がり、再び端部付近で水平気味に屈曲する口縁部を持つ。109・110は屈曲が緩やかで、112は屈曲が強い。また、114・115は扁平な器形をなす。口径は、109・110が約15cm、111・112が約17cm、



第23図 Bブロック出土墨書土器実測図(図版第38の158～160を含む)

4・7～11.5区 1～3・5・6.7区 12.14区 13.15区

114が16.4cm、115が14cmを測る。

須恵器杯身(116～140) 116～122は高台を付さない杯である。116は、口径11.1cm・器高3.3cmを測る小形品である。平らな底部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。117も口径13.1cm・器高3.1cmを測り、やや小形に属する。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部付近で若干外反する。118・119は、底部から丸みをもって屈曲し口縁部が立ち上がるもので、口縁部は外反気味にのびる。いずれも口径14cm・器高4cmを測る。120・121は、底部から鋭く屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁部は、120は直線的、121はやや内湾気味に立ち上がる。口径13cm前後・器高3.5cm前後を測る。

123～137は、高台を付す杯である。やはり口縁部の形態、高台の位置及び形態などから幾つかのグループに分かれる。123～127は、高台が底部と口縁部の境からかなり内側に付される。いずれも、高台は外側に踏ん張る形態をなす。口縁部は127のみ直線的に上外方へのびるが、他は外反気味に立ち上がる。125は、口径約14cm・器高約4cmを測り、127は口径15.2cm・器高4cmとやや大きくなる。

128～137は、高台が底部と口縁部の境からわずかに内側に付される。法量や口縁部の形態はさまざまである。口縁部が直線的に立ち上がり、口径約14.5cm・器高約4cmを測るもの(128・129・134・135・137)、口縁部が外反気味に立ち上がるもの(124・125・132・134～138)がある。130は、口径16.8cm・器高3.6cmとやや口径が大きく、底部と口縁部との屈曲が緩やかなもの(134)がある。

125・127・128・131・134は、口径の割に器高が大きい。中でも131は口径が大きく、口径15.3cm・器高3.9cmを測る。口縁部は緩やかに外反して立ち上がり、高台はやや小さく底部と口縁部との境界より内側に付される。134は、口縁部は内湾気味にのびた後、口縁端部付近で外反する。高台は、断面台形で、底部と口縁部の境に付される。口径15.2cm・器高5.5cmを測り、131より器高が高い。

須恵器皿(141～143) 141は、口径18.8cm・器高2.0cmに復原され、平らな底部から上外方へ短く立ち上がる口縁部を持つ。口縁部は外反してのび、端部は内側にやや肥厚する。142は、平らな底部から口縁部が緩やかに屈曲してから立ち上がる。口縁部は直線的に短くのび、端部は丸く終わる。口径16cm・器高2.1cmに復原される。143は、口径15.8cm・器高2.1cmを測り、器壁が約0.3cmと非常に薄い。ナデ調整によって非常に凹凸の激しい底部から、緩やかに屈曲して立ち上がる口縁部は、内湾気味にのびる。

須恵器平瓶(144) 体部から底部にかけての小片であるが、体部上端で内側へのびる痕跡を確認したことから杯身類ではなく、平瓶と判断した。体部上端の径が約12.8cmに復原されることから大形品とは考え難い。底部には断面台形の高台を付す。

須恵器鉢(145) 尖り気味の底部から内湾して立ち上がり、口縁部が内傾して終わる、いわゆる鉄鉢形の鉢である。口径21cmに復原される。

緑釉陶器(146・147) いずれも底部片である。削り出し高台を持ち、底部まで施釉されているが、底部外面には施されていない。釉色は黄緑色を呈する。

土師器皿(148～150) 148・149は、底部から緩やかに屈曲して立ち上がる口縁部が、端部付近で一端強く外反し、端部を上方へつまみ上げる。いずれも、口縁部付近の破片のため、底部の状況は明確ではないが、口縁部内面には放射状の暗文が認められる。148は口径18.2cm・器高3.9cm、149は口径22cm・器高3cmを測る。150は、149とほぼ同一の形態をなす。磨滅のためか、口縁部内面に暗文を認めない。口径20.5cm・器高4.1cmを測る。

土師器杯身(151) 高台をふくめた底部付近の小片であるが、高台を持つ須恵器の杯身と同一の器形をなすと思われる。高台径10.6cmを測る。

須恵器皿(152～154) 152は、丸みのある底部から緩やかに口縁部がのび、口縁端部は内上方へつまみ上げられる。口縁部内面には放射状の暗文が認められる。口径20cm・器高3.1cmを測る。153・154は、平らな底部から緩やかに屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁端部付近は外反して終わる。両者ともほぼ同大・同形をなし、口径約20cm・器高2.4cmを測る。内面に暗文を認めない。

漆附着須恵器(155～157) 器壁内面に漆の付着した須恵器である。155・157は杯身、156は壺である。特に157は、厚さ2mmほどが良好な状態で遺存する。

墨書土器(158～160) 158は蓋、159・160は杯である。158は、平坦な天井部に「吉」と書かれる。159は破片のため判読するのは難しいが、「福」であろう。160は、外方に踏ん張る高台を持つ杯で、底部外面に「大」と書いている。

(森下 衛)

③Cブロック

ア. 溝(S D 21001)出土遺物(図版第39)

須恵器蓋(161～169) 蓋には、笠形で天井部からなだらかに下り、口縁部で屈曲するものと平らな天井部を持つものがある。162は、平らな天井部で口縁端部には面を持ち、口径は28cmと大きい。167は、宝珠つまみを持ち、天井部には墨書があるが文字は不明である。169は、つまみはなく、中央部に稜を持ち、天井部に「長福」と書く。

須恵器杯(170～178) 170・171は、高台を持たない杯である。底部から斜めに立ち上がる口縁部を持つ。172～174・176・177は、高台を持つ杯である。172は、底部から口縁部へ至る屈曲点よりも内側に外方に踏ん張る高台を張り付ける。この172以外の杯は、ほぼ

屈曲点に高台を持つ。173・177は、外方に踏ん張る高台で、174・176は、小さく下方に下がる高台を持つ。176～178は、底部外面に墨書が施され、176は「萬」と読める。

土師器皿(179) 平坦な底部から斜め上方に立ち上がる口縁部を持つ。口縁部は内外面とも横ナデ、底部屈曲点には指押さえの痕跡が認められる。

緑釉陶器椀(180) 底部片である。底部ヘラ切り離しで、色調は黄緑色を呈している。

須恵器壺(181～184) 181は、短頸壺の口縁部である。なだらかな肩部から口縁は短く直立し、口径8.6cmを測る。183は、台付壺の底部である。底部から体部に至る屈曲点に外方に踏ん張る高台を持つ。

イ. 井戸(S E 22001)出土遺物(図版第40の185～190)

この井戸は、井戸枠に扉片が転用されており注目される。遺物としては、墨書土器が特徴的で、奈良時代の一括資料として貴重である。

須恵器蓋(185) 平坦な天井部から口縁部へ至り、口縁端部は下方に終わり面を持つ。

須恵器杯(186～188) 186・188は、高台を持つ杯である。186の口縁端部は外反し、高台は底部と口縁部の屈曲部よりも内側についている。底部外面には墨書が施されており「寺カ」と読める。口径17.6cm・器高6.1cmを測る。187は、屈曲部付近に高台を持ち、口縁端部は斜め上方にまっすぐに終わる。底部外面には「大長」と墨書されている。口径13.1cm・器高3.8cmを測る。188は高台を持たない杯である。口径14cm・器高4.4cmを測る。

土師器杯(189) 千代川遺跡出土の土師器は珍しく、中でも遺構に伴うものとして貴重である。底部から口縁部に至る屈曲部付近は強く横ナデを施し、口縁端部は尖り気味でやや外方に開く。底部はヘラ切り後ナデを行う。口径14.2cm・器高3cmを測る。

須恵器瓶(190) 口縁部を欠くが、底径5.4cmを測る。器壁はやや厚く、約0.6cmを測る。

ウ. 溝(S D 22100)出土遺物(図版第40の191～197)

この溝から出土した遺物は、193～195のように10世紀代の遺物が多いが、検出面付近では青磁椀(196)や瓦質羽釜(197)も出土している。

須恵器蓋(191) 平らな天井部から屈曲して端部に至る。口縁端部は、下方におり面を持つ。口径21.3cmを測る。

須恵器杯(193～195) いずれも、底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。193・194の底部は、ヘラ切りのちナデを行う。193は、体部外面に墨痕を認める。

土師器皿(192) 平らな底部から斜めに立ち上がる。端部は、やや尖り気味に終わる。

エ. 溝(S D 23010)出土遺物(図版第40の198～204)

須恵器蓋(198・199) 198は、輪状つまみを持ち、笠形の天井部から口縁部で屈曲し、口縁端部は面を持つ。199は、宝珠つまみを持ち、平坦な天井部から口縁部へ至る。器高

は低く、1.7cmを測る。

須恵器杯(200・201) 200は、外方に踏ん張る高台を持ち、口径12.7cm・器高4.9cmを測る。201は、高台を持たない杯である。底部には稜を持ちやや外方に張り出す。

須恵器皿(202) 平坦な底部から斜め上方に立ち上がる。口径16.8cm・器高2.4cmを測る。

土師器皿(203) 底部には指押さえの痕跡が明瞭に残る。口縁端部は尖り気味に終わる。

青磁皿(204) 内面見込みには猫掻き文を施す。釉色は、黄灰色を呈する。

オ. 23区出土遺物

この調査区から、遺構のところで述べたように、包含層中より多くの奈良・平安時代の遺物が出土した。特に、C・Dブロックのなかでは、唯一8世紀代の遺物が顕著である。これは、22区の井戸とあわせ、23区西側に奈良時代の官衙関連遺構の存在を確実視させる。

須恵器蓋(205～212) 205～207は、笠形の天井部を持つ。205と206は、口縁端部に面を持ち、207は、口縁部で屈曲し明瞭な面はもたない。208・209は、平らな天井部から屈曲し口縁部に至り、口縁端部に面を持つ。208は宝珠つまみ、209は輪状つまみを持つ。211は器高が1.8cmと低く、平坦な天井部からそのまま口縁部に至る。212は、天井部に「□長」と書く。同じ23区に「大長」と墨書されたものがあるので、これも同じ語句かもしれない。

須恵器杯(213～225) 213～216は、高台を持たない杯である。216は、内面に漆がぶ厚く残る。217～225は、高台を持つ杯である。219は、217に比べると口縁部はひらき気味で高台は屈曲点よりも内側につき外方に踏ん張る。220・221は、口径に比べて器高の高い杯である。220は、口径10.8cm・器高5.4cmを測る。222～225は、口縁端部が外反する杯である。224は、底部と口縁部の屈曲点からかなり内側に外方に踏ん張る高台を持ち、屈曲点までヘラ削りが施されている。8世紀前半のものであろう。

須恵器皿(226～230) 226～229は、高台を持たない皿である。226・227は、底部と口縁部の屈曲が明瞭で、228は緩やかに変化し明瞭ではない。228は、転用硯として使用されており、内面見込部分は滑らかである。230は、高台を持つ皿で、高台が屈曲点付近に付き、口径26.4cm・器高4.3cmを測る。

須恵器椀(231) 内湾しながらのびる口縁部を持ち、端部は肥厚する。11世紀初頭の篠窯跡群の西長尾5号窯産であろう。

施釉陶器(232・233) 232は、緑釉陶器の椀である。底部から斜め上方にひらく口縁部を持ち、口縁端部は尖り気味でやや外反する。高台は削り出しで下方にのびる。色調は深緑色を呈する。また、この調査区からは器壁の厚い緑釉陶器片も出土している(図版第115)。色調は黄緑～緑色で、胎土は精良、焼成は堅緻である。底部は、厚さ2.5cm前後で、内面は黒色に変色している。233は、灰釉陶器の椀である。底部から緩やかにひらく口縁

部を持ち、断面三角形のくちばし状高台を張り付ける。色調は灰白色を呈する。また、これ以外にも数点の灰釉陶器が出土している(図版第116)。ほとんどは、233と同じように、くちばし状高台を持つが、なかには高台が外方に張り出し、32・34区出土のものを中心とする図版第42よりも古式の9世紀前半代に比定できるもの(図版第116-3)などもある。

黒色土器(234・235) 黒色土器の椀である。内外面ともていねいにミガキを施し、口縁端部には1条の沈線を持つ。235の内面見込みの暗文は鉅齒状を描き、底部外面には「十」の字に線刻が施される。高台は断面台形で高さは低い。10世紀後半頃のものであろう。

須恵器平瓶(236) 口縁部は欠損する。底径7.5cmで、あまり大きくない。肩部は張り出し、角度を持っている。千代川遺跡では平瓶の出土は珍しく、同じ23区から出土した墨書土器と合わせて官衙的な遺物と言えよう。

須恵器壺(237～239) 237は、小さな高台を底部の屈曲点に張り付ける。238は、長頸壺である。頸部から緩やかに開く口縁部を持ち、先端はやや尖る。239は、短頸壺である。口径9.4cmを測る。

須恵器甕(240・241) 240は、なだらかな肩部から「く」の字に外反し口縁部に至るもので、口縁端部は上下とも突起する。頸部は内外面ともロクロナデ、体部外面はタタキが施される。241は、肩部に最大腹径がくる甕で、肩部から「く」の字に外反し口縁部へ至る。口径20cmを測る。

④Dブロック

ア. 施釉陶器

Dブロックでは、32・34区の平安時代の掘立柱建物跡に関連して、大量の緑釉・灰釉陶器が出土した。

緑釉陶器(242～270) 242～245は、皿である。242～244は、糸切りによる円盤高台から、外方に至る口縁部を持つが、242の口縁端部は外方に開く。245は、削り出しによる断面台形の輪状高台を持ち、口縁部には片口を持つ。底部外面には「□福」と墨書される。色調は、淡緑色を呈する。246は、杯である。口径は9.4cm・器高3.4cmを測る。色調は、淡い黄緑色である。247～252は、椀である。248は、削り出しによる輪状高台を持ち、口縁部には片口を持つ。底部外面に「□福」と墨書する。249～252は、口径の比較的大きなものを並べた。249～251は、やや内湾する体部を持つが、252は、外反する口縁部を持つ。

253～270は、緑釉陶器の底部片を集めた。259・260は、尖り気味で内面に面を持つ高台である。色調は深緑色を呈する。261～263は平高台、264は円盤高台を持つ。色調は青みがかかった黄緑色を呈する。269・270は、耳杯である。269は、厚目の底部から内湾する口

縁部に至るもの、270は、斜めに開く口縁部を持つ破片である。

また、図版第113は、32区出土で色調が淡緑色、高台や底部外面にも施釉されたものを集めた。図版第114は、緑釉陶器の色調と底部調整に注目して抽出した。114-1は、黄緑色を呈する。114-2は、底部切り離しがヘラ切りによるもの、114-3は、高台及び底部外面に施釉していないため、篠窯産と考えられる。114-4は、胎土が軟質で白っぽく、黄緑色を呈することから、長門産と考えられる。328は、蛇の目高台を持ち、色調がやや青みがかった黄緑色を呈する。268は、胎土が軟質で、色調が深緑色、底部調整は糸切りである。

灰釉陶器(271～278) いずれも底部片である。器種としては皿が多い。高台は、断面長方形で背の高いものが多く、黒笹90号窯期のものを中心とする。274～276・278は、墨書土器であるが、文字の判読できるものはない。

イ. 32区出土遺物(図版第43の279～310)

この調査区では、須恵器の蓋杯・椀などの出土が多く、墨書土器も顕著である。出土遺物には時期幅があるが、掘立柱建物跡付近の包含層からは、300～310などの遺物がまとめて出土した。

須恵器蓋(279～287) 279は、笠形の天井部を持ち、口縁端部には面を持つ。口径は、15.1cm・器高3.2cmを測る。281・282は、笠形の天井部から口縁部は「S」字状に屈曲する。283は、平坦な天井部から口縁部へ至るもので、器高は低く2cmを測る。284～286は器高は低く、口縁部が「S」字状を呈する。287は、口縁端部はシャープで、天井部に「井」と墨書されている。

須恵器杯(288～304) 288～295は、高台を持つ杯である。288は、器高に比べ、口径の大きな杯である。高台は、口縁部との屈曲点から内側につき外方に踏ん張る。294は、器高の高い杯である。平坦な底部から外上方に外反しながら立ち上がる。屈曲点に台形の高台を持つ。295は、墨書土器である。底部外面に「福□」と書いている。296～304は、高台を持たない杯である。298は、平坦な底部から角度をもって口縁部に至る。口縁端部には、一条の沈線を持つ。303は、平坦な底部から外上方に内湾しながら立ち上がる。口径15.3cm・器高3.2cmを測る。304は、口径に比べて器高の高い杯である。体部は外上方に内湾しながら立ち上がる。口径11.7cm・器高4.7cmを測る。

須恵器皿(305・306) 305は、平らな底部を持ち、体部は外上方に真っ直ぐ立ち上がる。口縁端部はやや丸く終わる。306は、口縁部が外反し、端部は丸い。口径15.3cmを測る。

須恵器椀(307～310) 308は、平高台の椀で、体部は内湾しながら外上方に立ち上がる。口縁部は、やや器壁が厚くなっている。体部外面には「東万呂」と墨書されている。310も平高台の椀で、口縁端部は外反する。これも墨書土器で、文字ははっきりしないが、

「福カ」と読める。口径16cm・器高5.3cmを測る。

ウ. 33・34区出土遺物(図版第44の311～343)

図版第44は、33・34区に遺構出土の遺物を中心に集めた。311～330は、34区の掘立柱建物跡の柱穴出土遺物を中心としたもの、331～340は、包含層から出土したものが多く、333～335は、整地層出土である。341～343は、33区から出土した。

まず、掘立柱建物跡についてまとめる。掘立柱建物跡は4棟確認し、柱穴出土遺物が311・313～320・322～327である。遺構でも述べたが、遺物的には4棟の建物の時期差は見られない。遺物から、10世紀代の建物と考えられる。整地層出土の遺物は、333～335であり、この杯身の年代観から、整地層出土の遺物の方が約1世紀ほど古い。建物跡の年代は10世紀に入る時期だとしても、33区出土遺物(341～343)や整地層出土遺物などから、9世紀代から34区を中心とする坪田の谷部には遺構が広がっていたと考えられる。

須恵器杯(311～320) 311・312は、口縁部が内湾気味に斜め上方に立ち上がり、口縁端部が肥厚する。313は、口縁端部が尖り気味になる。315は、底部から緩やかに内湾気味にひらき、体部外面にはロクロナデが明瞭に観察でき、器高が4.2cmと比較的高い。341は、高台を持つ杯で、高台は底部屈曲点よりも内側で外方に踏ん張る形を取る。口径13.8cm・器高4.7cmを測る。342は、高台を持たない杯である。破片のため右側が欠損するが、底部外面に「福カ」と墨書が施される。

須恵器椀(321・323) 321は、平高台の椀の底部片である。323は無釉陶器で、口縁端部が外反し、器壁は薄く、324の黒色土器の椀と同じ形態を呈する。ていねいにミガキが施されており、表面は滑らかである。

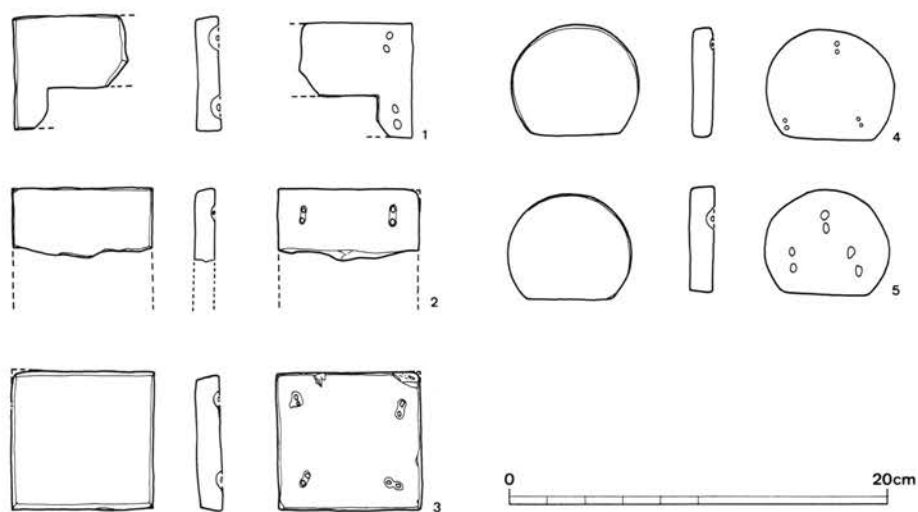
土師器杯(322) 平坦な底部から斜め上方に立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は尖り気味である。底部外面には墨書が認められる。

黒色土器(324～326) 324は、内湾気味の口縁部から端部が外反し、内外面とも細かにヘラミガキが施される。口径15.2cm・器高5cm以上を測る。325は、いわゆる内黒の椀である。体部外面は指押さえの痕跡が明瞭に残り、内面は黒色で、ヘラミガキがていねいに施される。326も内黒である。底部片で、断面三角形の小さな高台を張り付ける。

緑釉陶器(327～329) 327は椀で、削り出しの平高台を持つ。328・329は、皿である。329は、口縁部で上方に屈曲し、端部はやや外方に開く。高台は削り出しの輪状高台で、色調は、淡黄緑色を呈している。口径14cm・器高2.9cmを測る。

須恵器壺(330) 平底の底部片である。底径11.8cmを測る。

須恵器蓋(331・332) 331は、平坦な底部から口縁部が「S」字状に屈曲し、端部は斜めに外反し面を持つ。332は、笠形の天井部で、口縁端部はまっすぐ下方に下りる。



第24図 石帯実測図(1/2)

須恵器杯(333～337) 333～335は、高台を持つ杯で、整地層である黒褐色粘質土より出土した。いずれも底部と口縁部の屈曲点に高台を持つ。335～337は、墨書土器で、336は、高台を持たない杯の底部外面に「廣」と墨書している。

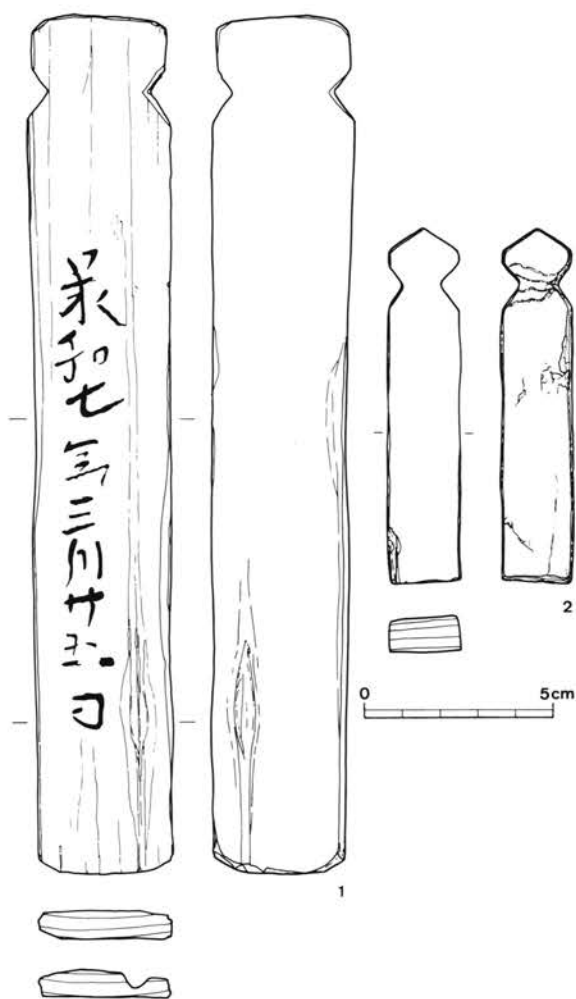
須恵器椀(338・339) 339は、糸切りによる平坦な底部から内湾しながら立ち上がる口縁部を持ち、端部は玉縁状にふくらみ外反する。口径15.8cm・器高5.1cmを測り、その形態から10世紀後半に亀岡市篠窯跡群で製作されたものと考えられる。

須恵器鉢(340) 糸切りによる平坦な底部から斜め上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部を破損するが、篠窯跡群で製作されたものであろう。343は鉢である。鉄鉢を模しており、底部から内湾気味に立ち上がる体部から口縁部でさらに内湾する。口径16.2cmを測る。

(鶴島三壽)

(2)石 器(第24図)

第24図は石帯である。1～3は巡方、4・5は丸柄である。1は31区の奈良・平安時代遺物包含層中から出土した。透かしを持つ巡方で、大きさは縦3.1cm・横3cm以上を測る。表面はきわめていねいに磨かれている。裏面の潜穴は直径2mm程度の楕円形で、やや斜め方向に穿たれている。石材は蛇文岩である。2・3は、32区から出土した。2は、あまり残りはよくないが、縦1.8cm以上・横3.7cmを測る。石材は石英斑岩である。3は、縦3.6cm・横3.8cmを測る。表面は大変ていねいに磨かれ滑らかである。石材はケイ岩で、きわめて硬い材質のもので作られる。4は31区から、5は30区の溝S D21001から出土した。4は、縦3cm・横3.4cmを測る。裏面の潜穴は直径1mmの円形で、斜め方向に穿たれる。



第25図 木簡実測図

石材は石英斑岩で、灰色を呈する。5は、縦2.8cm・横3.3cmを測る。石材は晶質石灰岩(大理石)で、灰色を呈している。

(鶴島三壽)

(3)木 器(第25図、図版第62・63)

第25図は、木簡である。1は、16区の自然流路跡S R 16001の鎌倉時代遺物包含層の最下部で、奈良・平安時代遺物包含層との間から出土した。出土状況は、他の木製品や雑木らとともに西より流れてきた状況であった。大きさは、長さ22.7cm・最大幅3.8cm・最大厚0.7cmを測る。木簡型式は032型式に属し、上端から1.4cmのところ両方から切り込みを入れている。文字は、「承和七年三月廿五日」と書かれている。承和七年は西

暦840年であり、平安時代前期にあたる。2は、32区の平安時代の遺物包含層から出土した。先端は宝珠形で、長さ9.2cm・幅2cm・厚さは0.9cmとやや厚い。赤外線カメラを用いても文字は確認できなかったことや、厚いことから未使用ということも考えられよう。

17は、扉片である。22区の井戸跡S E 22001の井戸枠に転用されていた。扉片は、残存長24.1cm・幅31.3cm、厚さは軸部で4.3cm、先端で2.7cm、軸部長7.2cm・直径2.8cmを測る。軸の基部から1.9cmのところ、幅約1cmで回転による摩滅痕が残る。軸先端部に摩滅は認められないことから扉の上端と考えられる。井戸枠転用の板材は10片ほどあるが、軸を持つのはこの1点のみである。他の板材には本例とほぼ同じ厚さを測るものもあるが、大半は厚さ2cm程度であった。

18~20は、いずれも32区の平安時代遺物包含層から出土した。18は、棒状木製品である。

両端を削り込むが、使用痕などは認められなかった。長さ13.9cm・直径1.3cmを測る。19は、曲物の底板であろう。破損するが、直径17cm・厚さ0.5cmを測る。周辺は幅約1cmで削り込み、やや薄く作る。穴には桜と思われる樹皮が遺存していた。20は、梯子状木製品である。長さ59.2cm以上・幅8.7cm・最大厚3.4cmを測る。梯子状に作るが、厚さが3.1cmと薄いことから人の体重を支えるものとは考えられず、具体的な使用方法は不明である。ていねいに階段部を削り出し、裏面は平滑に仕上げる。

21は下駄である。平面形は長楕円形に近く、長さ23cm・推定幅12.7cm・厚さ2.3cmを測る。まっすぐに下りる連歯下駄で、歯は高さ5.5cm・厚さ3.5cmである。歯は高く、使用に伴い摩滅した痕跡は認められない。22は、大きさが長さ15.7cm・最大幅5.3cm・高さ2cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、後壺を後歯の前にあけ、台と同じ幅で断面方形の歯を作る。これは、23とともに自然流路跡S R 16001の黒褐色粘質土中から出土しているため、古墳時代に入る可能性もある。25は、先端は丸く、後ろは尖り気味に作る。前歯は幅3.5cmで作り出すが、後歯は台と一体で作る。前壺は右に片寄ることから左用の下駄と考えられる。31区から出土した。

(鶴島三壽)

(4)瓦 類(図版第119)

今回の調査地からは、少量ながら瓦片も出土している。ほとんど平瓦で、凸面に一辺約1cm前後の正格子タタキを施す。凸面が確認できるものは、いずれも正格子タタキを施すもので、出土地は、A～Cブロックに限られる。同様な瓦は、千代川遺跡6・7次調査で出土しているため、桑寺廃寺に関係するものと考えられよう。

(鶴島三壽)

第9節 鎌倉時代の遺構

ここで鎌倉時代の遺構としてまとめたものは、12～13世紀、正確には平安時代末～鎌倉時代初頭に位置づけられる。先の奈良～平安時代の遺構・遺物の時期と比べると、11世紀代が空白に近くなる。ただし、遺物の項では若干この11世紀頃の遺物についてもふれることとする。本時期の遺構も、奈良～平安時代と同様に、地形に左右された状態で、大きく4地区に分かれて分布している。本項でも、これらをA～Dの4つのブロックと呼称し、各ブロックごとに遺構・遺物を報告する。

①Aブロック

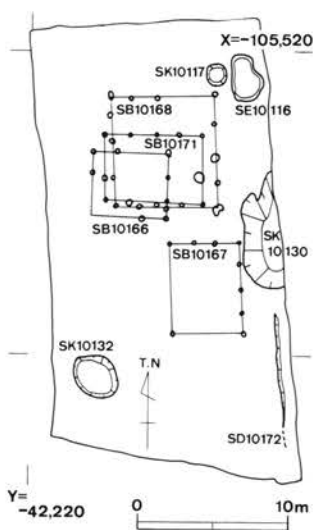
4区において、この時期の柱穴群・溝・土坑・井戸跡などを検出したことから、これをAブロックとした。先に述べたように、調査地内南端の微高地に相当している。検出した柱穴は総数約350を数えるが、建物跡としてのまとまりを確認しえたのは4棟であった。また、明確に井戸跡として確認しえたのは1基にとどまるが、類似した大形の土坑がもう1基ある。なお、大半の遺構の検出面は灰色砂層上面であった。

掘立柱建物跡1 (S B 10168) 建物跡2・3とともに、4区の北半部で検出した。かなり歪な形態をなすが、桁行4間(7.4m)×梁間4間(6.9m)の建物跡と考えられる。主軸はN-2°-Wである。柱穴は、それぞれで若干の差異を認めるが、径約30～40cmの円形である。隅部に相当する柱穴内から、瓦器椀や土師皿片が出土した。

掘立柱建物跡2 (S B 10171) 建物跡1・3と重複して検出した。建物跡1に比して若干規模が小さく、桁行4間(6.6m)×梁間3間(4.6m)の建物跡と考えられる。主軸はN-90°-Wである。柱穴は、直径約25～30cmの円形で、深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡3 (S B 10166) 建物跡1・2と重複する。検出面は黄灰色粘土上面である。桁行3間(5.1m)×梁間3間(4.3m)の建物跡である。主軸はN-89°-Wである。柱穴の形状及び深さは建物跡1・2と同じである。これら重複する3棟の建物跡は、ほとんど主軸方向が一致することから、前後関係は不明であるものの、建て替えが行われたのであろう。

掘立柱建物跡4 (S B 10167) 上記の建物跡1～3の南側で検出した。西側の約半分が溝S D 10149と重複しており、柱穴を検出することが困難であった。建物跡の



第26図 Aブロック(4区)
遺構配置図

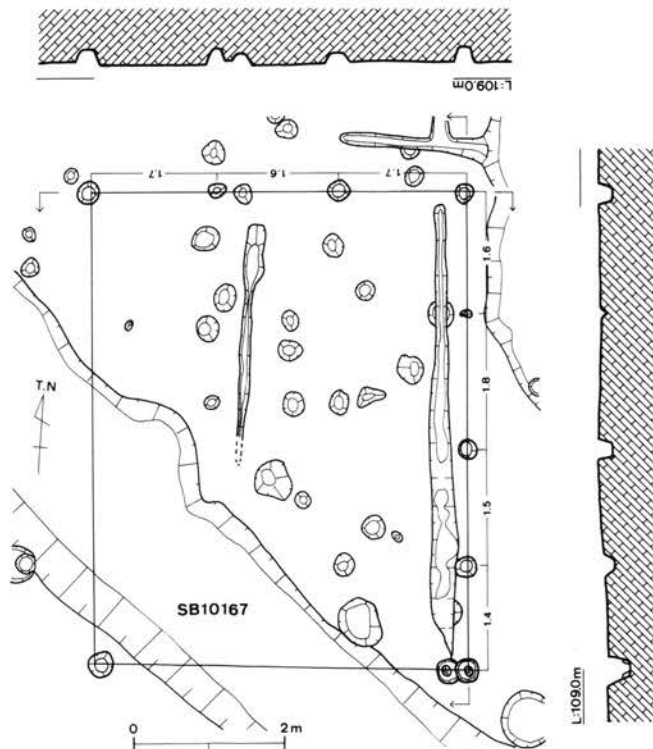
規模は、桁行4間(6.1m)×梁間3間(4.9m)である。主軸はN-3°-Wである。柱穴は、円形で直径約30cm・深さ20~30cmを測る。

井戸跡1 (S E 10116) 4区の北東隅、建物跡1の北東側に近接して検出した。大きさは直径約1.2m・深さ約1.3mを測る円形の石組の井戸である。ただし、北側に一段浅くなった方形の突っ出し部が付く。この部分は検出面から約0.7mの深さがあり、北端部には2段程度の石積みが残る。これは水の汲み出し部の可能性がある。検出面で、崩落した多くの石材が井戸内に投げ込まれている状況を呈していたことから、使用時には地上にも石組みが設けられていたと考えられる。ただし、底部に曲物等はなく、非常に浅い。遺物は、底部付近から瓦器碗1点、検出面で崩落した石材中から瓦質の火舎片が出土した。

土坑1 (S K 10130) 4区東辺中央付近で約半分を検出した。長楕円形の平面形態を示すと考えられ、南北長径は、約3m以上・深さ約80cmを測る。埋土は、灰黄色砂質土の単一層である。埋土中からは瓦器碗・土師器皿の破片が出土した。石材等の出土は認められなかったが、形態からみて、これも井戸跡の可能性が高い。

土坑2 (S K 10132) 4区西南部で検出した一辺約2.5mの隅丸方形土坑である。深さ約30cmを測る。埋土は灰黄色砂質土で、瓦器碗・土師皿片が出土した。

溝1 (S D 10172) 4区の東辺南半部で検出した。幅が約50cm・深さ約20cmを測る。土坑1から南に向かってのびる状況を呈していた。なお、遺存状況は極めて悪いが、溝の肩の一部に石材の残存を認めたので、石組の溝であったと考えられる。埋土は暗灰色土で、瓦器碗の小破片が出土している。



第27図 掘立柱建物跡SB10167実測図

②Bブロック

Bブロックでは、15区で掘立柱建物跡5棟を検出した。ここは、先の奈良～平安時代のBブロックと同一の微高地上に相当するが、奈良～平安時代の遺構を検出した6区ではこの時期の遺構を検出できなかった。遺構面のレベルなどからみて、この時期の遺構はすでに削平された可能性が高い。遺物は周辺の5～7・9・14区からも出土したが、遺構を検出したのは15区のみであった。なお、掘立柱建物跡は基本的に2棟がセットとなり、同一か所に建て替えを行っていた。

掘立柱建物跡5 (S B 15001) 15区東側中央で検出した。桁行2間(5.0m)×梁間2間(2.7m)の総柱建物跡で、一部建物跡6と重複する。主軸はN-3°-Wである。柱穴は、円形で直径約30～40cm・深さ30cmを測る。

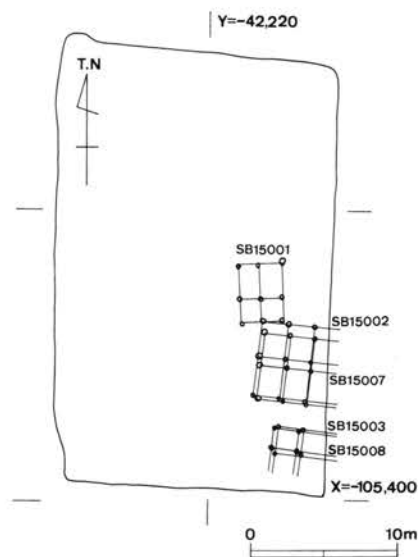
掘立柱建物跡6 (S B 15002) 15区東側建物跡5の南で検出した。東方部が調査区外へのび、規模は確定できないが、桁行2間(3.4m)×梁間2間(4.7m)の建物跡である。主軸はN-7°-Eである。柱穴は、円形で直径約30～40cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡7 (S B 15007) 建物跡6と重複し、建物跡6の建て替えと考えられる。規模は、桁行2間(3.6m)以上×梁間2間(4.3m)であり、方位は建物跡6と同じである。柱穴は、円形で直径約30～40cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡8 (S B 15003) 建物跡6・7の南側で検出した。東・南方とも調査区外へのび、全体の規模は不明であるが、東西1間(1.7m)×南北1間(1.5m)を測る。主軸は、N-7°-Eで、建物跡6・7とほぼ同一でありほぼ柱筋が通る。規格性をもった配置を

とり、両者がセットをなすと考えられる。柱穴は、円形で直径約25～30cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡9 (S B 15008) 建物跡6・7と同様、建物跡8の建て替えと考えられる。方位もほぼ同じで、重複して存在する。規模も東西1間(1.7m)以上×南北1間(1.4m)以上と考えられる。柱穴の形状及び深さも建物跡8と同じである。



第28図 Bブロック(15区)遺構配置図

③Cブロック

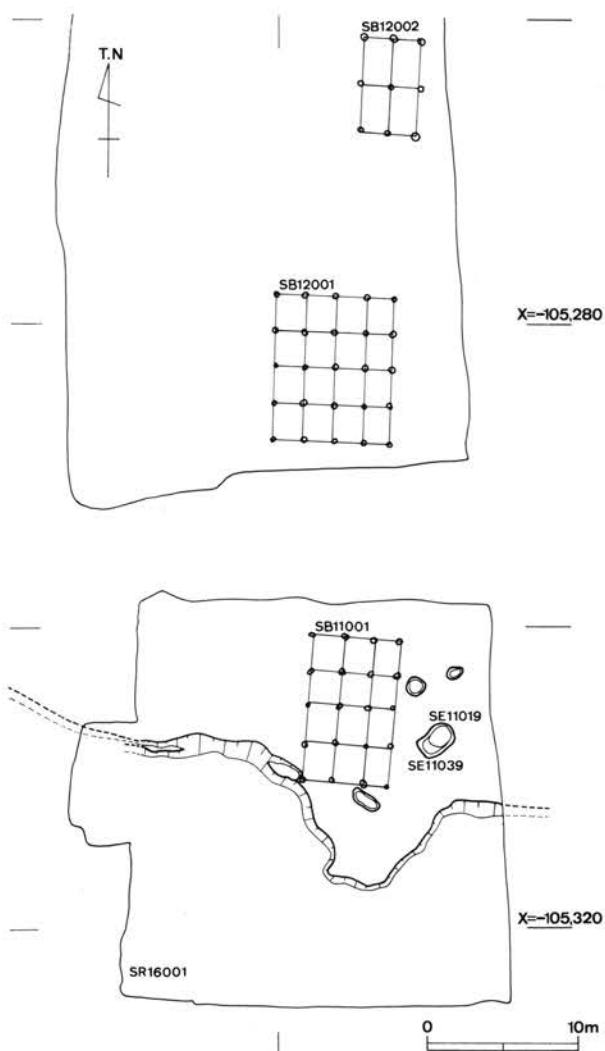
Cブロックでは、10・11・16～18区で検出した自然流路跡(S R 16001；幅約25m)の北

岸に認められる微高地上の11・12区で掘立柱建物跡3棟、井戸跡などを確認した。先に示したように、奈良～平安時代の遺構の存在も期待されたが、後世の削平のためか、遺存していなかった。当該期の遺構は、柱穴などは削平され、深くないが遺存していた。遺構は、現在の耕作土直下に認められ、地山の青灰色砂質土及び黄灰色粘土上面で検出した。遺構のある微高地は18区のある北西方向へ続くが、こちらは削平が及んだようでは確認できなかった。建物跡は、自然流路跡の北岸に1棟、北側に棟筋を合わせて1棟、さらに北側に前2者に比べ小規模な建物跡が1棟と南北に3棟が並んで検出された。

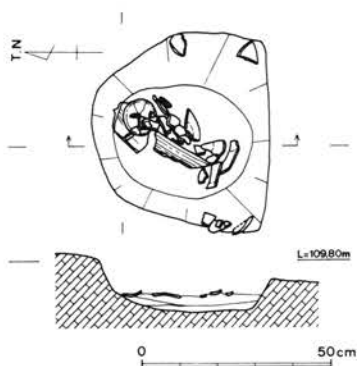
掘立柱建物跡10(S B 11001) 11区自然流路跡 S R 16001の北側肩部で検出した。桁行4間(9.5m)×梁間3間(5.8m)の南北棟の総柱建物跡である。主軸は、 $N-5^{\circ}-E$ である。柱穴は円形で、大きさにばらつきがあるが、直径約40cm・深さ約30cmを測る。柱穴 P 037から瓦器碗が完形で出土した。

掘立柱建物跡11(S B 12001) 12区東南部で検出した。桁行4間(9.5m)×梁間4間(8.0m)の南北棟の総柱建物跡である。この建物跡はまだ南にのびる可能性もある。主軸は $N-1^{\circ}-E$ である。柱穴は、円形で直径約30～40cm・深さ約30cmを測る。北側の梁間には、一部で柱根が遺存し、直径約10～15cmの木材の使用を確認した。柱穴 P 051から瓦器碗が完形で出土した。

掘立柱建物跡12(S B 12002) 12区の東北部、建物跡11の北側で検出した。桁行2間(6.0m)×梁間2間(4.0



第29図 Cブロック遺構配置図



第30図 柱穴P037遺物出土状況

m)以上の建物跡である。調査地東辺で確認したため、この建物跡はまだ東方にのびる可能性がある。主軸は $N-3^{\circ}-E$ である。柱穴は、円形で直径約30～40cm・深さ約30cmを測る。

井戸跡2(S E 11019) 建物跡10の東で検出した。この井戸跡は井戸跡3と切り合い関係にある。井戸の掘形は一辺約1.5mの隅丸方形で、大きさは、井戸枠が一辺約1m・深さ約1mを測る。井戸枠は、長さ約70～80cm・幅約20cmの板材を横組みにし、棧やほぞ

などはもたない。この井戸の北側の肩部には瓦器椀を中心とする遺物が重なり合った状態でまとまって確認された。井戸の中からも完形の瓦器椀や木筒状木製品をはじめとする遺物が出土した。

井戸跡3(S E 11039) 井戸の平面形は楕円形で、直径約1.5mを測り、深さは約30～40cmと浅い。この井戸は浅い素掘りの井戸で、井戸跡2のような井戸枠はもたない。井戸内からは瓦器椀・土師器皿・須恵器の播鉢などが出土した。

④Dブロック

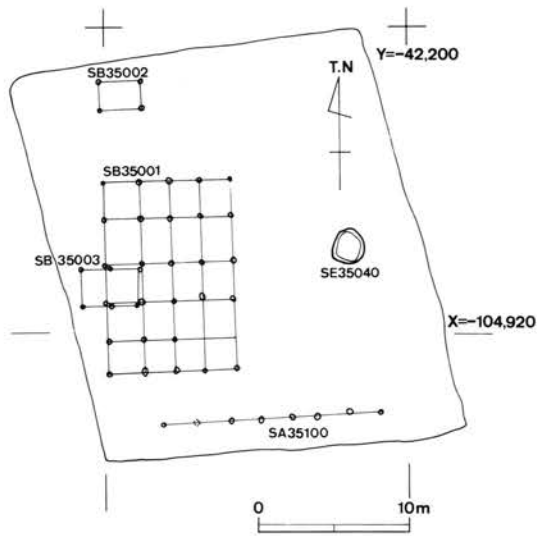
Dブロックでの検出遺構は、拝田谷部の最も奥に設定した35区で、掘立柱建物跡3棟・井戸跡1基を検出した。ただし、遺物は、明確な遺構を検出することができなかった26～28区にも広がっており、周辺部にも遺構の広がりが想定できる。

掘立柱建物跡13(S B 35001) 35区中央で検出した。拝田谷部の最も奥に位置し、丘陵裾の地形変換点近くの微高地上に立地する。規模は桁行5間(12.8m)×梁間4間(8.2m)のかなり大きな南北棟の総柱建物跡である。主軸は、 $N-3^{\circ}-W$ である。柱穴は、円形で直径約40cm・深さ約30cmを測る。柱穴P053から瓦器椀・土師皿等が出土した。

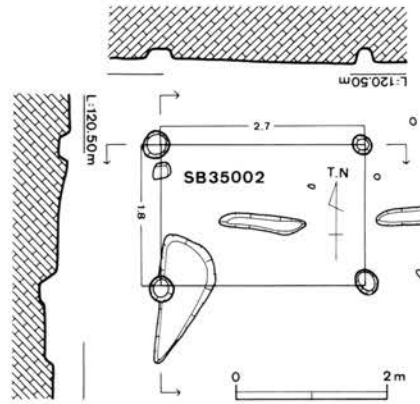
掘立柱建物跡14(S B 35002) 建物跡13の北方約5m、35区の北辺で検出した。桁行1間(2.7m)×梁間1間(1.9m)の小規模な建物跡である。主軸は $N-91^{\circ}-W$ である。柱穴は、円形で直径約30cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡15(S B 35003) 35区の西辺で、建物跡13と一部重複して検出した。さらに西側へ広がる可能性はあるが、桁行2間(3.6m)×梁間1間(2.5m)の小規模な建物跡である。主軸は $N-85^{\circ}-E$ である。柱穴は、円形で直径約30cm・深さ約30cmを測る。

井戸跡4(S E 35040) 建物跡13の東側約8mで検出した。井戸の規模は、方形で一辺約1mである。掘形は不整形な円形で、直径約2mを測り、井戸枠は長さ1m・幅20～



第31図 Dブロック(35区)遺構配置図



第32図 掘立柱建物跡SB35002実測図

付表7 鎌倉時代掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	調査区	規模	柱間寸法				主軸
S B 10168	4区A	4間×4間	2.0	2.3	1.7	1.7	N2° W
			1.9	1.6	1.8	1.7	
S B 10171	4区A	4間×3間	1.6	1.6	1.9	1.7	N90° W
			1.4	1.4	1.6		
S B 10166	4区A	4間×3間	1.6	1.8	1.5	1.4	N3° W
			1.7	1.6	1.7		
S B 10167	4区A	3間×3間	1.8	1.6	1.7		N89° W
			1.6	1.6	1.1		
S B 15001	15区B	2間×2間	2.3	1.7			N3° W
			1.4	1.3			
S B 15002	15区B	2間×2間以上 総柱建物	2.5	2.3			N7° E
			1.7	1.7			
S B 15007	15区B	2間×2間以上 総柱建物	2.3	2.4			N6° E
			1.6	1.7			
S B 15003	15区B	1間×1間以上	1.9				N7° E
			1.7				
S B 15008	15区B	1間×1間以上	1.7				N7° E
			1.4				
S B 11001	11区C	4間×3間 総柱建物	2.3	2.2	2.6	2.4	N5° E
			1.8	2.0	2.0		
S B 12001	12区C	4間×4間 総柱建物	2.4	2.4	2.4	2.4	N1° E
			1.9	2.0	2.0	2.0	
S B 12002	12区C	2間×2間	3.1	3.1			N3° E
			2.0	1.9			
S B 35001	35区D	5間×4間 総柱建物	2.5	3.1	2.5	2.5	N3° W
			2.0	2.0	2.0	2.3	
S B 35002	35区D	1間×1間以上	2.7				N91° W
			1.8				
S B 35003	35区D	2間×1間以上	1.7	1.9			N85° W
			2.5				

30cm・厚さ約2cm程度の板材を縦組みにし、横方向には3か所に棧を設けて構築する。底部から最下段の棧までは約50cmで、それから棧は約30cm間隔で設けている。板材は、約1.8mが遺存していた。埋土は黒灰色粘砂土で、井戸の最下部で完形の瓦器碗2点をはじめ、土師皿・木製の勺などが出土した。なお、検出段階では、拳大から人頭大の石が密集した状況が確認され、本来は地上に石組み部が設けられており、それが廃絶時に投げ込まれた可能性が高い。また、方形井戸枠の示す方向は、先の建物跡13の主軸とほぼ一致するため、両者は同時期に存在したものと考えられよう。

(鶴島三壽)

第10節 鎌倉時代の遺物

本時期の出土遺物としては、各ブロックで検出した遺構埋土内及びその上面に堆積していた灰褐色土・淡灰色土中から出土した遺物を報告する。

(1)土 器

①Aブロック(図版第45)

Aブロックでは、4区の遺構(溝・土坑・井戸・柱穴)及び遺構面直上にわずかに堆積していた暗灰色土中から出土した遺物を報告する。遺物には、土師器皿、瓦器椀、青磁椀・皿、瓦質鉢、鍋、土釜、火舎などがある。時期的には、井戸(S E 10116)出土の瓦器椀が12世紀後半、瓦質火舎が14世紀頃の時期を示すほかは、13世紀代のものが主体を占める。

土師器皿(1～19) 口径・器高から大・中・小の3種類に大別される。数量的には圧倒的に小皿が多く、小皿については3分の1以上の破片を示したのに対し、中・大皿は図示したもの(中皿3点、大皿1点)を抽出しえたにすぎない。

小皿(1～15) 口径7.5～9cmのものを小皿とした。1～11が口径8cm、12～15が7cmを測る。底部をナデ、口縁部を横方向のナデ調整によって仕上げるという製作手法は、基本的にすべてに共通する。ただし、形態的特徴から、丸みのある底部から緩やかに口縁部へ至るもの(1・7)と、口縁部の横ナデによって口縁部と底部の境に明瞭な段が観察されるもの(2～6・8～15)に大別される。

中皿(16～18) 口径10cm前後・器高1.6cm前後のものを中皿とした。16が口径8.9cm、17・18が10cmを測る。成形手法及び形態は基本的に小皿と共通する。確認したものでは、16・17が丸みのある底部から緩やかに口縁部へ至るもので、18が口縁部と底部の境に明瞭な段が観察される。

大皿(19) 平らな底部から緩やかに屈曲して上外方へ立ち上がる口縁部を持つ。底部から口縁部下半をナデ、口縁部上半を横方向のナデ調整によって仕上げる。口径14.2cm・器高3cmを測る。

瓦器椀(20～27) 全体に遺存状況の悪いものが多く、暗文が良好に観察される資料は少ない。器形については、体部が内湾して立ち上がるタイプのものが多い。

20は、井戸(S E 10116)から出土しており、最も遺存状況が良好である。口径12.8cm・器高4.5cmを測る。断面三角形で、高さ0.8cmの高台を持ち、体部は内湾して立ち上がりながら口縁部付近で一旦厚みを増している。口縁端部付近は強く横ナデされ、外面がくぼむ格好となり、再び器壁が薄くなる。口縁端部は上外方にわずかな面を持つ。体部外面下半はナデ調整によって仕上げられ、内面には横方向の暗文が認められる。内面見込みには鉅

歯状の暗文が観察される。

21～24は、ほぼ共通した形態をなす。口径12cm・器高4cm前後を測る。断面三角形で高さ0.5cmの高台を持ち、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部付近は強く横ナデされ、やや内湾度を増している。25は、これらに比べ10.6cmと口径が小さい。口縁部の立ち上がる傾斜も強くなり、高台も一層小さくなる。26は、口径10.6cm・器高3.8cmを測り、器壁はほかのものに比べ薄い。口縁部は強く横ナデされているため、端部付近で外反する。27は、口径12cm・器高4.1cmに復原されるが、左右が非対称で歪な形態となる。高台もわずかに痕跡をとどめる程度となる。外面の磨滅が著しく、調整については明確でないが、内面はわずかにハケ目調整の痕跡を認める。

青磁皿(28) 体部中央に稜を持ち、内面見込みには櫛状工具によるキザミがある。

土師器羽釜(29) 1点のみ確認された。口縁部付近の小片で、口径15.1cmを測る。

土師器鍋(30) 1点のみ確認された。口縁部付近の小片で、口径30.6cmに復原される。直立する体部から短く水平近くに外反したあと、上外方へ屈曲して終わる口縁部を持つ。端部は外面に面を持つ。

石鍋(31) 1点のみ確認した。口径30cmに復原される。体部から口縁部へとやや内湾気味にのびるもので、口縁端部から2.6cm下に凸帯を付し、羽釜状をなす。滑石製である。

瓦質土器鉢(32) 口径30.5cmを測り、体部から口縁部へと外反気味に立ち上がる。内面にはヘラ状工具によって施された摺目が約3cmごとに確認される。外面に回転ナデ、内面には横方向のハケ目調整が観察される。

瓦質土器火舎(33) 口径30.7cm・器高20cmを測る。口縁部は水平に面を持ち、口縁部外面には雲雷文を施す。底部は四角に面取りされた脚を持つ。

②Bブロック

本ブロック出土遺物として、14・15区の灰褐色土及び淡灰色土出土遺物、15区の掘立柱建物跡柱穴内からの出土遺物を図示した。建物跡柱穴内及び灰褐色土出土遺物に対し、淡灰色土出土のものは数型式新しいものが主体をなす。また、その出土状況も、前者が比較的大きな破片であるのに対し、後者は細片化したものが非常に多い。基本的に、本ブロックの遺構とした15区の掘立柱建物跡の時期を示すのは、このうち前者と考えられる。後者については、後述するが当地一帯が耕作地化された段階に設けられた素掘り溝群に伴うものと考えられる。なお、ここでは、両者の遺物について一括して報告する。

ア. 14・15区出土遺物(図版第46)

遺物には、土師器皿(中・小)・瓦器碗・土師器土釜・青磁碗などがある。このうち、注

目されるのは、輸入磁器についてである。他のブロック出土遺物では白磁がほとんどを占めるのに対し、ここでは青磁が目につく点があげられる。これは、遺構に伴う时期的な差異をあらわす可能性が高いと考えているが、細かな点については後述する。

本ブロック近辺の14・15区以外にも6区など微高地が広がっており、遺構の広がりが見込まれたが、過去の開墾等によってすでに削平されたのか、この時期の顕著な遺構を確認することはできなかった。ただ、6・7・9区からもやはり当該時期の遺物がわずかながら出土している。以下、これらについて簡単に報告したい。

土師器皿(34~45) 34~37は、口径約9cmを測る。37は、器高8mmと低い。38~41は、口径約7~8cmを測る。39は、口縁端部をやや強くナデ、40は、体部中央に稜を持つ。41は、平坦な底部から斜め上方にのびる口縁を持つ。42~45は、口径約11cmを測る。45は、いわゆる「て」の字状口縁を持ち、口縁端部をやや上方につまみ上げている。

瓦器椀(46~55) 46は、平坦な底部から緩やかにひろく口縁部を持つ。口径13.9cm・器高4.9cmを測る。ふ厚い高台を持つことが特徴的である。47・48は、口径約15cmを測り、内面はまばらなミガキが施される。50は、矮小化したもので、口径12.2cmを測る。内外面ともミガキは施されず、底部は遺存しないが、55のようなものと考えられる。

青磁椀(56~59) 56は、色調は緑がかった青色を呈し、口縁体部がやや外方に開く。57~59は、体部外面に蓮華文を持つ。58は口径15.7cm、色調は灰緑色を呈している。

瓦質土器羽釜(60・61) いずれも体部外面はナデ、内面は横ハケを施す。小さな顎を持ち、いわゆる大和型の羽釜である。

白磁椀(62・63) 62は、小さな玉縁状口縁を持ち、口径18.4cmを測る。

瓦質土器播鉢(64) 口縁部しか遺存しないが、内面には横ハケが施される。

瓦質土器羽釜(65~67) 67は、口径17.8cmを測り、顎は低い。

瓦質土器鍋(68) これも、遺存状況が悪く、口縁部を残すにすぎないが、口径24.8cmを測る。

イ. 16区出土遺物(図版第47)

遺物包含層である灰褐色土及び素掘り溝から出土したもので、瓦器椀は器形も矮小化し、暗文もまばらになったものが多い。

土師器皿(69~105) 71は、平坦な底部から斜め上方に立ち上がる口縁部を持つ。口径9.5cmを測る。87は、平らな底部からわずかに立ち上がる口縁部を持つ。口径8cm、器高は低く、0.8cmである。88は、口縁端部が外方に開き、92は、丸い底部から体部中央に稜を持ちやや尖り気味の口縁部へ至る。99・100は、「て」の字状口縁を持ち、口径10cm・器高1cm前後を測る。101~103は、口縁部を強く横ナデし、口縁部がやや外反する。

瓦器椀(106～124) 口径約12～13cmを測り、内面の暗文も比較的密に施されるもの(106～110・113)から、内面の暗文もまばらで、高台も小さく、口径は11cm前後と矮小化したもの(111・112・114～124)がある。特に、123・124は矮小化が著しく、内面のミガキもわずかに数条を数えるにすぎず、高台は消失寸前できわめて小さい。122は、口径10.3cm・器高4cm、124は口径10.8cm・器高3.3cmを測る。

③Cブロック

Cブロックでは、11・12区にまたがって確認した掘立柱建物跡や井戸跡出土の遺物及び自然流路跡S R 16001の埋土から出土した遺物と、23区出土遺物を合わせて報告する。23区のもは遺構に伴うものではないが、調査地西側に遺構の存在を現実視させる。

ア. 11・12区出土遺物(図版第48)

土師器皿(125～143) 125・126は、口縁端部外面を強くナデ、やや外方に開く。138～140は、底部から緩やかに口縁部に至る。141～143は、口径13cm前後を測る中皿である。141は、口縁端部を上方につまみ上げる。142は、平らな底部から口縁部を横ナデし、稜を持つ。口径13cm・器高1.8cmを測る。

瓦器椀(144～152) 144・145は、内外面とも暗文が密に施され、断面台形の高台を持ち、口縁端部には1条の沈線を持つ。145の器壁は厚く6mmを測る。144は、S B 12001の柱穴から出土した。146・147は、外面に暗文は施されず、内面の暗文も比較的まばらになる。146は、台形で小さな高台を持つが、147は、外方に踏ん張る高台を持つ。いずれも口縁端部は強く横ナデされる。148・149は、口径12.8cm前後と小さく、150～152は、口径11cm前後とより一層小さい。特に151は、口径10.2cmを測り、内面の暗文はわずかに数条であり、その特徴から高台は消失した時期のものと考えられる。13世紀後半頃のものであろう。

白磁(153～161) 153～158は、椀である。153は、口縁端部が外方に開き、口径16.3cmを測る。154～158は、玉縁状口縁を持つ。154は口径13.6cm、158は口径19cmを測る。159は合子である。体部外面は蓮華文を施し、釉色は灰白色を呈する。口径5.6cm・器高2.1cmを測る。160・161は、皿である。口縁部は外反しながら立ち上がるもので、釉色はいずれも黄色がかった白色を呈する。160は、口径8.6cm・器高2.2cmを測る。

青磁椀(162・163) 162は、口縁端部をやや強く横ナデし、外方に開く。外面は縦ハケ、内面は櫛状工具によるキザミが施される。口径16.1cmを測る。

瓦質土器(164) 164は、羽釜である。いわゆる大和型の羽釜で、頸の下部には明瞭な指押さえの痕跡が残る。口径24.9cmを測る。

(森下 衛)

イ. 井戸 S E 11019・11039、柱穴出土遺物(図版第49・50)

土師器・瓦器皿(170・171・183～189・204～207・209～216) 165～171は、井戸 S E 11019内から出土した。170・171は、瓦器皿である。170は口径8.1cm・器高1.8cm、171は口径9.3cm・器高1.7cmを測る。両方とも内面に暗文は施されていない。184は、口縁部端部が上方に尖り気味に終わり、185は「て」の字状口縁を持ち、端部は丸く終わり、188は尖り気味に外反する。207は、口径14cm・器高1.7cmを測る。口縁端部を丸くおさめる。209・211は、掘立柱建物跡 S B 11001を構成する柱穴 P 003から、214は、柱穴 P 002から出土した。209～213は口径8cm前後の小皿、214・215は、中皿である。214・215は、それぞれ口径13.9cm、15cmを測り口縁部端部は尖り気味に終わる。

瓦器椀(165～169・172～182・191～203・217) 165は、口径15.7cm・器高5.7cmを測る。外面は体部下方近くまでミガキが施される。断面三角形の高台を持ち、内面見込みには螺旋形の暗文、底部外面には、針のようなもので線刻されている。167・168は、二次焼成を受けたためか、全体は白く変色している。172～182は、井戸 S E 11019の肩部から井戸枠上部にかけてまとまって出土した。191は、口径14.3cm・器高5.6cmを測る。断面三角形で外方にふんばる高台を持ち、内面見込みの暗文は螺旋状を描く。口径は、14cm前後のものが多い。200のように、口径15.6cm・器高5.1cmを測るものもあるが、高台はきわめて小さな三角形である。202は、口径12.3cmと小さく、器壁も薄く、暗文も疎らで、体部中央に稜を持つ。

瓦質土器羽釜(190・218) 190の口縁部は「く」の字に外反し、大きな顎を持つ河内型の羽釜である。218は、いわゆる大和型の羽釜で、口径19cmを測る。

須恵器鉢(208) 208は、口径30.2cm・器高10.5cmを測る。いわゆる東播系の播鉢で、口縁端部は尖り気味に上方におさめる。

須恵器甕(219) 219の口頸部は短く外反し、頸部外面にはタタキが施されている。口径は29.2cmを測る。

ウ. 23区出土遺物(図版第51)

土師器皿(220～242) 220・221は、手づくねによる成形で、外面には特に指頭圧痕が目立つ。224は、口縁端部外面を強く横ナデし、端部は尖り気味に終わる。口径7.9cm・器高1.3cmを測る。13世紀代の製品であろう。232は、底部に糸切り痕を看取できる。口縁部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。土師器皿は23区だけでも数多く出土しているが、糸切りのものはこれだけである。234・235は、口縁端部が肥厚する。体部外面は指オサエ、内面には横方向のナデを施している。236は、口縁端部を内側に「く」の字に折り曲げる。口径7.8cm・器高1cmを測る。13～14世紀頃の平安京の製品であろう。平安

京の製品は、いわゆる「て」の字状口縁を持つ11世紀中頃～末の皿が23区からも出土している。土師器の皿は平安京からかなり持ち込まれていることがわかる。239は、口縁端部に強く横ナデを行う。242は、底部から斜め上方に立ち上がる口縁部を持ち、端部は上につまみあげる。底部は指押さえによる調整のため、器形に歪みがある。調整は内外面とも不定方向のナデを施す。12世紀後半から13世紀頃のものであろう。

瓦器椀(243～249) 243・244は、口縁部が内湾し、台形の高台を持つ。243の端部は沈線を持つ。内外面とも横方向のミガキが施され、243の内面見込みの暗文は、鉅齒状である。245～247は、三角形の小さな高台を持つ。245は、口縁部を強く横ナデするためくぼんでいる。247は、内外面とも横方向のミガキが密に施され、口縁端部には沈線がめぐる。248・249は、口径の小さなもので、内面のミガキは疎ら、内面見込みの暗文は螺旋形を描く。249は、高台が矮小化してしまったもので、高台を持つ瓦器椀の最終段階のものであろう。内面のミガキはまばらで、器形が大きく歪んでいる。

瓦質土器羽釜(250～252) 251は、ぶ厚い顎を持ち、顎の下部及び口縁部内面は指オサエ、体部外面は一部縦方向のハケ調整を行う。口径23.2cmを測る。252は、大和型の羽釜である。顎を水平に張り付ける。その下部は指押さえが明瞭である。口径22.4cmを測る。

瓦質土器鉢(253～255) 253は、斜め上方に立ち上がる口縁部を持ち、端部はやや外反気味に肥厚する。内面は使用による摩滅が著しい。254・255は、口縁端部が肥厚する鉢である。口径の大きいものと小さいものがあり、255は口径21.6cmを測る。

須恵器甕(256～258) いずれも東播系の甕の口縁部で、口縁端部に特徴がある。256は、「く」の字に外反した口縁部からさらに端部が尖り気味に外反し、257は端部に面を持つ。頸部には波紋が施され、口径26cmを測る。258は、口縁端部を上につまみ上げ、体部外面は平行タタキ、内面は指頭による強いナデが施される。口径26.2cmを測る。これらはいずれも12～13世紀頃のものであろう。

エ. 23区出土青白磁(図版第52の259～280)

白磁椀(259～270) 259～265は、いわゆる玉縁状口縁を持ち、259と262はあまり肥厚しない小さな玉縁状口縁を持つ。266・267は、口縁部が内湾気味にのび、端部で外反する。268は、椀の底部で細く高い高台を持ち、高台部分を除いて施釉されている。内面は、不定方向に猫掻き文を施す。269は細く高い高台、270は台形の高台である。

白磁皿(271・272) 271は、底部から緩やかに開き口縁部が外反し、断面台形の高台を削り出す。口径9.9cm・器高2.2cmを測る。272は口径10.2cm・器高2.7cmを測る。胎土は密で、釉色は灰白色を呈し、全面に施釉される。13世紀後半～14世紀前半頃のものであろう。

青磁椀(273～278) 273の外面は、櫛描き文を施す。口径13.2cmを測る。釉色は灰緑色

を呈する。274・275は、外面に蓮弁文を持つ。274は、蓮弁文の間に間弁を持つものだが、275は間弁をもたない。276～278は、青磁碗の底部である。276は、ヘラにより「十」字状の記号を持つ。

青磁皿(279) 底部の小片であるが、見込みにヘラ描きと櫛状工具による草花文様を持つ。口径11.1cm・高さ2.9cmを測る。

青磁盤(280) 内湾気味に立ち上がった口縁部を持ち、端部は外反し上につまみ上げる。口径27.2cmを測る。胎土は良、釉色は緑褐色である。釉は厚く施されているが、底部の一部外面は施釉後削り取っている。

④Dブロック

Dブロックとした拜田の谷部では、35区における掘立柱建物跡や井戸が中心である。そのため、遺物としても35区の遺構に関連したものが中心となるが、それ以外でも、27区の包含層中から多量の遺物が出土している。ちなみに、先の23区出土青白磁は、35区の建物跡に伴って出土した輸入陶磁器よりも質・量ともに上回っている。

ア. 27区出土青白磁(図版第52の281～291)

白磁碗(281～288) 281～283は、玉縁状口縁を持つ口縁部片である。284～286は底部片で、284は削り出しによる蛇の目高台、285・286は断面長台形の輪状高台である。287・288は、玉縁状口縁を持たない碗である。287は、口縁端部は外反しながら上方に尖り気味に終わり、口径15.4cmを測る。288も、口縁端部を外反させ、口径19.8cmを測る。

青磁碗(289～291) 白磁に比べると出土点数は少ない。289・290は、平坦な底部から斜め上方に開く口縁部を持つ碗と考えられる。口径は18.8cm、断面台形の高台を削り出し、色調は灰緑色を呈する。

イ. 井戸(S E 35040)出土遺物(図版第53)

井戸内から出土したものと、掘形から出土したものがある。掘形から出土したものは293・294・296・304である。

土師器皿(292～296) 292～294は、小皿である。293と294の口縁端部は尖り気味に終わる。292は、口径8.8cm・器高1.4cm、293は、口径8.5cm・器高1.8cm、294は、口径8.5cm・器高1.9cmを測る。295・296は、中皿である。295は、平坦な底部を持ち、口縁端部を上につまみ上げる。口径12.3cm・器高2.5cm、296は口径13.5cm・器高2.5cmを測る。

瓦器碗(297～306) 297は、内湾気味の口縁部を持ち、端部はぶ厚くやや尖り気味に終わる。外面は指押さえの痕跡が明瞭に残り、内面はミガキが施される。内面見込みの暗文は鉅齒状に施され、高台は低い台形である。口径14cm・器高5.3cmを測る。298も内湾す

る口縁部を持ち、底部の器厚は薄い端部はふ厚く丸い。断面三角形の高台を持つ。口径13.9cm・器高4.9cmを測る。299は、口径14.1cm・器高4.8cmを測る。303は、内面のミガキはまばらで、器高もやや高く、高台も小さな三角形である。口径14cm・器高5.5cmを測る。305は、直線的な口縁部を持ち、306は内湾する口縁部を持つが、いずれも口径は13.5cm前後を測る。

ウ. 柱穴・土坑出土遺物(図版第53の307～313)

307～313は、柱穴及び土坑から出土した遺物である。307～309・311は柱穴から、310・312・313は土坑37から出土した。

土師器皿(307～310) 307・308は、平坦な底部から尖り気味に口縁部が立ち上がる。307は、口径9.2cm・器高1.4cm、312は口径8.6cm・器高1.4cmを測る。309は、「て」字状口縁を持ち、口縁端部を上方につまみ上げる。口径10cm・器高1.7cmを測る。12世紀後半頃のものであろう。310は、へそ皿で底部は大きくくぼむ。口径8.2cm・器高1.5cmを測る。

白磁椀(311～313) 311は、小さな玉縁を持ち、白磁椀の中でも形式的に古いタイプと思われる。口径15.4cmを測る。312は、口径19cmを測る。313は、削り出しによる、断面台形の高台を持つ。

エ. 35区包含層出土遺物(図版第53の314～323)

土師器皿(314・315) 314は、口径8.3cm・器高1.5cm、315は中皿で、口径15.2cm・器高2.1cmを測る。

瓦器椀(316) 316は、瓦器椀で井戸内出土のものと同様である。口縁端部は丸く、内面の暗文はやや疎らである。口径13.8cmを測る。

白磁椀(317～319) 玉縁状口縁を持つもの(317・318)と、口縁端部が外反するもの(319)がある。

青磁皿(320) 320は、体部中央に稜を持ち、口径10.8cmを測る。

青磁椀(321～323) 321は、外面3条、内面口縁端部に1条の沈線を持つ。口径12.8cmを測る。竜泉窯系の製品であろう。322・323は、外面は縦方向の櫛描き文、内面にキザミを入れる。色調は灰緑色である。322は、口径16.3cm、323は口径17cmを測る。

(2)木器(図版第63)

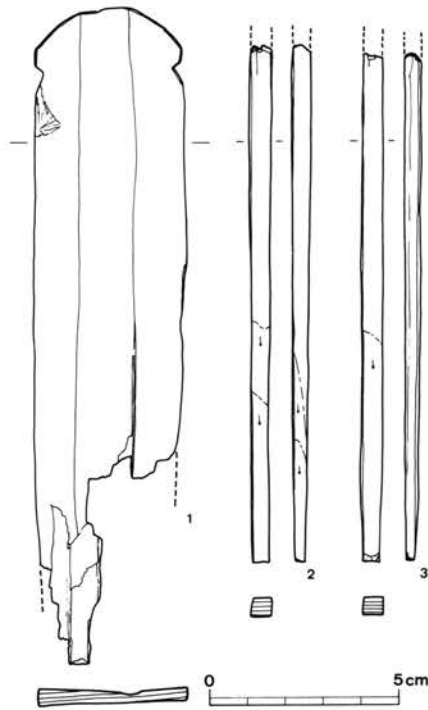
木製品は、古墳や奈良・平安時代出土のもの比べると、量的にもかなり少なく、11区における井戸出土遺物以外では下駄をあげることができるだけである。

24・26は、下駄である。24は27区、26は23区の鎌倉時代の遺物包含層からそれぞれ出土した。連歯下駄で、後壺を後歯の前にあける。24の平面形は、隅丸長方形を呈し、台と同

じ幅で断面台形の歯を作る。長さ20.8cm・最大幅7.6cm・高さ2.2cmを測る。

第33図1～3は、井戸S E 11019から出土した。1は、木筒状木製品である。残長17.2cm・幅4.1cmを測る。両側面に抉りを持ち、表は真ん中の1/3ほどがややくぼむ。赤外線カメラを使用しても文字などは確認しえなかった。2・3は箸と考えられる。いずれも上部が欠損し、長さ約13.3cm以上・幅約0.5cm、最大厚0.7cm、先端で0.2cmを測る。正方形ではなく、厚さに比べると幅の方が長い。全体的にていねいに面取りされる。

(鶴島三壽)



第33図 井戸S E 11019出土木製品実測図

第11節 鎌倉時代以降

鎌倉時代後半の13世紀後半～14世紀頃を境に、調査地内では居住区としての痕跡がほぼ認められなくなる。調査区の幾つかの地点では、耕作地への転化を示す遺構と考えられる素掘り溝群を検出した。5区で検出した素掘り溝群では、遺構の切り合い関係や、検出面の違いなどから、他の時期の遺構とは明瞭に区別できることを確認した。また、土層の観察から、中世以降の遺物が細片化して出土する淡灰色土層は、中世～近世の耕作土の可能性も指摘できる。

以下、素掘り溝の状況を鎌倉時代以降の遺構としてまとめ、遺存状況のよかった調査区を中心に報告する。なお、この時期の遺物は、すでに前章で一括して報告している。

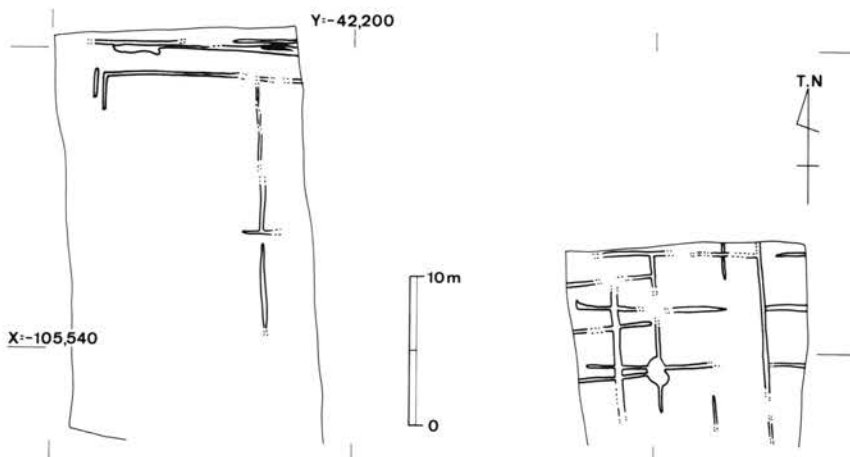
1. 素掘り溝群

素掘り溝群は、調査地の1・4・7・12・15・29・35区などで検出した。以下、これらを、近接する調査区ごとに、A～Dのブロックごとに報告する。

①Aブロック

Aブロックでは、1・4区の遺構群に重複して、素掘り溝群を検出した。本ブロックでは、黒褐色土がほとんど遺存しておらず、これら素掘り溝群は他の遺構と同様に黄褐色土(地山土)の上面で検出した。

1区 耕作土・淡灰色土の除去後、北半部では地山である黄褐色土上面、南半部では灰色砂層上面で検出した。溝は、東西方向にのびるもの6条、南北方向のもの5条を確認した。埋土は、淡灰色土である。東西方向と南北方向の溝群の切り合い関係は、後者が前者を切っており、東西方向の方が先行することがわかる。各溝はおよそ3.6m間隔で平行して存在し、従来から言われているように、耕作に関するものと考えられる。溝は、幅約



第34図 Aブロック(1・4区)素掘り溝実測図

30cm・深さ約5～10cmを測り、断面は緩やかな「U」字形を呈するものが多い。溝の間隔は、同時期に存在した各単位の抽出が比較的容易に行え、東西南北ともおよそ2間(3.6m)間隔に掘られたことがわかる。

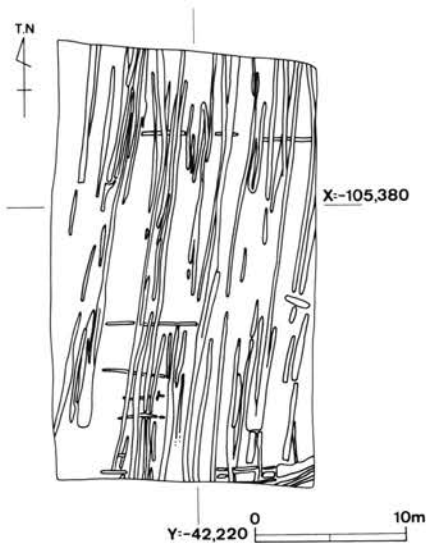
4区 調査区の北東部で、南北方向の溝をそれぞれ1条ずつ検出したにとどまる。その状況から、明らかに1区のものとは性格が異なる。これについては、13世紀初頭とした建物跡との関連も考慮しなければならないが、埋土の状況からこの段階の素掘り溝群の一部と考える。溝は、同一か所に重複し、水田ないしは畑の畦畔に関係する可能性が高いと考えられる。なお、溝の形態・規模については、1区のものと同じである。

②Bブロック

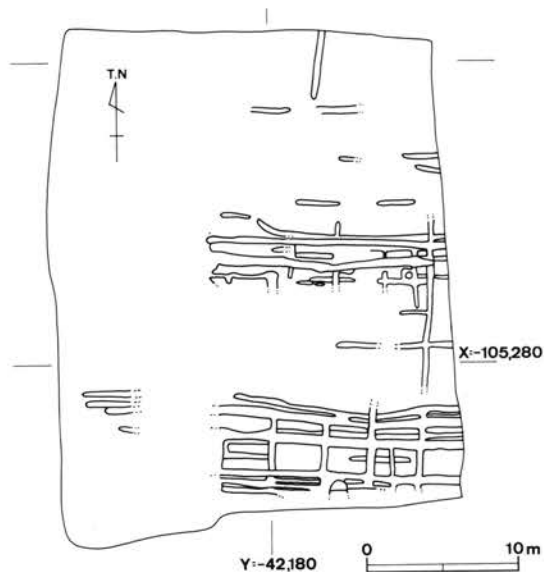
Bブロックでは、7・15区にまたがって素掘り溝群を検出した。7区の遺存状況は極めて悪いため、15区の状況を報告する。

15区 耕作土・淡灰色土の除去後、暗灰色土の上面で多数の素掘り溝を検出した。暗灰色土下層の黒褐色土上面では13世紀前半の掘立柱建物跡(S B 15001～15003・15007・15008)を検出した。溝群のベース土である暗灰色土は厚さ約5cm程度で、層的にも居住区としての土地利用が終了して間もなく耕作地へと変化したことが確認できる。

溝は東西方向が約10条、南北方向が約30条ある。溝の大きさは、幅約30cm・深さ約10cmを測り、断面は緩やかな「U」字形を呈する。埋土は淡灰色土である。東西方向と南北方向の群があるが、溝の切り合い関係からは東西方向のものが先行し、密度も南北方



第35図 Bブロック(15区)素掘り溝実測図



第36図 Cブロック(12区)素掘り溝実測図

向が圧倒的に多い。同一方向の溝でも切り合い関係を持つものがあるが、同一時期に存在した溝の抽出が可能である。これによると、先のAブロックと同様、幅約2間(3.6m)間隔に設けられたものであった。

③Cブロック

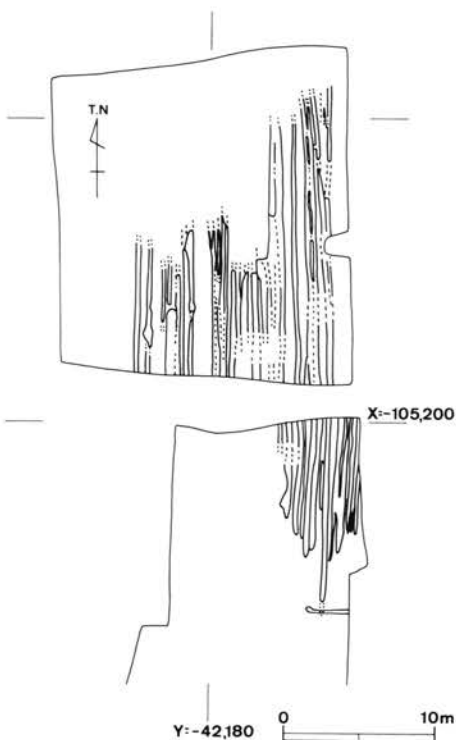
Cブロックでは、11・12区と13・29区で素掘り溝群を検出した。本ブロックも、黒褐色土の堆積は認められず、基本的に素掘り溝群は地山である黄灰色粘質土ないしは青灰色砂質土上面で検出した。このブロックにおいても溝が柱穴を切っていることが確認された。

12区 耕作土・淡灰色土の除去後、地山である青灰色砂質土の上面で素掘り溝を検出した。検出面では13世紀前半の掘立柱建物跡(S B 12001・12002)を検出した。

溝は東西方向が10数条、南北方向が約5条ある。溝の大きさは、幅20~30cm・深さ約10cmを測り、断面は緩やかな「U」字形を呈する。埋土は淡灰色土である。この調査区は近代の暗渠排水の構築により、遺存状況はあまりよくない。東西方向と南北方向の溝では、東西方向のものが数が多い。南北方向の溝は約3.4m間隔に掘られている。

13・29区 とくにこの両調査区にまたがって検出された素掘り溝は遺存状況がよい。

溝は南北方向が20~30条確認できる。大きさは幅20~30cm・深さ約10cmを測り、断面は半円形を呈する。南北方向の溝は密集して掘られ、大きさや深さも同じであり、掘削間隔を復原するのは難しい。他の調査区と異なって、東西方向のものは掘られていないことが特徴的である。



第37図 Cブロック(13・29区)素掘り溝実測図

④Dブロック(34・35区)

Dブロックでは、32~35区の遺構群に重複して素掘り溝群を検出した。32区では遺存状況が悪かったが、34・35区では良好な状況で検出された。

34区 調査区南側では黒褐色粘質土上面で、建物を構成する柱穴とともに良好な状態で検出できた。東西方向の溝は2・3条で切り合い関係を持ちつつも、約3.3m

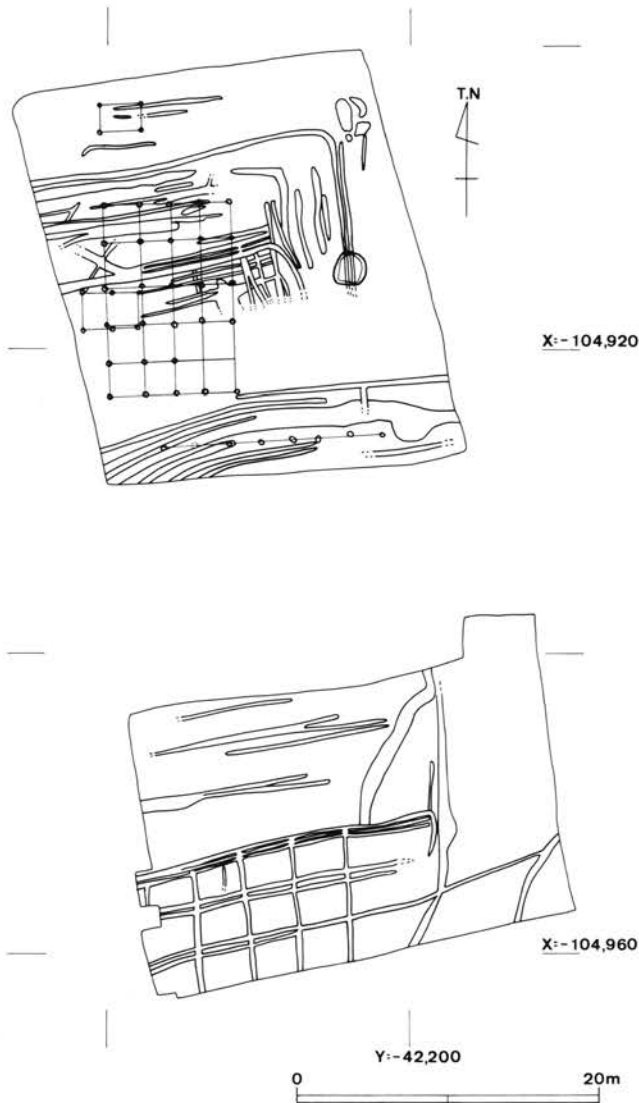
間隔で掘られている。南北方向の溝は1条ずつ整然と3.2m間隔に掘られる。溝の大きさは幅約20～30cm・深さ10cm、断面は「U」字形を呈している。溝内からは、小片となった瓦器・土師器及び土錘などが出土した。

35区 黄灰色土上面で検出した。南北方向のものに比べて、東西方向のものが遺存状況もよく、特徴的である。これは調査区の南北で、高低差が約2mあることとも関係があるろう。素掘り溝は、13世紀前半に比定できる掘立柱建物跡や井戸との切り合い関係からみても、それらより後出するものである。溝の方向と建物跡の主軸方向を比べても、建物跡はほとんど真北を向くが、溝群は約6°ずれている。

溝の大きさは幅約25cm前後・深さ約10cm、断面は緩やかな「U」字形を呈している。溝間の距離は不規則である。素掘り溝の中でも、東西方向から南北方向へ屈曲する溝が1条確認できた。溝の南部は削平を受け、全体の規模は復原しえないが、耕作地の規模を考える上で、貴重なものと言えよう。

2. 淡灰色土について

今回の調査では、多くの調査区で淡灰色土を確認した。この土層は、安定した平安時代末～鎌倉時代の遺物包含層である灰褐色土に対して、遺物がいずれも細片化している点や、素掘り溝群の埋土となっていることなどから、中世～近世に



第38図 Dブロック(34・35区)素掘り溝実測図

かけての耕作土と考えられる。この土層が良好な状態で確認できる調査区では、2～3層に細分できることから、現在の水田が形成される以前、長期にわたって畑作が行われていたことが推測できよう。

(森下 衛)

付表8 石器一覧表

番号	名称	地区	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材
1	有舌尖頭器	18	8.5	2.7	1.00	19.25	サヌキトイド
2	有舌尖頭器	18	7.1	2.7	0.8	13.5	サヌキトイド
3	有舌尖頭器	6	6.2	2.35	0.80	11.2	サヌキトイド
4	石 鎌	16	1.6	1.15	0.25	0.4	チャート
5	石 鎌	32	1.85	1.3	0.35	0.5	チャート
6	石 鎌	6	2	1.45	0.20	0.45	チャート
7	石 鎌	34	2.5	1.75	0.30	1.6	サヌキトイド
8	石 鎌	11	2.3	1.8	0.30	1.6	チャート
9	石 鎌	5	2	1.5	0.25	0.6	頁岩
10	石 鎌	20	2.7	2.3	0.60	3.2	サヌカイト
11	石 鎌	32	4.9	2.7	0.50	7.8	チャート
12	石 匙	9	2.9	4	0.40	4.7	チャート
13	石 匙	6	3.4	4.3	0.90	12.4	サヌキトイド
14	剥 片	35	4.3	2.7	0.65	8.75	サヌキトイド
15	削 器	13	3.7	2.9	0.90	9.35	チャート
16	楔 形 石 器	23	2.5	2.15	0.40	2.70	チャート
17	二次加工ある剥片	35	3.45	4.15	0.95	16.8	チャート
18	剥 片	35	4.85	2.3	0.80	9.95	サヌキトイド
19	球状耳飾り	16	3.5	1.2	0.40	3	滑石
20	球状耳飾り	16	2.45	2.1	0.25	1.7	滑石
21	有孔円盤	6	1.83	1.9	0.20	1.5	滑石
22	石 鎌	7	2.8	1.7	0.25	1	サヌキトイド
23	石 鎌	23	4.5	2.4	0.42	3.6	サヌキトイド
24	石 鎌	7	6.2	2.7	3.80	6.2	頁岩～粘板岩
25	鎌形石製品	15	4.8	2.7	0.40	6.9	頁岩～粘板岩
26	鎌形石製品	34	3.8	2.8	0.35	5.1	頁岩～粘板岩
27	紡錘車	31	3.4	3.35	1.10	20	滑石
28	石庖丁	16	4.5	3.55	0.55	15.75	頁岩～粘板岩
29	石庖丁	16	8.5	3.7	0.85	48	頁岩～粘板岩
30	石 斧	11	4.75	14.95	1.85	25	頁岩～粘板岩
31	石 斧	32	13.7	4.1	1.50	970	頁岩～粘板岩
32	石 斧	34	11.4	4.3	1.20	750	頁岩～粘板岩
33	石 錘	3	5.3	5.5	1.30	58	ホルンフェルス
34	凹み石	5	10	9.05	4.30	615	閃緑岩
35	石 錘	21	12.1	8.5	1.95	280	砂岩
36	石 斧	7	10.7	8.7	2.00	240	砂岩
37	石 斧	23	8.7	7.7	3.50	298	安山岩
38	石 斧	11	14	6.6	4.30	725	砂岩
39	台 石	32	16.8	4.8	3.8	690	斑礫岩
40	石 斧	32	6.8	5.1	4.00	182	砂岩
41	石 斧	18	8.1	5.15	3.45	205	砂岩
42	敲 石	16	13.4	8	5.25	1050	斑礫岩
43	石 斧	16	9.2	5.05	2.40	170	珪質頁岩～珪質粘板岩
44	石 斧	16	9	3.5	1.30	57	頁岩～粘板岩
45	石 斧	35	7.2	3.95	2.80	132	安山岩

第4章 考 察

第1節 時期別総括

(1) 縄文時代

亀岡盆地の縄文時代の遺跡は、国道9号バイパスにかかわる調査で確認されたものが大半であり、千代川遺跡・北金岐遺跡・太田遺跡などをあげることができる。これらの遺跡により、行者山周辺には、縄文時代後・晩期の遺跡が広がっていることが明らかになった。

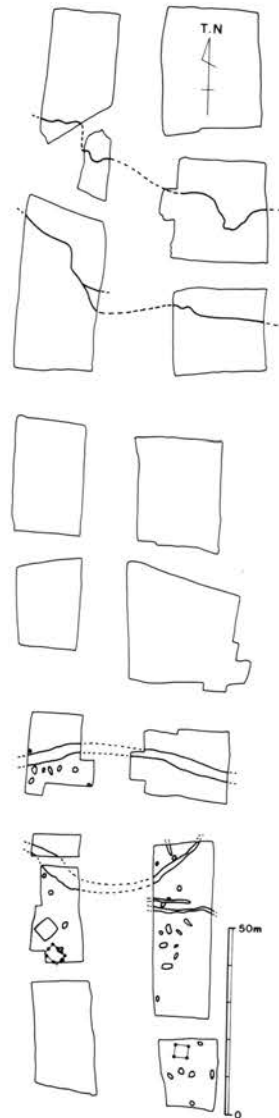
縄文時代の遺構としては、7区で溝を1条確認したにとどまった。周辺の調査区でも、同一の黄褐色粘土上面でこの時期の遺構の広がりが想定されたため、各所で断ち割りをを行ったが確認できなかった。遺物としては、ほとんどが包含層中の出土で、縄文時代の中でも幅があるが、調査地全体で出土しており、遺構の広がりが確実視できる。特に、遺構がBブロックの微高地上に立地しているため、この延長上は可能性が高いと言える。

縄文時代草創期では、有舌尖頭器が3点出土した。出土地点は、6・18区であり、約50m離れるが、一遺跡のみならず近接した地区から3点出土するのは近畿でも珍しい。

今回の報告対象からは外れるが、まとめて土器が出土した11・16次調査資料により、千代川遺跡では縄文時代後・晩期の集落の広がりが想定できる。これ以後、遺構・遺物とも弥生時代後期まで、調査地内では空白期間が続く。しかし、千代川遺跡全体をみると、縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構・遺物が調査地の東方部の千代川遺跡第6・7・11次調査地点で確認されているため、時代ごとに場所を移しながら、人々の居住が継続されていたことがうかがえる。

(2) 弥生時代

弥生時代後期段階になると、再び調査区周辺に集落が営まれる。弥生時代の遺構は、調査地の南辺1～6区に限られ、遺物



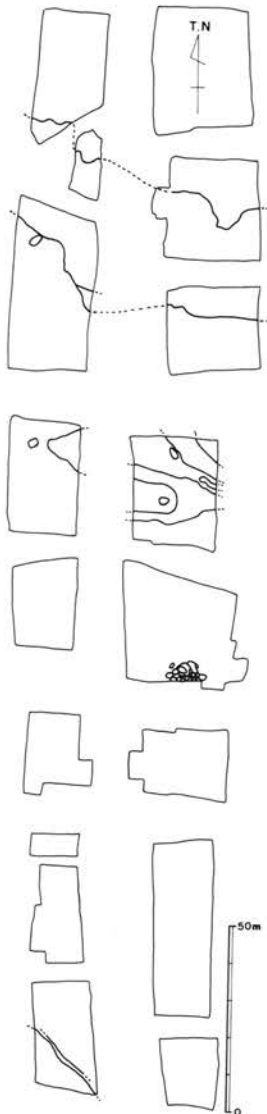
第39図 弥生時代遺構概観図

も自然流路跡 S R 16001 出土のものを除けば、これより北側ではほとんど出土していない。

遺構を確認した調査区は、集落の東端付近にあたると考えられるが、竪穴式住居跡 1 基・溝 3 条・土坑群を確認したにすぎない。竪穴式住居跡を 3 区の西端で検出していることから、集落の中心はさらにこの西側へ広がっていると考える。

弥生時代の溝を 2 条検出したが、溝は集落構造と深くかかわっていたものと考えられる。これらの溝は、微高地の縁辺の窪地部を東西に流れ、その規模・形態から集落の縁辺を画する環濠の可能性が考えられる。また、その周辺で検出した土坑群については、粘土採掘

坑・墳墓などの可能性が指摘されているが、現時点では墳墓の可能性を考えておきたい。



第40図 古墳時代
遺構概観図

(3) 古墳時代

古墳時代の遺構は、Bブロックの 9・15区で前期の溝及び土坑、6区で後期の土坑を検出し、11・16区を中心とする自然流路跡からは古墳時代全般にわたる遺物が出土した。いずれの時期も竪穴式住居跡などは確認していない。

溝及び自然流路跡からは、古墳時代前期後半～中期頃の遺物群が大量に出土し、この時期の土坑も遺存状況は悪いが 1 基確認した。溝と自然流路跡の埋土中の遺物は、西方から流れ込んだ状況であり、Bブロックを中心とする微高地上の、調査地からそれほど離れていない地点に集落跡の存在が想定できる。

後期の土坑群も同じ B ブロックの微高地上の 6 区で検出した。ここは、集落立地に最適な微高地の縁辺に位置しており、奈良時代を中心とする柱穴群を検出しているため、古墳時代後期の遺構はすでに削平を受けた可能性もあろう。特に、これら土坑群は、その立地に加え、ほぼ同一地点に 20 基以上の土坑が重複していること、出土遺物に大形の杯身や双孔円盤などが認められることなどから、集落の隣接地における祭祀的な遺構の可能性が考えられる。したがって、先の古墳時代前期～中期よりも、調査地隣接地に後期の集落跡が想定されるのである。

次に、確認した遺構・遺物、さらに西側に想定される集落跡と、周辺に所在する古墳群との関連を考えてみよう。古墳時代後期の遺構に関連する人々の墓域としては、調査地北方の拝田

古墳群が想定できよう。ところが、古墳時代前期～中期に関しては、現在のところ周辺部に関係するような時期の古墳の存在は確認されていない。拝田丘陵には、場所を特定できないが、地元の人の間では埴輪を持つ古墳が存在するといった話もあり、今後、十分な配慮が必要であろう。

なお、亀岡盆地全域では、弥生時代後期段階から古墳時代にわたって、小規模な集落が激増する時期に相当している。調査例は少ないものの、遺物は多くの遺跡で確認されている。千代川遺跡では、第2～5次調査が行われた遺跡南半部でも、弥生時代後期～古墳時代の遺構・遺物を確認した。したがって、単に調査地の西方ばかりではなく、広範囲な千代川遺跡の幾つかの地点に集落が分布している可能性も指摘できよう。

(4) 奈良・平安時代

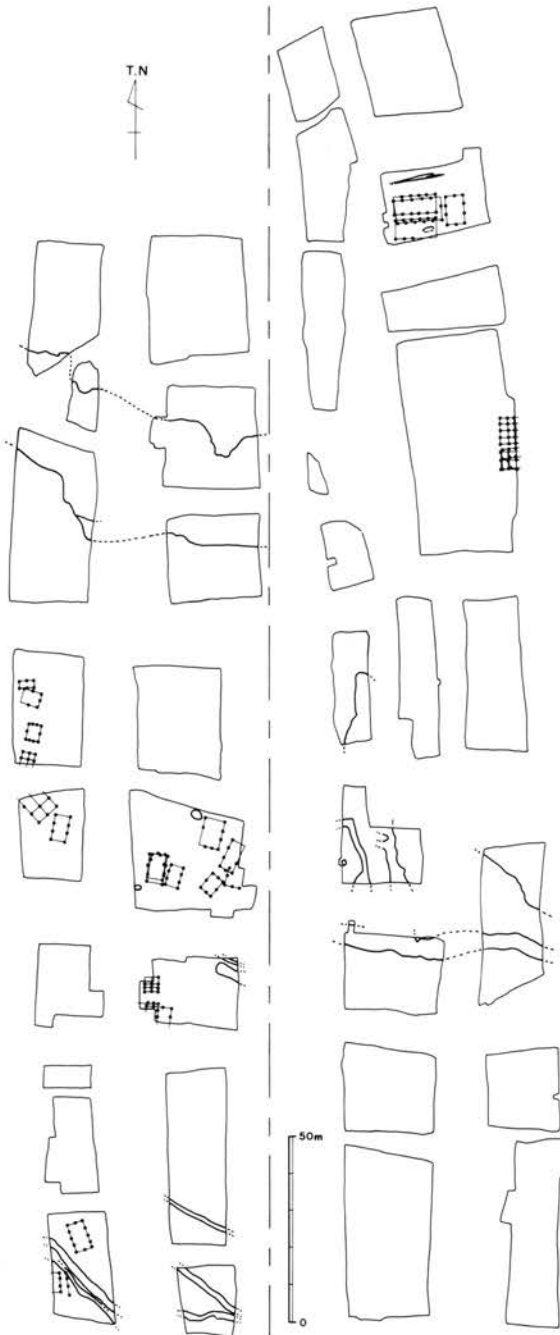
発掘調査地は、丹波国府推定地の中で最も可能性の高いところであり、しかも推定地の西辺上であることからすれば、奈良・平安時代の遺構・遺物に関する調査成果は最も注目を集めるところである。

まず、全体の成果を簡単にまとめると

- 1) Aブロックとした4区を中心として、8世紀中葉の遺物を包含する溝と9世紀後半の掘立柱建物跡1棟を検出した。この建物の主軸は、真北からやや西へ振っている。
- 2) Bブロックとした5・6・14・15区では、7世紀末葉～8世紀後半及び9世紀前半頃の掘立柱建物跡を総数17棟検出した。これらの建物跡は、8世紀中葉頃のもの最も多く、この時期を境に建物の主軸が真北へ近づくものもある。
- 3) Cブロックとした21～23・30区では、国府跡との関連で注目された推定地北辺の溝の延長上で幅約4mの溝を検出した。しかも、埋土内の出土遺物は、8世紀中頃から10世紀の奈良・平安時代にかけてのものであり、これは国府存在時期と重なるため重要な発見と言えるだろう。また、その北側の微高地では、小規模な井戸を検出した。枠板には木扉の廃材の一部が転用されていた。
- 4) Dブロックとした拝田谷部では、平安時代(9～10世紀)の掘立柱建物跡を確認した。ここは、国府推定地外であり、出土遺物として緑釉陶器・墨書土器・石帯などがある。これらから、国府推定地外にも官衙的な建物群が存在したことがわかる。23区では、8世紀後半から9世紀にわたる時期の須恵器・土師器・緑釉陶器・墨書土器が大量に出土しており、ここの西側に官衙的な遺構群の存在が予想される。これは、22区で確認した井戸を合わせるとよりその可能性は高いと言える。

これらの遺構群は、I・II・IV・Vの各微高地上の居住によい場所に建物跡の集中が認

められる。しかし、Bブロックとした5区などは、奈良時代以前には居住に適しておらず、8世紀前半までは耕作地であった場所にまで居住区を拡張している。この周辺で検出した建物跡群の方向が真北を指向し始めるのが、やはりこの居住区の拡張される時期、8世紀



第41図 奈良・平安時代遺構概観図

中葉であることからすれば、この頃に土地利用に関する画期があったことを示していると考えられる。この点に関しては、北西-南東方向に流れる4区の溝(S D 10149)なども、この時期に埋没しており、やはり調査地全体で遺構の方向性の変化がこの頃におこった可能性が考えられよう。

また、建物跡ないしは建物跡群の性格であるが、調査範囲などの制約もあり建物跡を群としてまとまって検出することに十分成功しているとはいえ、細かな検討作業を進めていくには問題が残る。先のBブロックにおける建物跡群の状況は、特に8世紀中葉のものを中心に15棟以上の建物が建てられ、これに伴う倉庫群もその西側に企画的に配置されている可能性が考えられる。そうすると、これらは一般集落ではなく、一定以上の身分を有した者の邸宅の可能性が指摘できる。当地が国府推定地内の一画であることからすれば、これに付随する官衙的な施設の可能性もある。このことは、出土遺物のなかには、「大家」・「小家」をはじめとする8世紀中葉頃の墨

書土器が出土していることから裏付けられる。ただし、建物跡の規模や配置などからすれば、官衛的な施設にしては規模が小さく、建物配置も規則的ではない。したがって、建物の性格としては邸宅の可能性が最も高いと言えよう。

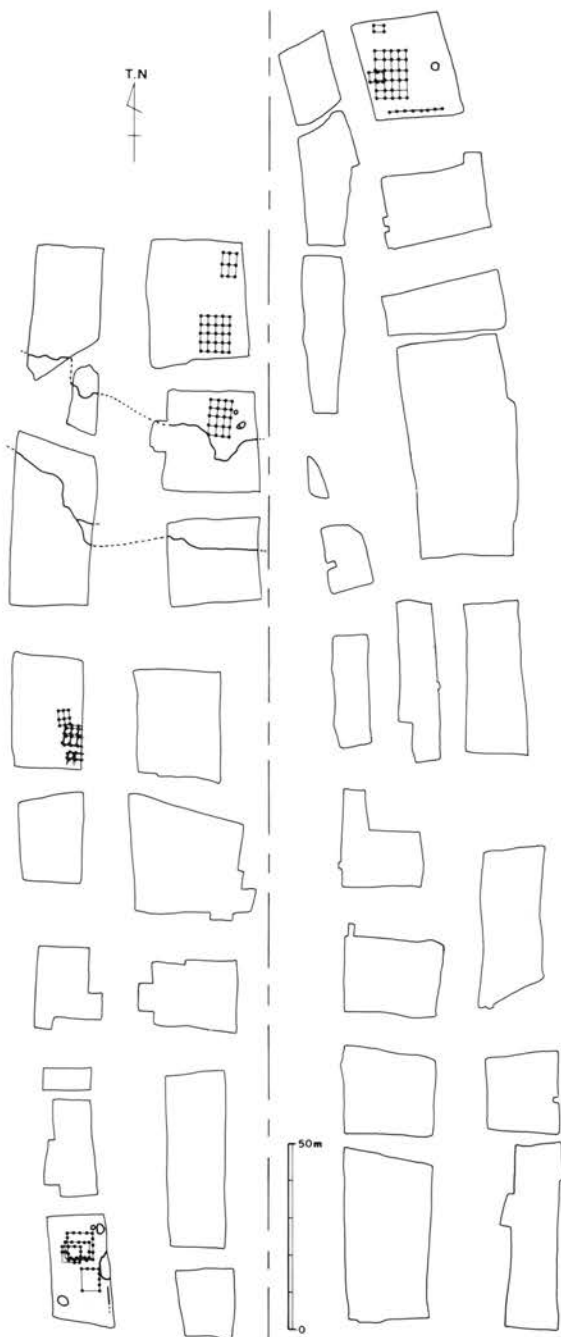
石帯の出土地区は、国府推定地北限の溝以北の30～32区に限られる。とくに、31・32区からは2点ずつ出土しており、32区の掘立柱建物跡に関係するものと考えられる。また、墨書土器は全調査区にわたって100点以上出土している。中でも32区では、この1/3以上が1つの調査区から出土していることになる。墨書土器と同時に緑釉・灰釉などの施釉陶器の優品も伴出しており、遺物の面から見ると、平安時代に限れば32・34区の掘立柱建物跡は官衛的建物の可能性が高いといえよう。

21・30区で検出した溝S D21001についてであるが、これが明らかに人工的に造作されていること、その位置が従来から推定国府域の北限に設けられた堀の痕跡として指摘される窪地の延長上にあたっていること、埋土内から8世紀中頃～9世紀代の遺物が比較的まとまって出土していることなどからすれば、今回の発掘調査によって検出された遺構のなかでは、唯一、従来からの千代川国府説の内容を実証しうる内容をもった遺構と言えよう。ただし、これが機能していた時期が問題で、溝内から出土した遺物からは9世紀頃の遺物までが出土するにとどまるようである。無論、細かな時期については検討できないのが現状である。ただ、先の拝田谷部の遺構群が、溝に区画された地域を越えた部位にあったと理解するより、溝の機能がほぼ消滅した後に、設けられたものと理解するには十分な材料となろう。

このように、今回の調査で検出した遺構の中心は、Bブロックの15区を中心とする7世紀末～8世紀末頃の建物跡群と、Cブロックの21・30区で検出した溝、Dブロックの32・34区の9～10世紀頃の建物跡群である。これらの遺構は、千代川国府説と照らし合せて考察すれば、国府説を肯定しうるものと、疑問を投げかけるものに分かれる。特に、方六町の国府域を想定した場合、今回の調査地がその西辺上に相当することを立証する根拠は調査上の制約もあり全く認められなかった。北限の溝の可能性のある溝S D21001は、この想定域を越え、さらに西へのびている状況であった。方六町域が国府として整備されていたかどうかという問題もあり、国府推定地内の遺構の状況は今後の課題と言えよう。遺物では9世紀中葉の紀年を持つ木簡や石帯の出土などから、一般集落とは考えられず官衛的遺構と捉えることができる。そうして考えてくると、従来から小字名に現されていると言われるように、国府の可能性がやはり高いといえる。国府推定地西辺の調査ということもあり、今後の発掘調査に課題を残すものと言えよう。

(5) 鎌倉時代

調査地内では、平安時代の10世紀の遺構以後、12世紀まで遺構のみでなく遺物の面でも空白の時期が生ずる。10世紀の掘立柱建物跡に続いて確認されるのは、A～D各ブロック



第42図 鎌倉時代遺構概観図

の微高地上で確認した12世紀～13世紀前半の掘立柱建物跡・井戸跡である。なお、便宜上12世紀後半の遺構も鎌倉時代にいている。

鎌倉時代の掘立柱建物跡は、Aブロックで4棟、Bブロックで5棟(2棟は建て替え)、Cブロックで3棟、Dブロックで3棟を確認した。Aブロックのみ、同一時期の建物の単位を抽出することは困難であるが、他の3ブロックでは規模の大きな建物1ないし2棟と小形の建物1棟がセットとなり一単位を構成している状況を確認した。この状況が当時の集落構造上、どういった意味を持つのか、周辺での良好な資料が少なく、明確にはなしがたい。ただ、北金岐遺跡で確認された13世紀頃の建物跡群を見た場合、2間×3間程度の建物2～3棟がまとまって、これが幾つか集合し、その中に中心の大形の建物が1～2棟存在し構成するといったパターンが復原されている。これをもとに今回の検出遺構を評価したとすると、4間×4間の規模を持つ総柱建物跡の中心的な建物跡を少なくとも3か所で確認したこととなり、この周

辺に小形の建物群がグループを構成しつつ広がっていることが想定できる。しかし、今回小形の建物跡群の広がりには確認できていないため、北金岐遺跡とは集落構造自体が異なっていた可能性も十分考えられる。この場合、一般の集落で中心的な立場になりうる身分をもった人々のみが、立地に適した場所を選んで居住していたこととなる。例えば、11区から出土した白磁の合子などは、この点においても注目に値しよう。

このように、今回の調査地内での成果のみでは、検出遺構の十分な評価はしがたい。今後の周辺部での調査成果の蓄積をまって改めて検討を行っていく必要がある。ただ、こういった建物跡の検出例が少ない中、当時の社会構造を知る上で貴重な成果を得たと言えるであろう。

(6) 鎌倉時代以降

12～13世紀の建物群が廃棄されて以降は、当地一帯は耕作地へと変化した。ここで問題となるのは、亀岡盆地のほぼ全域で確認される条里制との関係である。当該地が丹波国府跡であったとすれば、条里制とは異なった要因で現在認められる1町四方の土地区画が成立したことになる。今回の調査地で、条里制地割とされる1町四方の区画が確認される場所では、発掘調査で検出される耕作の痕跡が、鎌倉時代以降まで下ってしまうといった状況は、近年徐々に類例が増加しつつある。具体的には、現在の認められる土地区画のなかで、整った半折型や長地型とされる条里制地割の基本構造にのっとりたところは別にして、大まかな1町四方の区画はあっても、その内部の区画が非常に乱れている場所では、耕作地へと造成されたのは鎌倉時代以降に下る例が多いためである。調査地で確認される耕作の痕跡とされる素掘り溝群は、その方向性からみて条里制地割にのっとりた可能性が高い。こういった例の増加は、条里制の研究を進める際に、方形の土地区画が認められても、それが何時の時期に形成されたものなのかといった点を十分確認すべきであることを警告している。また、現在条里制地割としている土地区画の多くが鎌倉時代以降(主に13世紀末から14世紀初頭頃)に施工されたものであり、しかもこれが水田に伴う区画ではなく畑作にともなって設けられたところから出発している点も十分に認識すべきであろう。

(森下 衛)

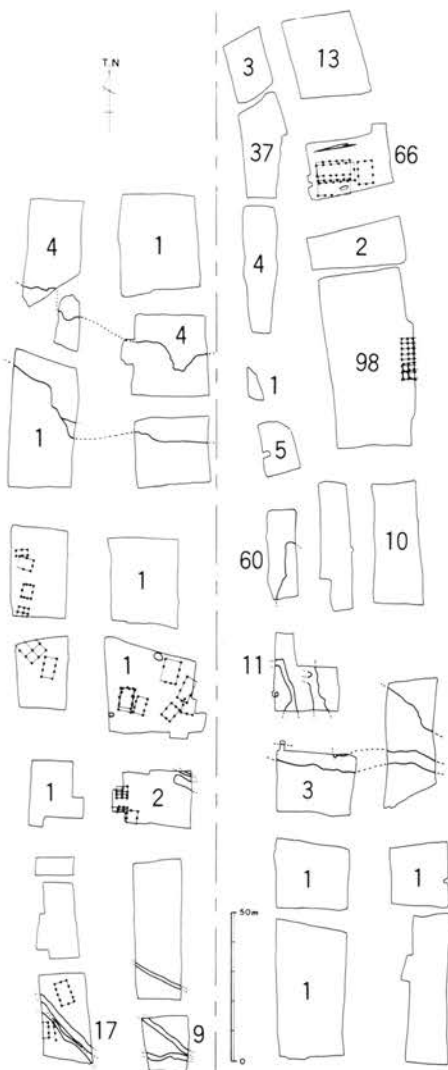
第2節 緑釉陶器

昭和59年度から平成元年度まで丹波国府推定地として調査を行った千代川遺跡では、国府推定地の西端を帯状にかすめる延長約500m・幅約60mの範囲に限られたが、自然流路跡や遺物包含層内より大量の緑釉陶器が出土した。出土地点は、調査地のほぼ全域に認められるが、推定国府北限域付近及び西から東に流れ込む自然流路跡に集中している(第43図)。このことは、推定国府北限の溝以北で検出した石帯を伴う大形建物跡(S B 32001)からの流入及び、推定国府城北西の官衛的施設からの流入と考えられる。

千代川遺跡の緑釉陶器は、総数357点の施釉陶器(緑釉陶器348点・灰釉陶器9点)が出土

している。緑釉陶器の大半は碗皿類で、その他の器形は少ない。高台を基準としてその点数を分けると、高台部136点・口縁部91点・体部106点・不明24点となる。

近年の研究成果によって、緑釉陶器は成形・焼成技法や形態・胎土・釉薬の違いで、一定の産地別時期編年が可能となった。前川 要氏は、東海系(猿投窯・尾北窯・美濃窯)・京都系(洛北窯・洛西窯・篠窯)・近江系の緑釉陶器を概観し、碗皿の特徴から、東海系では「高台は貼り付け高台を有し、ヘラ磨き調整を器面に微細に施し、一次焼成を直接重ね焼きで行い、二次焼成を三又トチンを使用し重ね焼で行い、胎土が硬質もの」、京都系は「高台は削りだし高台を有し、ヘラ磨き調整を器面に施し、一次焼成を直接重ね焼きで行い、二次焼成を原則的に三又トチンを使用せず重ね焼で行い、胎土が硬質で濃緑色釉もの」、近江系では「高台は貼り付け高台を有し、ヘラ磨き調整は器面に施さず、一次焼成を直接重ね焼きで行い厚く釉をかけ、二次焼成を大きい三又トチンを使用し重ね焼で行い、濃緑色釉のもの」としている。この観点から、



第43図 施釉陶器出土分布図

千代川遺跡出土の緑釉陶器をみると、比較的識別の容易な底部の形態・成形から分類して、京都系90%・東海系5.5%・近江系4.5%となる。また、口縁部・体部片でも胎土・釉薬の施釉から、京都系が同等の数値を示す。

京都周辺の緑釉陶器生産は、市北部の岩倉を中心とした、洛北窯跡群・市西部の大原野を中心とした洛西窯跡群・亀岡市篠町に所在する篠窯跡群に大別される。

洛北窯跡群は、平安京造営に伴い官窯として築かれた栗栖野窯跡群があり、栗栖野13号窯跡からは三彩釉とともに椀・皿・火舎などの緑釉陶器が出土し、9世紀前葉から生産が始まり、妙満寺境内窯跡・本山窯跡が9世紀後半、栗栖野3号窯跡が10世紀初頭まで続く各窯跡が確認されている。洛西窯跡群では、石作窯跡から印刻花文・輪花を持つ9世紀後半の椀・皿や香炉・壺・唾壺等が出土し、小塩窯跡群では10世紀中頃まで生産されている。篠窯跡群では、前山窯跡より、五輪花を持つ椀・皿が出土し、続いて、黒岩窯跡へと移行する。10世紀中葉期の生産と考えられる。

このように、京都近郊の緑釉陶器生産は、9世紀中葉に洛北窯跡群が、10世紀を境として洛西窯跡群が、10世紀中葉に篠窯跡群がそれぞれピーク時を向かえ移行したものと考えられている。京都近郊産の緑釉陶器の特徴は、9世紀前半期では、平底高台で胎土の軟質のものが見られるが、概して高台を蛇の目・輪状高台に削り出し、緑釉をハケで施釉し、胎土が硬質のものといえる。石作窯跡では、三又トチンを用いて重ね焼きしているが、他は直接重ね焼きを行っている。緑釉陶器は、10世紀前半から技法の省略や粗雑化が顕著になり、一部の優品を除いて下級貴族にまでその需要が移ったと考えられる。

千代川遺跡では、出土地点が国府北限の溝付近の包含層及び自然流路跡に集中してはいるが、一括資料とするには出土地区が広がり信憑性に欠けるため、ここでは平安京跡及び平安京近郊の官衙跡で出土する緑釉陶器の相対的な傾向として捉えてみたい。

平尾政幸氏は、平安京右京三条三坊(三坊)の比較的大きな宅地割りを占める貴族の邸宅跡から出土した9世紀代の緑釉陶器を底部の形態から細分し、土坑及び包含層の一括資料を時期的に器種・器形の割合を算出し、その消長変化を捉えられた。付表9施釉陶器の底部の形態は、千代川遺跡出土緑釉陶器の識別可能な高台110点について平安京右京三条三坊の形態分類に準拠して作成したものである。右京三条三坊十町地区包含層(9世紀中頃)では、糸切り底5.1%、削り出し高台83.7%、貼り付け高台11.2%であるのに対し、千代川遺跡では、糸切り底4.5%、削り出し高台85.5%、貼り付け高台10%となり、ほぼ近似した傾向を示す。

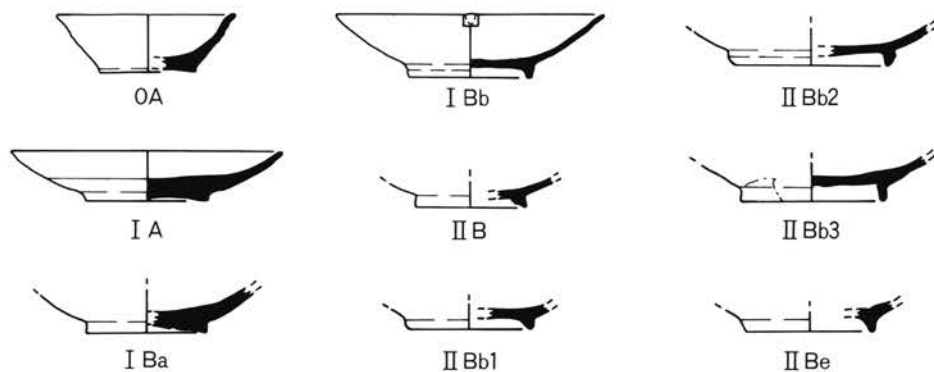
今回の調査で判明したことは、東海猿投産や洛西石作産の印刻花文が施された製品がない点、丹波国府にあって丹波篠窯産の製品が比較的少ない点などがあげられる。

千代川遺跡で出土した15点の灰釉陶器は、猿投黒笹14・90号窯式の9世紀代に位置する。律令期の国府は、8世紀代に整備され、10世紀中頃までに多くは廃滅している。今回の調査地では、国府推定地西端をかすめることから、今後国庁域の調査が期待される。

(水谷壽克)

付表9 施釉陶器の底部形態

	個体数	比率	%	備考
OA	5	100		糸切り痕 円盤状高台
小計	5	100	4.5	
IA	34	36.2		削り出し 円盤状高台
IBa	10	10.6		削り出し 蛇の目高台
IBb	50	53.2		削り出し 輪状高台
小計	94	100	85.5	
II B	5	45.4		貼り付け 蛇の目高台
II Bb1	2	18.2		貼り付け 輪高台 断面隅丸方形
II Bb2	1	9.1		貼り付け 輪高台 断面丸味を帯びる
II Bb3	2	18.2		貼り付け 輪高台 高台が比較的高く 断面隅丸方形
II Be	1	9.1		貼り付け 輪高台 断面三角形
小計	11	100	10	
総計	110		100	



第44図 緑釉陶器底部実測図

第3節 墨書土器

今回の調査では、総数にして約100点の墨書土器が出土した。ここでは、出土地点と文字及びその年代について簡単にまとめておく。

まず、墨書土器の分布を見てみる。調査区ごとの出土点数を付表10に示した。これから、墨書土器はまんべんなく出土しているのではなく、建物跡を検出した調査区を中心に集中して出土していることがわかる。15次調査における32区から出土した墨書土器は、量的に多く、全体の約40%を占める。墨書土器の年代は、平安時代で、10世紀前後のものが多く、34区でも平安時代の建物跡を確認しており、ここからは墨書土器が13点出土した。この2つの調査区出土の墨書土器を合計すると50点を越え、全体の半数以上を占める。したがって、墨書土器全体から見ると、32～34区における墨書土器の集中は注目すべきものがある。また施釉陶器の出土量も同様で、32～34区では優品の出土が目立つ。こうしたことから考えると、拜田の谷部は、国府推定地の方六町からはずれるけれども、平安時代には国府に関連する施設が存在した可能性が高いと言えよう。

墨書土器を遺構別に見ると、奈良時代では、22区で確認した井戸出土の一括資料がある。書かれた文字は、「寺カ」と「大長」である。次に、推定国府北限溝のS D 21001出土のものがある。文字は、「長福」「萬」があり、判読できないものが4点ある。これ以外では、34区の柱穴から出土したものが目立つ。

次に、図版第63～65をもとに墨書土器の文字について考えてみる。1～3は「大長」である。「大長」は、23区及び11区出土の計3点で、すべて奈良時代と考えられる。「□長」は2点出土しているが、出土した調査区は11・23区であり、これも「大長」の可能性はある。「大長」の意味は不明であるが、身分やこれに類するものを表わす可能性も考えられる。22・23区と隣接して出土したものは、両調査区の西側に存在するであろう遺構の性格を表わすものとして興味をもたれる。「大家」は、「小家」と書かれたものとともに7区で2点出土している。これらは、7区で検出した掘立柱建物跡の性格を考える上で参考になろう。

今回の調査で最も多く出土したものは、「福」に関するものである。判読できるものには、「福敷」「長福」「平福」がある。「長福」をはじめ、福の字を持つものは、一般的に吉祥句だと考えられる。中には人名の可能性を持つものの存在も想定されるが、

付表10 墨書土器
出土地区一覧表
(墨痕のみ含む)

地区	個数	地区	個数
1	1	19	1
2		20	
3		21	3
4	1	22	4
5	10	23	4
6	2	24	
7	7	25	
8		26	
9		27	
10		28	
11	5	29	
12	1	30	3
13	1	31	1
14	2	32	39
15	1	33	1
16		34	13
17		35	
18		総計	100

付表11 出土墨書土器一覽表

番号	調査区	文字	器種	部位	備考
1	23	大長	杯身	底部	
2	22	大長	杯身	底部	井戸 S E 22001
3	11	大長	皿	底部	
4	7	大家	杯身	底部	
5	11	大	杯身	底部	
6	32	大□	杯身	底部	
7	32	大□	杯身	底部	
8	32	大□	杯身	底部	
9	11	□長	杯身	底部	
10	23	□長	杯蓋	天井部	S D 21001
11	7	小家	杯身	底部	
12	7	小家	杯身	底部	
13	7	福敷	杯身	底部	
14	7	□□□□富□	杯身	底部	
15	7	□敷	杯身	底部	
16	32	福□	碗	底部	
17	32	□福	緑釉碗	底部	
18	32	□福	緑釉碗	底部	
19	30	長福	杯蓋	天井部	S D 21001
20	5	福カ	杯身	底部	
21	32	福□	杯身	底部	
22	32	福	碗	底部	
23	33	福カ	杯身	底部	
24	32	福カ	碗	底部	
25	11	平貴	杯身	底部	
26	5	平福	杯身	底部	
27	32	□平□	杯身	体部外面	
28	7	平	杯身	底部	
29	7	平	杯身	底部	
30	5	平	杯身	底部	
31	5	平福	杯身	底部	
32	32	平	杯蓋	天井部	
33	5	福	杯蓋	天井部	
34	32	福カ	杯身	底部	
35	32	廣	杯身	底部	
36	32	廣	杯身	底部	
37	32	廣	杯身	底部	
38	34	廣□	杯身	底部	柱穴
39	32	□	杯蓋	天井部	
40	32	井	杯蓋	天井部	
41	30	□	杯蓋	天井部	S D 21001
42	32	東万呂	碗	体部外面	
43	5	吉	杯蓋	天井部	
44	21	萬	杯身	底部	S D 21001
45	22	寺カ	杯身	底部	S E 22001
46	34	司	杯身	底部	柱穴
47	11	西	杯身	底部	
48	34	後	杯身	底部	柱穴
49	11	□	杯身	底部	
50	34	□人	杯身	底部	
51	21	□	杯身	底部	S D 21001
52	5	□	杯身	底部	
53	32	厨カ	杯身	底部	
54	32	□□	杯身	底部	
55	32	□	杯身	底部	
56	5	□	杯身	底部	
57	32	□	杯身	底部	
58	32	□	杯身	底部	
59	30	□	杯身	底部	S D 21001
60	34	□□	杯身	底部	
61	5	□	杯身	底部	
62	34	□	土師器杯	底部	柱穴
63	34	□□	灰釉碗	底部	
64	34	□□	灰釉碗	底部	
65	32	□	灰釉碗	底部	
66	32	□	灰釉碗	底部	
67	32	□	杯身	底部	
68	32	□	杯身	底部	
69	34	□	灰釉碗	底部	
70	32	□	杯身	底部	
71	32	□	杯身	底部	
72	32	□	灰釉碗	底部	
73	32	□	杯身	底部	
74	34	□	杯身	底部	
75	32	□	杯身	底部	
76	21	□	杯身	底部	S D 21001
77	32	□	杯身	底部	筆ならしの跡
78	32	□	杯身	底部	
79	34	□	杯身	底部	
80	5	□	杯身	底部	
81	32	□	杯身	底部	
82	32	□	杯身	底部	

断定しうるものはなかった。

14は、「□□□□富□」と6文字が想定できる。墨痕もあざやかであるが、破片のため、これ以上は判読できない。35～38は「廣」である。32区から出土した3点(35～37)は、いずれも杯の底部外面に大きく1文字だけ墨書する。「廣」の意味は不明であるが、この3点は書体も似ており興味深い。40は蓋で、天井部に「井」と書く。「井」は、他の遺跡例から考えると、井戸の祭祀に関するものが多い。これは、32区の包含層中の出土で、井戸から出土したものではないが、調査区外の32区の東側に井戸の存在する可能性も指摘できよう。42は、体部側面に「東万呂」と書く。今回の資料の中では、人名が判明する貴重な資料である。43は「吉」で、吉祥句であろう。45は「寺カ」である。22区の奈良時代の井戸跡から出土した。調査区付近では、桑寺廃寺が存在するが、これとの関連も考えられる。46は「司」である。官職に関するものであろうか。47は「西」、48は「後」である。50は「□人」である。42の「東万呂」と同じように人名であろうか。「官人」・「上人」のように、身分を示すものの可能性もある。53は「厨カ」である。32区から出土した。「厨」は、官厨・城厨のように広く施設全体を示す場合と、厨舎などのように一建物をさす場合があるので、注意を要しよう。55～82は破片のため文字が判読できず、一部を認めるのみである。77は、文字を書く際に筆先を整えたもので、墨痕があざやかである。

墨書土器を器種別に見ると、須恵器が圧倒的に多く、土師器は62などわずか数点を数えるにすぎない。拝田の谷部の32・34区を中心に、緑釉・灰釉陶器もまとめて出土しているが、文字が判読できるものは、緑釉陶器の17・18くらいである。

墨書土器の中で、官衙に関するものは、国府推定地ながら非常に少ない。わずかに4の「大家」、11・12の「小家」、53の「厨カ」などがあるにすぎない。これらは、官衙というよりも、建物・施設を表わすものと考えたほうが適切である。「大家」・「小家」も、建物の性格を表わすもので、直接官衙に関係するものではない。したがって、官衙関係の墨書土器はきわめて少ないといえる。また、官職や身分を表わすものも、極めて少なく、わずかに「大長」にその可能性を認めるだけである。丹波国府推定地内には、桑寺廃寺も含んでいるが、寺院・仏教に関するものは、「寺カ」だけである。

時期的には、32・34区で出土した墨書土器が全体の半数を占めるため、10世紀以降のものが一番多い。破片資料のため、時期判定が困難なものが多いが、Bブロック出土のものは、8世紀中葉を中心とする奈良時代に入るものが多い。調査地は、丹波国府推定地の西辺であるが、墨書土器の多さから考えても、官衙遺構に関係するものと思われる。

(鶴島三壽)

第4節 丹波国府の移転—「丹波国吉富荘絵図写」をめぐる—

はじめに

初期丹波国府は、主として歴史地理学的観点から千代川町拝田に比定する説がもっとも有力である。それから後、12世紀代には、船井郡八木町屋賀に移転したと考えられている。しかし、八木町屋賀に比定するには問題点も多く残っているように思われる。したがって丹波国府の移転問題を考える上で、常に提示される「丹波国吉富荘絵図写」を取り上げ、比定地をめぐる問題を再考してみたい。

1. 吉富荘と絵図の製作

吉富荘は、現在の京都府北桑田郡京北町にあった神護寺領の荘園で、その範囲は、丹波国桑田郡から船井郡にわたる広大なものである。吉富荘の成立は、もともと源義朝の私領であった宇津郷に、藤原成親が、平安時代後期に神吉・八代・熊田・志摩・刑部等郷を加えて、「一円之庄号」をたて後白河院の御願寺法華堂に寄進したことに始まると言う。吉富荘の成立、写しの作られた理由などは、「文覚四十五箇条起請文」「小野細川御作手重訴状」「神護寺文書」等をはじめとする文献史料によって明らかである。それによれば、吉富荘絵図は、承安4(1174)年に荘園の境界である勝示を打ったときに作成されたものと言われる。したがって、絵図製作の動機から、当然吉富荘全域を描いたもので、現存するものはその写しである。写しの製作時期は、戦国時代か江戸初期、または江戸時代後期と揺れている^(iE8)。どちらにしても、その時期まで写しを製作する必要があったことが重要である。それは、吉富荘と小野細川との荘堺相論である。そのため、吉富荘民に承安4年の吉富荘絵図の写しを提出させていることは「小野細川御作手重訴状」(神護寺文書145号)で明らかである。史料では、堺相論は建長2(1250)年から応永19(1412)年まで継続しているが、実際はずっと後代(江戸初期)まで継続するのではないかと仲村氏は推測している。吉富荘に限らず、土地問題の領有をめぐるは、古文書、絵図などが自分の正当性を証明する手段として使われる。したがって、吉富荘絵図の写しの製作の動機は、堺相論が起きた際の正当性を証明するためである。そのためには、承安4年と古く作成された由緒ある絵図は絶大な効果があったであろうし、それゆえ、自らの正当性を証明する有力な根拠とするため、堺相論のたびに製作し続ける必要があった。

2. 吉富荘絵図の問題点

ここで、絵図の問題に移ろう。この絵図に関する論考は極めて少なく、仲村^(iE9) 研氏や展

覧会の際の^(註10)図録の解説に尽きる。まず、仲村氏の観察した絵図の特徴を箇条書きに挙げる。

- 1 吉富荘自体よりも荘域外の方に絵図の重点が置かれている。
- 2 在家の有様が藁葺き、板葺き、上床の建物というようにに区別して書いているのは名主、富豪の屋敷を重点的に描いたものである。
- 3 国衙領・荘園を囲む山々の景観と標高は、現在の地図と比較しても正確である。

この1に関しては、仲村氏は、絵図の裏書に「在庁辺 後度」とあることから、承安4年直後に書き加えられた可能性を指摘している。吉富荘は宇津を中心に神吉・八代・熊田・志摩・刑部郷から構成されるが、絵図では、志摩・刑部が榜示外にあり、国衙領と入り組んで存在する。その部分を描くため大きなスペースを割かなくてはならなかったとす

るが、吉富荘域外の部分が描かれる理由については後考に待ちたいとしている。

2に関しては、考古学的に見ても重要である。どのクラスの人が住んでいた屋敷かは今後の課題であるが、こういった点から考古学における絵図の利用は重要なものと言えよう。

3は、正確に描かれているだけに、絵図を単なる絵図としてのみならず、歴史地理学的、考古学的な意味も含めた資料としての貴重さがある。

そこで、絵図に書かれる地名と現在の地名との対比などを含めて、「国八庁」の所在地を推定してみよう。

付表12 地名比較表

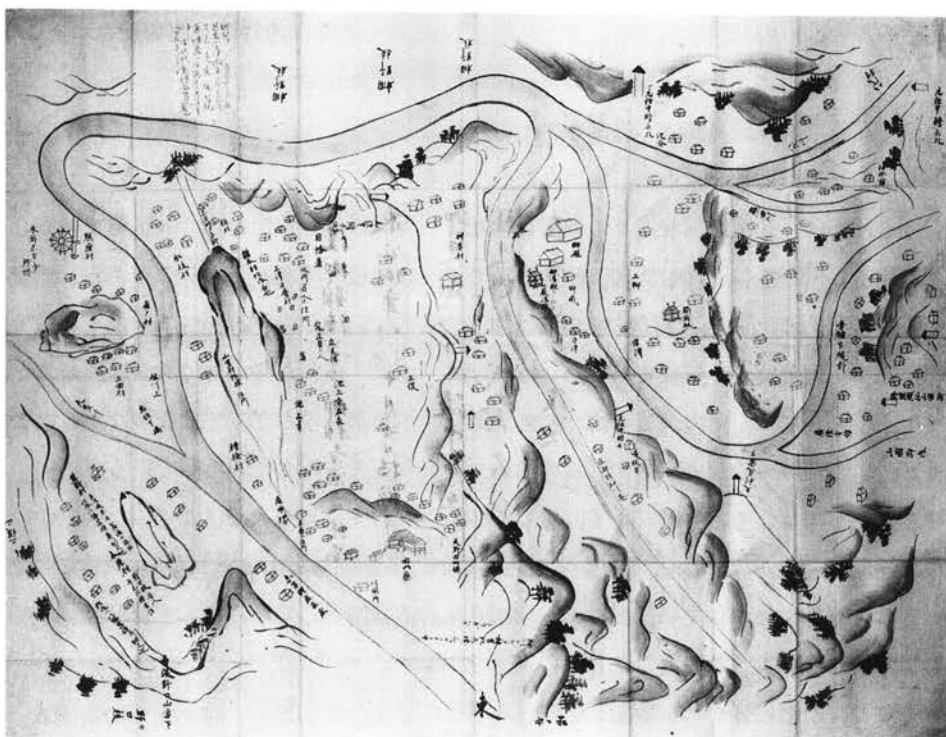
絵図地名	現地名
船枝村	船枝
熊厘村	熊原
榎村	
諸木村	諸木山
上津日量村	
氷所	氷所
因幡鼻	岩鼻?
池上寺	池上
山室村	山室
糟搔村	粕掛?
雀部村	雀部
鳥羽下鴨	鳥羽
草野村	宇佐野
木原村	木原
二俣山	二又(山)
木前	木崎
志万郷	
川関	川関
美野田	美濃田
コウガハナ	

3. 国八庁の位置

吉富荘絵図は、1923年、藤田元春が『京都府北桑田郡誌』編纂の際にはその存在が知られている。^(註11)魚澄惣五郎や八木茂美などは、この絵図を根拠に、丹波国府は現在の船井郡八木町屋賀に所在したと考^(註12)えた。国府の所在地に関しては、先学によって学説も整理されているが、近年、亀岡市千代川町に初期国府を想定して、その後屋賀に移動したと考える説が有力である。少なくとも、この絵図が原本の承安4年(1174)に作成された絵図の原初的な形が踏襲されているという前提に立てば、平安末期の12世紀後半には、国府は絵図の地点に存在したことになる。

絵図に描かれた国八庁が、屋賀に比定されてきた理由をまとめてみると次のようになる。

- 1 絵図に書かれた付近で、国府に関係するような地名を探すと「屋賀」というふさわしい地名がある。
- 2 屋賀には、「宗神社」と呼ばれる神社も存在し、これも



第45図 吉富荘絵図写(真継正次氏所蔵、京都府立丹後郷土資料館撮影)

国府に関連するものである。

3 屋賀地区には、「国府」姓が多い。

という3点に尽きる。屋賀地区には「国府」そのものの小字が残っている。この国府の小字周辺には、焼石・焼香・屋賀寺・府土垣などがある。これら寺院や「府」がつく小字名から、これまでは国府が存在したと考えられてきた。しかし、上に挙げたような理由から、屋賀を国府所在地と考えてよいのであろうか。再考すべき点はないのであろうか。

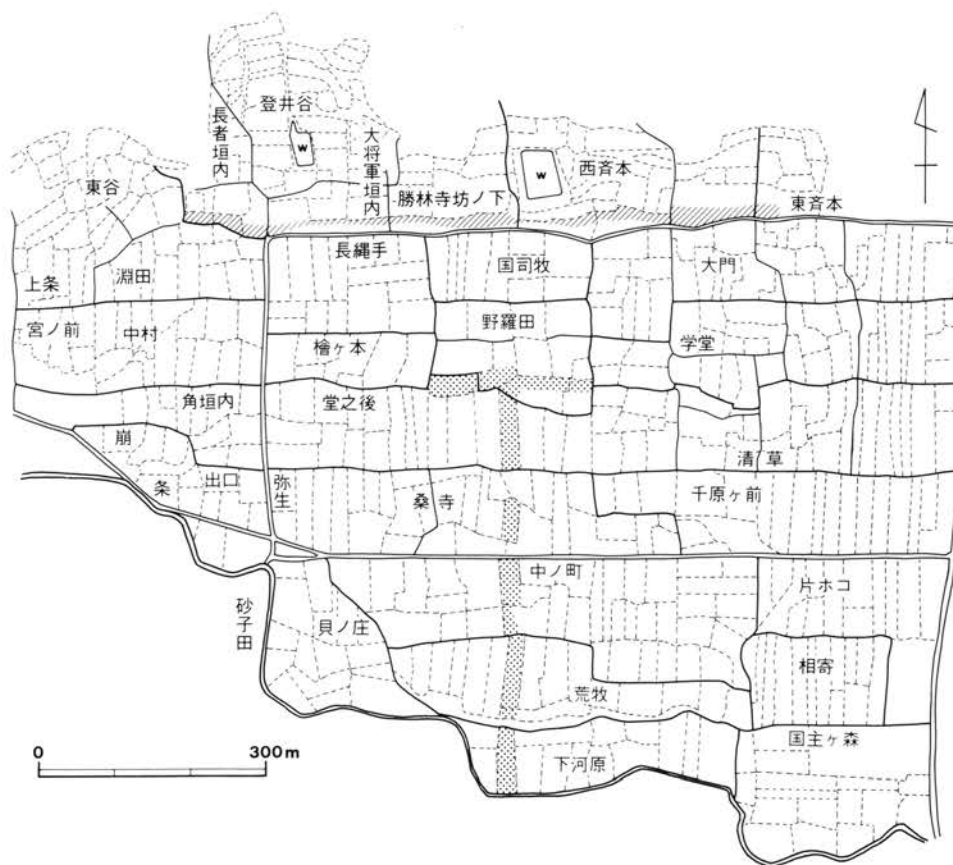
筆者は、承安4年時点での国府をこれまでのように屋賀に比定することは、もう少し慎重であるべきだと考えている。理由は、以下のような点からである。

まず、絵図に書かれた地点を検証してみよう。吉富荘絵図の場合、絵図の地名と現在の地名の検討が比較的容易である。そこで、絵図と地図をあげてみた(第45・46図)。絵図に記載される地名と現地名を比定したのが付表12である。このように、絵図と地図を比較してみても、「吉富荘絵図写」は、かなり正確に描かれており、十分絵図に書かれた建物の位置を現在の地形に比定していく作業は可能であることがわかる。絵図に出てくる地名と現在の地名を比較してみても、その位置は若干のずれはあるものの、全体的に見てその位置関係の正しさは肯定されてよい。



第46図 吉富荘比定図(1/100,000)

さて、問題となる国八庁の位置を比定する上でのポイントは、「国八庁」の背後の山である。この山も正しく描かれていることは、第46図のとおりである。そうして考えると、山の形、周辺の地名との対比から、「国八庁」と書かれた部分を屋賀に比定するのは、図像の上からもかなり無理があることは否めないであろう。絵図に見られる地点は山の南側であり、山の西側ではない。西側なら現在の屋賀であるが、南側は、亀岡市馬路町池尻である。絵図は、デフォルメされて描かれるのが常であるので、方向の違いはかまわないという意見があるかもしれないが、それはこの絵図全体の構成から考えても無理であろう。絵図から「国八庁」の位置を比定した場合、池尻地区が妥当であるように思われる。



第47図 丹波国府推定地小字図(1/10,000)

(高橋誠一氏1985を参考に作成)

次に、歴史地理学的に考えてみよう。

亀岡市の条里に関しては、足利健亮・高橋誠一両氏らが検討を試みている。^(註13) 足利氏は亀岡盆地の条里に関する基礎作業を行ったが、足利氏の作業をもとに、山の南側に位置する池尻を考える。これまで国府に推定されていた屋賀は、大堰川の氾濫原に隣接し、旧河道の存在から条里もかなり乱れている。したがって、屋賀は大堰川の氾濫をたびたび受けていたと思われる。それに比べ、池尻にはそのような危険性はない。また、足利氏によれば、国分寺の北方から北西方面に、国分寺の設立前に早くも造られていたと考えられる計画古道が確認できるという。この計画古道をさらに北にのばしていくと第48図の又点を指向する。この点は、現在馬路町馬路を南北に走る道路とぶつかるが、この道路は条里の方向に沿って南北を指向している。こういった点からも、池尻は注目するに価する地区といえる。

第3番目の点として、文献による検討がある。

丹波国府は、国分寺の西北約4kmの船井郡八木町北屋賀に、「国府」という小字名が

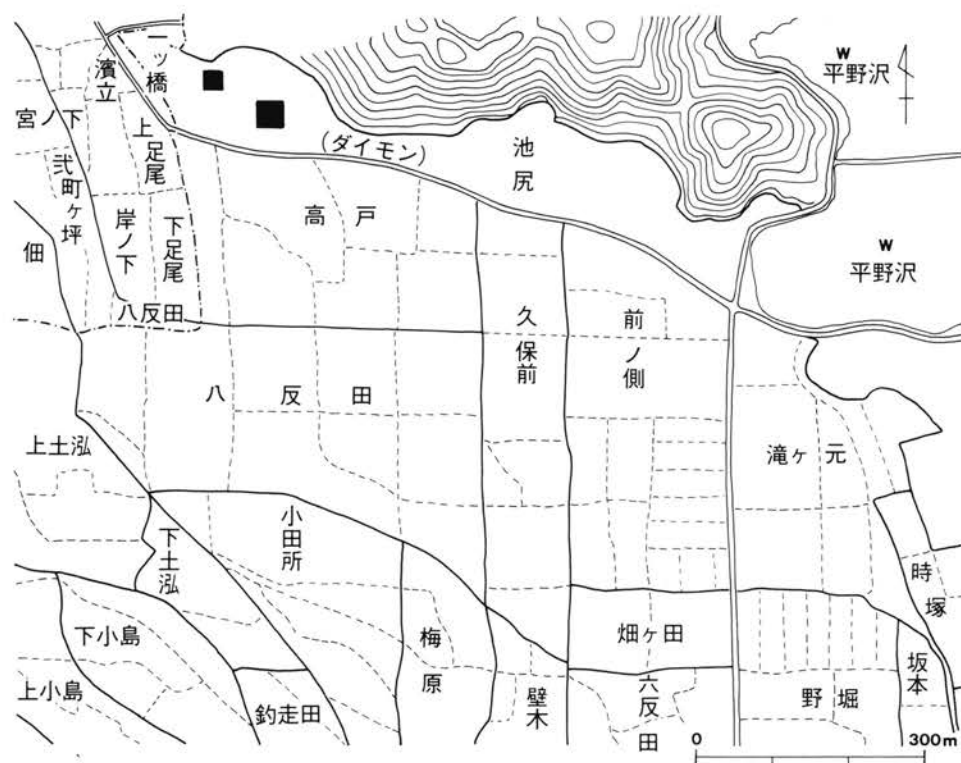


第48図 屋賀・池尻周辺条里図(足利健亮氏1987)

残り、また、この屋賀には宗神社という、総社と思われる神社も存在することから、丹波国府の最も有力な候補地であった。ただ、すべての文献は桑田郡に所在すると記載するので、亀岡市内の保津町案察使・千歳町・三宅町などに所在地を求める説が提出されてきたという経緯がある。しかし、仲村 研氏は、小字名の研究を中心に、丹波国府は初め亀岡市千代川町にあって、平安時代末期になって屋賀に移動したと考えた。

以上のような、研究史を再確認した上で、文献記載を考えてみることにする。丹波国府の所在地は、『和名抄』『延喜式』をはじめとする諸々の文献記載には、すべて桑田郡と書かれている。諸々の文献による丹波国府所在地は、付表13のとおりである。

以上の文献の編纂された年代から考えると、国府が屋賀に移転した平安時代末の段階ではまだ、桑田郡に存在したことになる。したがって、これら文献史料によるかぎりこれまでの比定はおかしいことになる。もちろん、当時の郡界がどこであったかは不明であるが、これまでは、屋賀・国府という地名を主な根拠に、文献記載の吟味はなされてこなかったように思われる。これら文献記載は、丹波国のみならず、全国の国府所在地比定の有力な



第49図 池尻地区小字図
(亀岡市馬路町は場整備事業平面図をもとに作成)

根拠とされている。その中で、丹波国の国府所在地のみが、文献記載とは異なった船井郡に比定するのは安易にすぎよう。文献記載を尊重するかぎり、桑田郡に所在地を探すべきである。平安時代末、国府が移動したと考えて、それが絵図に描かれた「国八庁」ならば、桑田郡にも属し、山の南側の池尻周辺が妥当であり、文献記載からも問題がない。

以上挙げたように、絵図・歴史地理・文献といった3方面から考えるかぎり、これまでのように安易に屋賀を移動先と考えるのは、やはり問題が残るであろう。

さて、絵図に戻ると、国八庁のとなりに、「在庁等住所」と書かれているところがあるが、地図と照らしあわせると、ここが現在の屋賀に相当する。例えば、平安時代の終わりには、国府は絵図に描かれるように山の南側にあつて、その後絵図に描くようにその西側に住んでいた役人の居宅などが中世の国府へと変化した可能性はないだろうか。そうして考えると、これまで国府の理由とされてきた3つの理由も矛盾することなく、合理的に解釈できる。屋賀地区は、道路が屈曲し、土塁跡と考えられる竹藪と堀状の窪地に囲まれていることから、典型的な中世防御集落だといわれている。したがって、筆者は千代川国府からダイレクトに屋賀に移動した説は取らず、絵図に描かれた山の南側、現在の池尻周辺に

付表13 文献記載国府所在地名(木下 良氏論文より作成)^{注10}

文献名	流布本『和名抄』		東急本『和名抄』		三卷本『色 葉字類抄』	『拾芥抄』	『延喜式』 頭註	十卷本『伊呂 波字類抄』
	国名肩註	郡名下註	国名肩註	郡名下註				
所在地	桑田	桑田	桑田	桑田	桑田国府	桑田	(武)桑田	桑田府
国府所 在年代	10前	10末～ 11初	10前	10末～ 11初	11世紀後半	1170頃	12初	1180年頃以 降か

平安末の段階で移動し、その後屋賀に再移転したと考えたい。

おわりに

丹波国府は、亀岡市千代川町から八木町屋賀に移転したと考えられてきたが、絵図、歴史地理、文献史料を丹念に調べ直してみると、屋賀に平安時代末の段階で存在したということは困難である。これまでの比定は、屋賀地区に存在する小字名と吉富荘絵図に書かれた「国八庁」を安易に結びつけてしまったところに問題点がある。

現在、亀岡市馬路町池尻で道路建設に伴う発掘調査が進行中である。ここからは、白鳳時代から平安時代にわたる瓦が出土している。遺構の性格は調査中のため判明するまで時間がかかろうが、調査にかかる期待は大きいものと言えよう。

本稿をなすにあたって、亀岡市文化資料館の黒川孝宏氏、当センターの田代 弘氏には諸々の点で御教示いただきました。記して感謝いたします。

(鶴島三壽)

注1 木下 良「丹波国府址」『古代文化』16-2 1966

注2 『篠遺跡第2次発掘調査』現地説明会資料 亀岡市教育委員会 1990

注3 『京都府遺跡地図』京都府教育委員会 1973

注4 藤岡謙二郎「丹波の国府」『国府』日本歴史叢書25 吉川弘文館 1969

注5 寺島孝一「平安京出土の緑釉陶器」『考古学雑誌』51-3 1976

注6 前川 要「平安時代における緑釉陶器の編年研究」・「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究(上・下)」『古代文化』41-5・8・10 1989

注7 加納敬治・平尾政幸「平安京右京三条三坊」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第10冊 1990

注8 仲村 研「丹波国吉富荘の古絵図について」(『史朋』2 京都) 1963

注9 注8に同じ。

注10 『古絵図の世界』京都国立博物館 1984

注11 藤田元春『京都府北桑田郡誌』1923

注12 魚澄惣五郎「丹波国沿革」『南桑田郡誌』1924、八木茂美「丹波国分寺」『国分寺の研究』

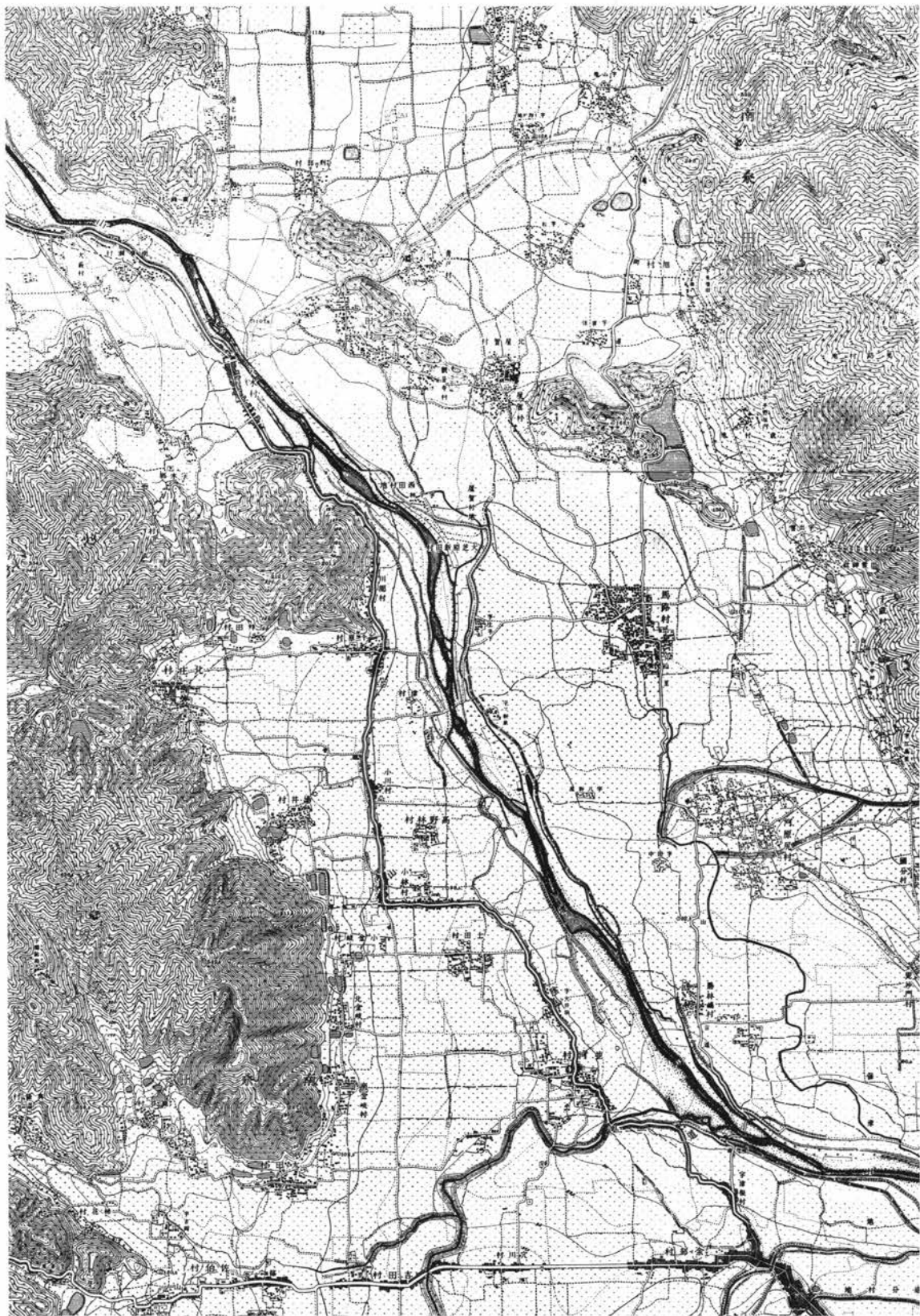
1938

- 注13 足利健亮「亀岡盆地条里の基礎的検討第一報」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987、高橋誠一「亀岡盆地の条里と丹波国府」『人文地理学の視園』大明堂 1986
- 注14 木下 良「古辞書類に見る国府所在郡について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集 国立歴史民俗博物館) 1986

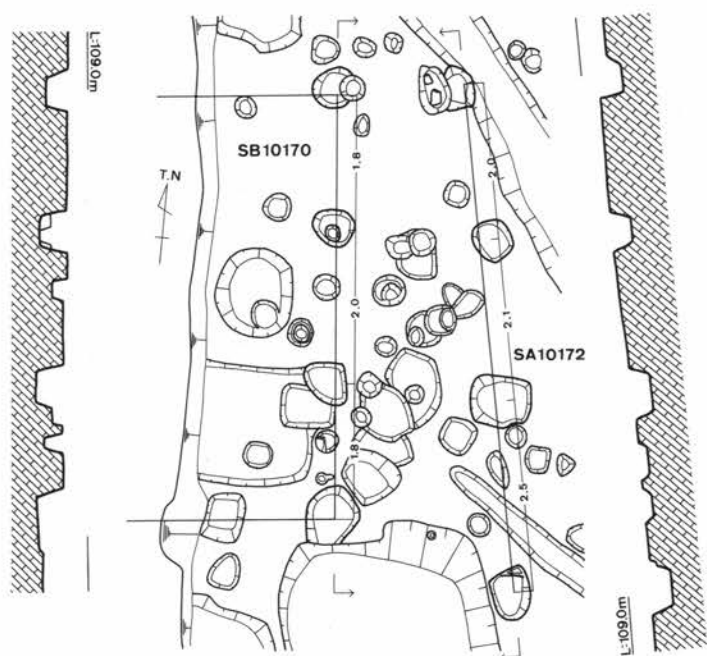
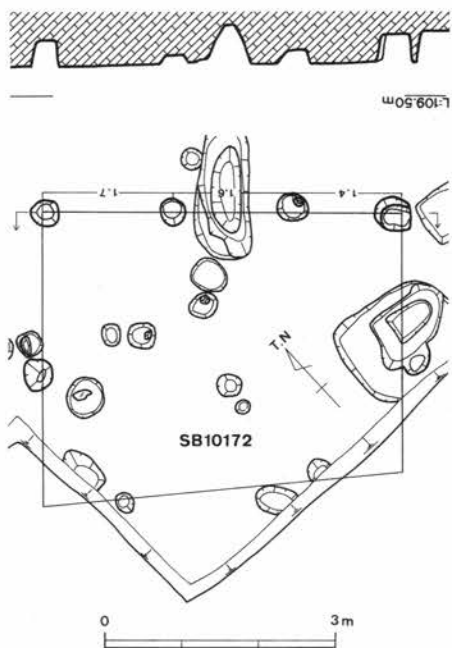
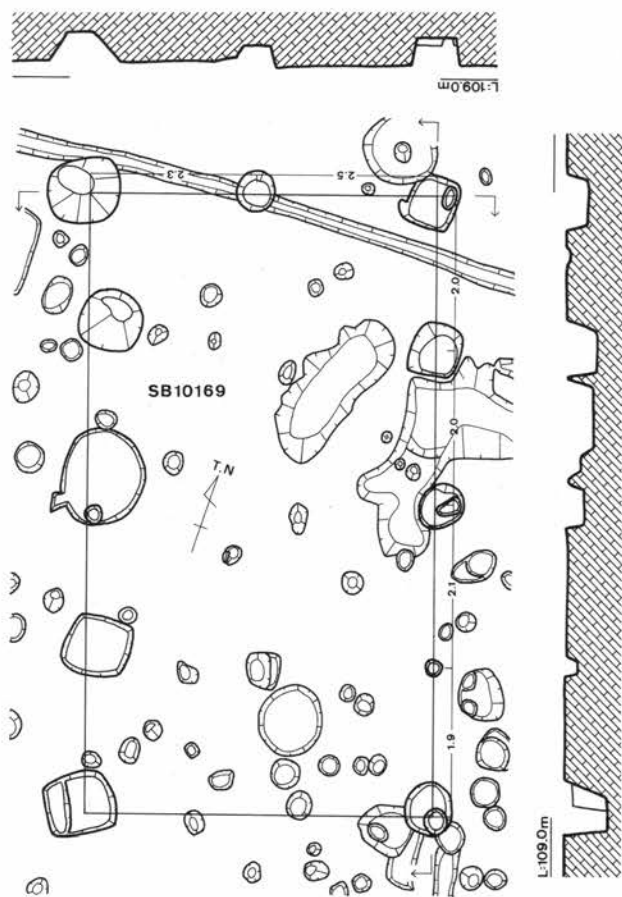
<千代川遺跡他関係遺跡文献>

- 安藤信策ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和55年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要(1981-2)』京都府教育委員会 1981
- 水谷壽克・村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982
- 水谷壽克・村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第7冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983
- 水谷壽克・村尾政人「千代川遺跡第4次」『京都府遺跡調査概要』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984
- 水谷壽克・岡崎研一「千代川遺跡第3次」『京都府遺跡調査概要』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984
- 水谷壽克・村尾政人ほか「国道9号バイパス関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984
- 水谷壽克ほか「千代川遺跡第6・7次」『京都府遺跡調査概要』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985
- 村尾政人「千代川遺跡第8次」『京都府遺跡調査概要』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985
- 水谷壽克・森下 衛「国道9号バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985
- 水谷壽克・森下 衛「国道9号バイパス関係遺跡昭和60年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第21冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986
- 樋口隆久「千代川遺跡第11次発掘調査概報」『亀岡市文化財調査報告書』第15集 1987
- 水谷壽克・森下 衛「国道9号バイパス関係遺跡昭和61年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987
- 水谷壽克・鶴島三壽「国道9号バイパス関係遺跡昭和62年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988
- 小池 寛・鶴島三壽「国道9号バイパス関係遺跡昭和63年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 鶴島三壽「国道9号バイパス関係遺跡平成元年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990

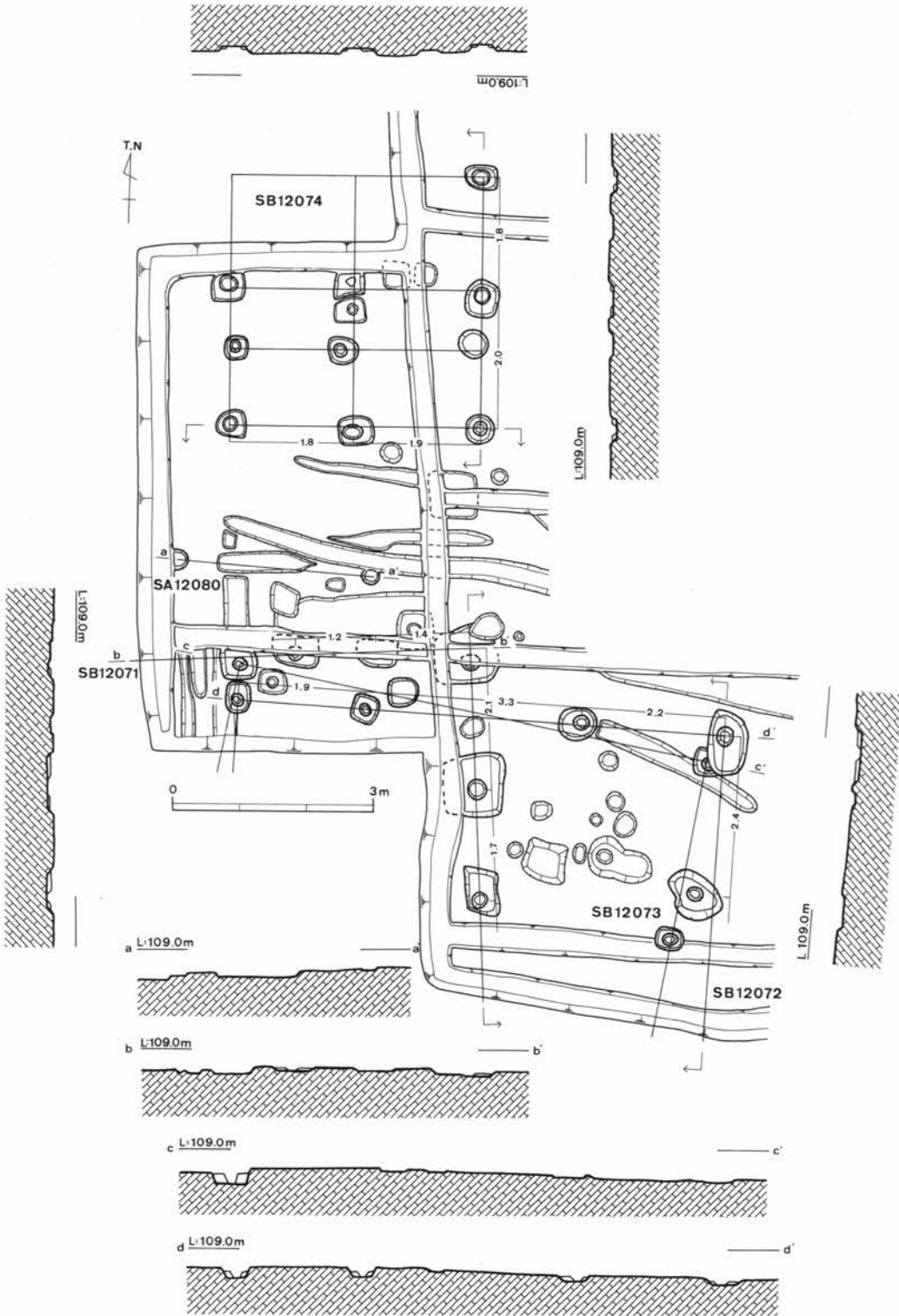
圖 版



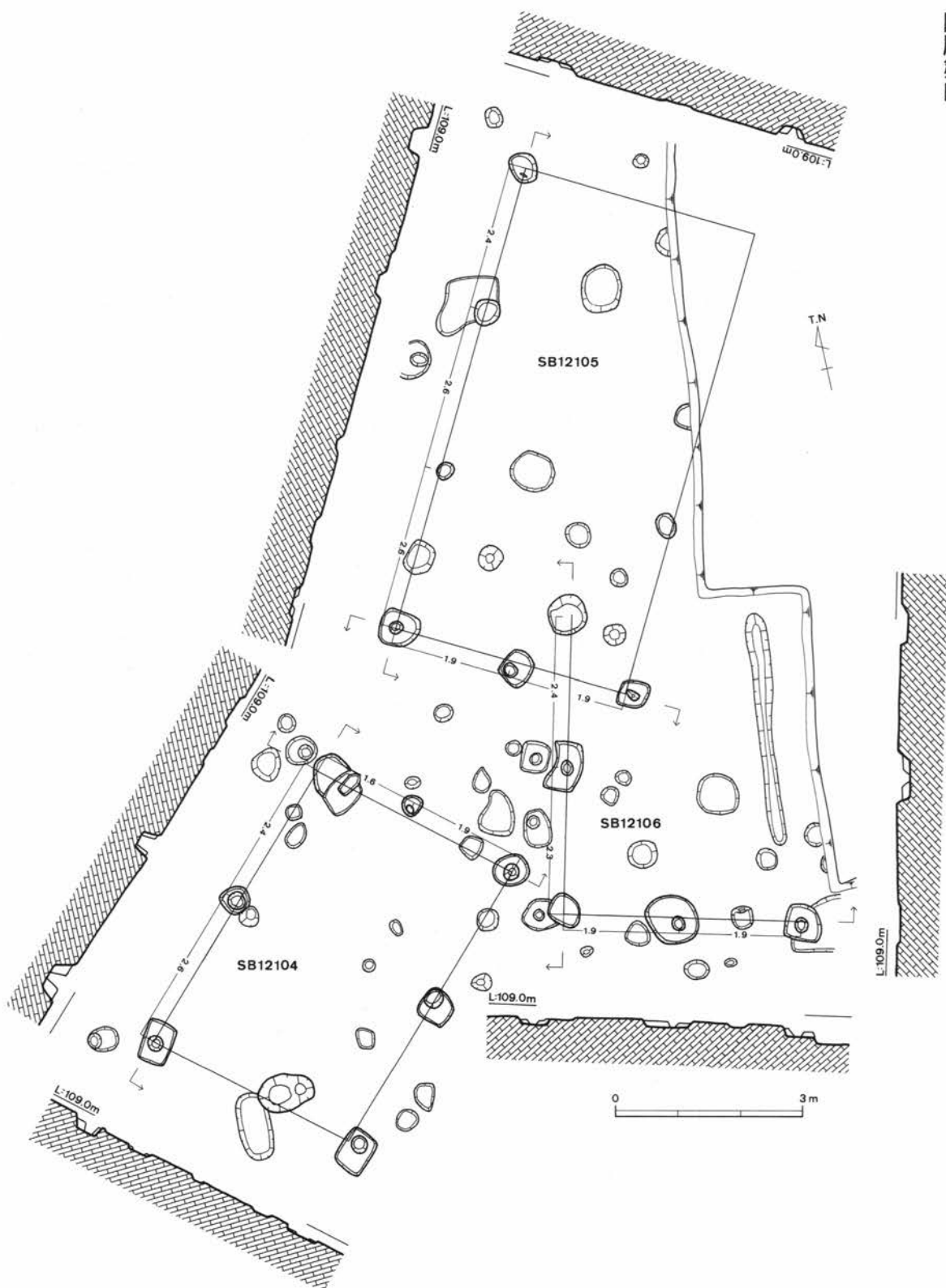
亀岡盆地古地図（明治21年；京阪仮製地図）



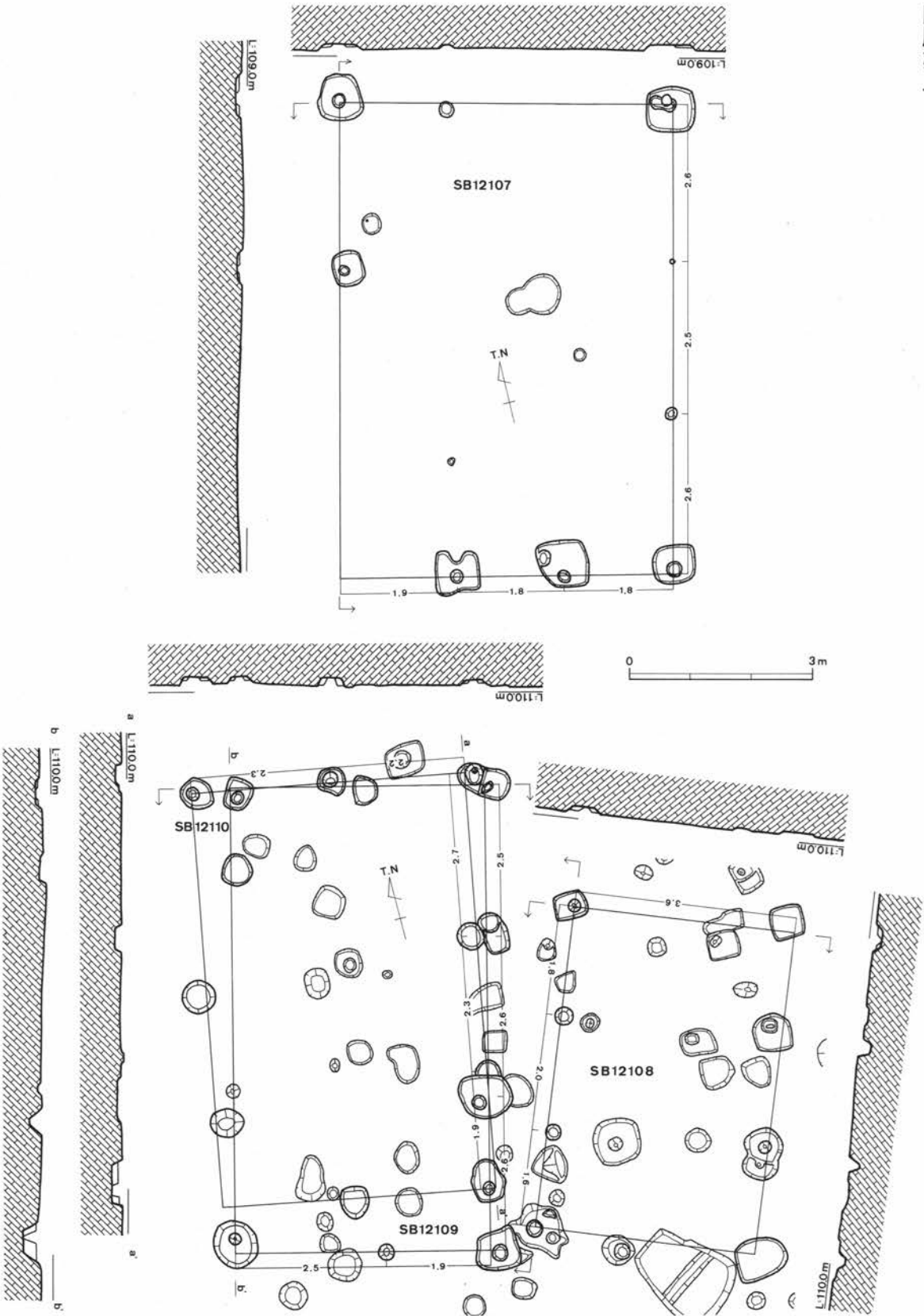
掘立柱建物跡 SB10169・SB10170・SB10172、柵列 SA10172実測図 (1/100)



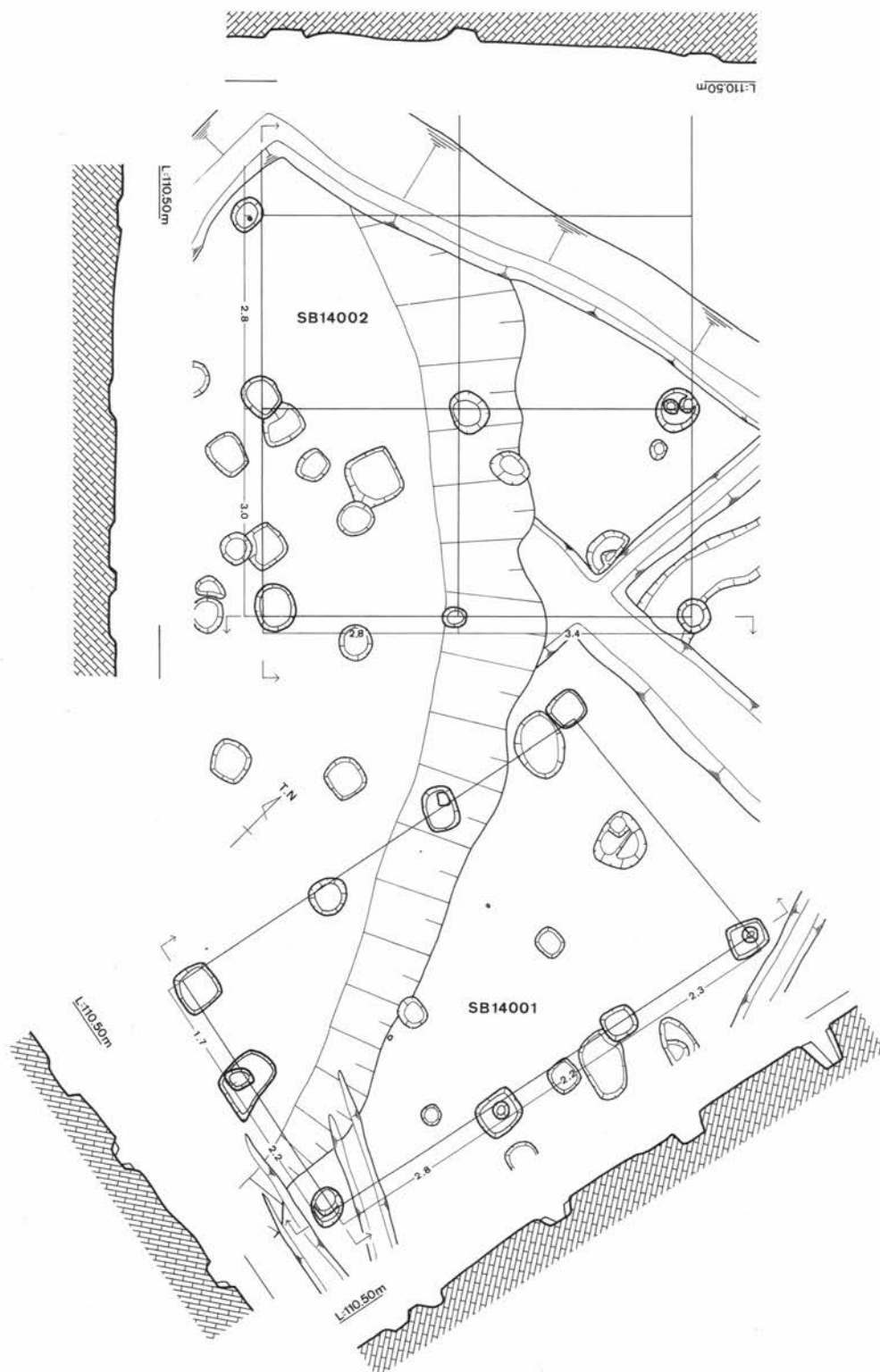
掘立柱建物跡 SB12071~12074、柵列 SA12080 実測図 (1/100)



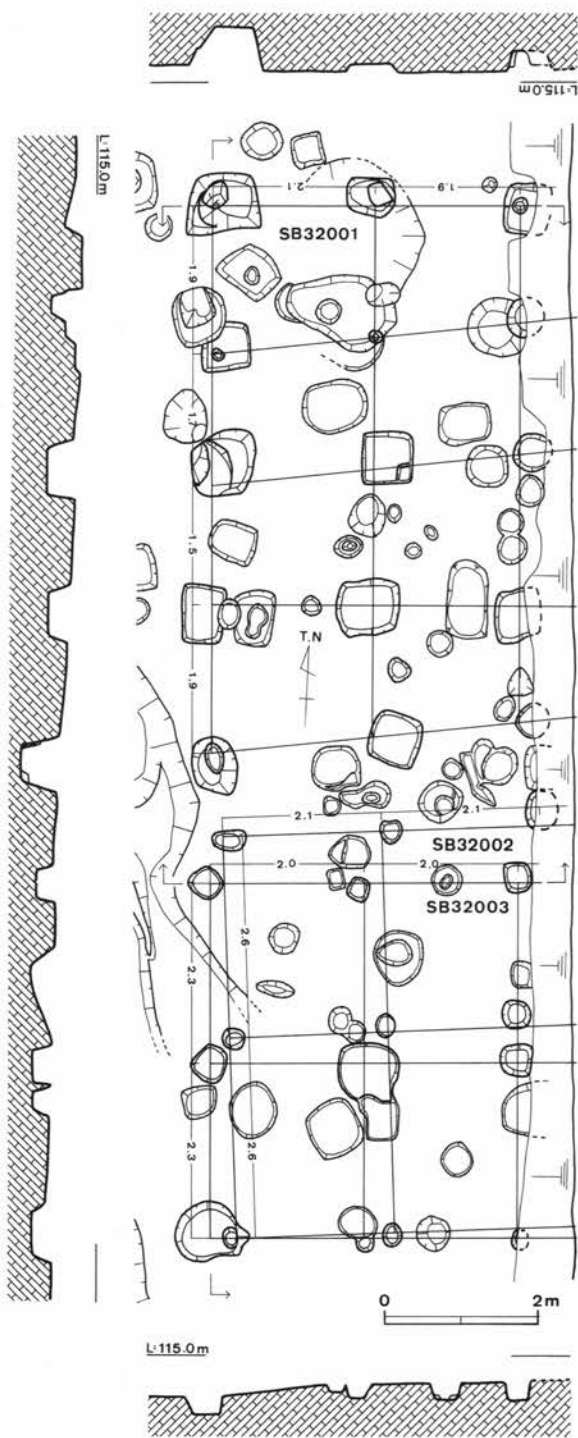
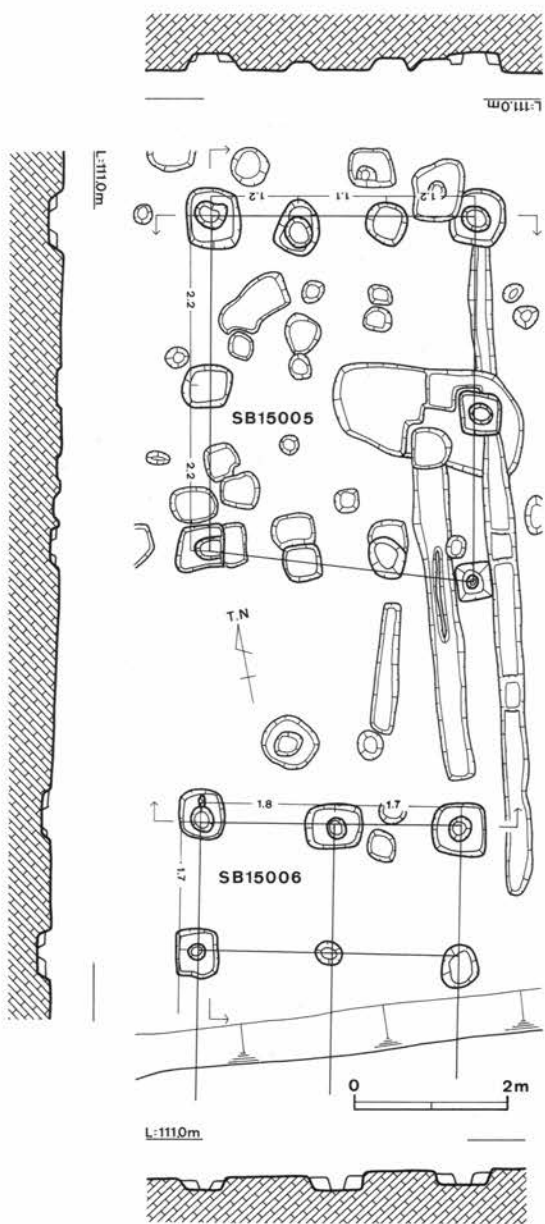
掘立柱建物跡 SB12104~12106実測図 (1/100)



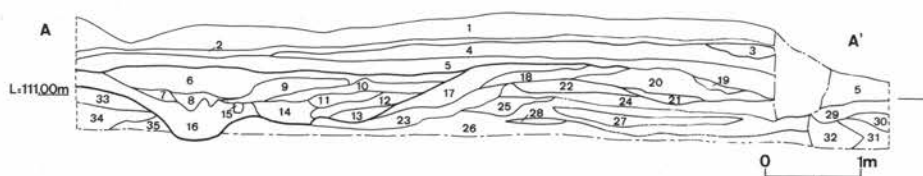
掘立柱建物跡 SB12107~12110実測図 (1/100)



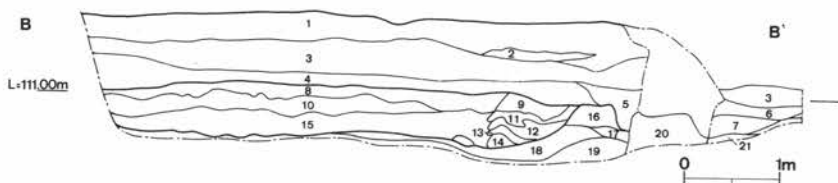
掘立柱建物跡 SB14001・SB14002実測図 (1/100)



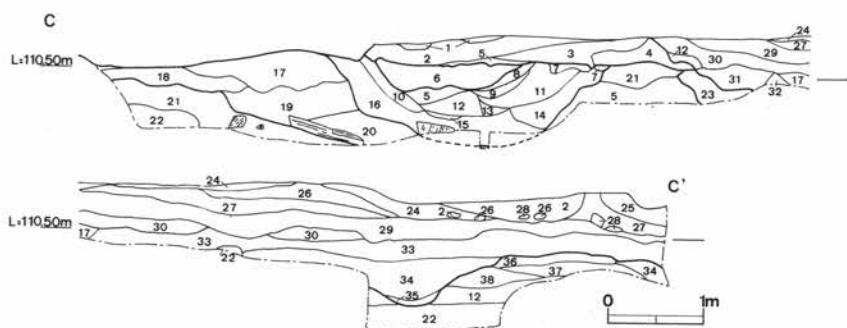
掘立柱建物跡 SB15005・SB15006・SB32001～32003実測図 (1/100)



1 表土 2 淡灰色砂質土 3 淡灰褐色砂質土 4 灰褐色土 5 灰茶褐色土 6 灰色砂・灰色土 (ラミナ状に堆積) 7 暗灰褐色土 8 茶褐色砂 9 暗灰色粘質土 10 灰褐色粘質土 11 灰褐色粘質土 (やや暗い) 12 灰褐色粘質土 (やや褐色) 13 灰褐色粘質土 (青灰色粘質土がブロック状に入る) 14 茶褐色砂 15 14に同じ 16 濁灰褐色砂質土 17 黒褐色土 18 黒褐色土 (バラス含む) 19 黒褐色土 20 茶灰色砂 21 茶灰色砂 (やや褐色) 22 茶灰色砂 (粗) 23 黒褐色土 (青灰色土ブロック状に入る) 24 茶灰色砂 (細) 25 茶灰色砂 (青灰色粘土含む) 26 青灰色砂 27 茶灰色砂 28 茶灰色砂 29 淡灰色土 30 濁灰褐色土 31 茶灰色砂 32 濁茶褐色土

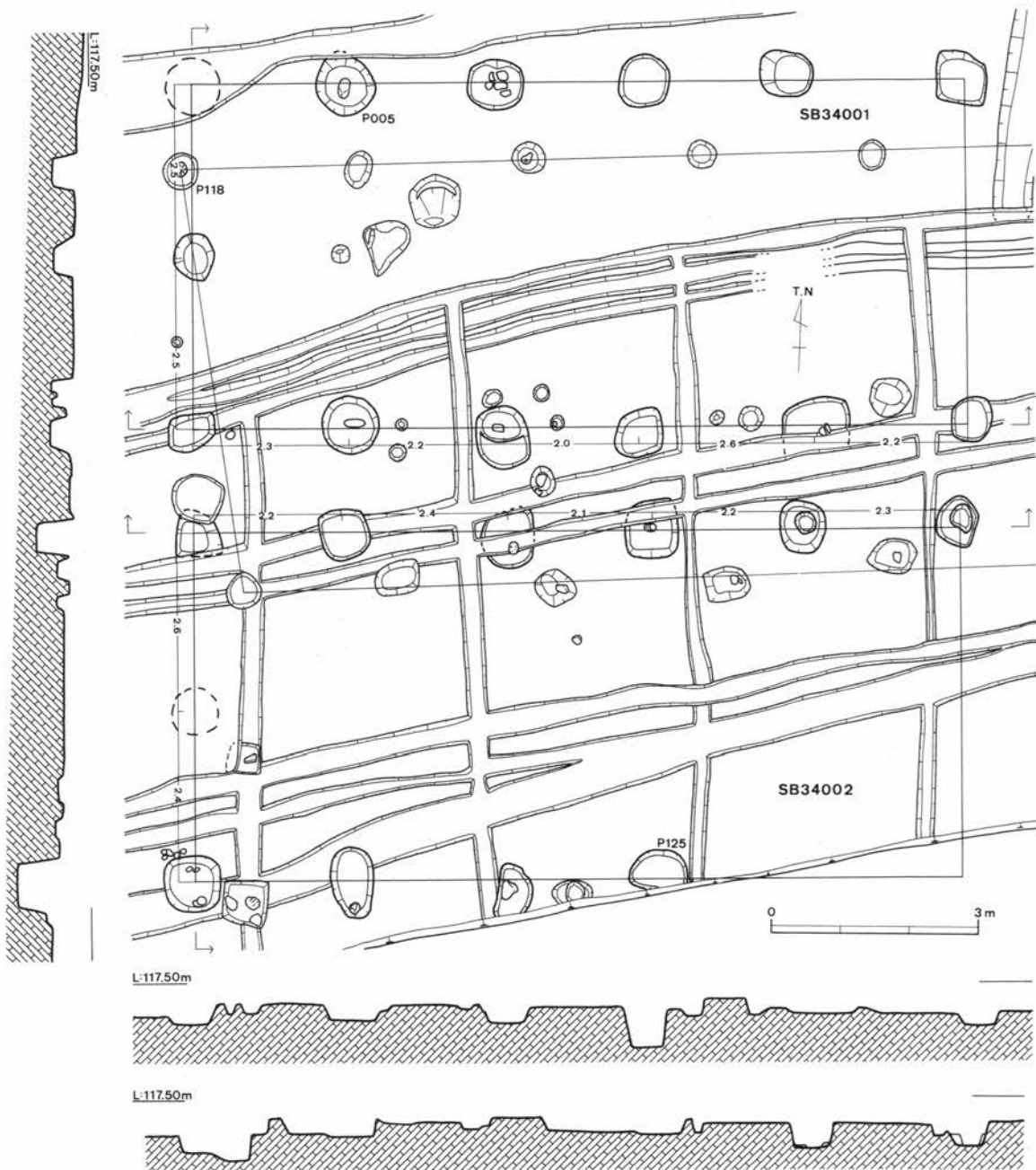


1 表土 2 淡灰色砂質土 3 淡灰褐色砂質土 4 灰褐色土 5 灰褐色土 (マンガン分多い) 6 淡灰色砂質土 (砂分多い) 7 灰茶褐色土 8 明灰色砂質土 9 黄褐色砂 10 暗灰褐色土 11 淡灰色砂質土 12 黄褐色砂 (Fe含む) 13 灰褐色粘質土 14 黄褐色砂 15 黒褐色粘質土 16 黒褐色土 17 暗黒褐色砂質土 18 青灰色粘質土 19 暗灰色砂質土 20 黒灰褐色土 21 暗灰色砂質土

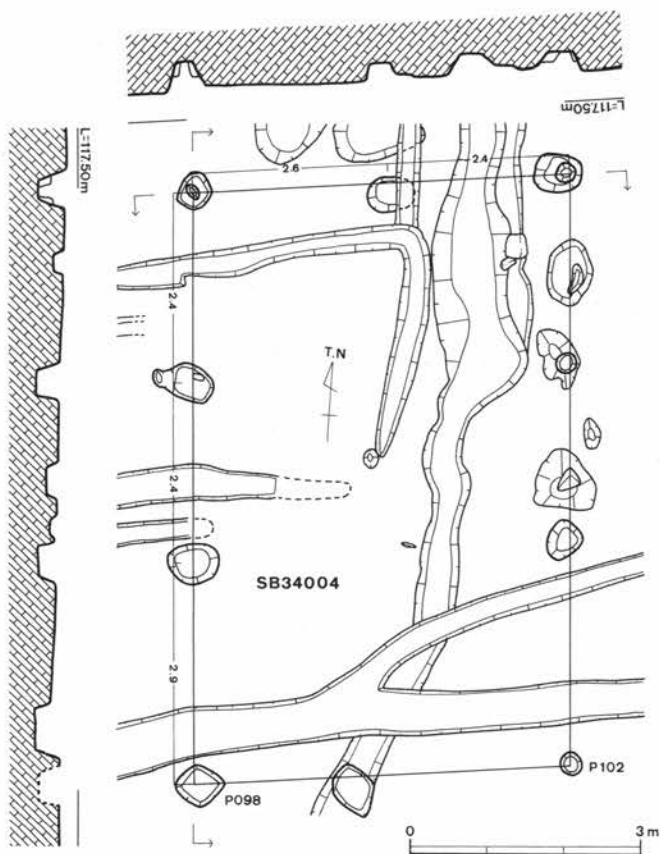
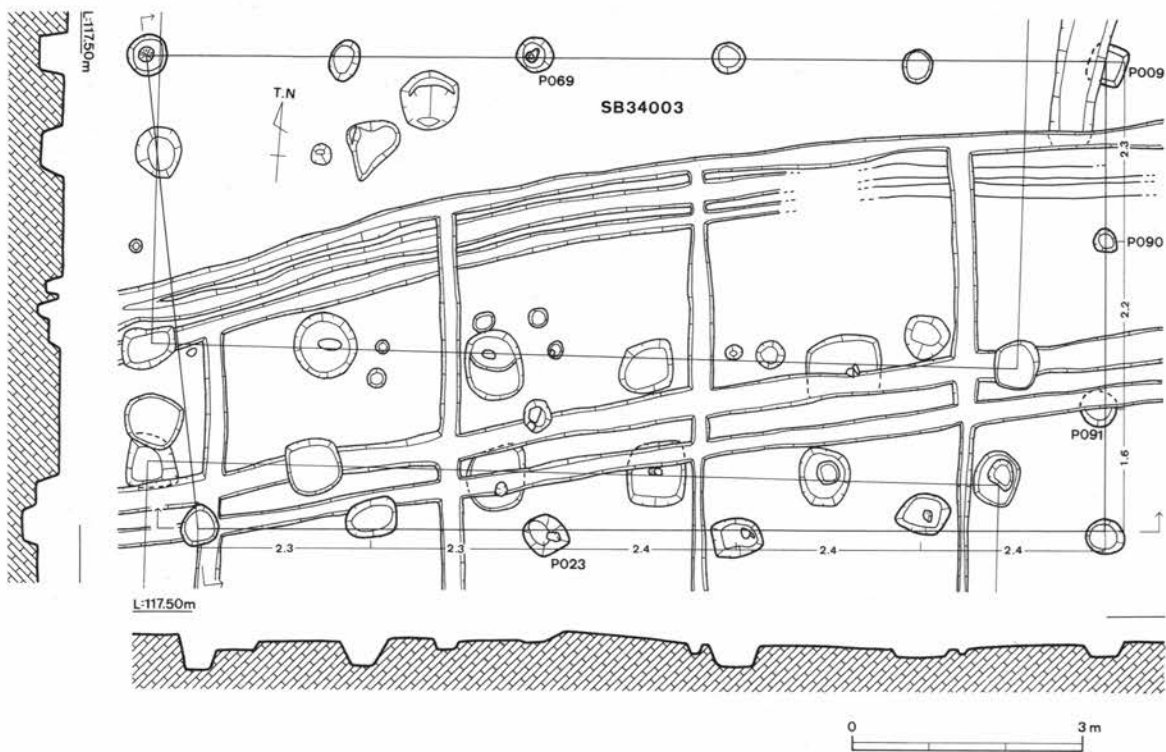


1 茶褐色砂 2 淡黒褐色粘質土 3 淡褐色砂質土 4 淡褐色砂 5 濁灰褐色砂 6 黒褐色粘質土 7 黄褐色土 8 暗茶褐色粘質土 9 8より粘質強い 10 黒褐色粘質土 (砂まじり) 11 淡黒褐色粘砂土 12 暗灰褐色粗砂 13 濁黄褐色土 (ブロック) 14 淡黒褐色粘砂土 (砂・粘土の互層) 15 12より粗い 16 淡黒灰褐色土 17 淡灰褐色砂 18 青灰色粘質土 19 17より粗い 20 19より粗い 21 18に同じ 22 青灰色粘土 23 灰褐色砂質土 24 黄茶褐色土 25 淡茶褐色土 26 明黄褐色土 27 濁黒褐色土 28 褐色粘質土 29 暗茶褐色土 30 淡灰褐色土 31 暗茶褐色砂質土 32 青灰色砂 33 濁青灰褐色土 34 暗青灰褐色土 35 青灰色砂利 36 淡茶褐色砂 37 青灰褐色砂 38 青灰色粘砂 (砂と粘土の互層)

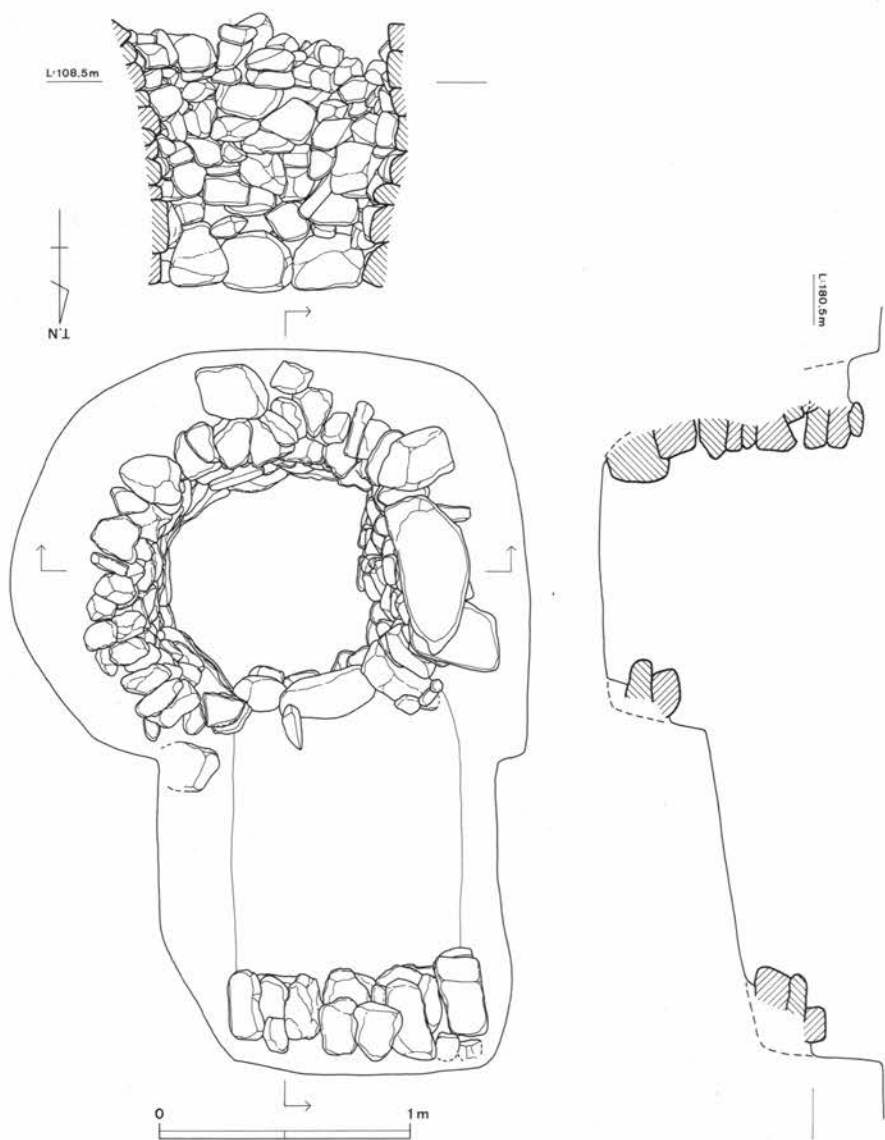
溝SD21001土層断面図・断ち割り土層断面図 (1/60) [位置は第8図に対応]



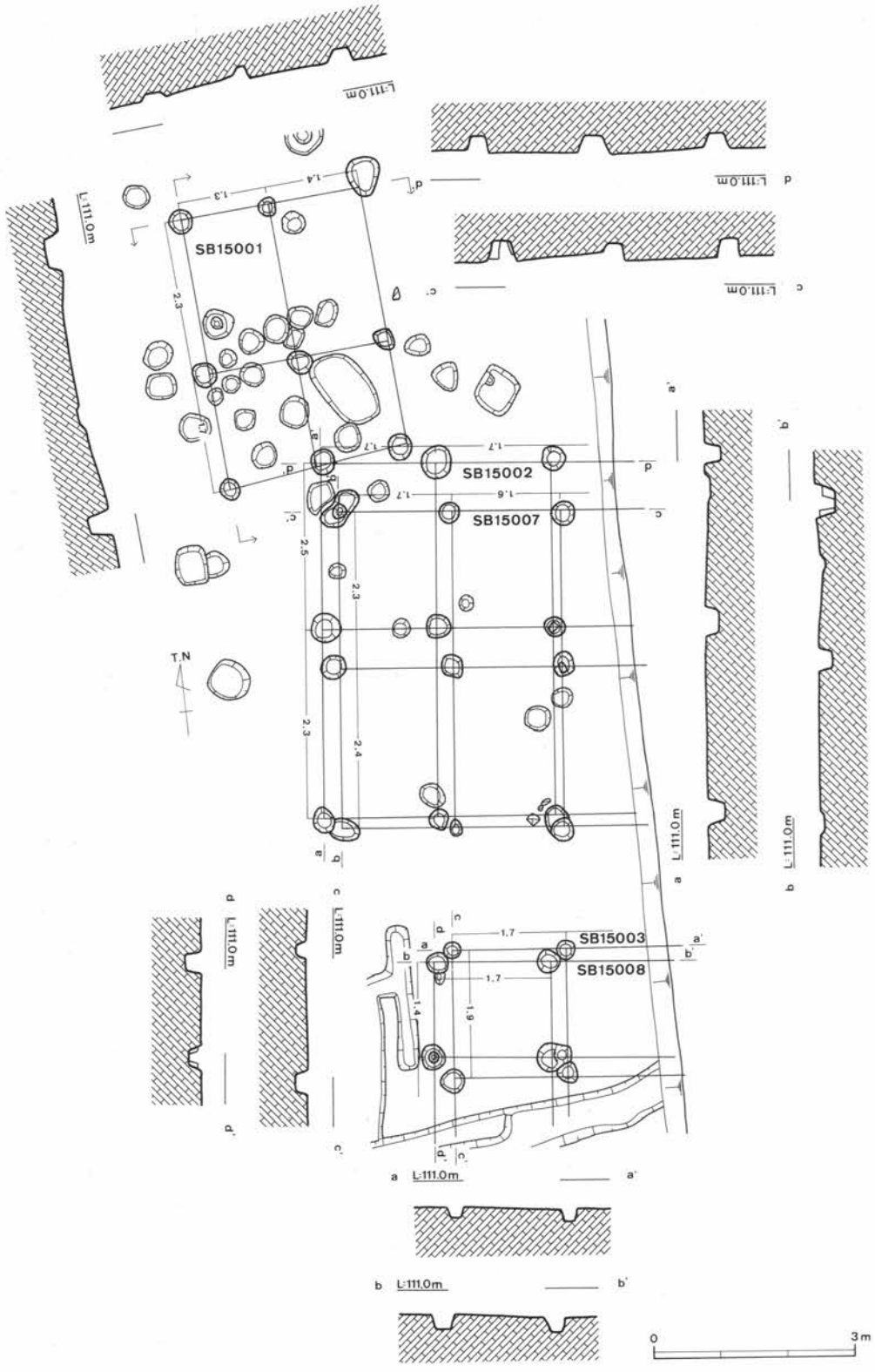
掘立柱建物跡 SB34001・SB34002実測図 (1/100)



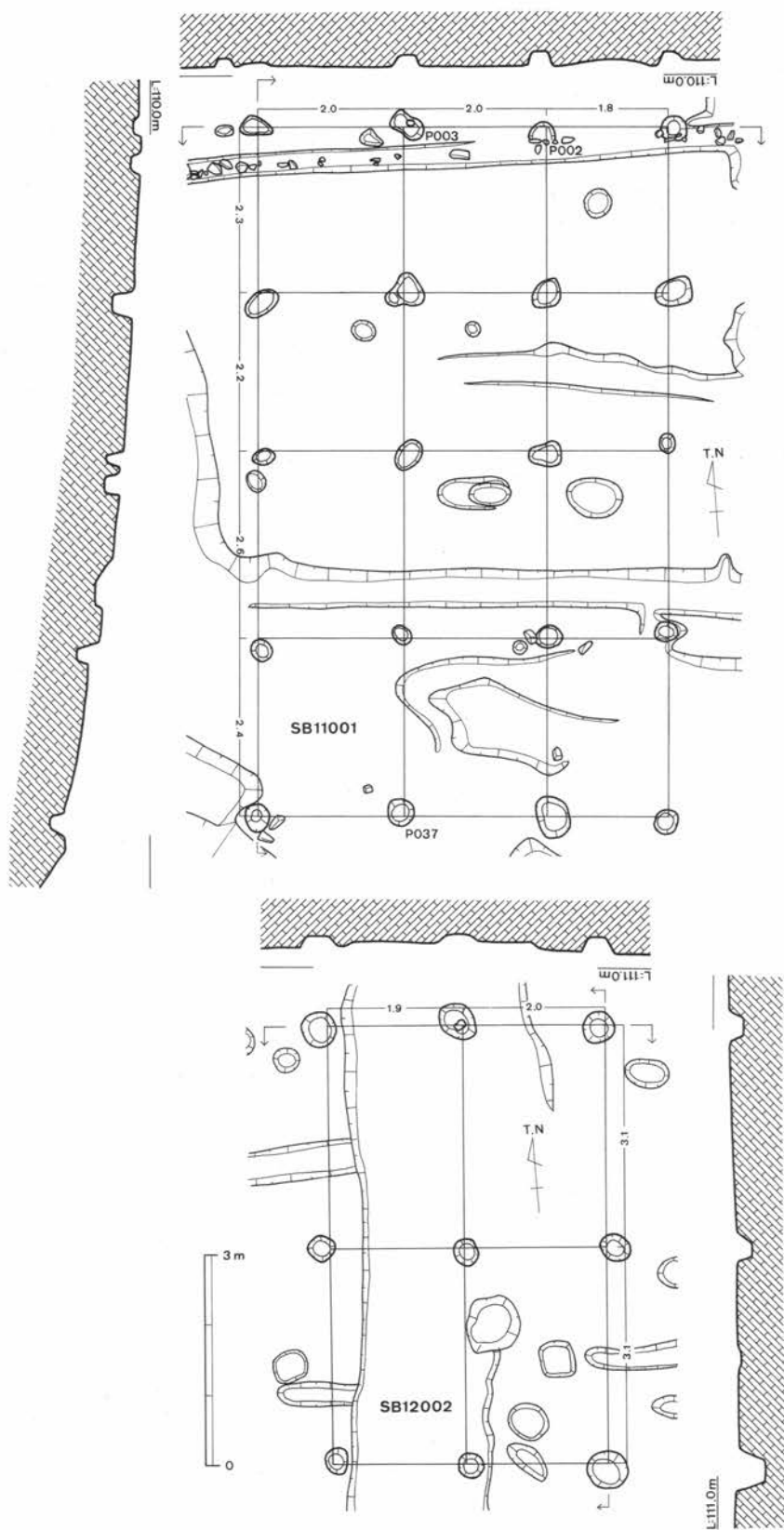
掘立柱建物跡 SB34003・SB34004実測図 (1/100)



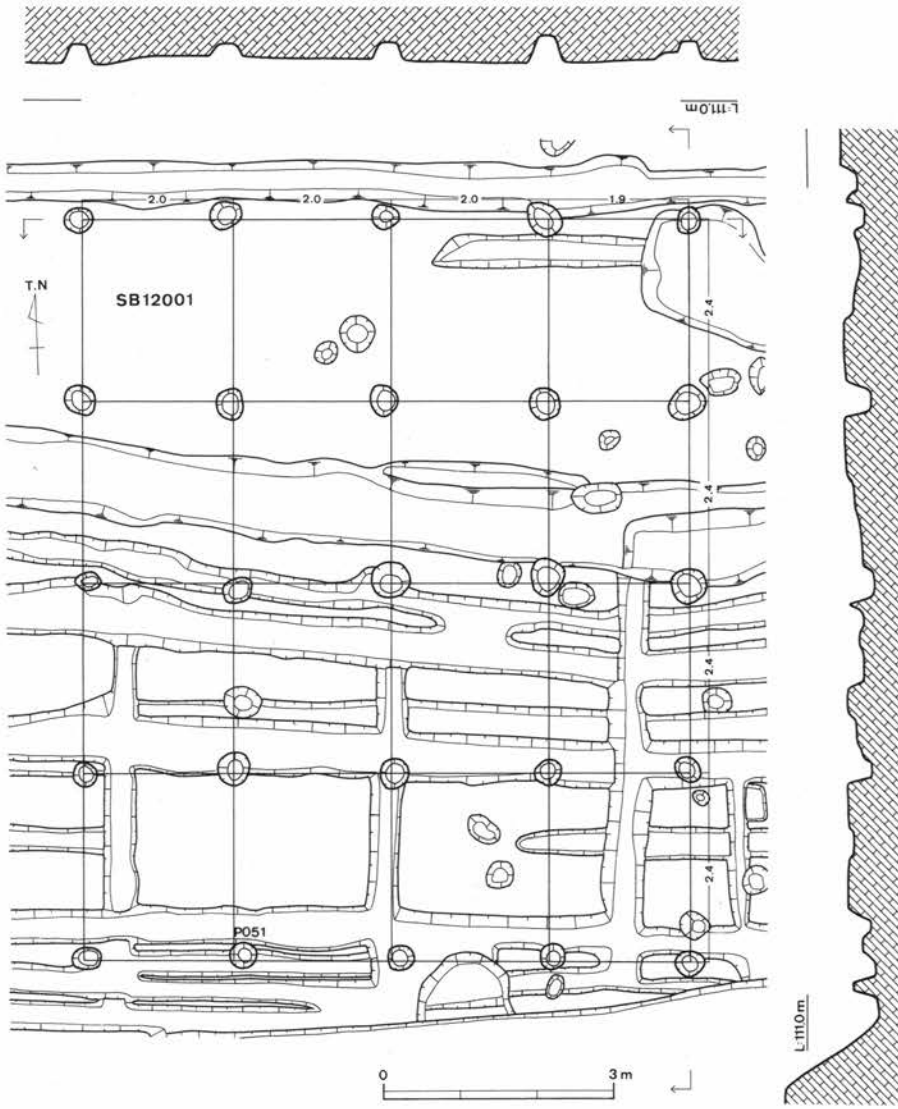
井戸跡SE10116実測図 (1/30)



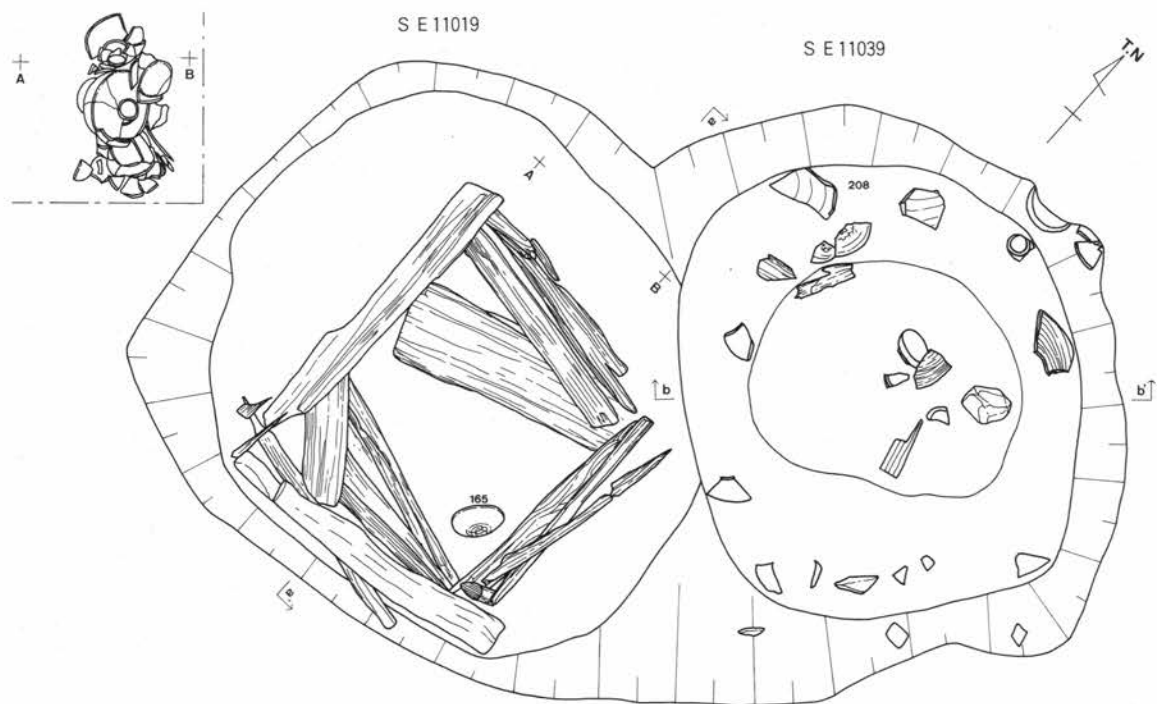
掘立柱建物跡 SB15001~SB15003・SB15007・SB15008実測図 (1/100)



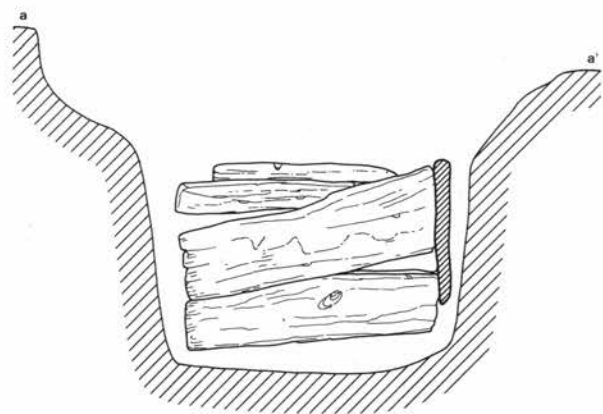
掘立柱建物跡 SB11001・SB12002実測図 (1/100)



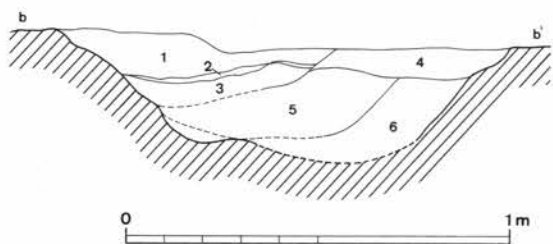
掘立柱建物跡 SB12001 実測図 (1/100)



L=109.6m

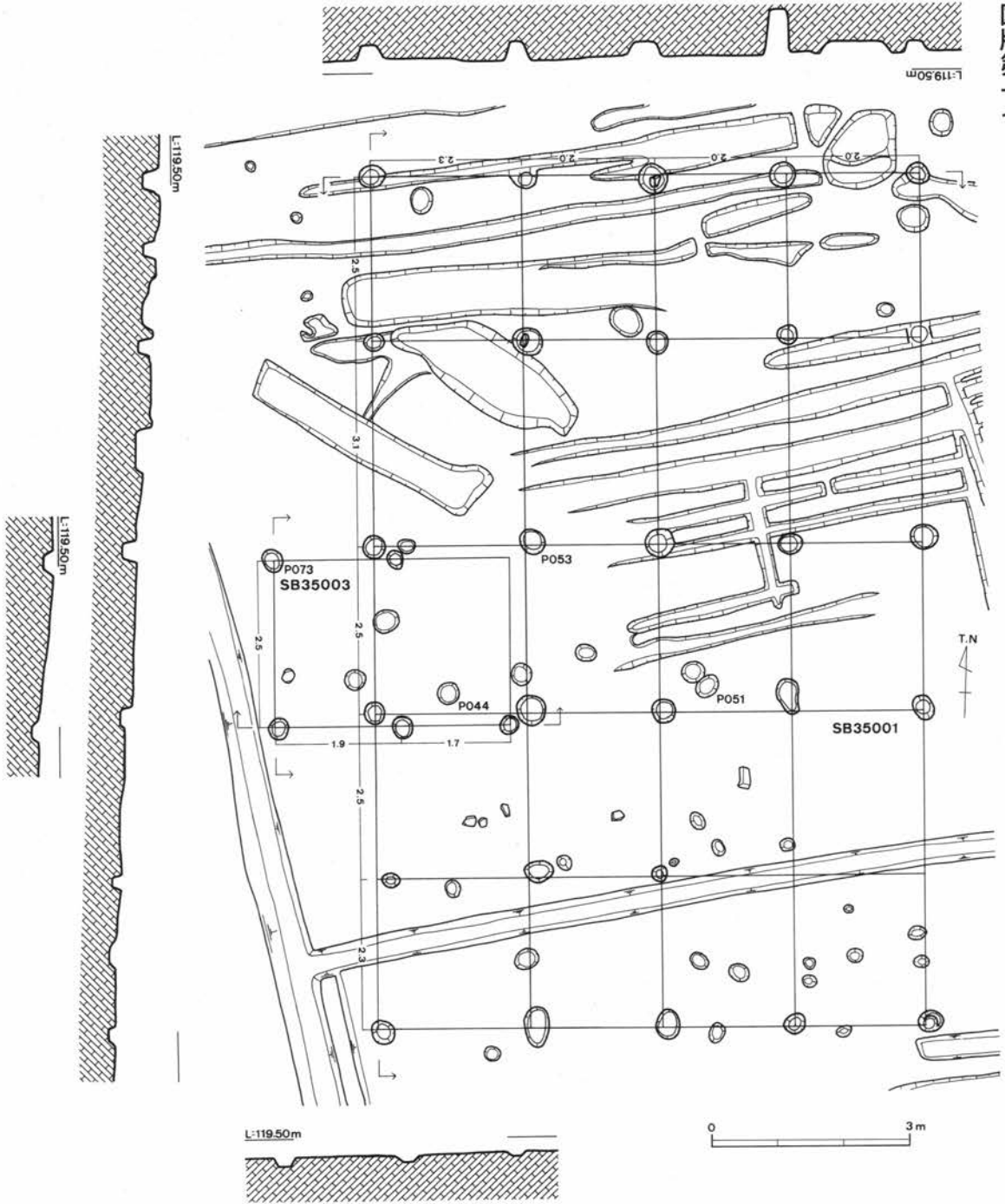


L=109.6m

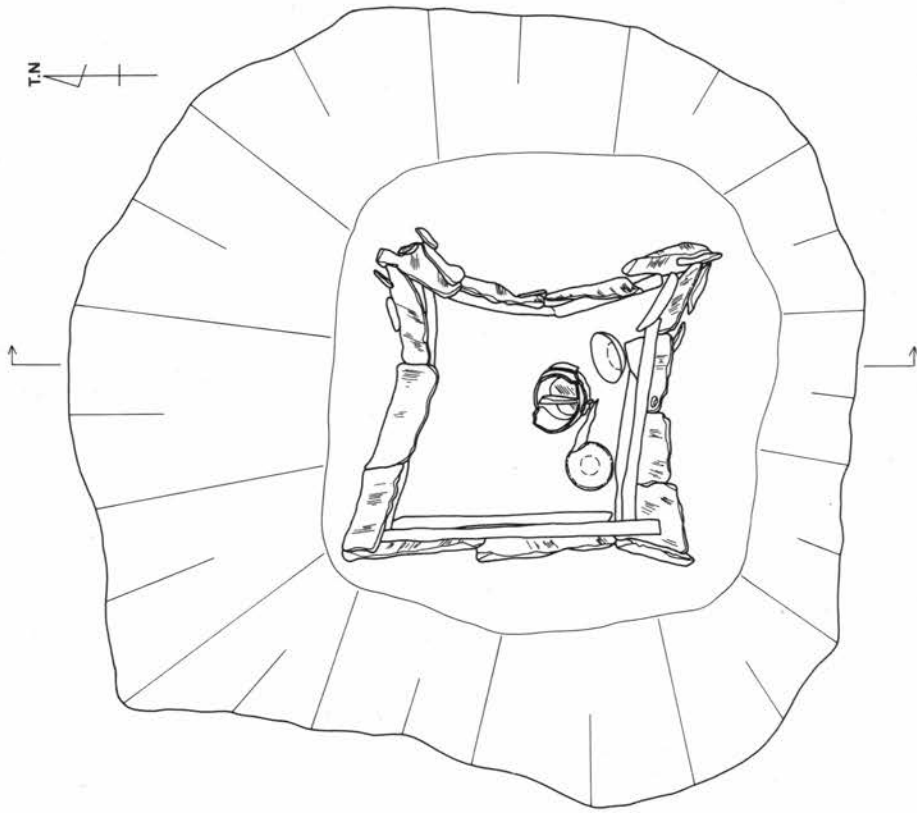


- 1 黒褐色粘質土 2 灰褐色砂 3 黒褐色粘質土 (砂多い)
 4 淡黒褐色土 5 黒灰褐色粘質土 6 濁黒灰褐色粘砂土

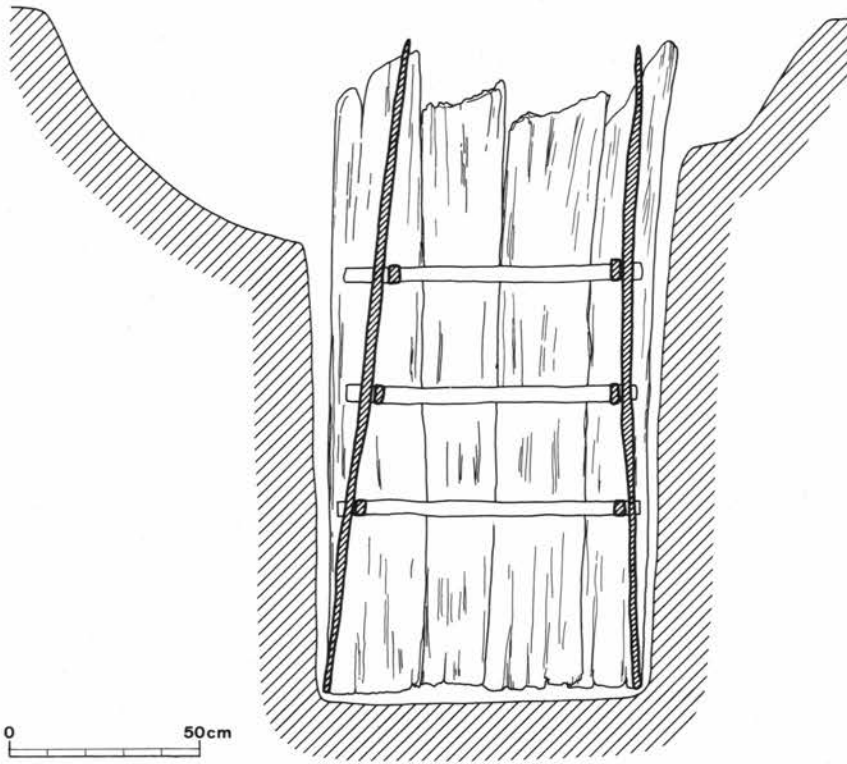
井戸跡 SE11019・SE11039実測図 (1/20)



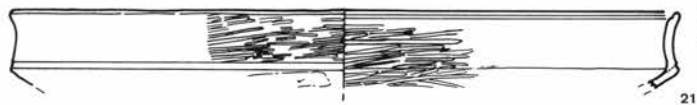
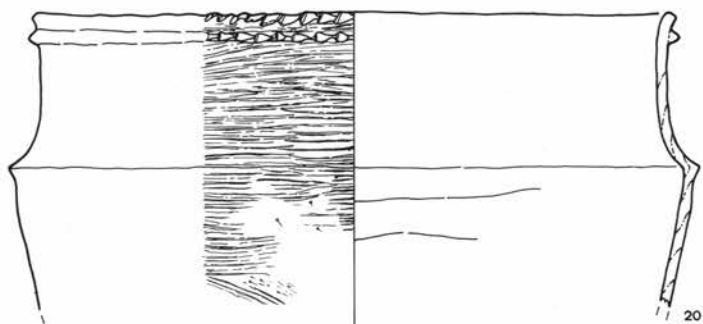
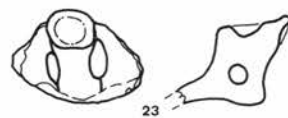
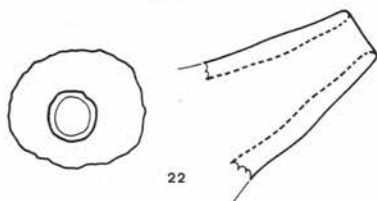
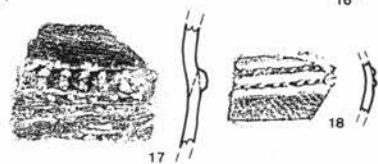
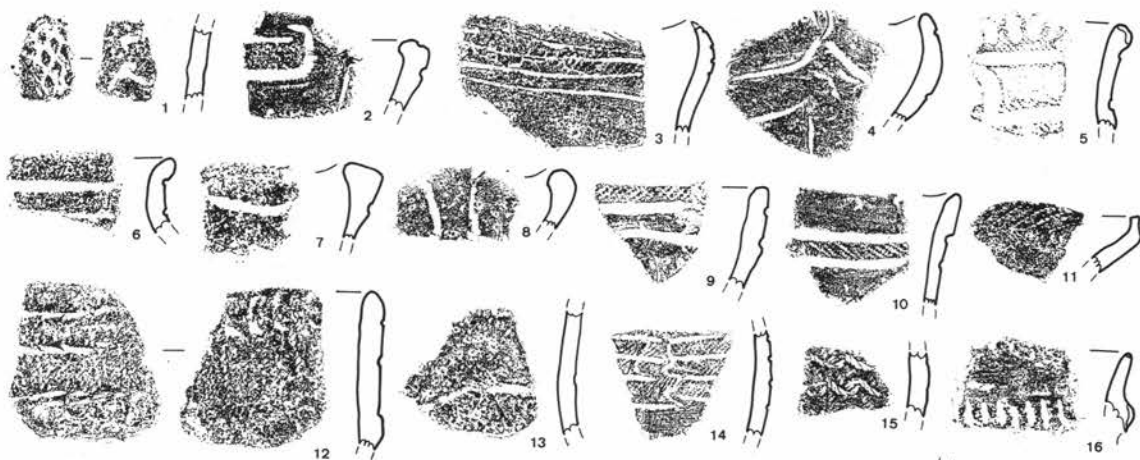
掘立柱建物跡 SB35001・SB35003実測図 (1/100)



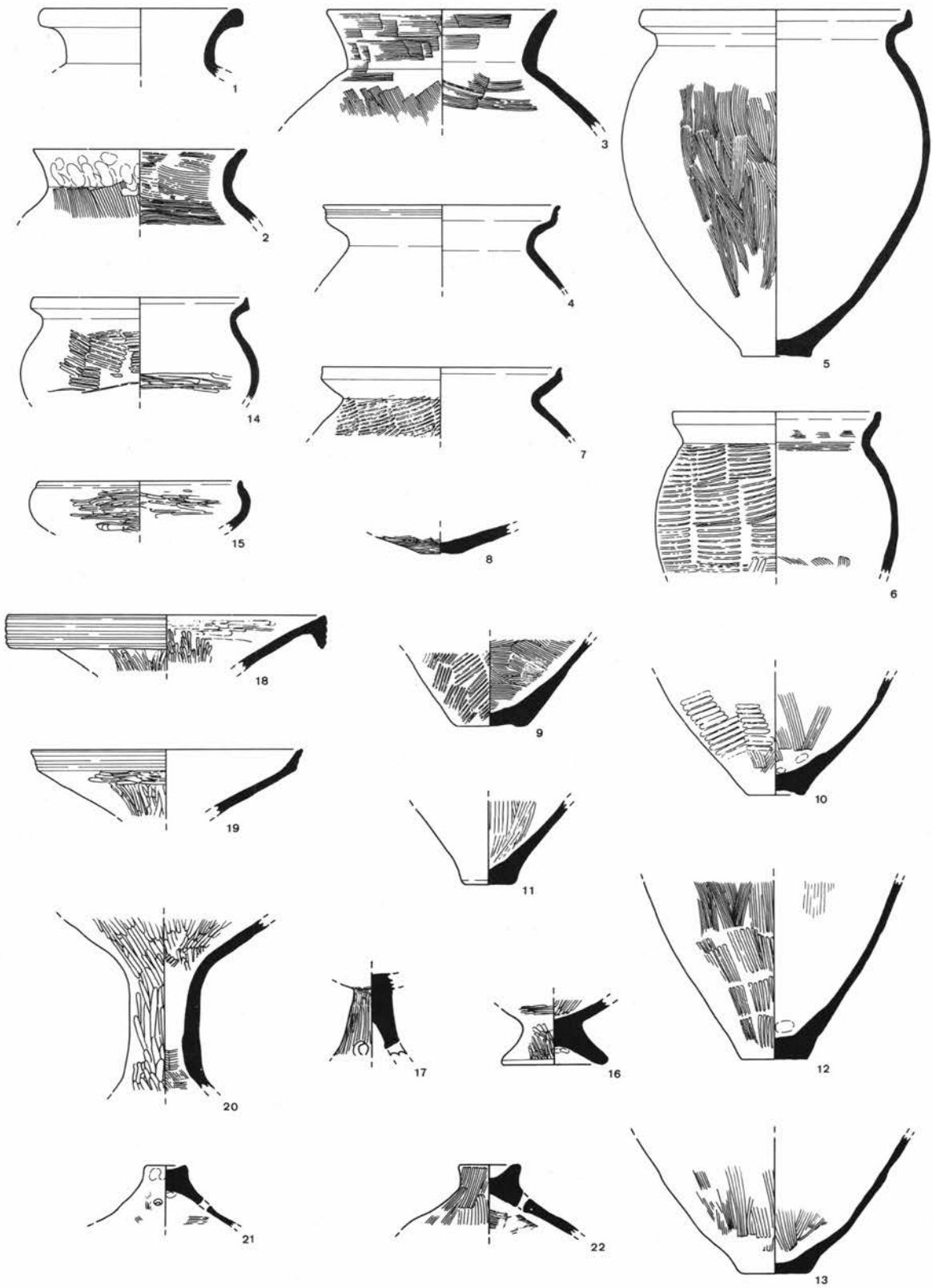
L=119.8m



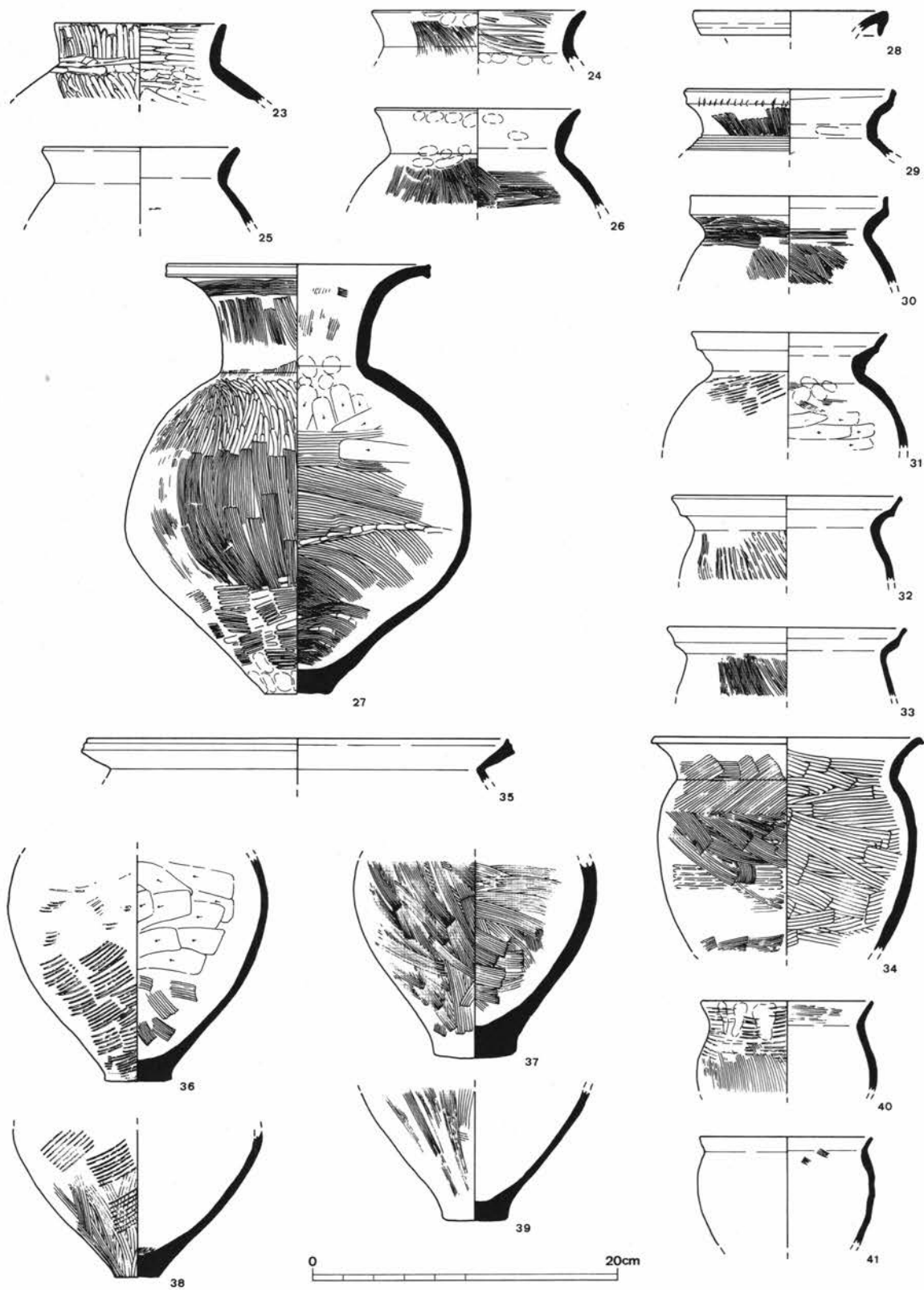
井戸跡 SE35040実測図 (1/20)



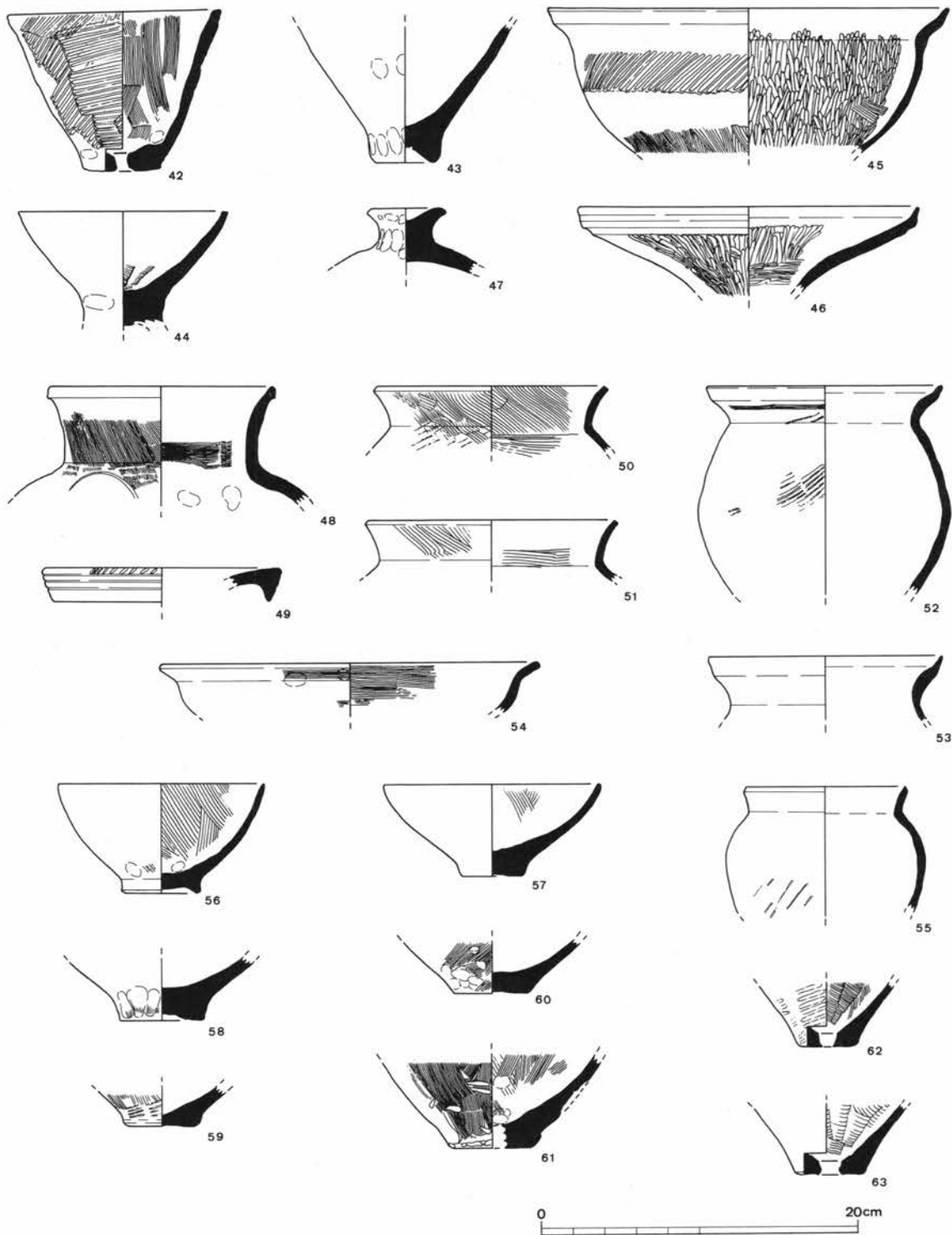
縄文土器実測図



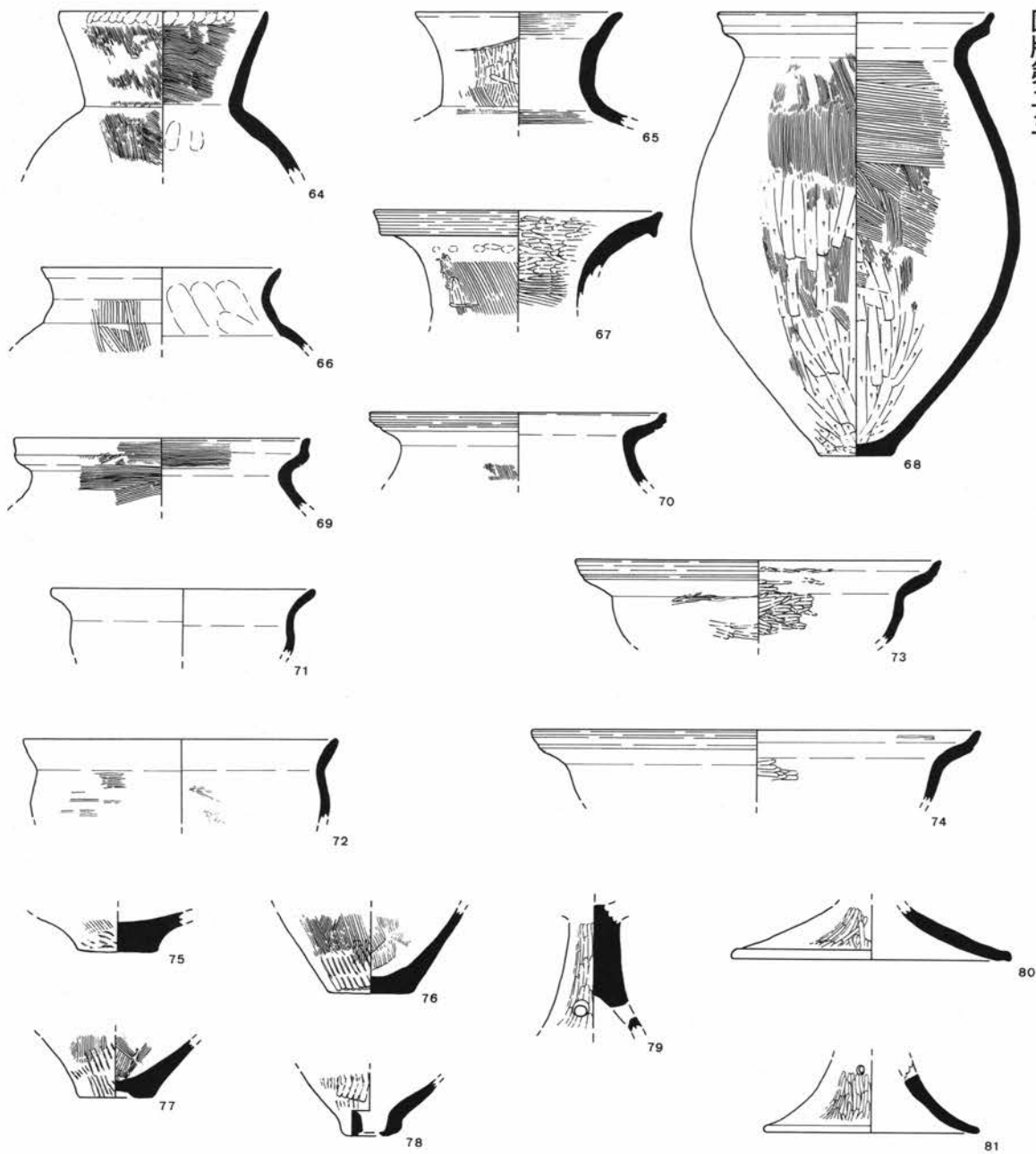
竪穴式住居跡 SH10099出土遺物実測図



溝 SD12131 出土遺物実測図 (1)

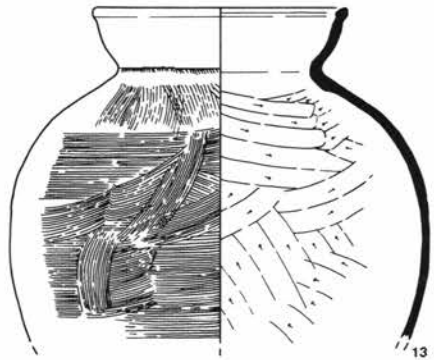
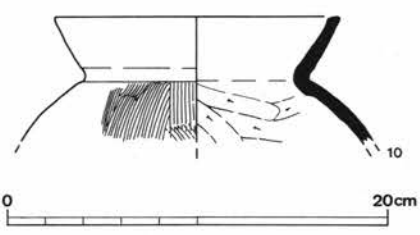
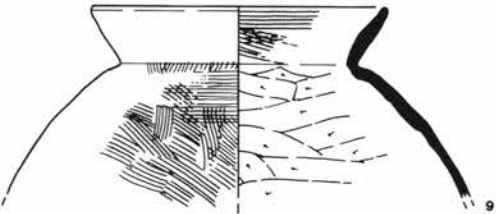
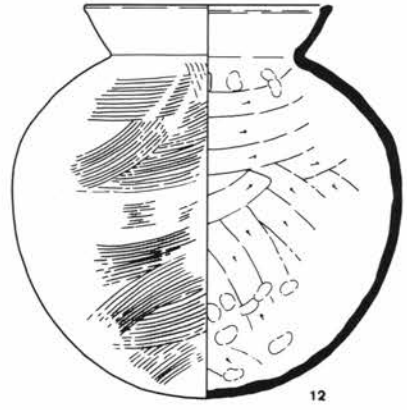
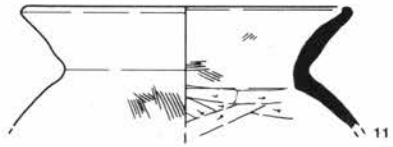
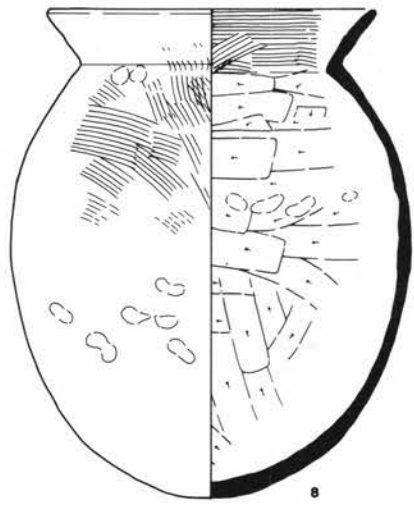
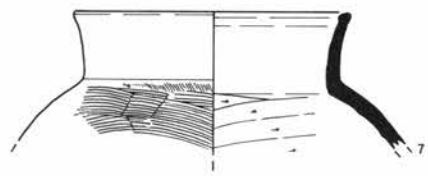
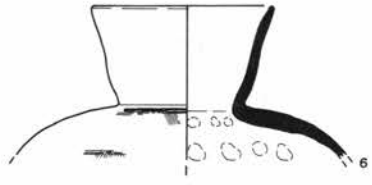
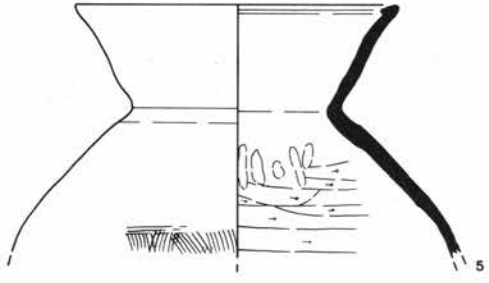
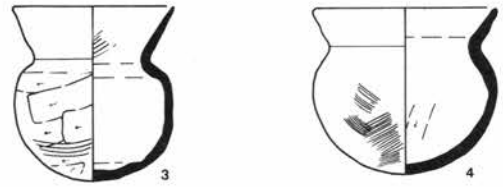
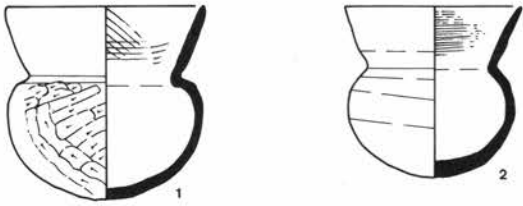


溝 SD12131出土遺物実測図 (2)

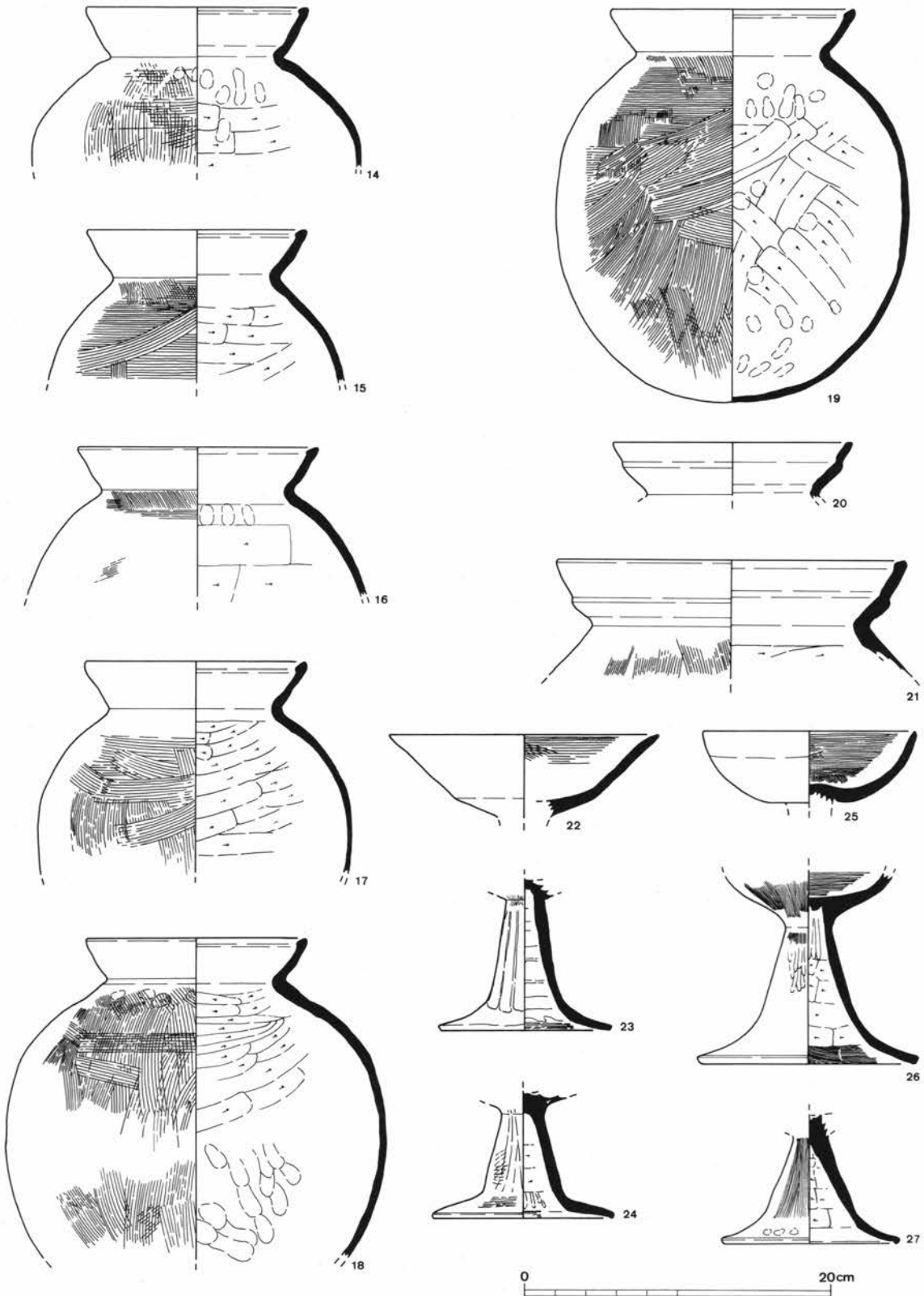


0 20cm

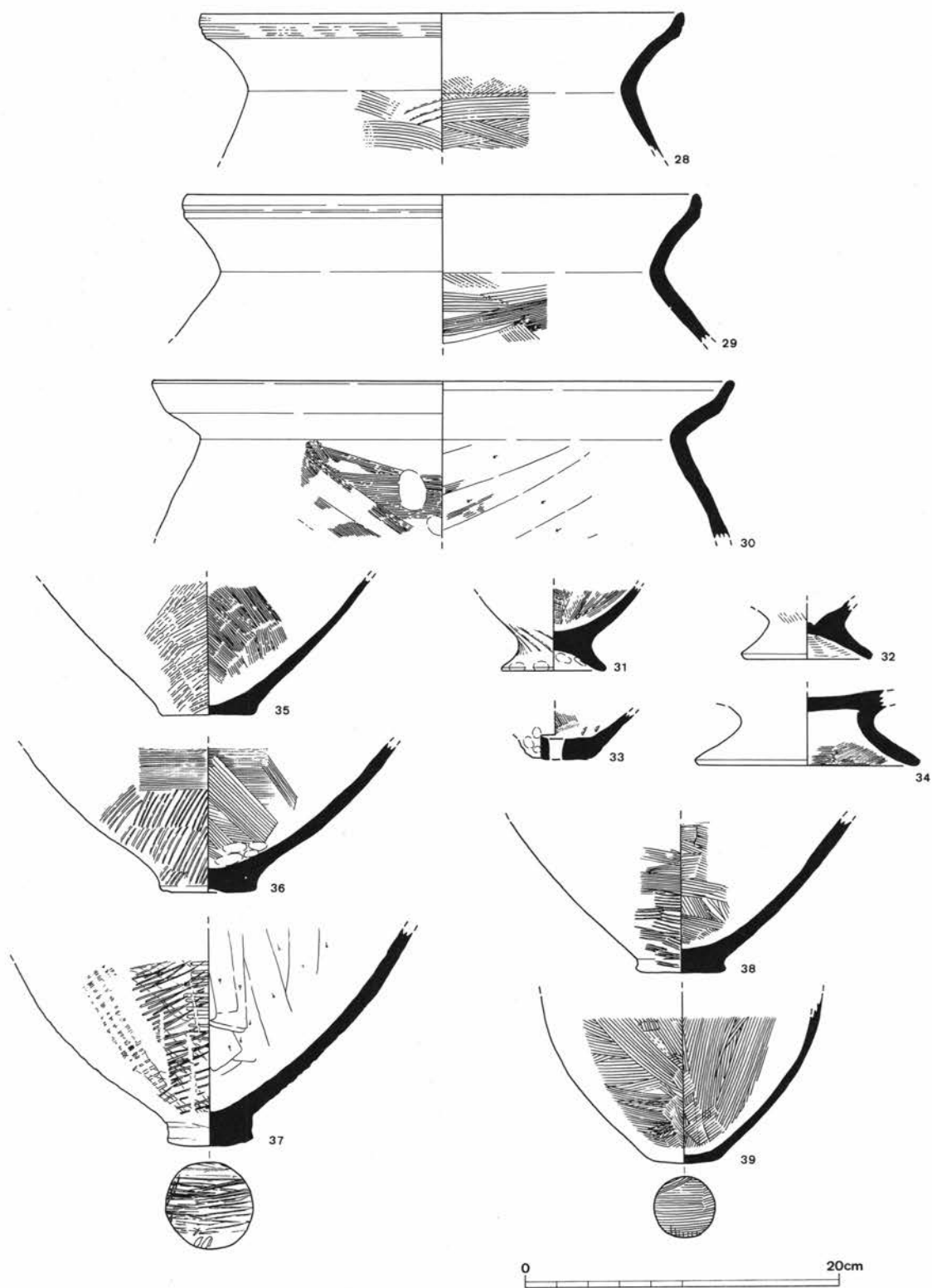
溝 SD12134出土遺物実測図



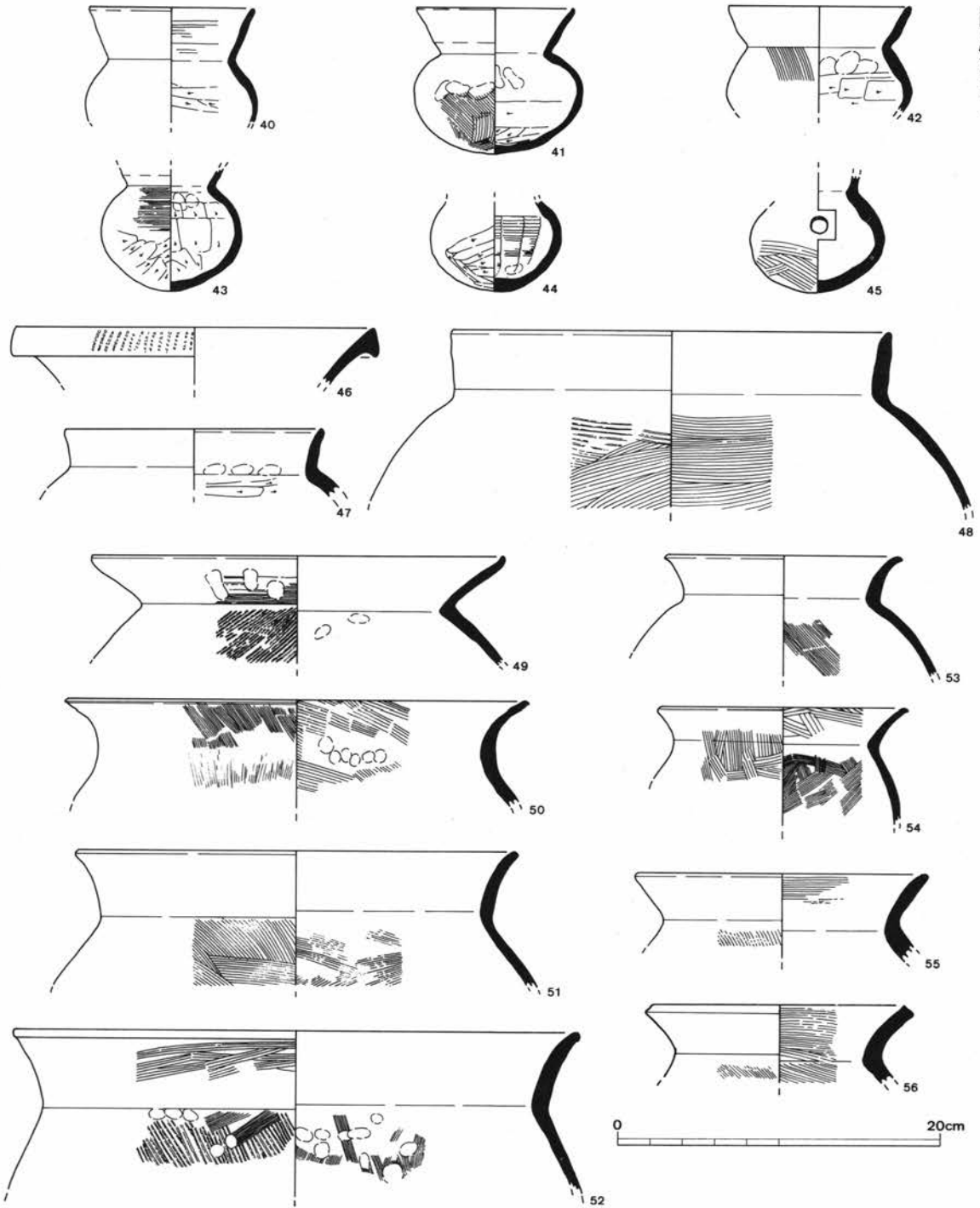
溝 SD12121出土遺物実測図 (1)



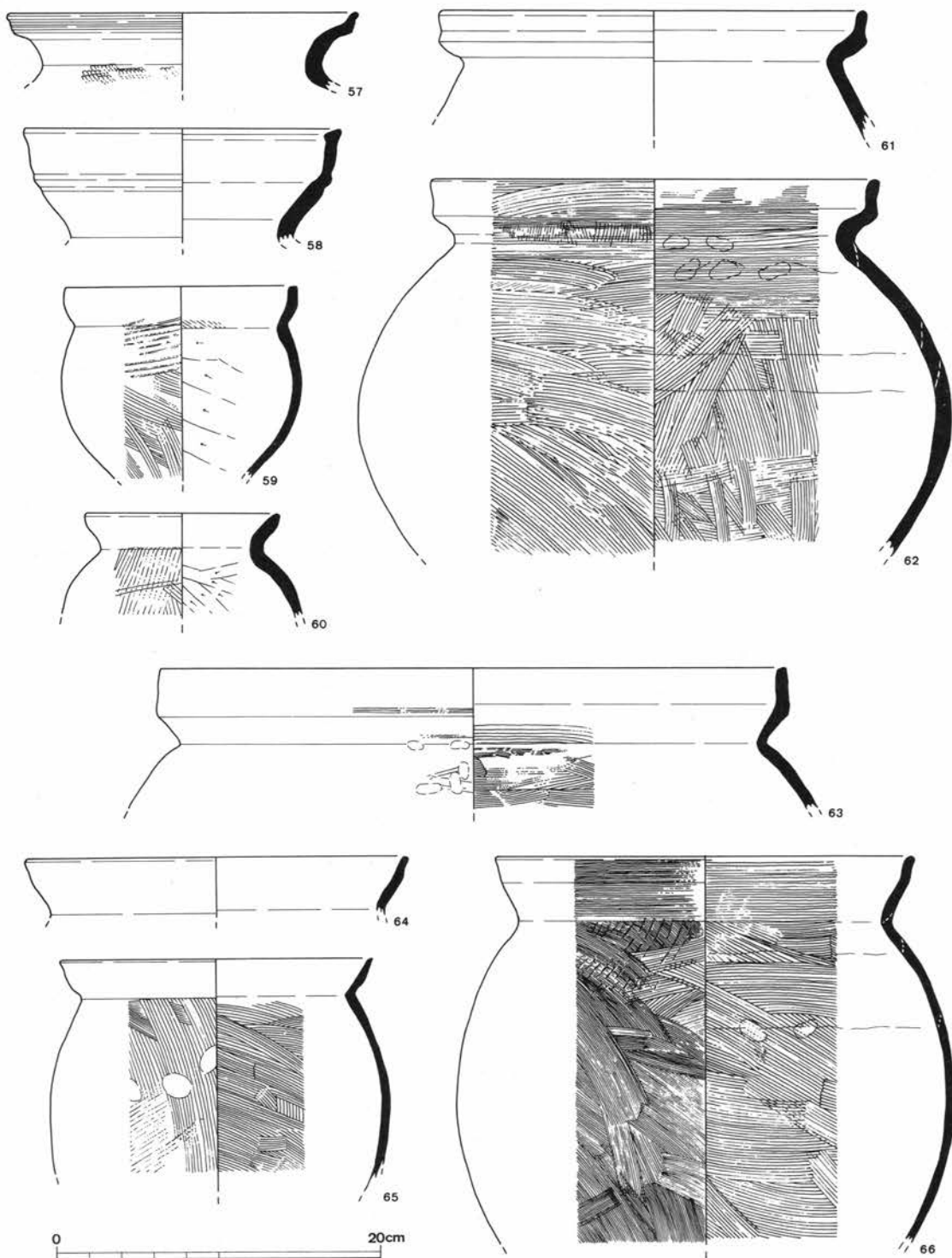
沟 SD12121出土遗物实测图 (2)



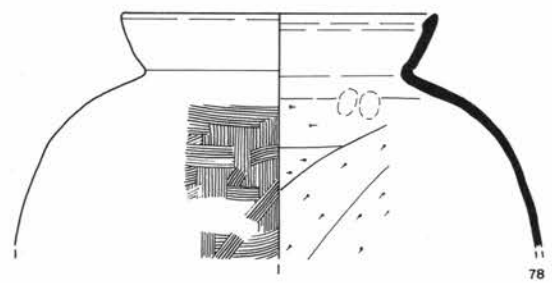
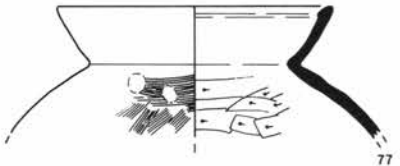
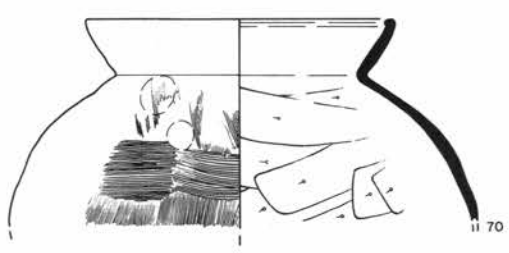
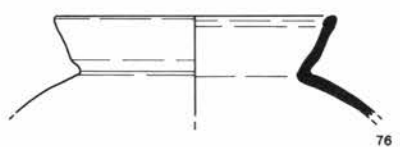
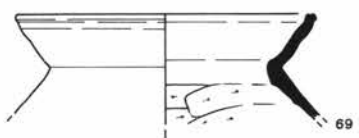
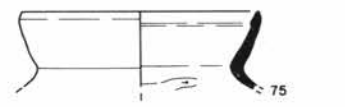
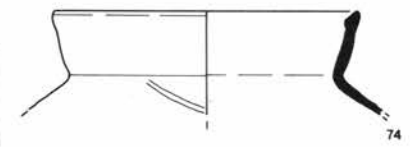
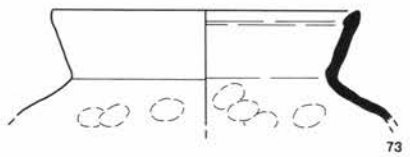
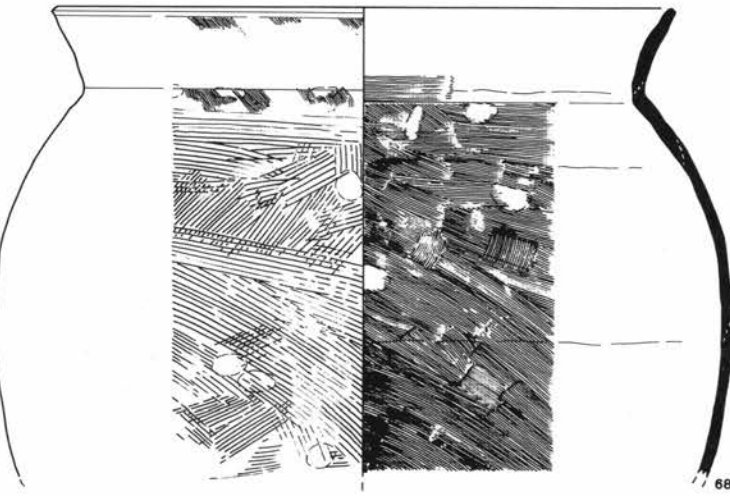
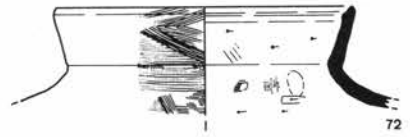
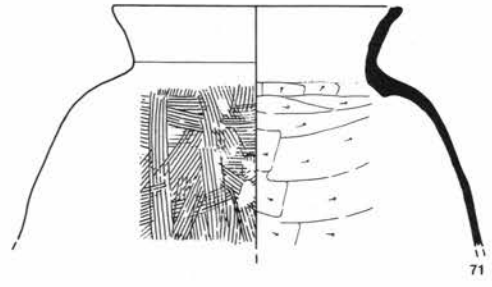
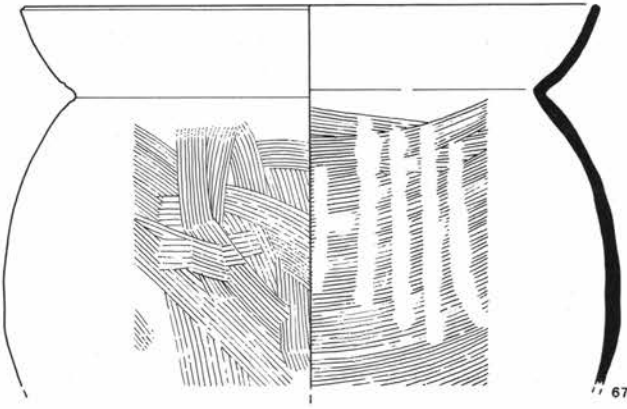
自然流路跡 SR16001出土遺物実測図 (1)



自然流路跡 SR16001出土遺物実測図 (2)

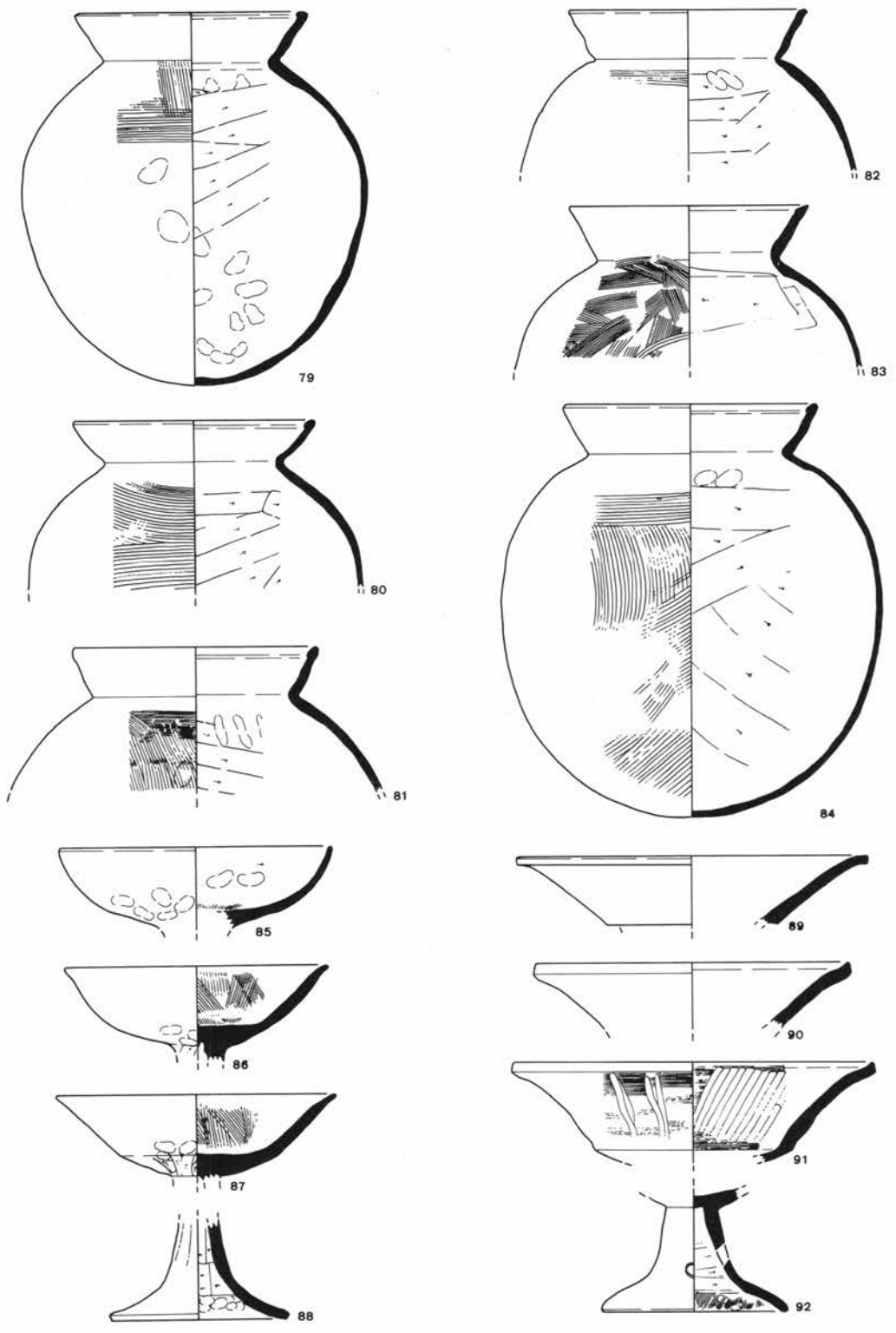


自然流路跡 SR16001出土遺物実測図 (3)

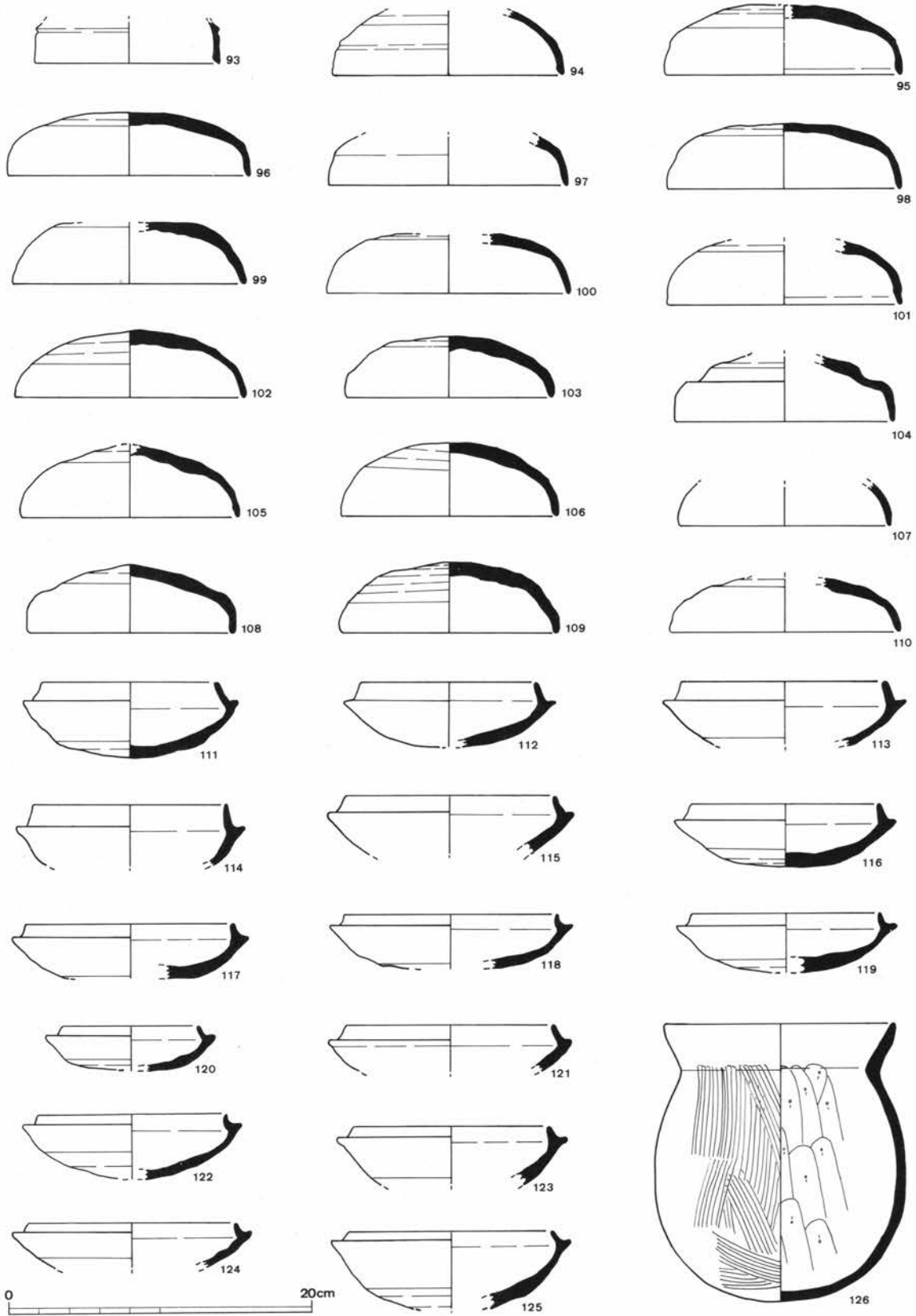


0 20cm

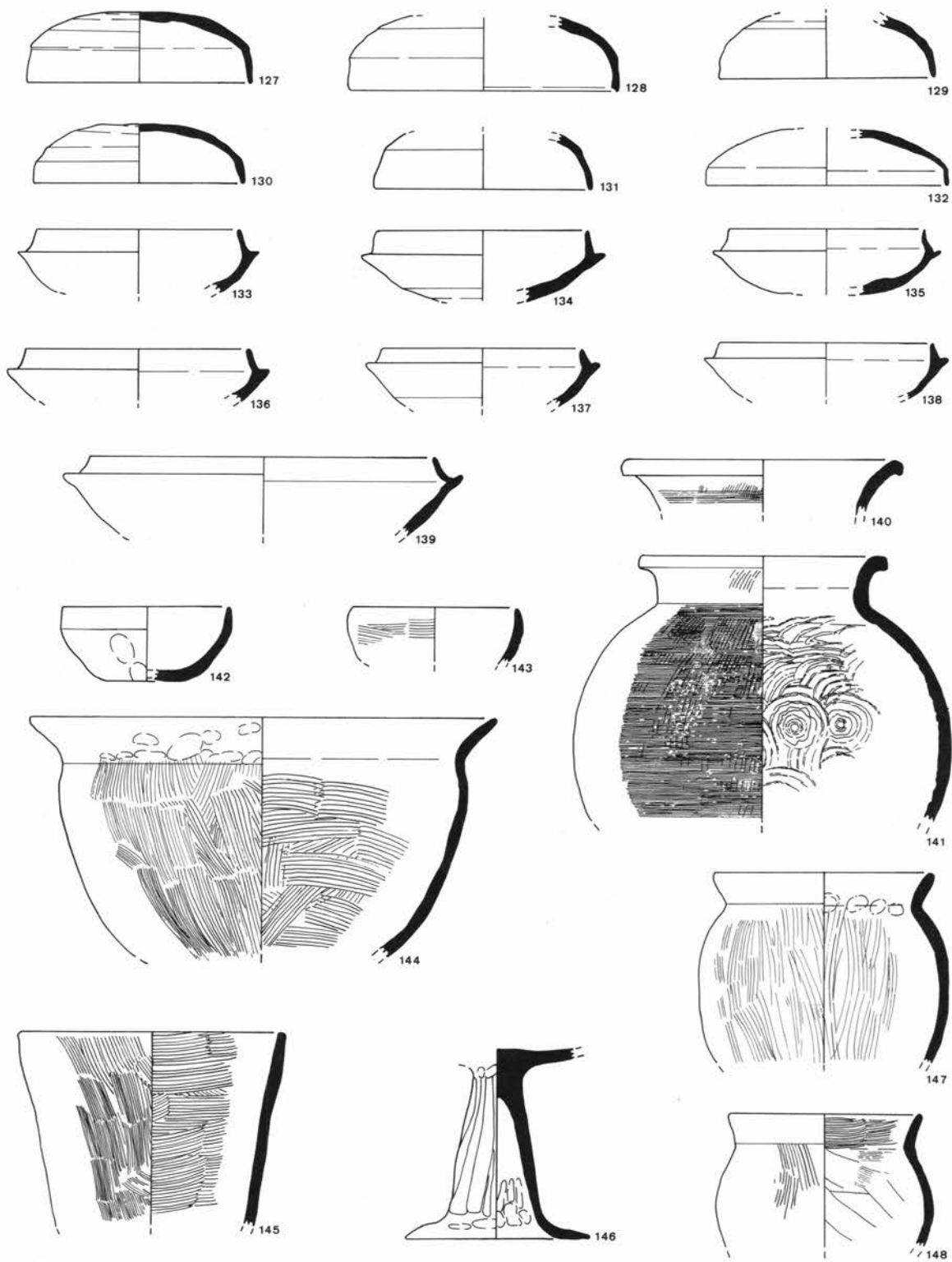
自然流路跡 SR16001出土遺物実測図 (4)



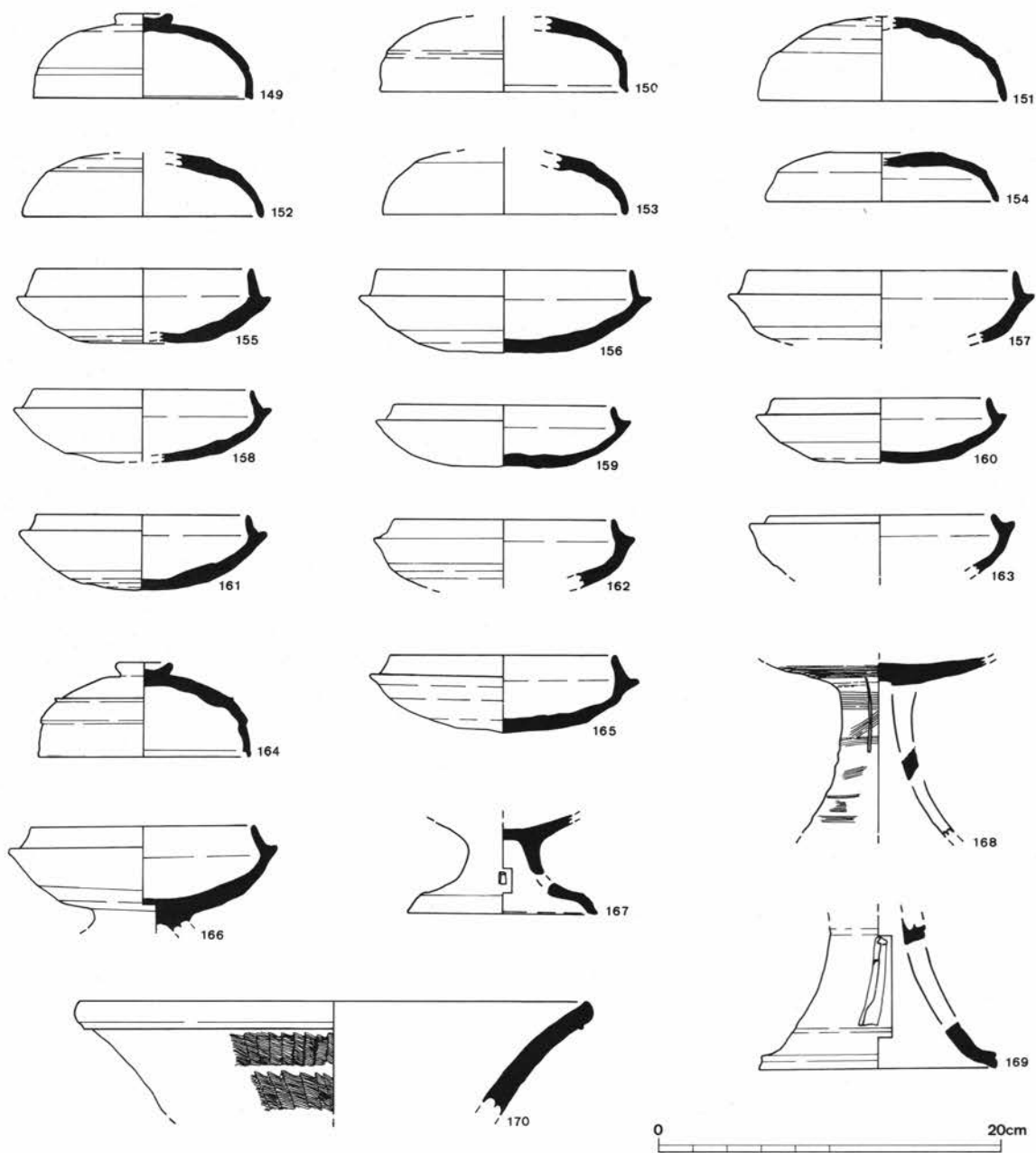
自然流路跡 SR16001出土遺物 (5)



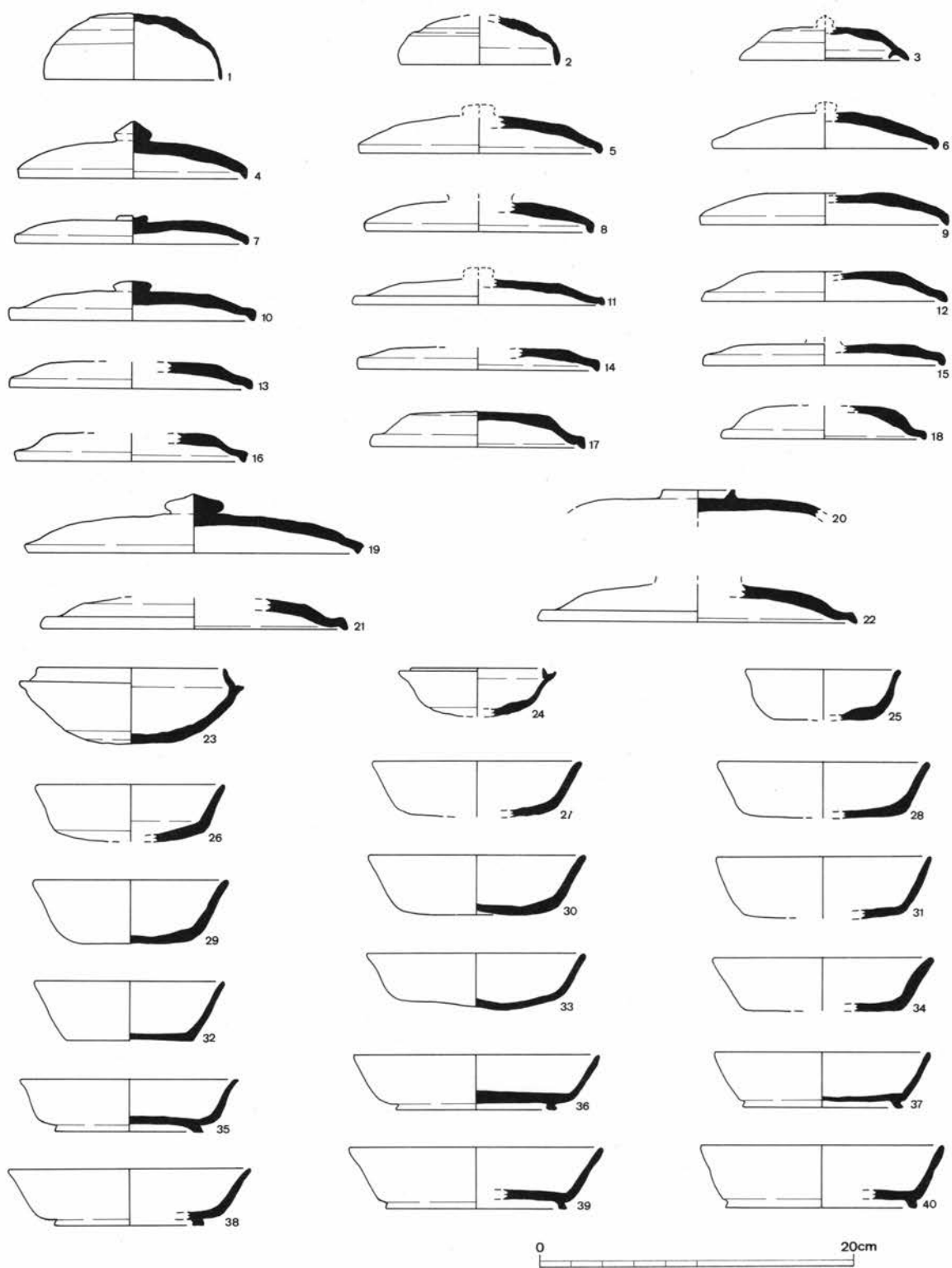
6区土坑出土遗物实测图(1)



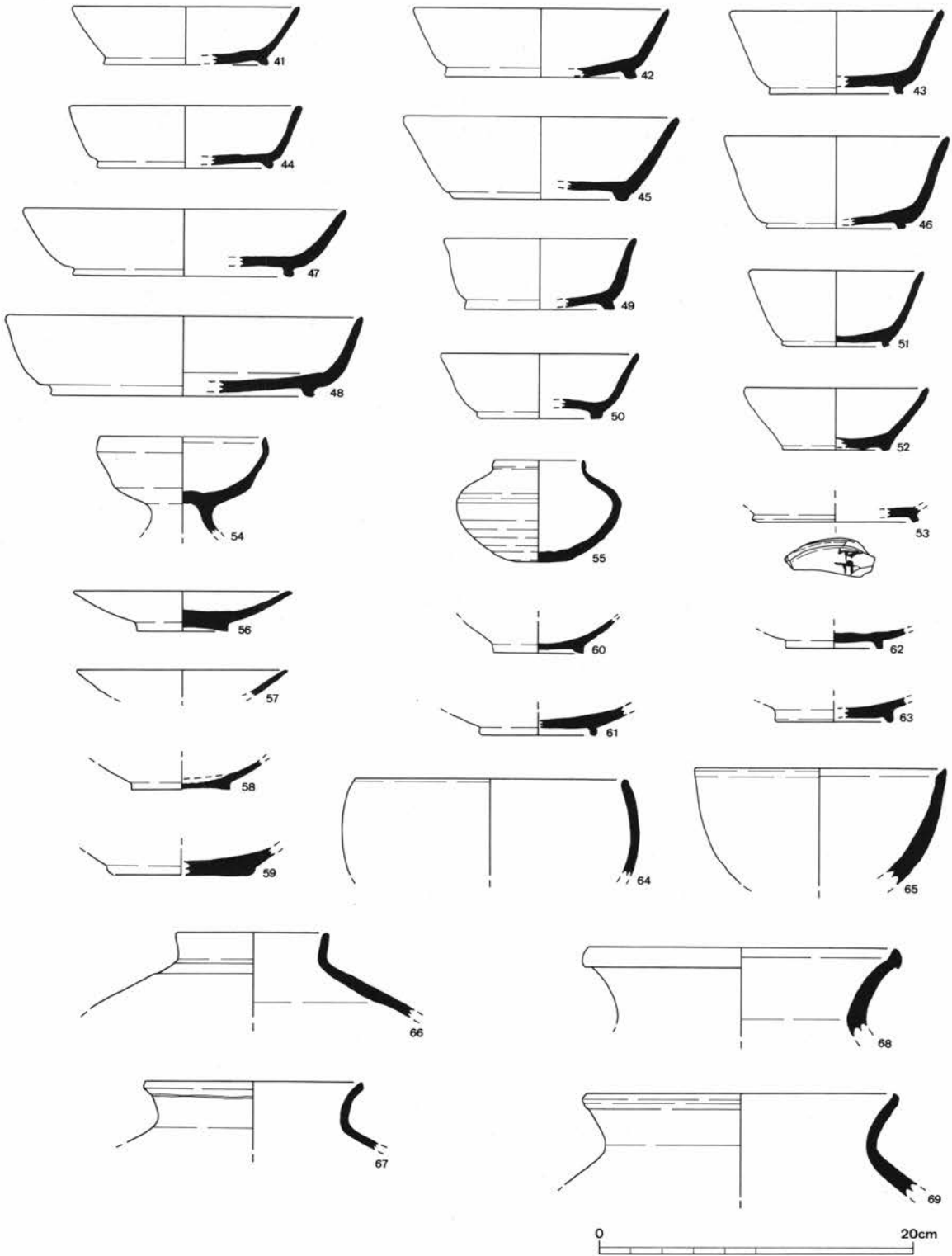
6区土坑出土遗物实测图(2)



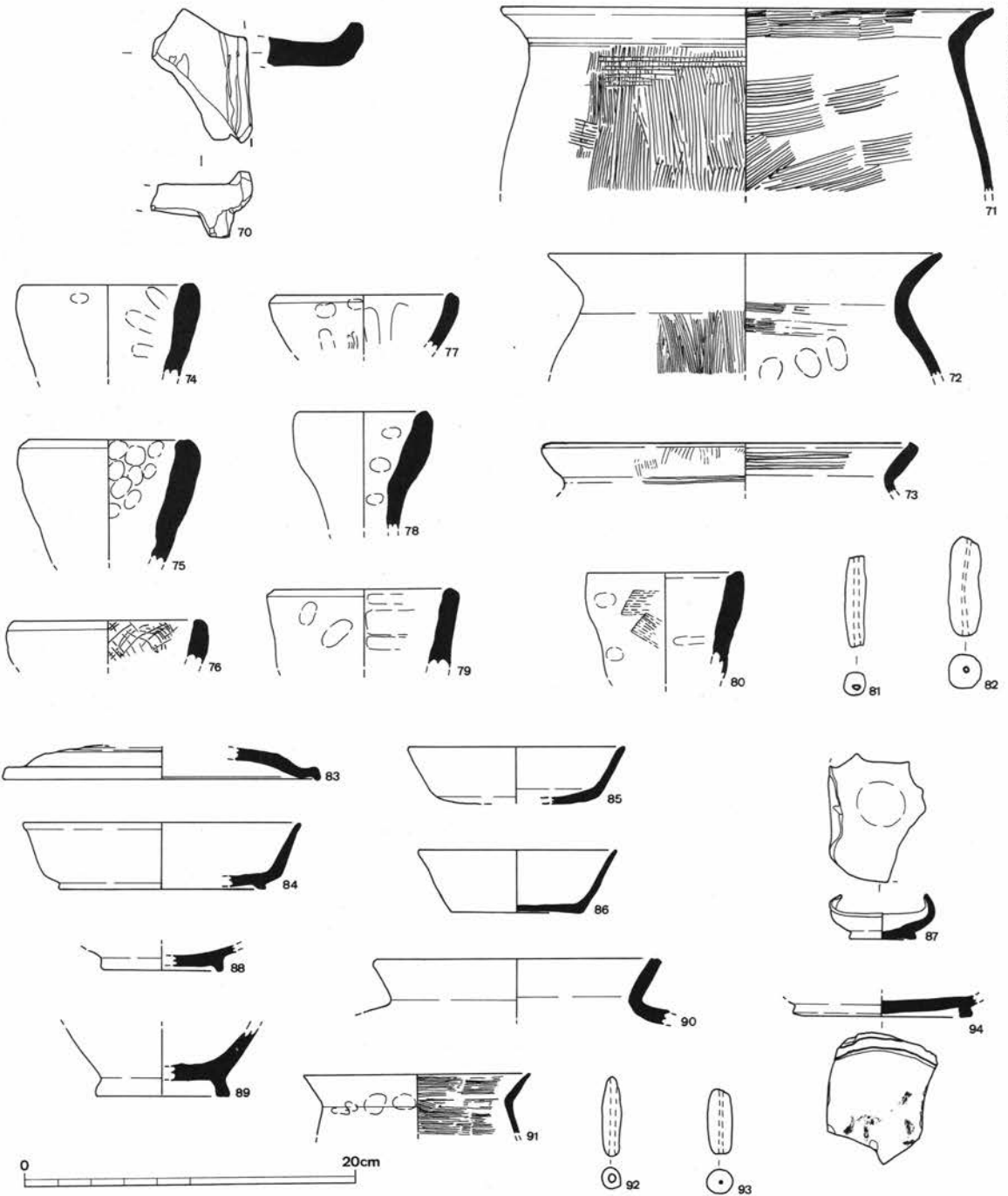
5~7区出土遺物実測図



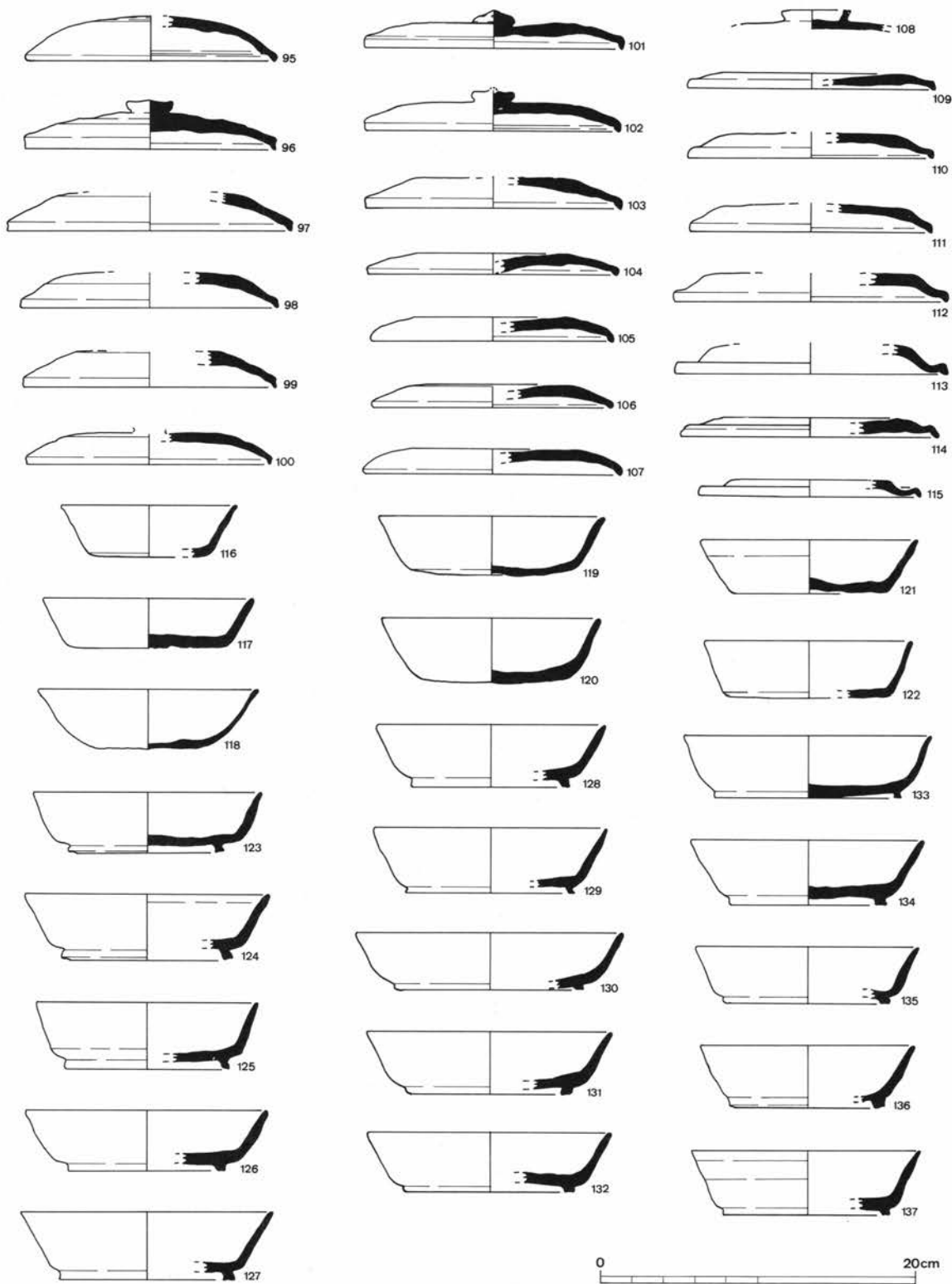
Aブロック(4区)出土遺物実測図(1)



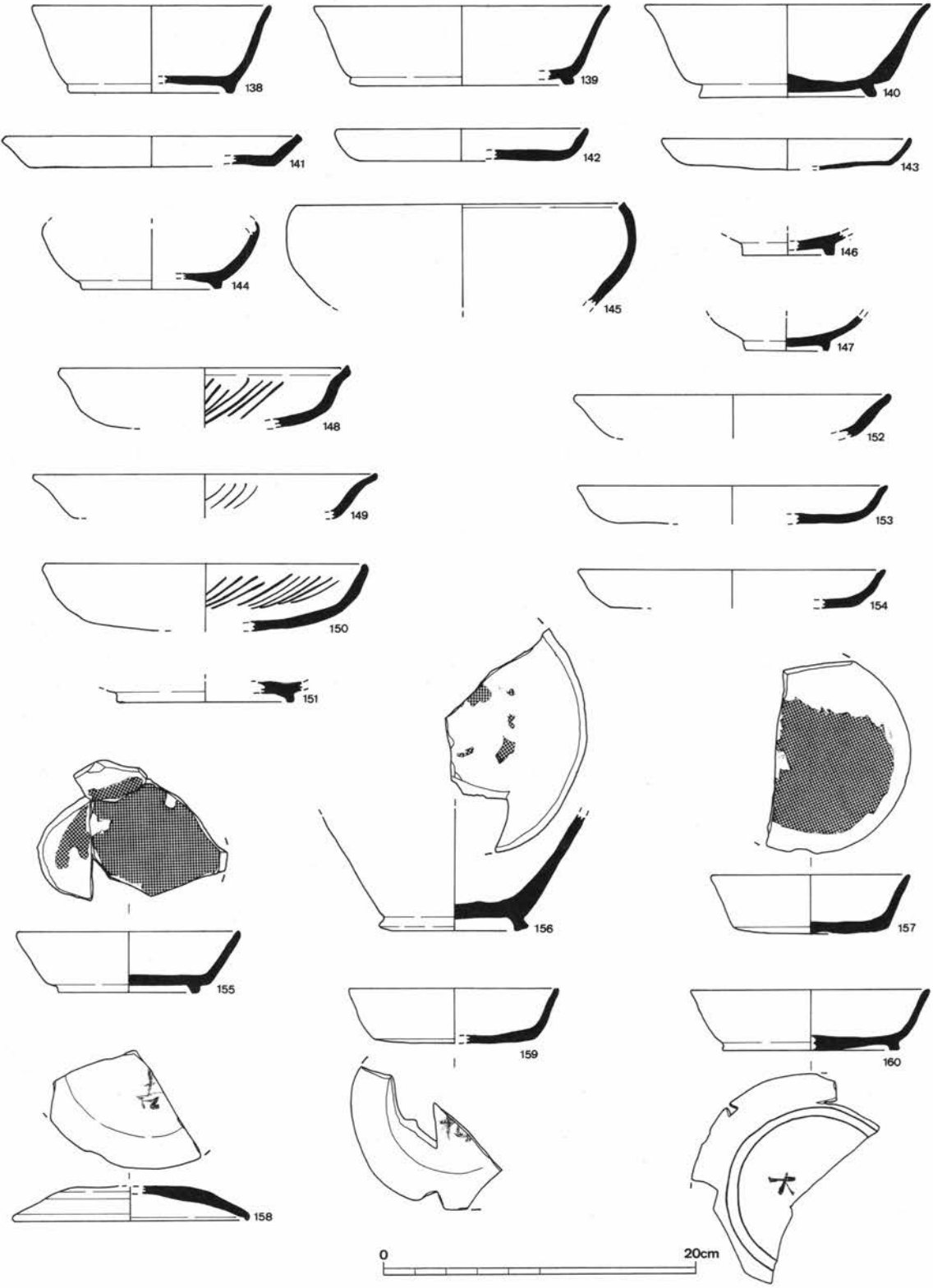
Aブロック(4区)出土遺物実測図(2)



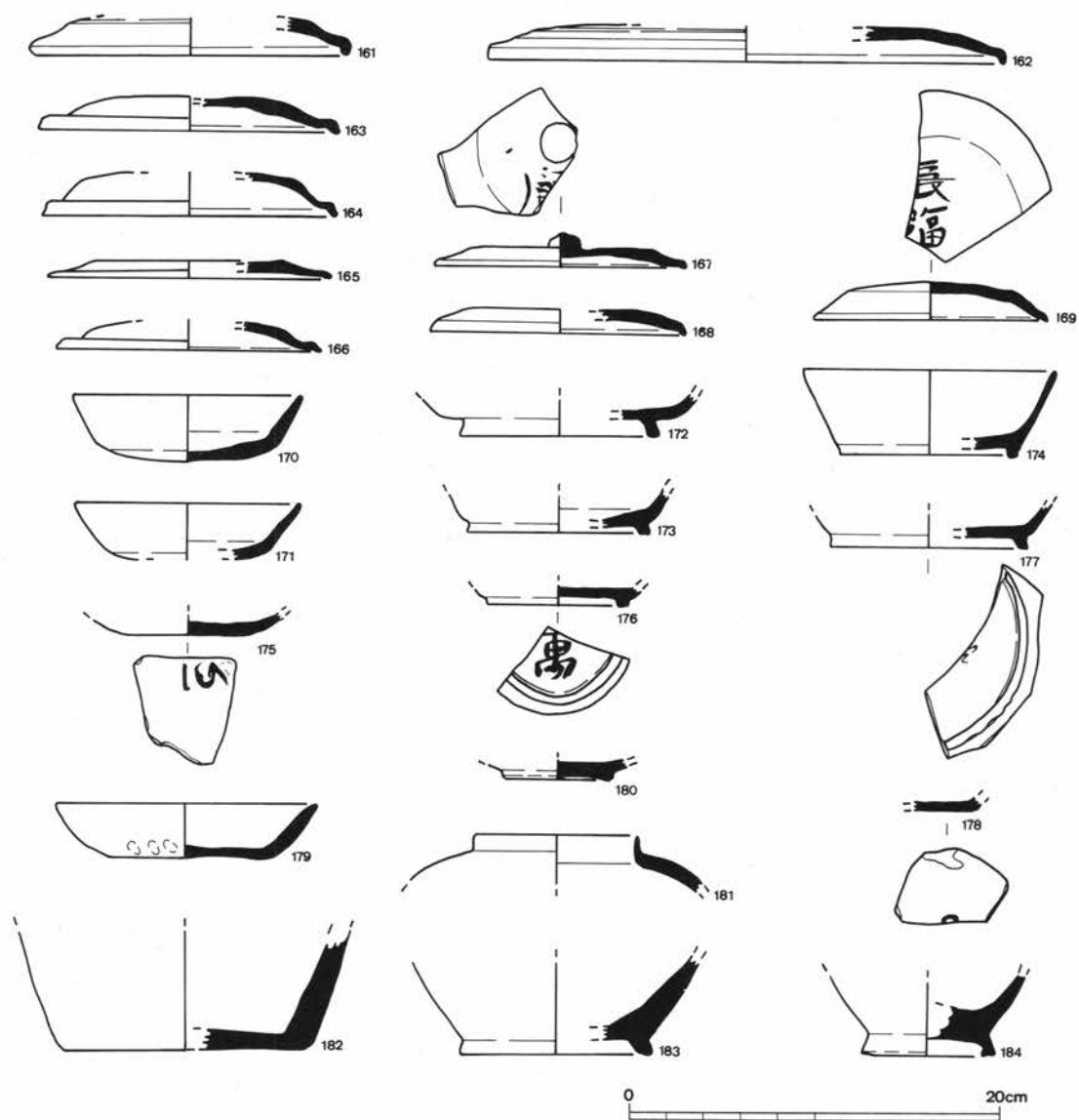
Aブロック(1・4区)出土遺物実測図



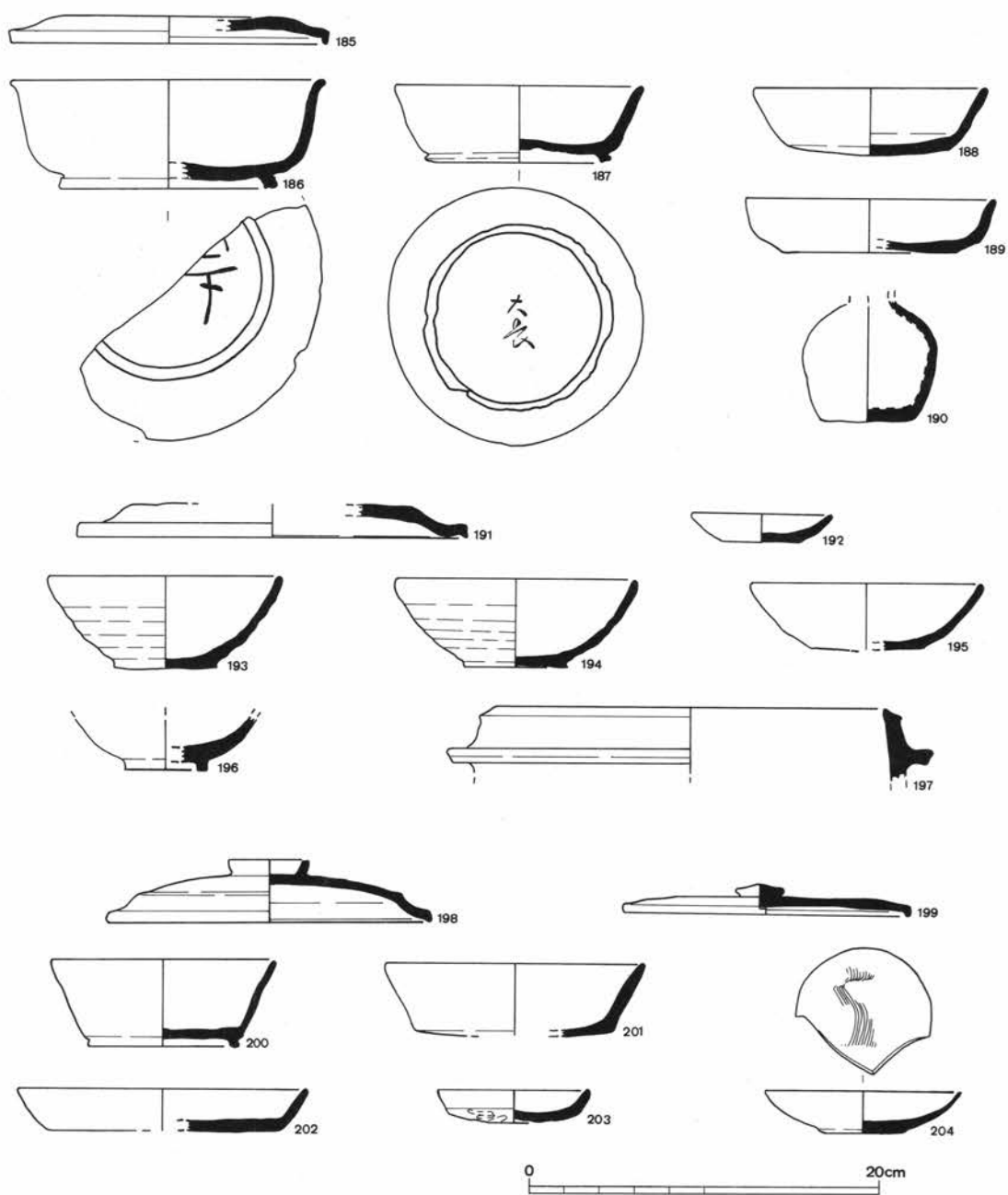
Bブロック出土遺物実測図 (1)



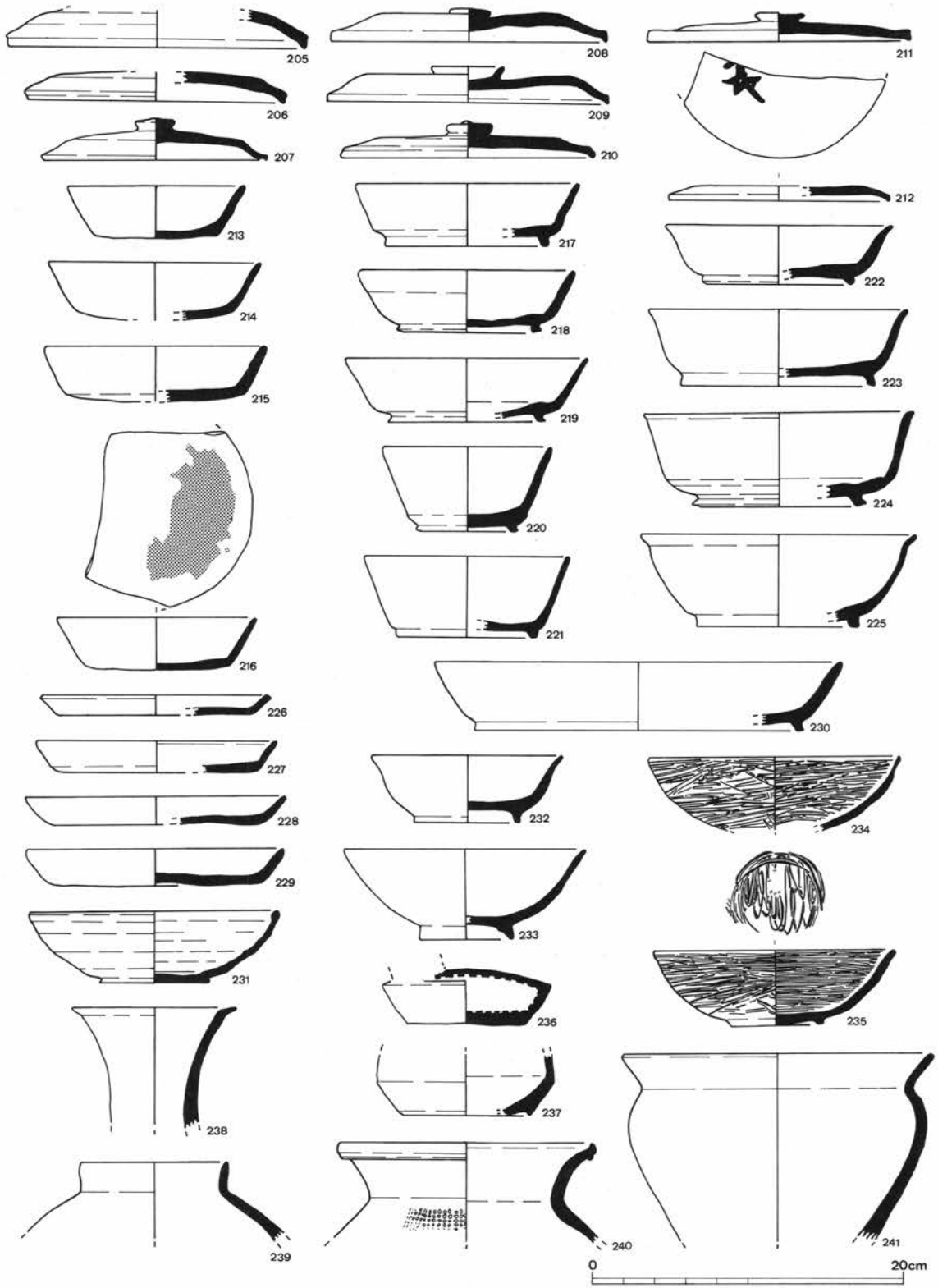
Bブロック出土遺物実測図 (2)



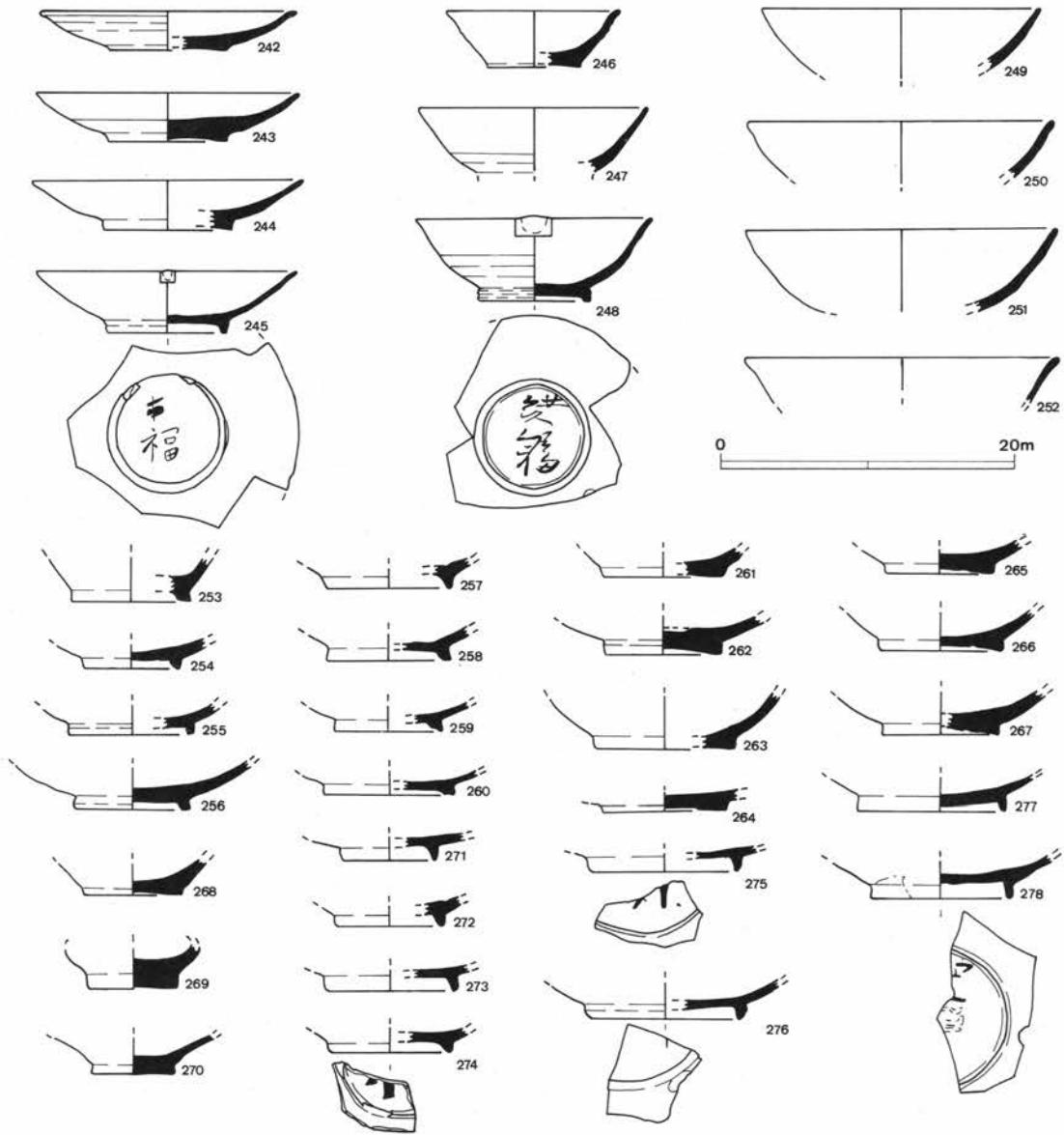
溝 SD21001出土遺物実測図



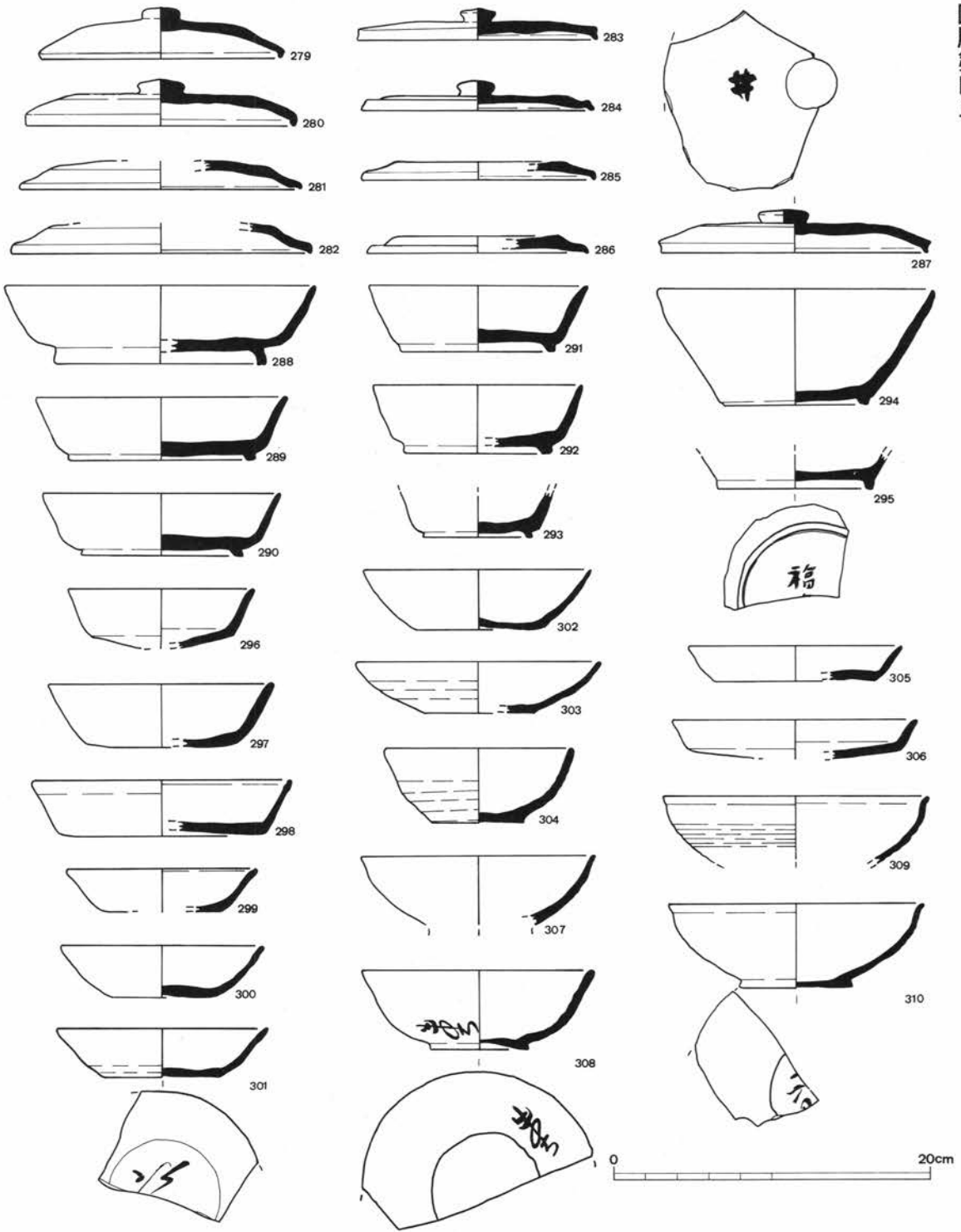
井戸跡 SE22001、溝 SD22100・SD23010出土遺物実測図



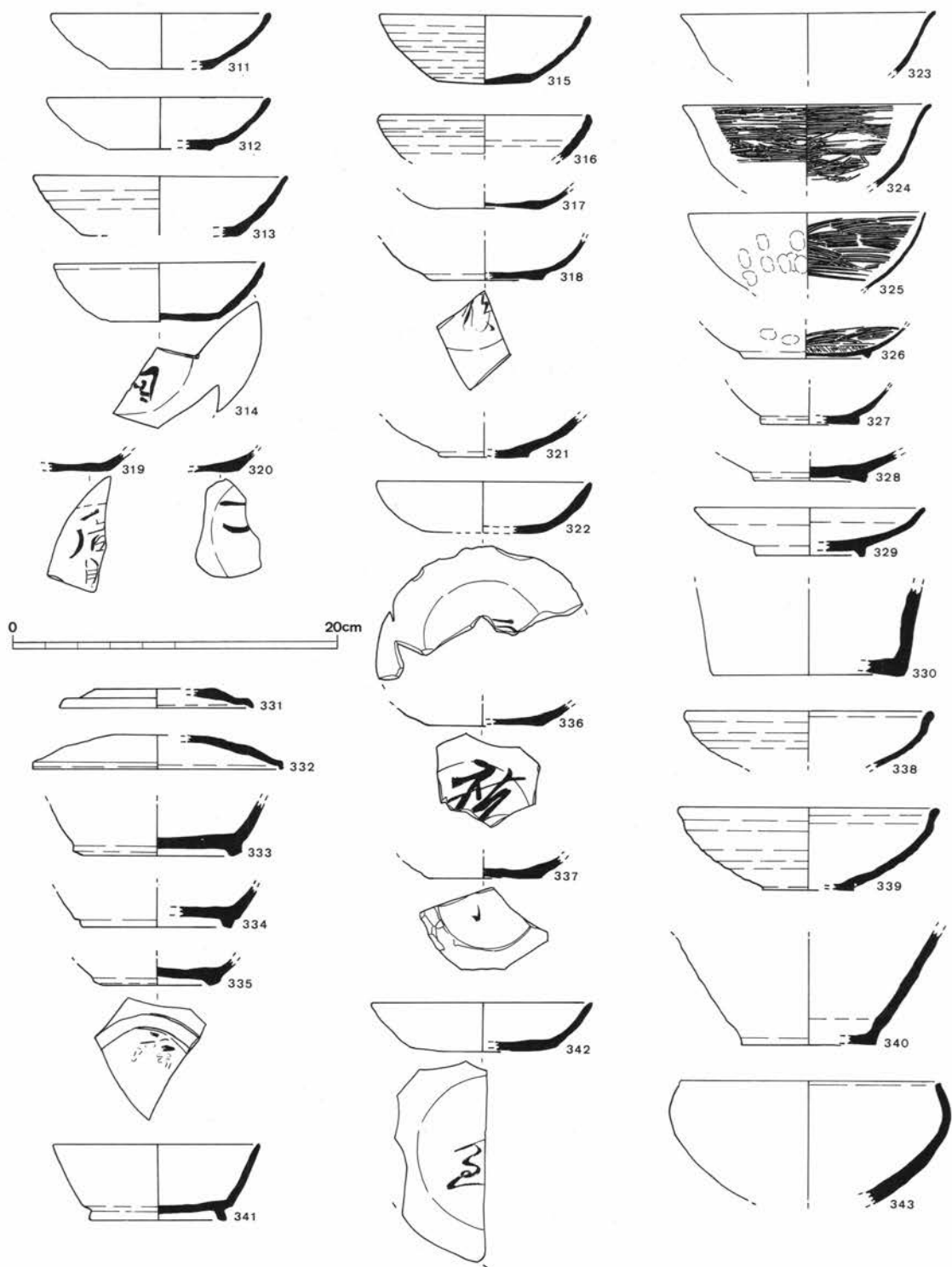
Cブロック(23区)出土遺物実測図



Dブロック出土緑釉・灰釉陶器実測図



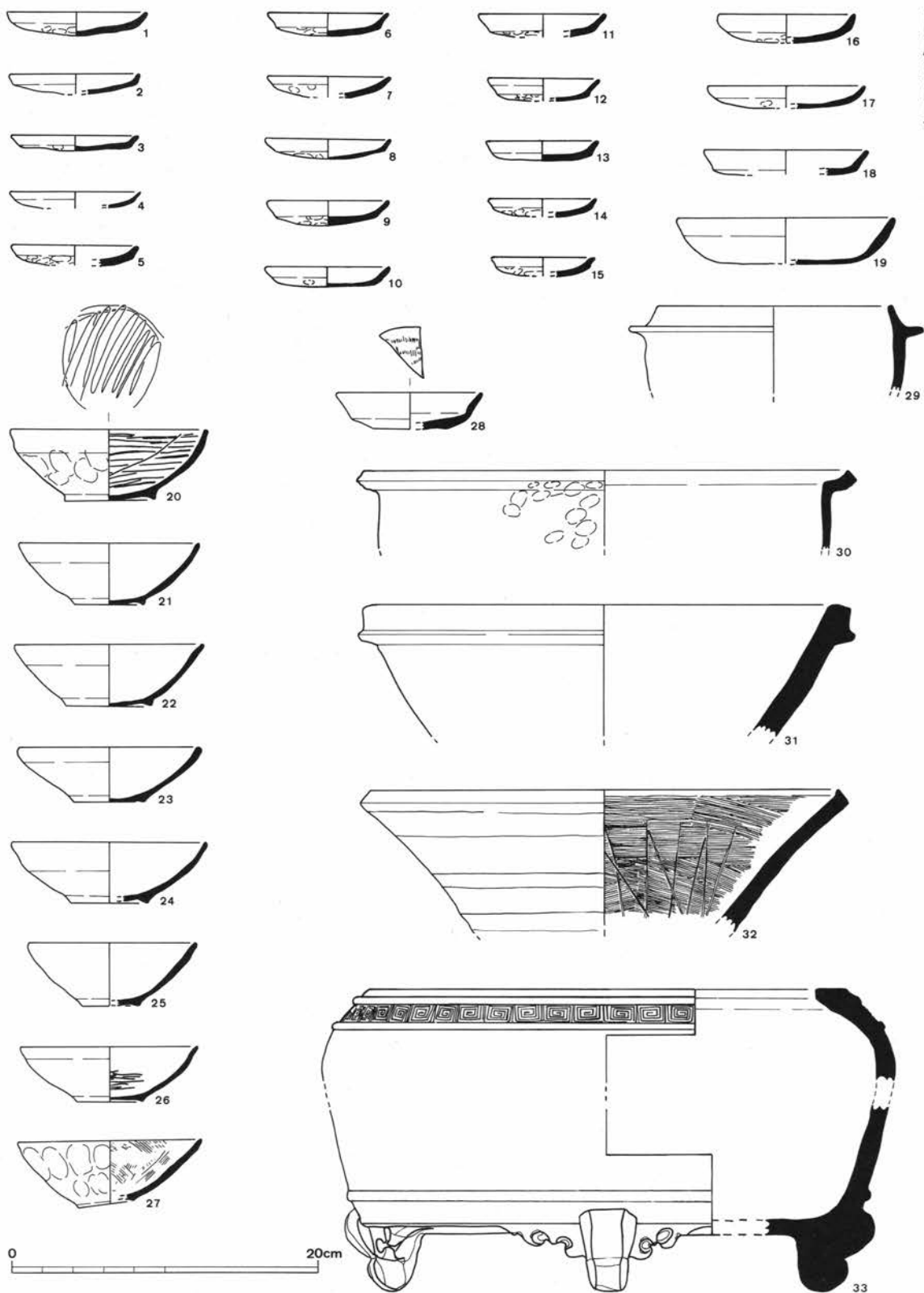
Dブロック(32区)出土遺物実測図



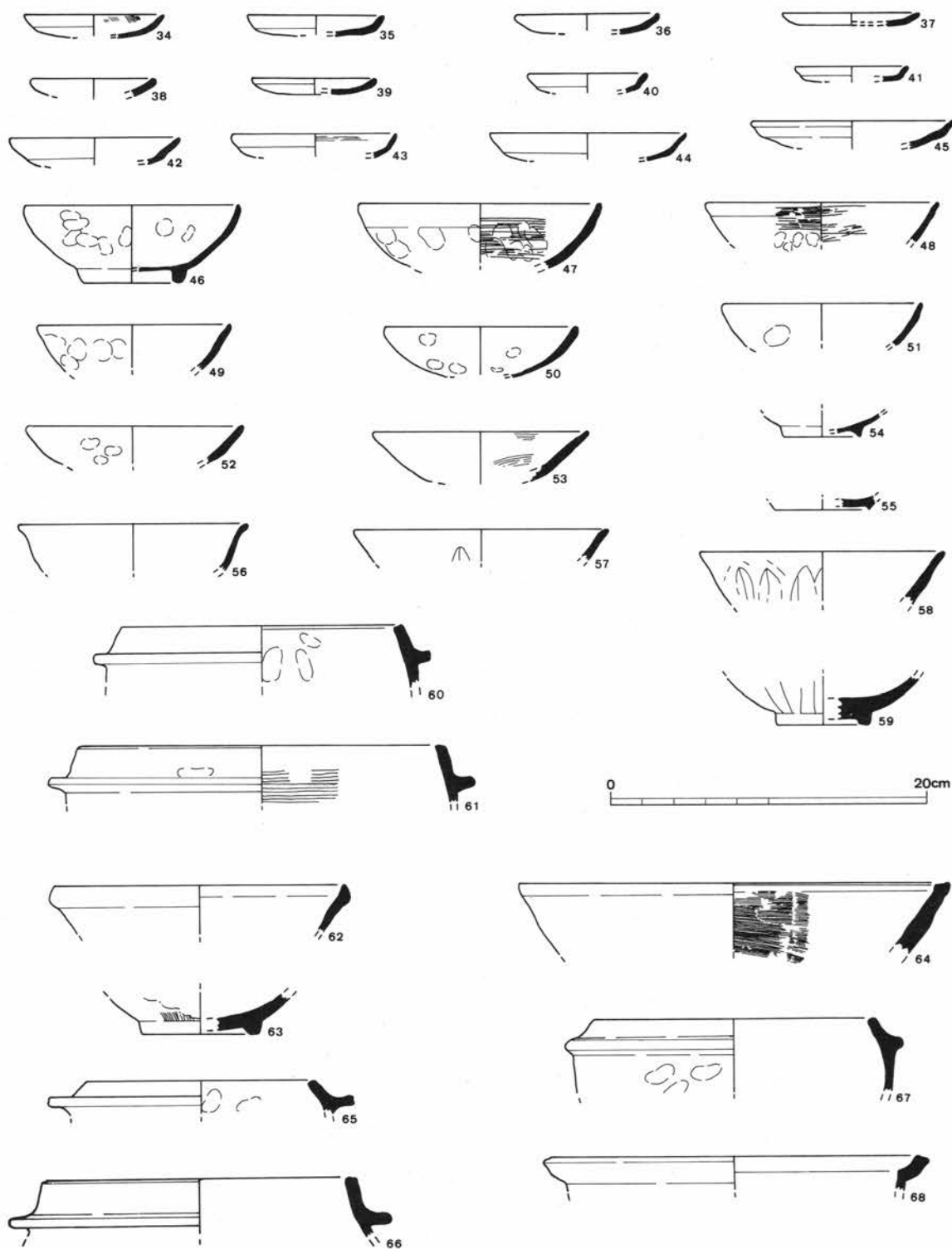
Dブロック(33・34区)出土遺物実測図

34区 SB34001(311・327) SB34002(319) SB34003(314・318・320・322) SB34004[P98(315・317・323~326)、P102(316)]
 柱穴 P104(313) SD34045(312) SK34061(321・328~330) 整地層(333~335) 包含層(331・332・336~340)

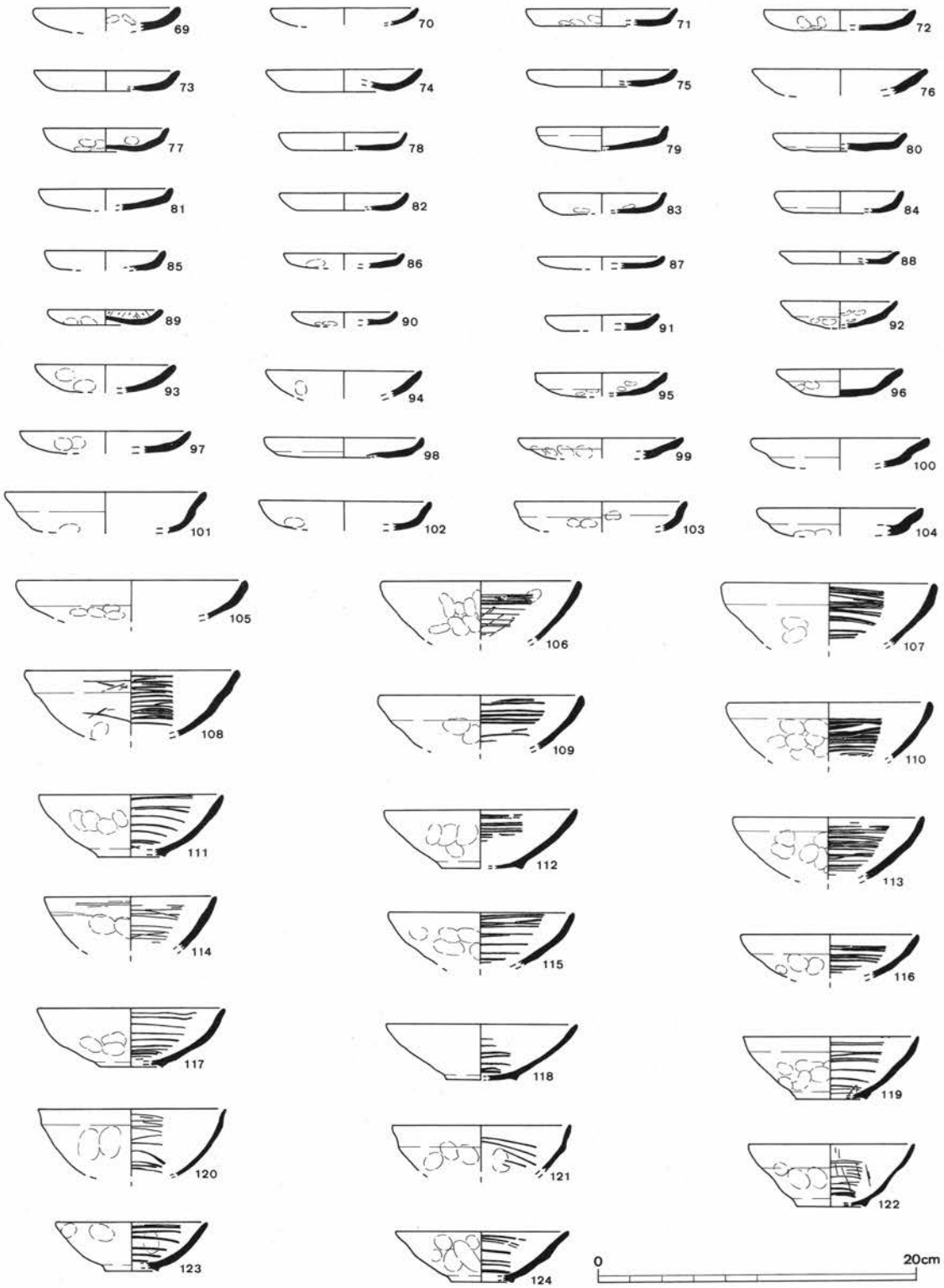
33区(341~343)



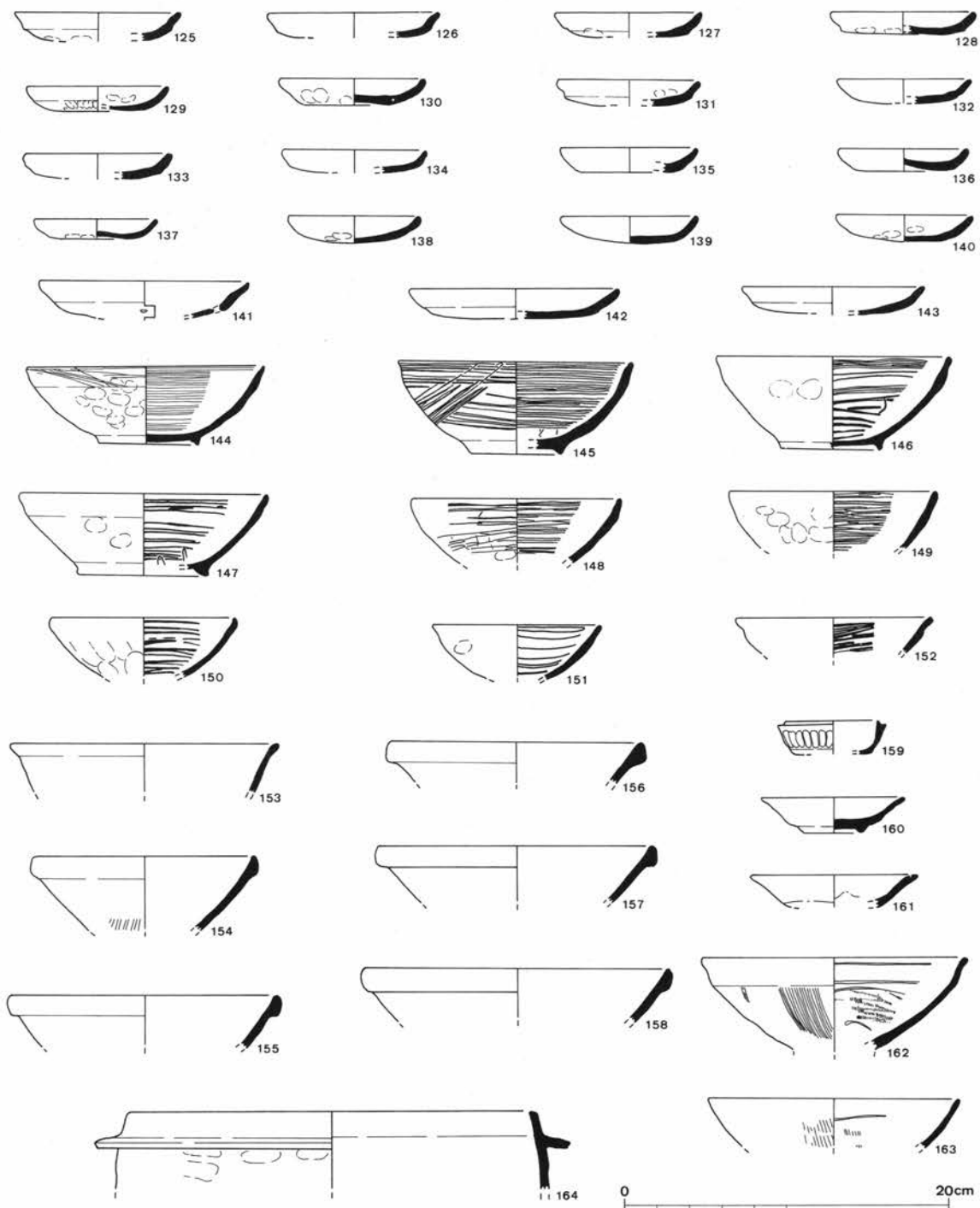
Aブロック(4区)出土遺物実測図



Bブロック出土遺物実測図

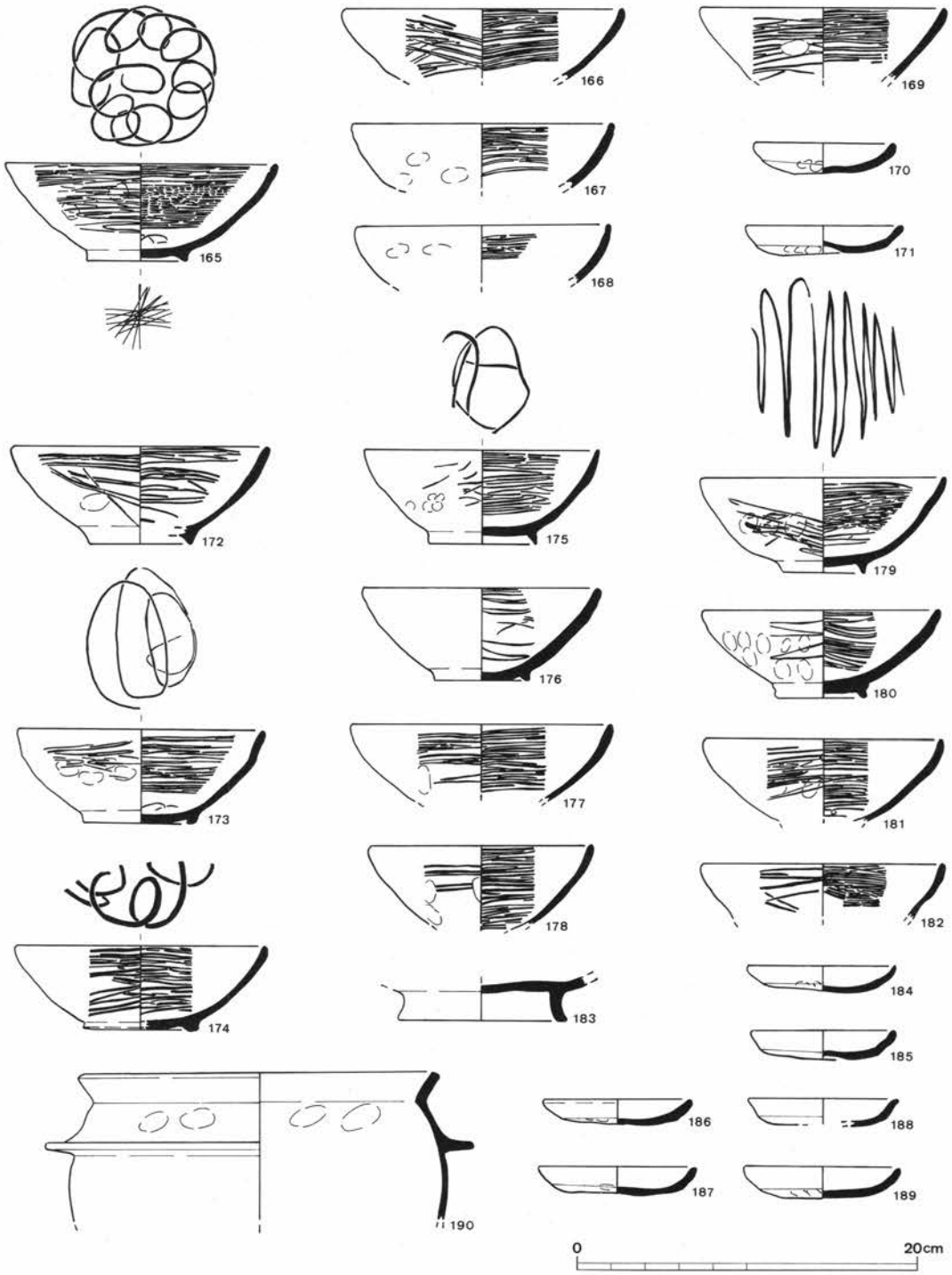


Bブロック(16区)出土遺物実測図



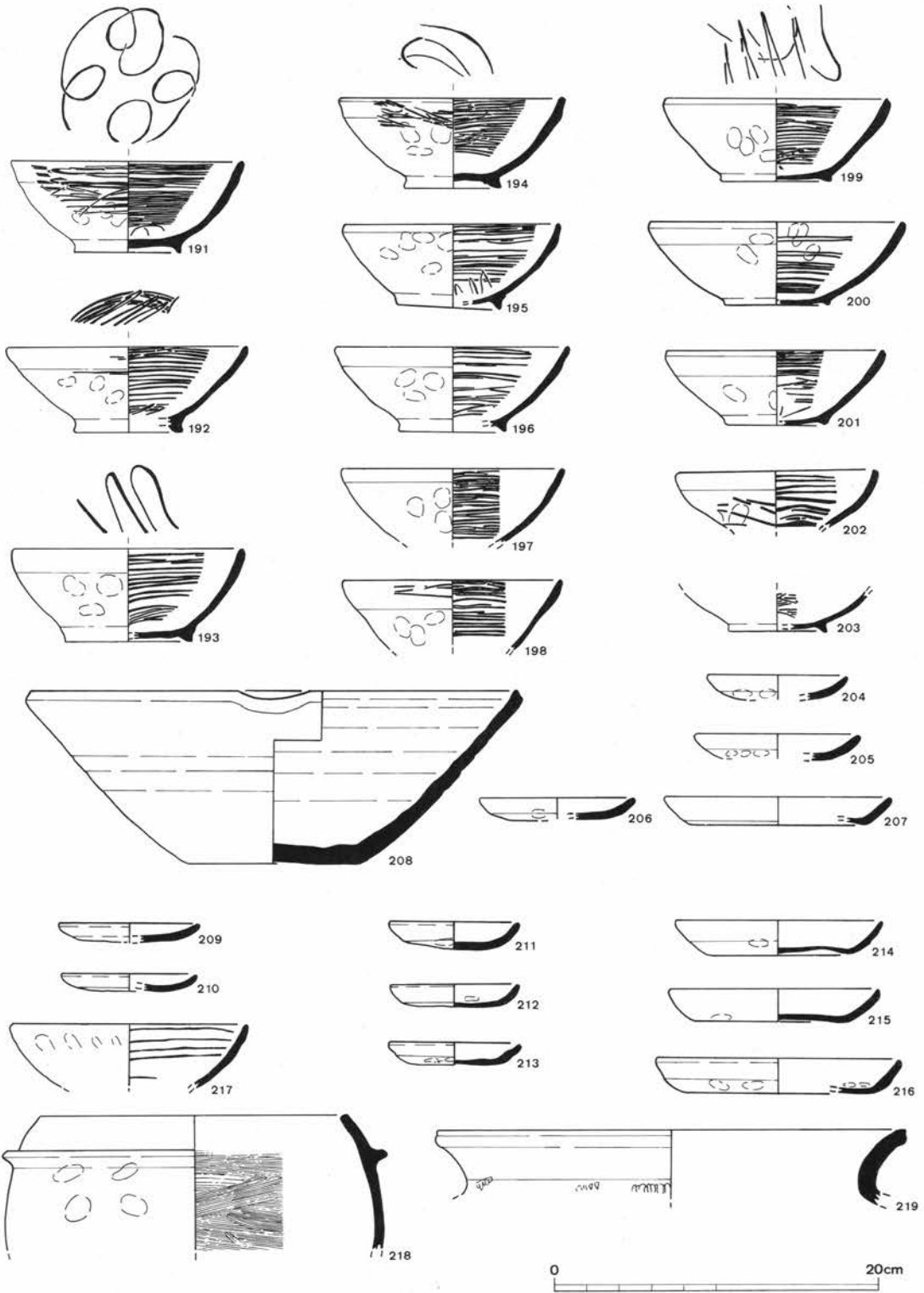
Cブロック(11・12区)出土遺物実測図

SB12001〔柱穴(P051)〕144、これ以外は11・12区包含層出土



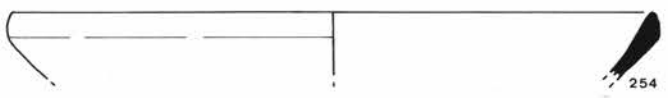
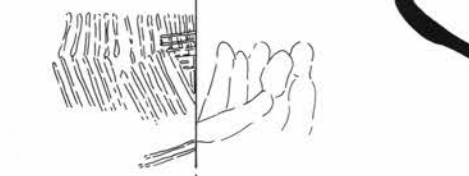
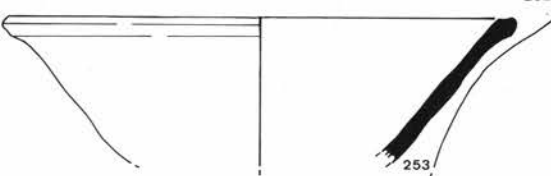
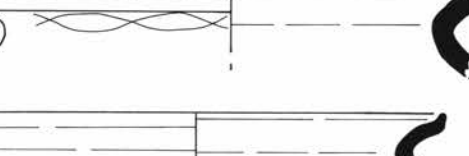
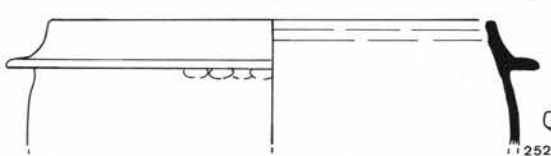
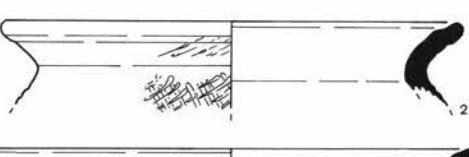
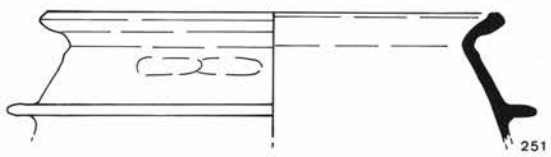
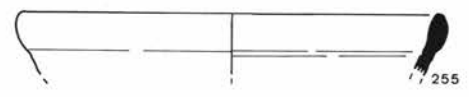
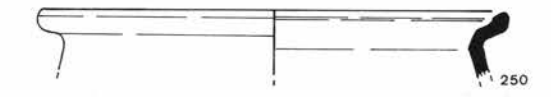
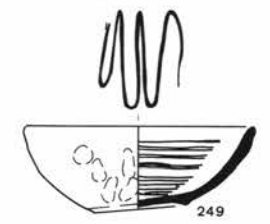
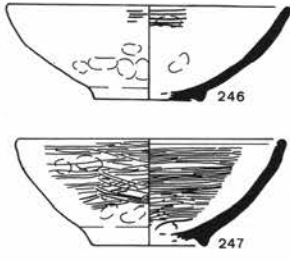
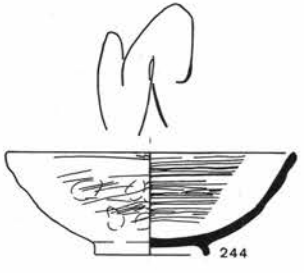
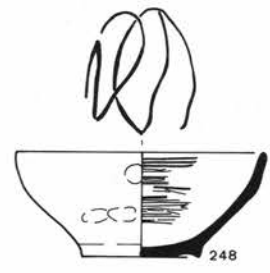
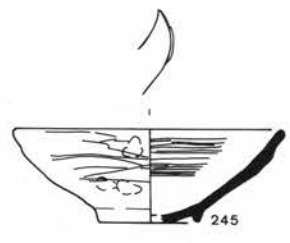
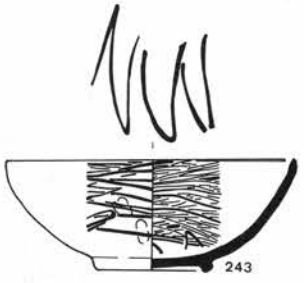
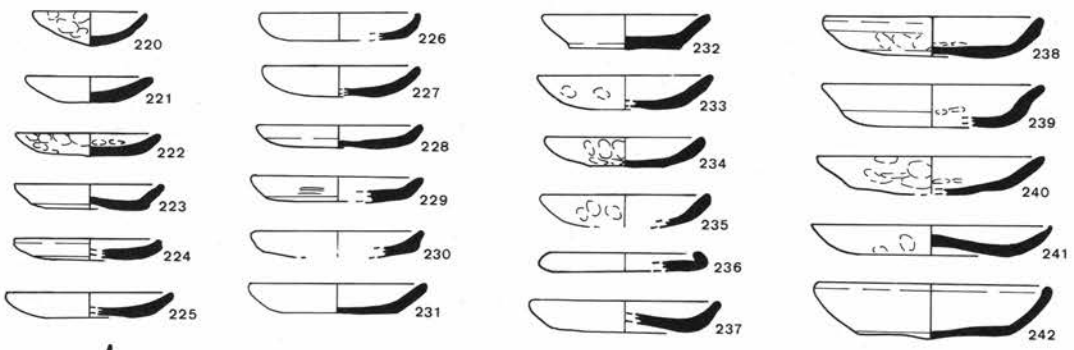
井戸跡 SE11019出土遺物実測図

井戸内 (165~171) 井戸肩部 (172~190)

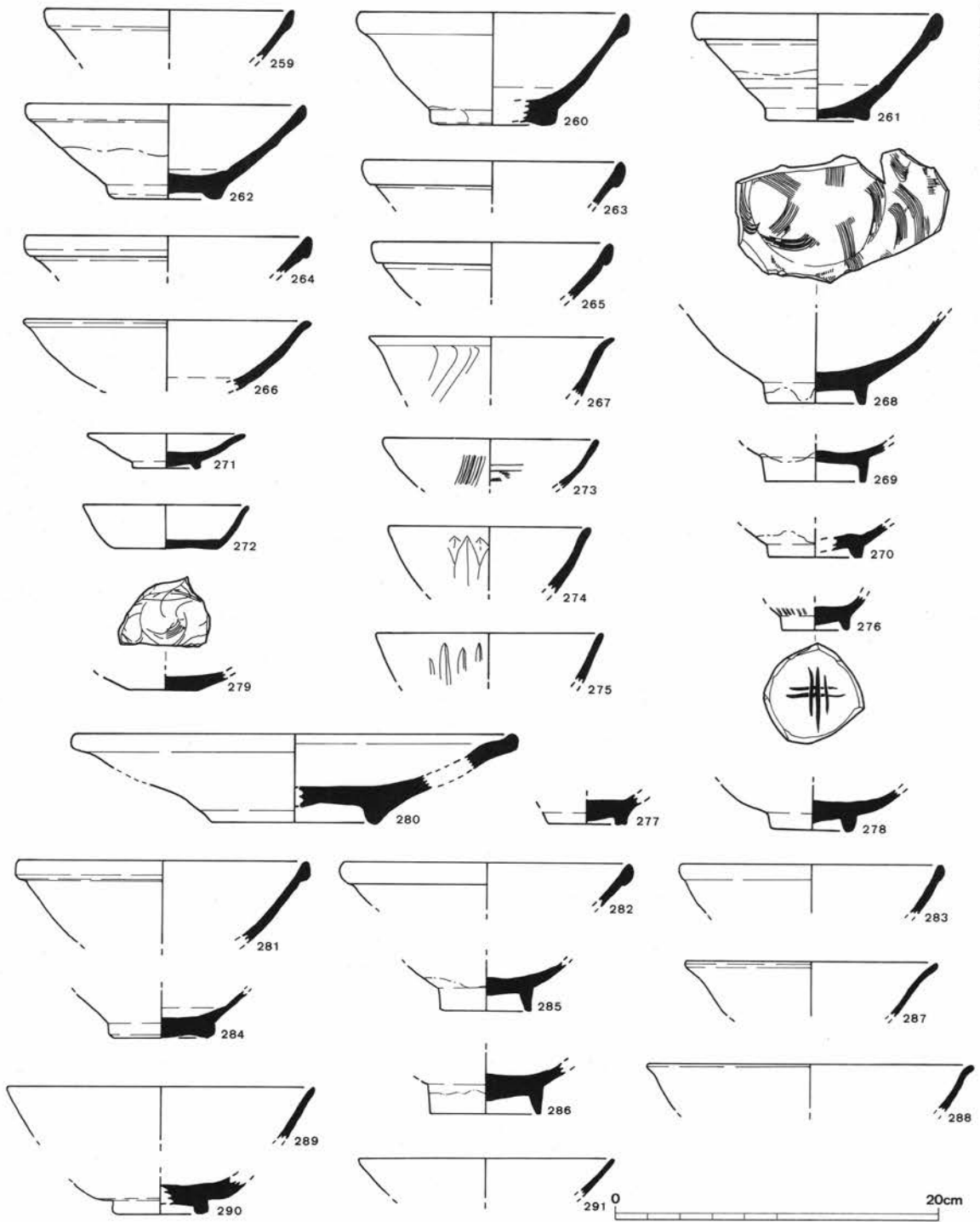


井戸跡 SE11039・柱穴出土遺物実測図

SE11039(191~208) P002(214) P003(209・211) P037(210・212・213・215~219)

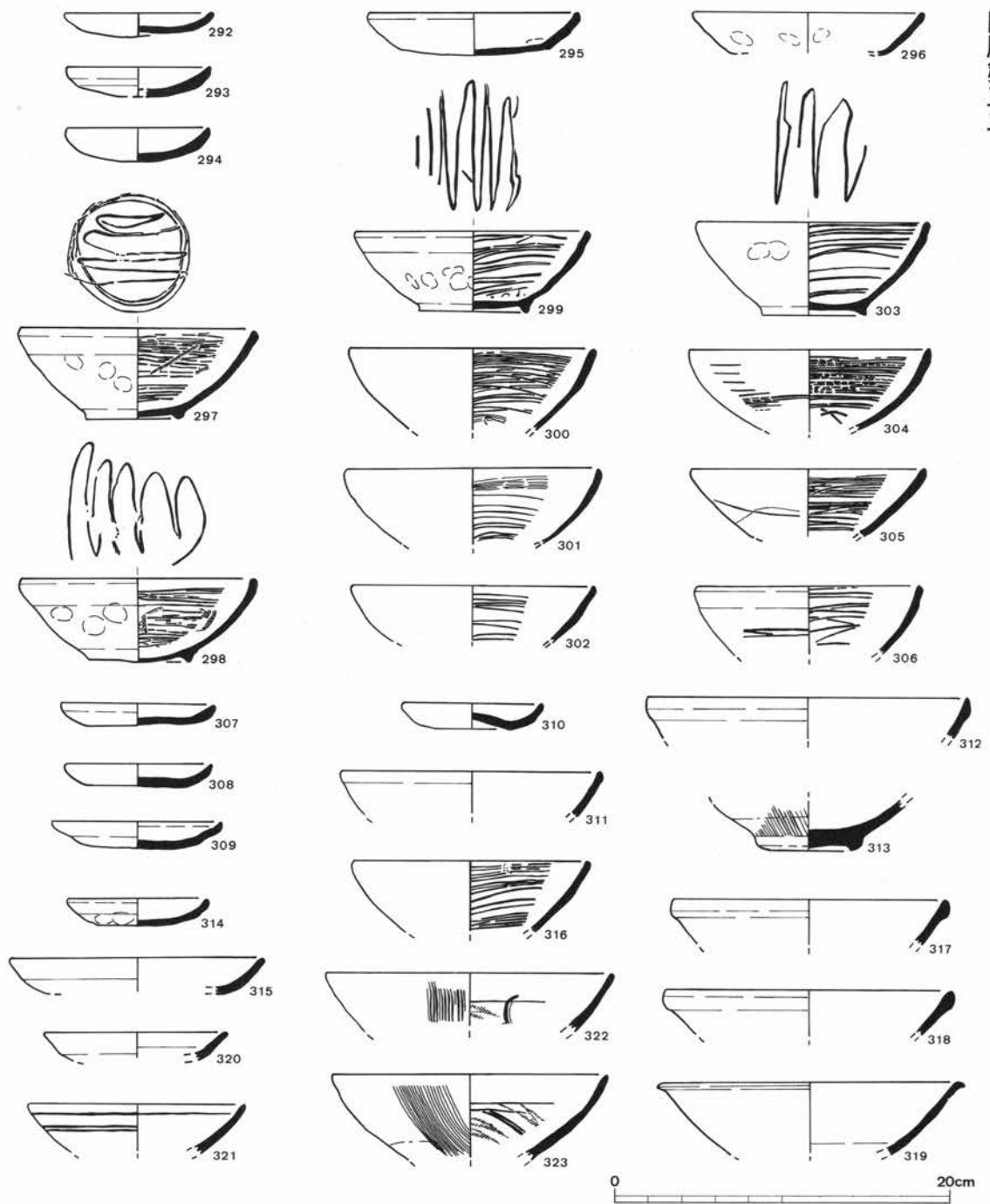


Cブロック(23区)出土遺物実測図



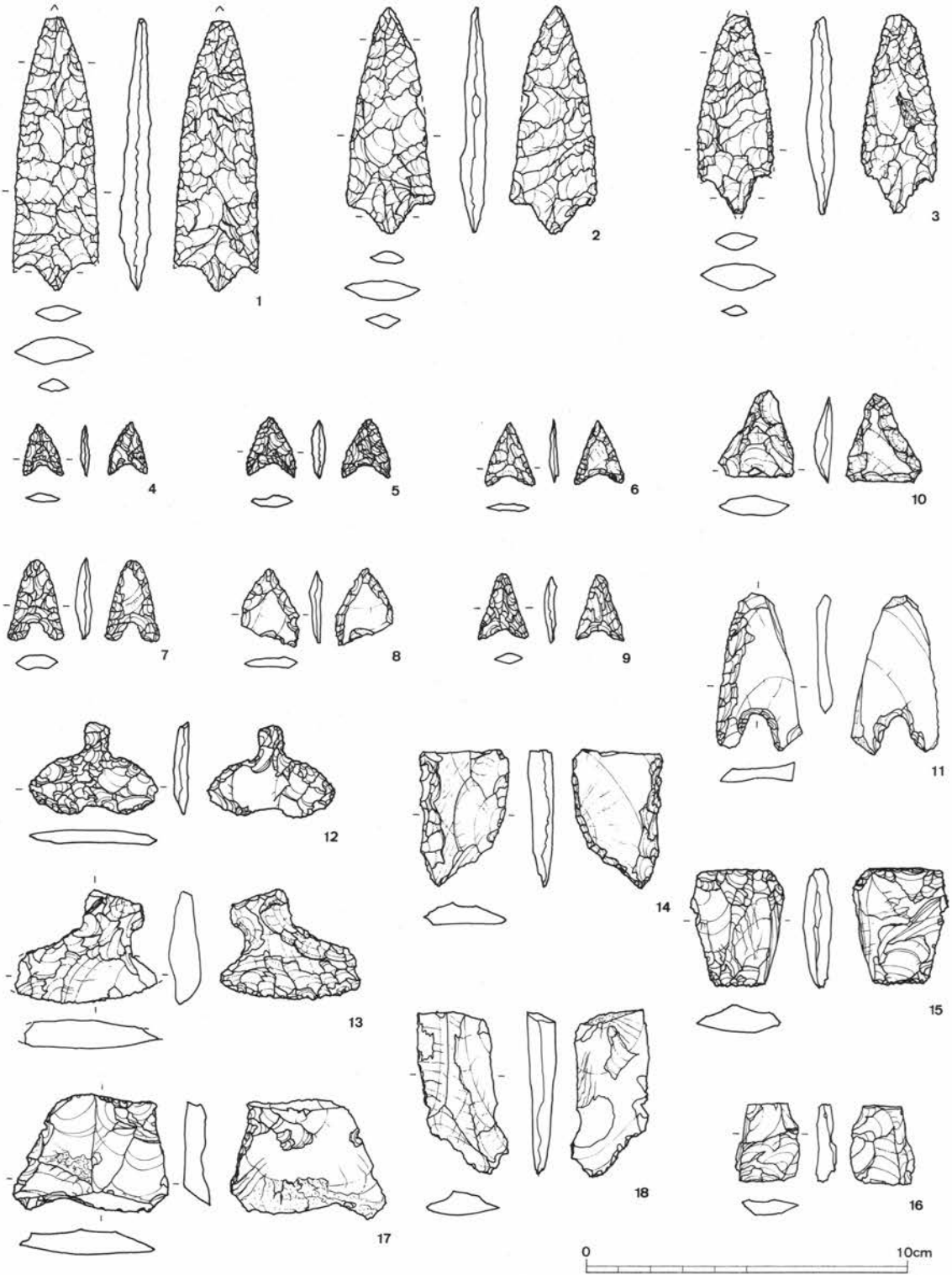
Dブロック(23・27区)出土遺物実測図

23区(259~278) 27区(281~291)

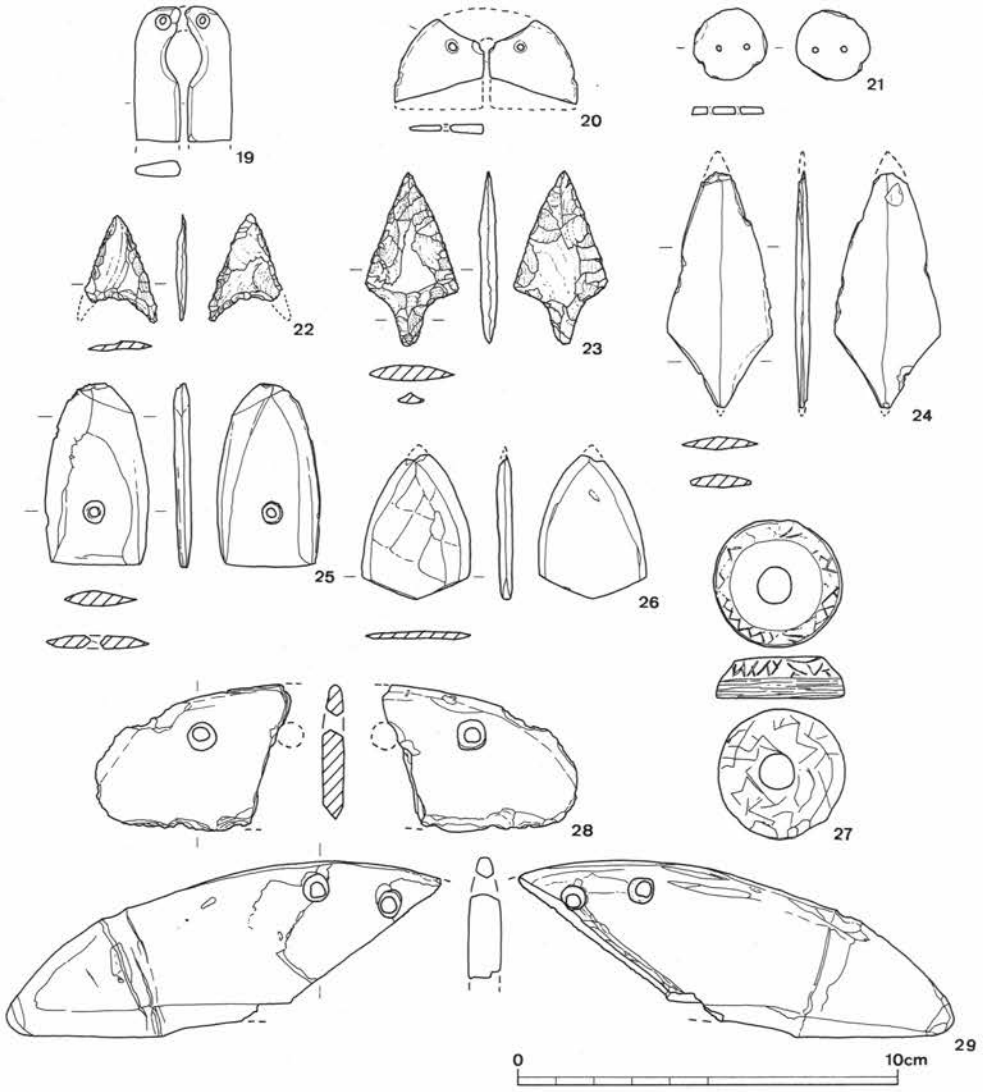


Dブロック(35区)出土遺物実測図

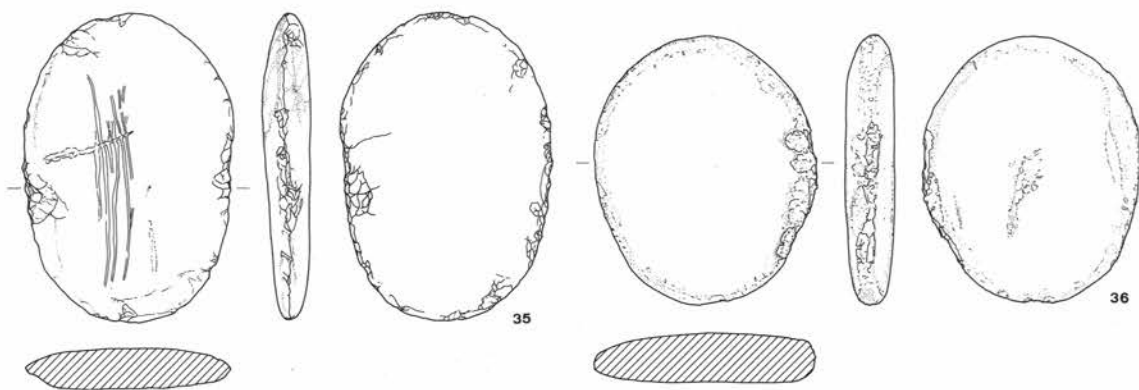
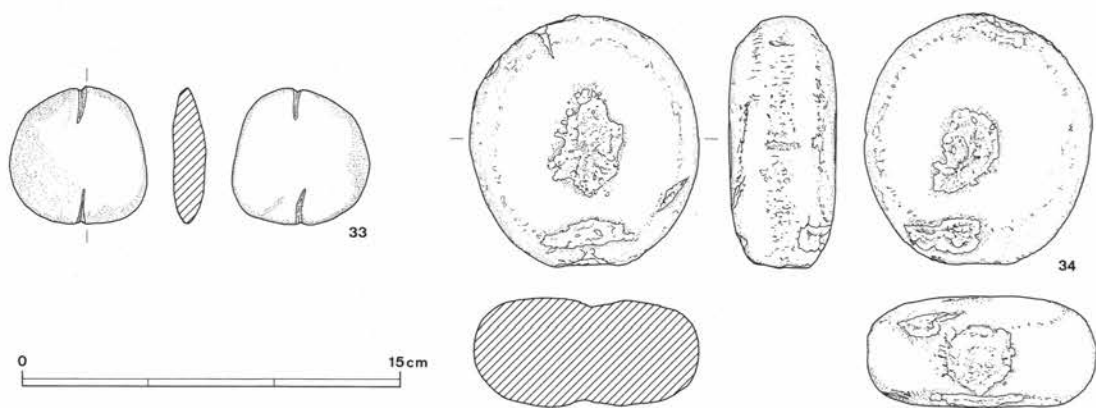
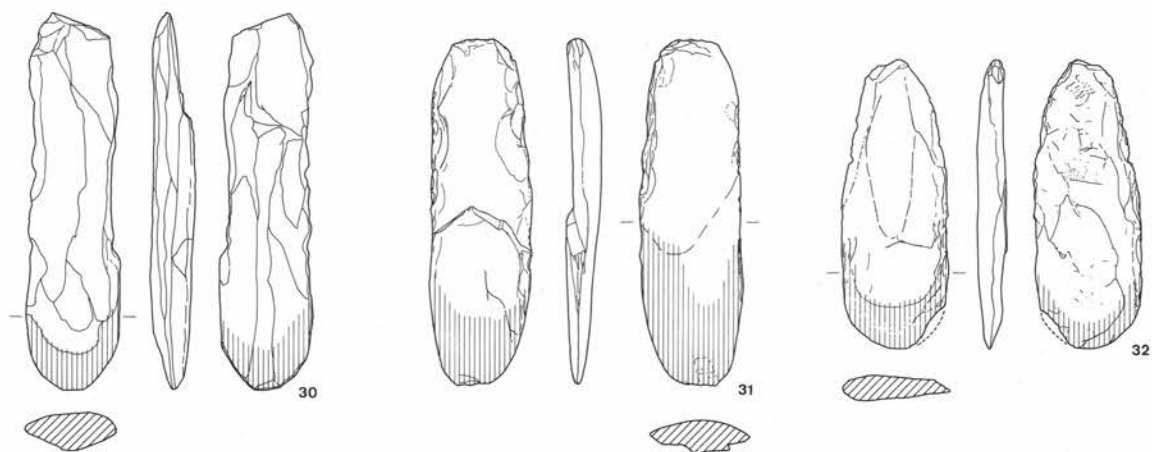
SE35040(292~306) P051(309) P053(307) P073(308) SK037(310~313)
 包含層 (314~323)



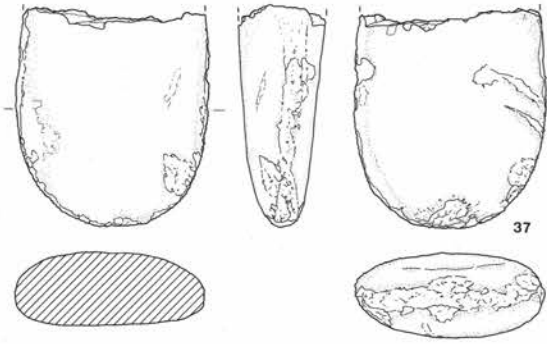
石器实测图 (1)



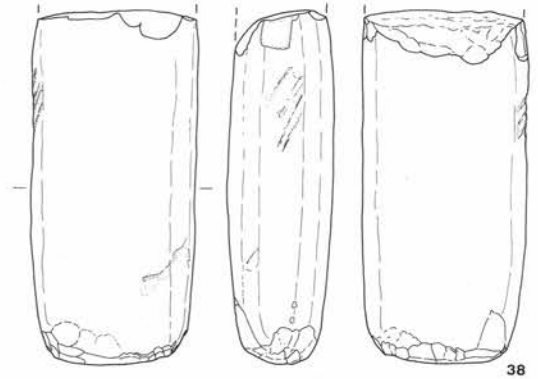
石器实测图 (2)



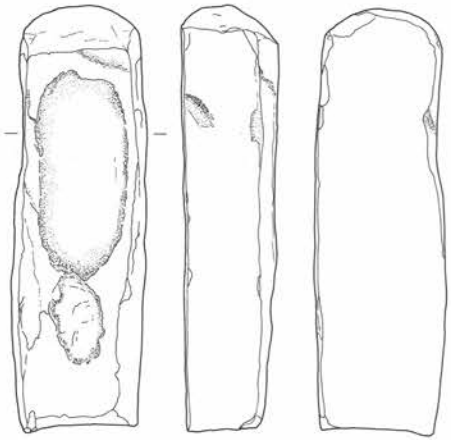
石器实测图 (3)



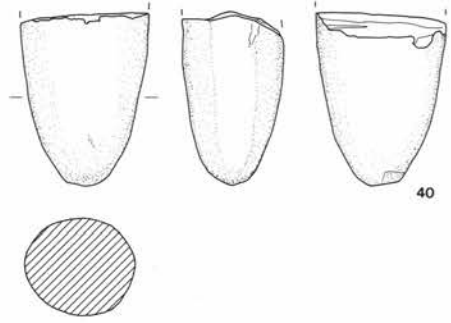
37



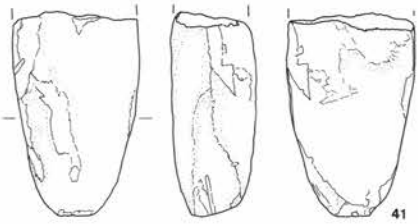
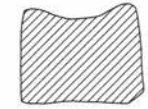
38



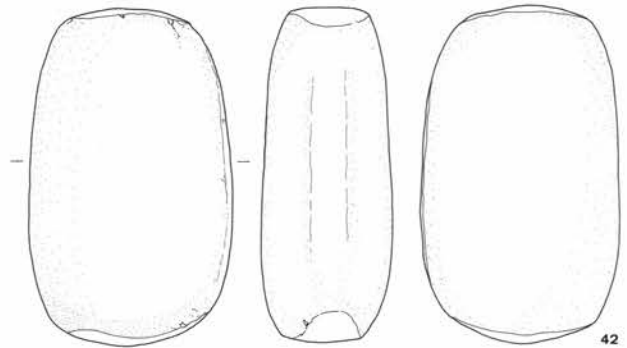
39



40



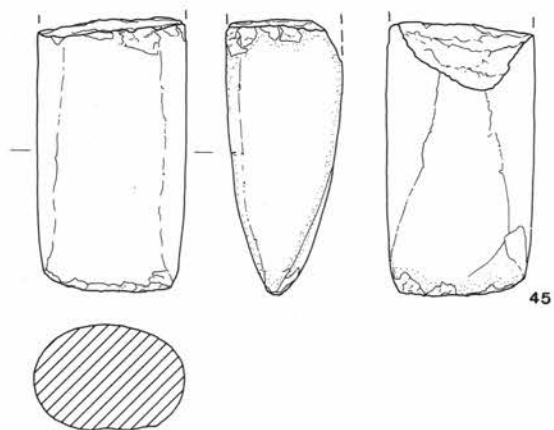
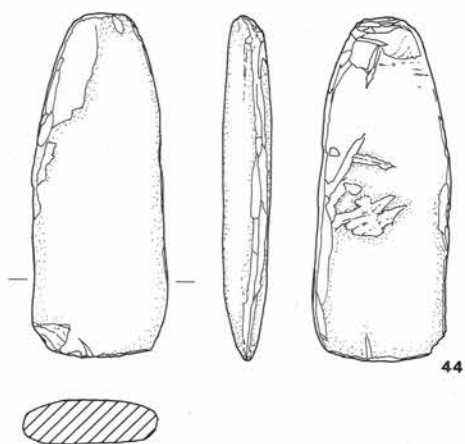
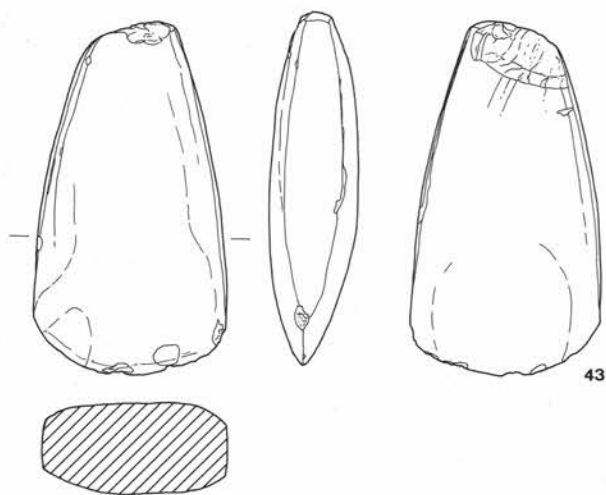
41



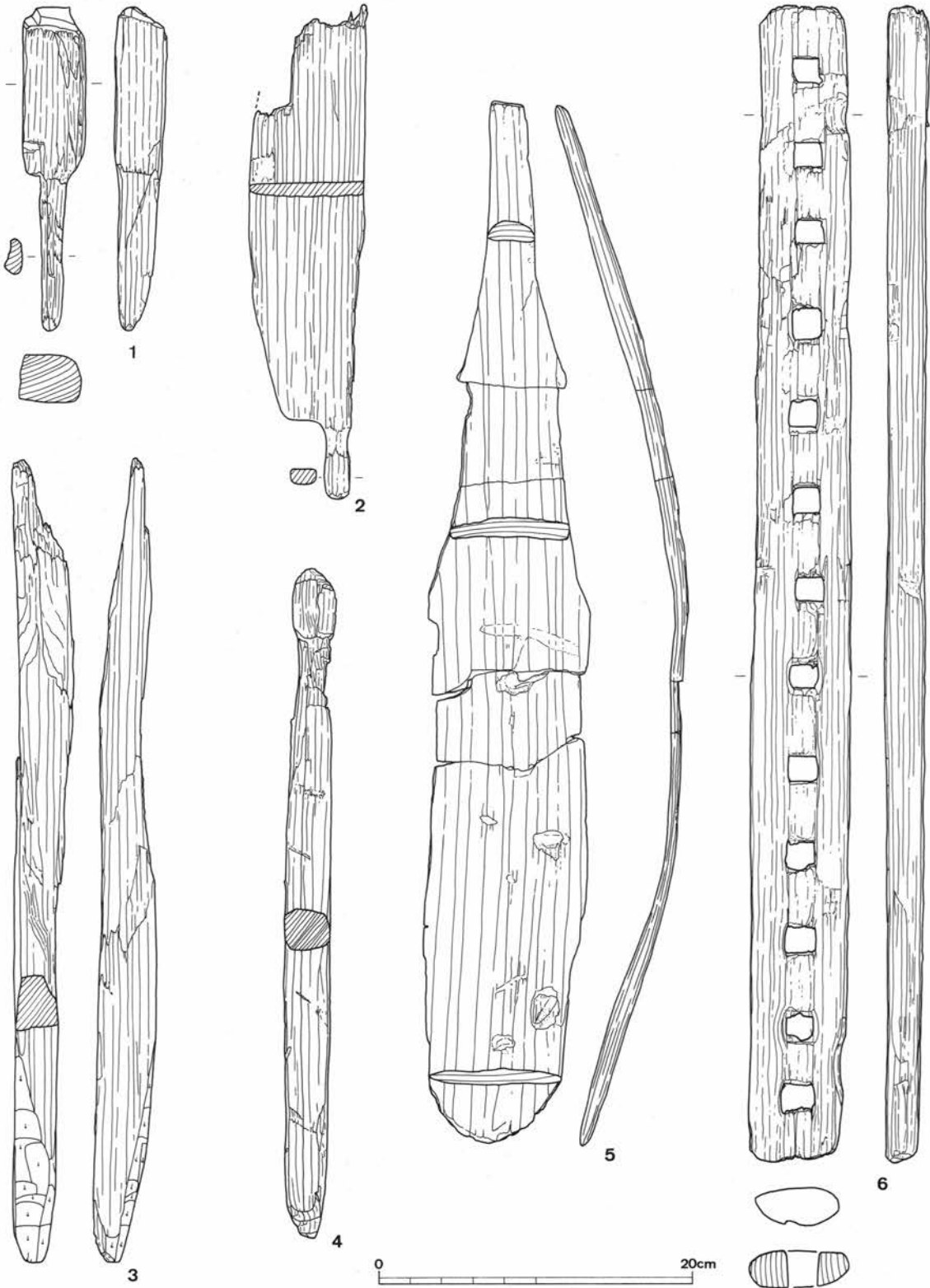
42



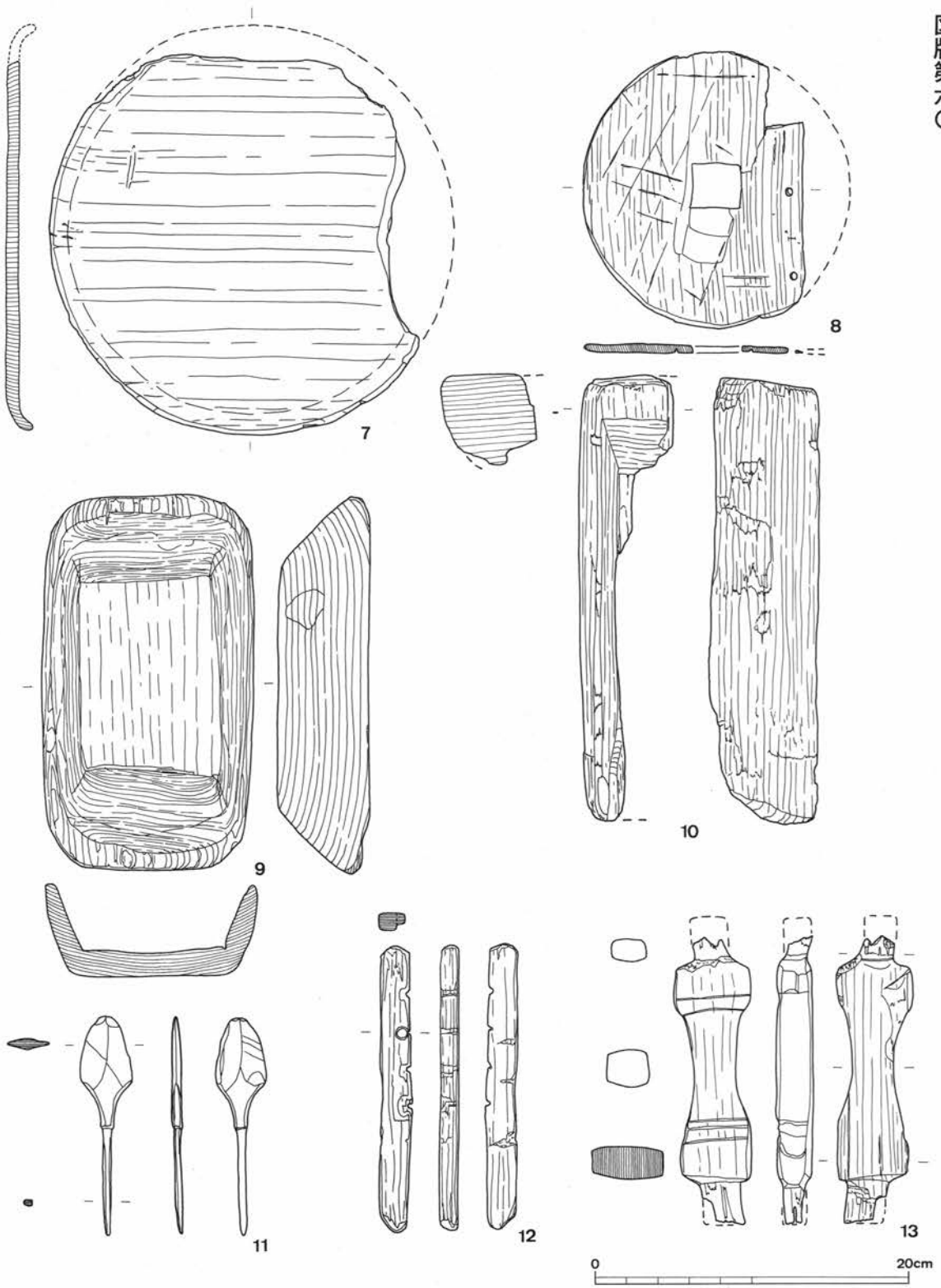
石器実測図 (4)



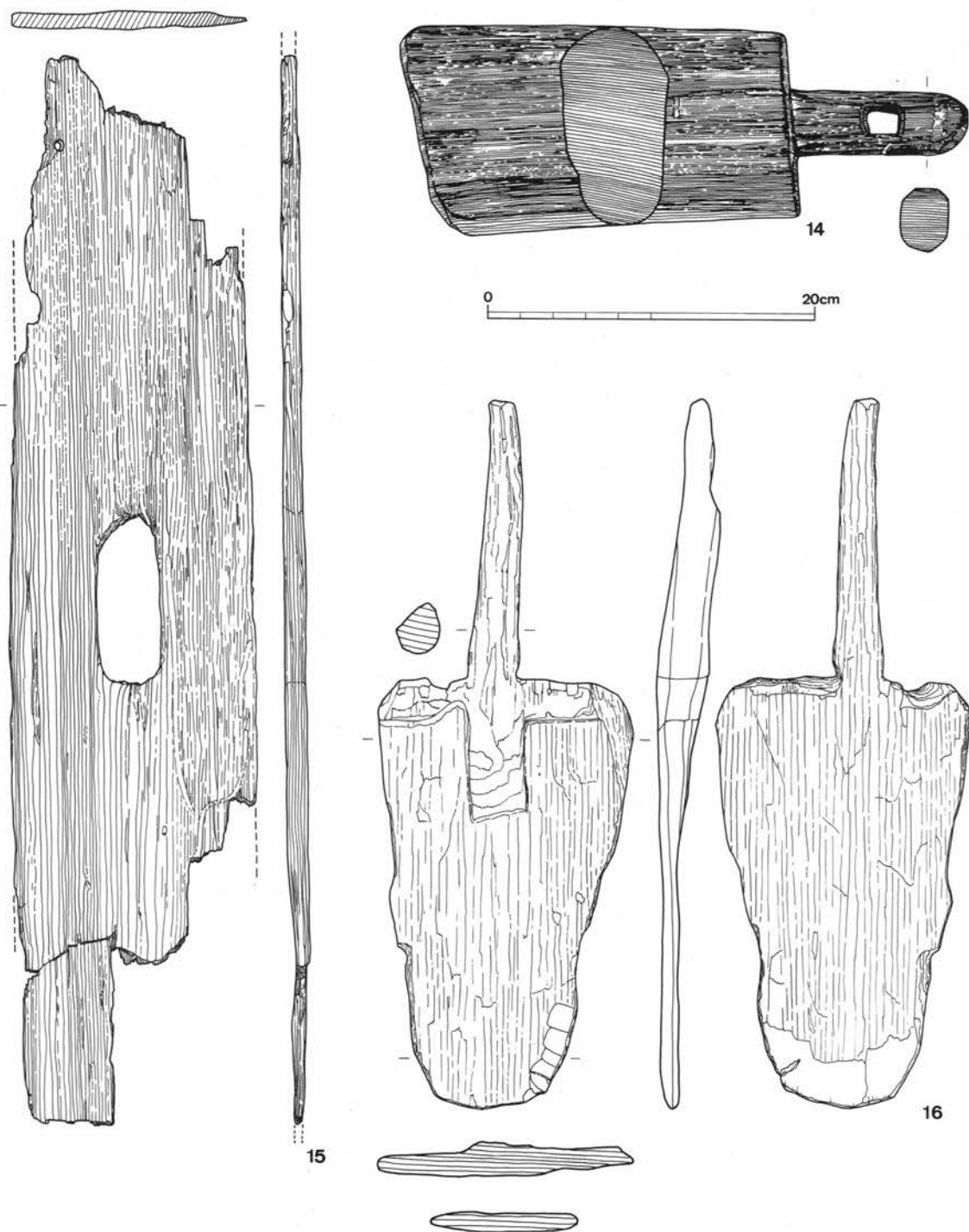
石器実測図 (5)



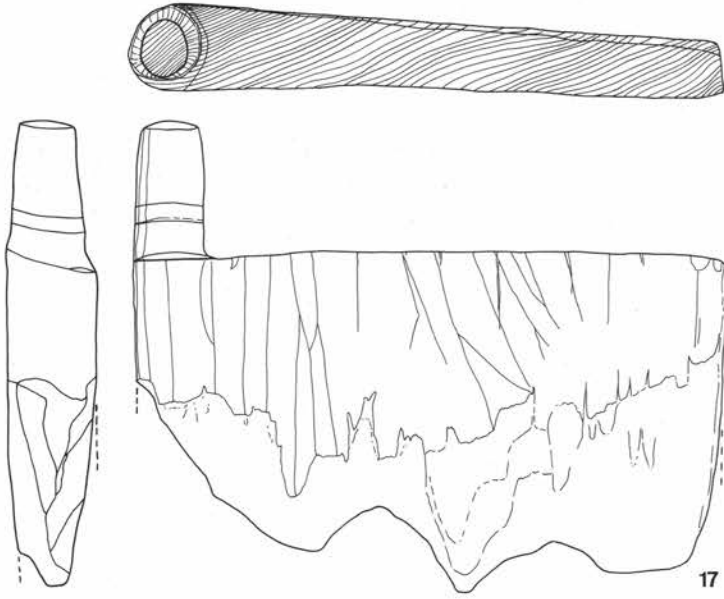
木器実測図 (1)



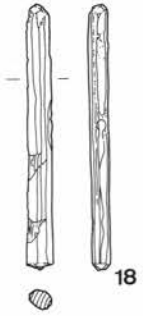
木器実測図 (2)



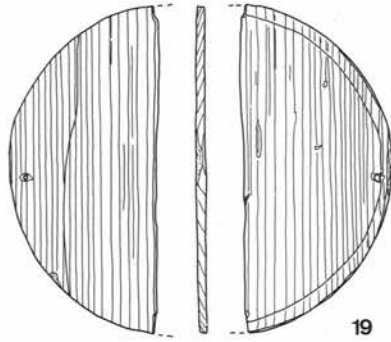
木器实测图 (3)



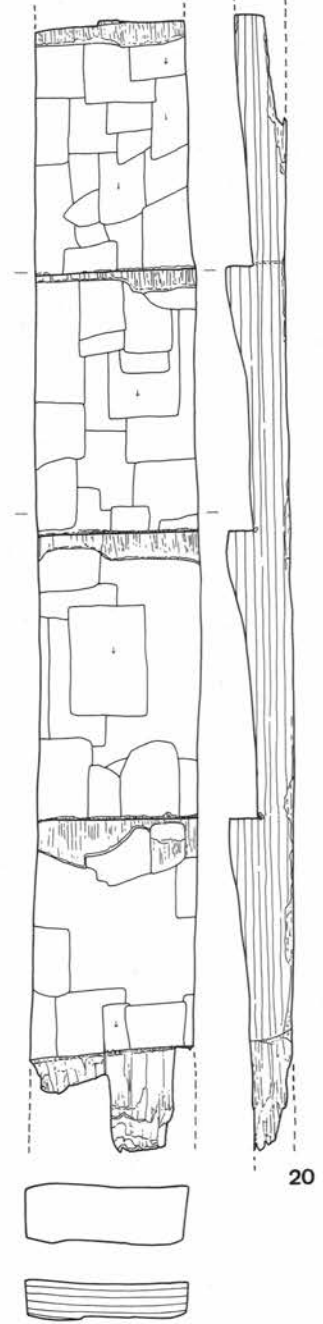
17



18

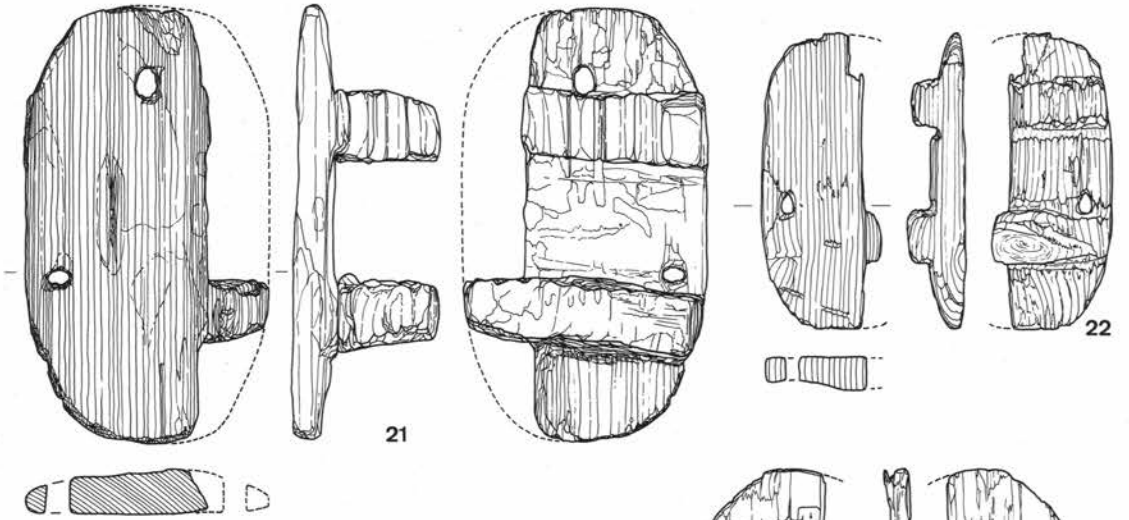


19



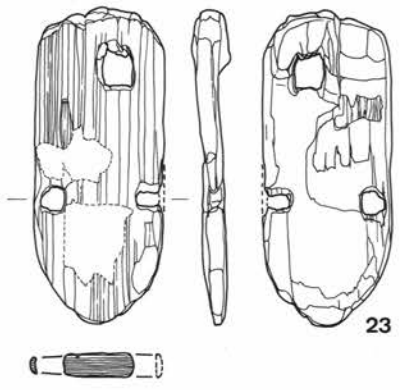
20

木器実測図 (4)

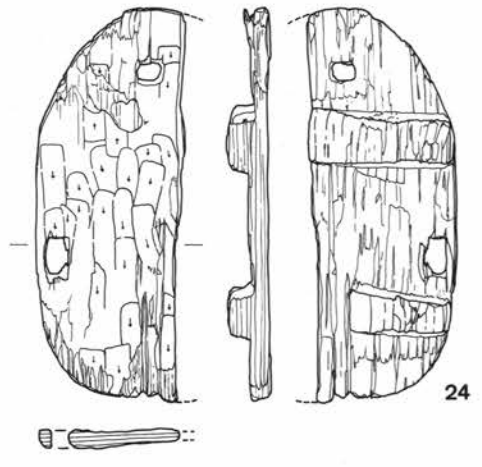


21

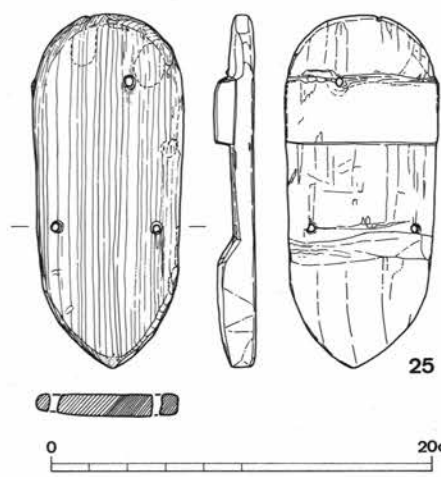
22



23

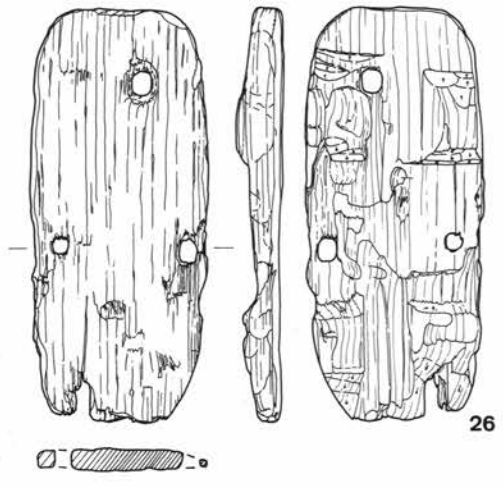


24



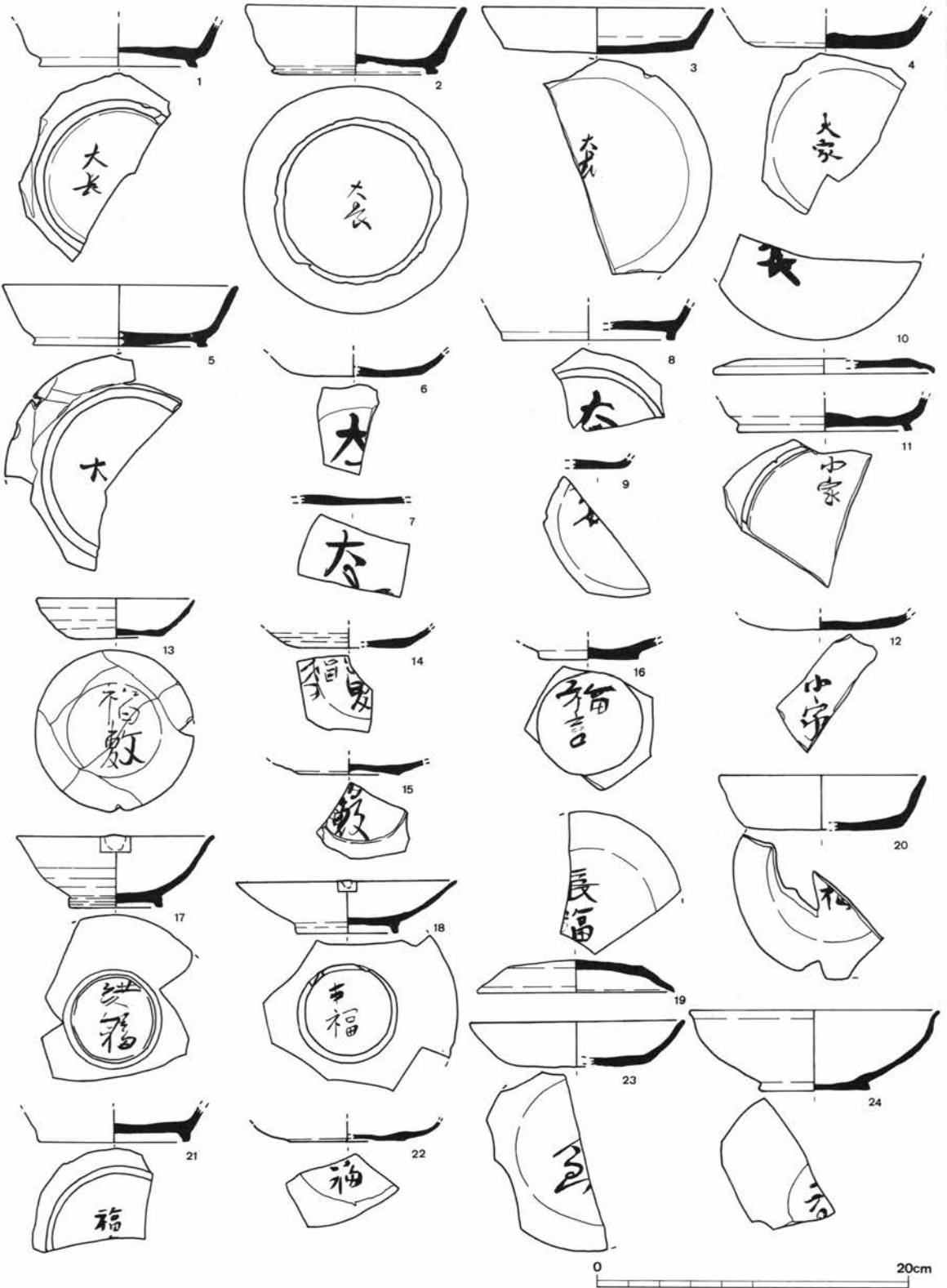
25

0 20cm

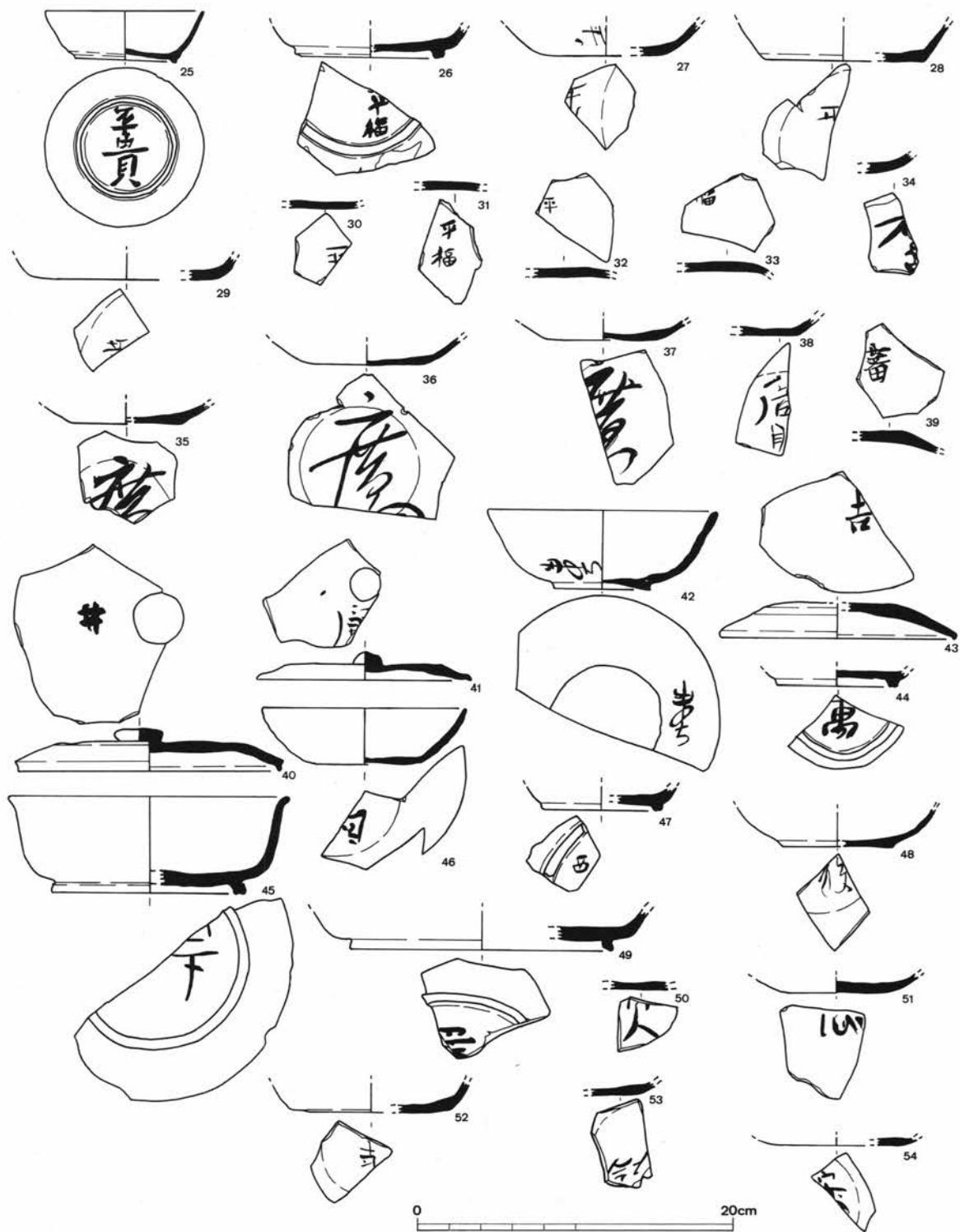


26

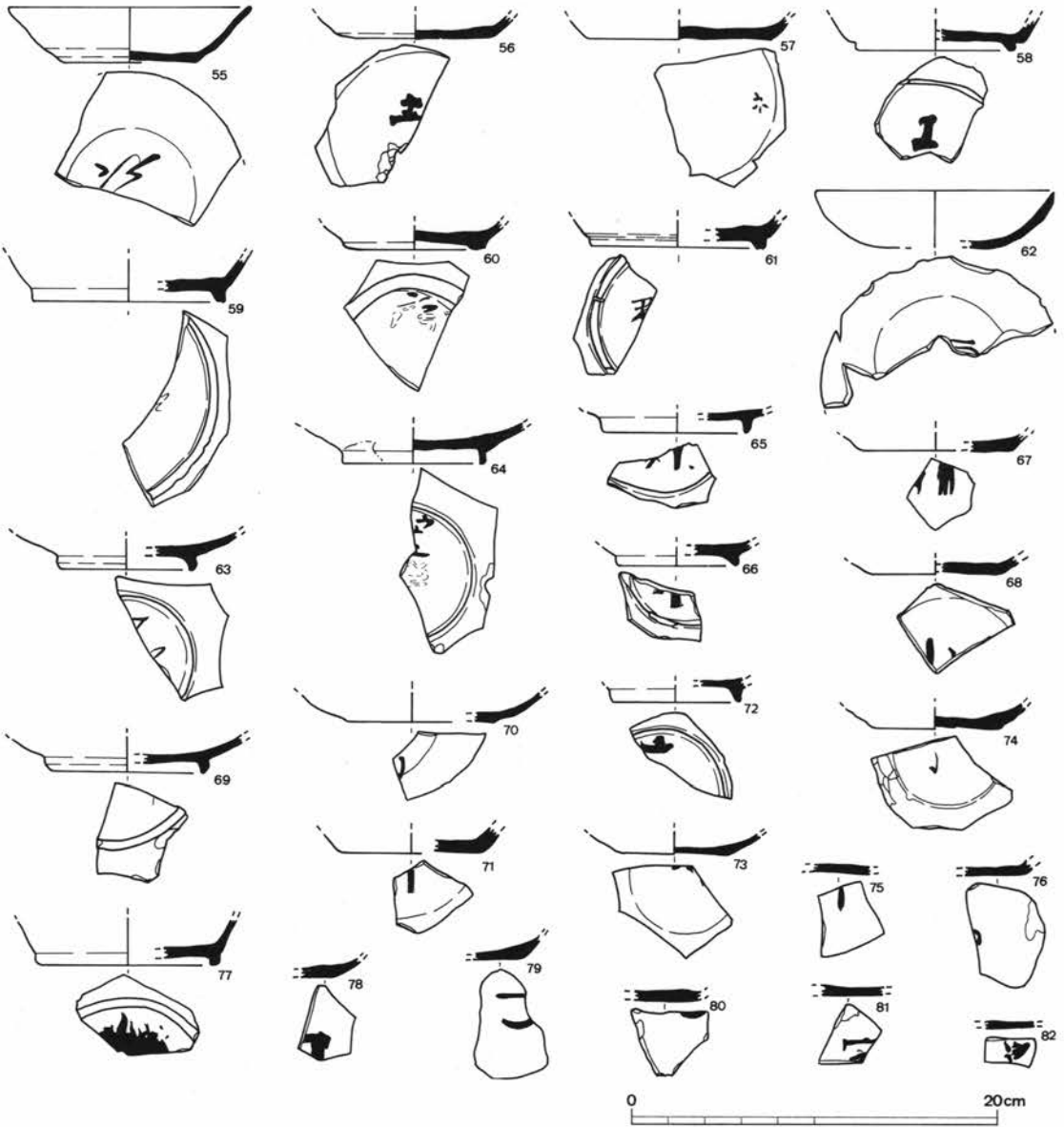
木器实测图 (5)



墨書土器実測図 (1)



墨書土器実測図 (2)



墨書土器実測図 (3)



(1) 千代川遺跡調査地遠景（南からの空中写真；12次）



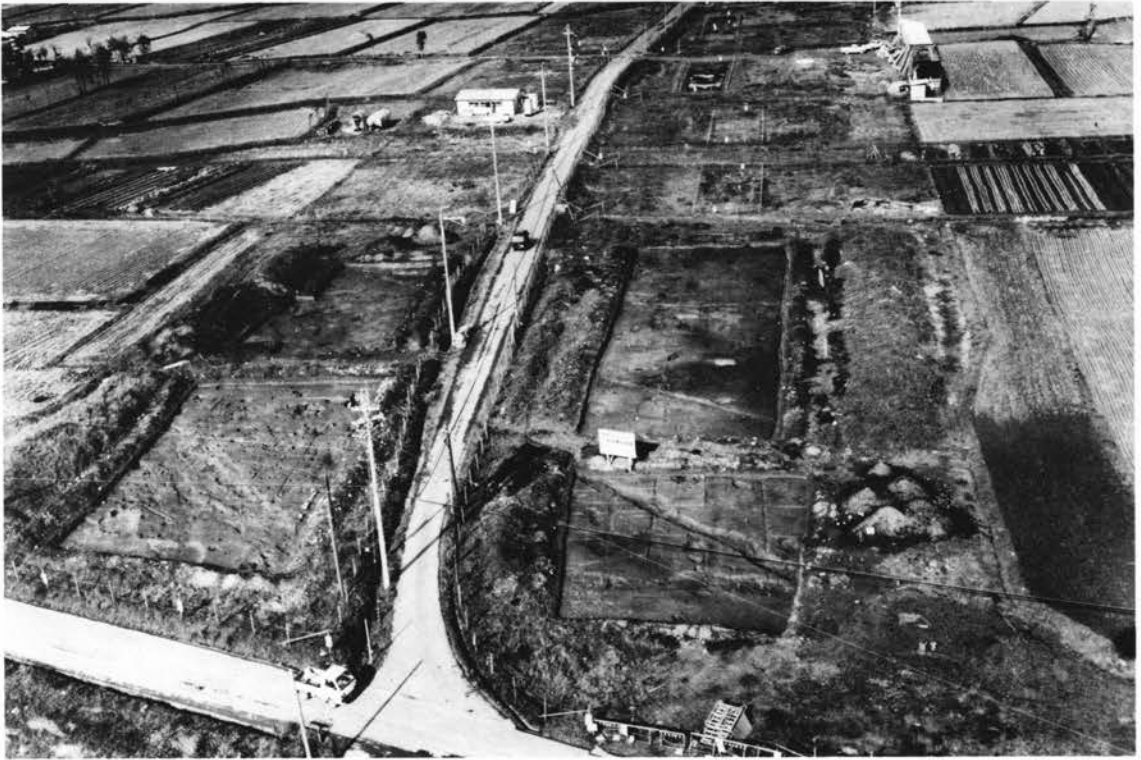
(2) 同上（北からの空中写真；14次）



(1) 千代川遺跡調査地遠景（北からの空中写真；13次）



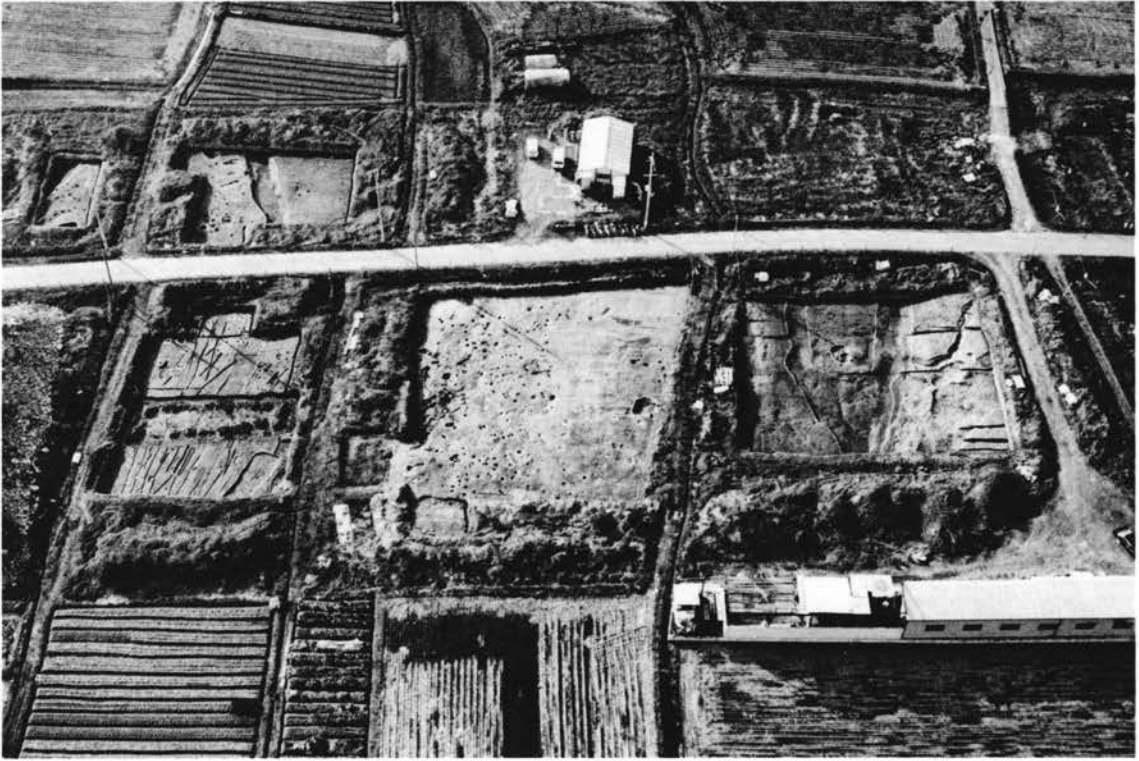
(2) 国府推定地北辺全景（西からの空中写真；13次）



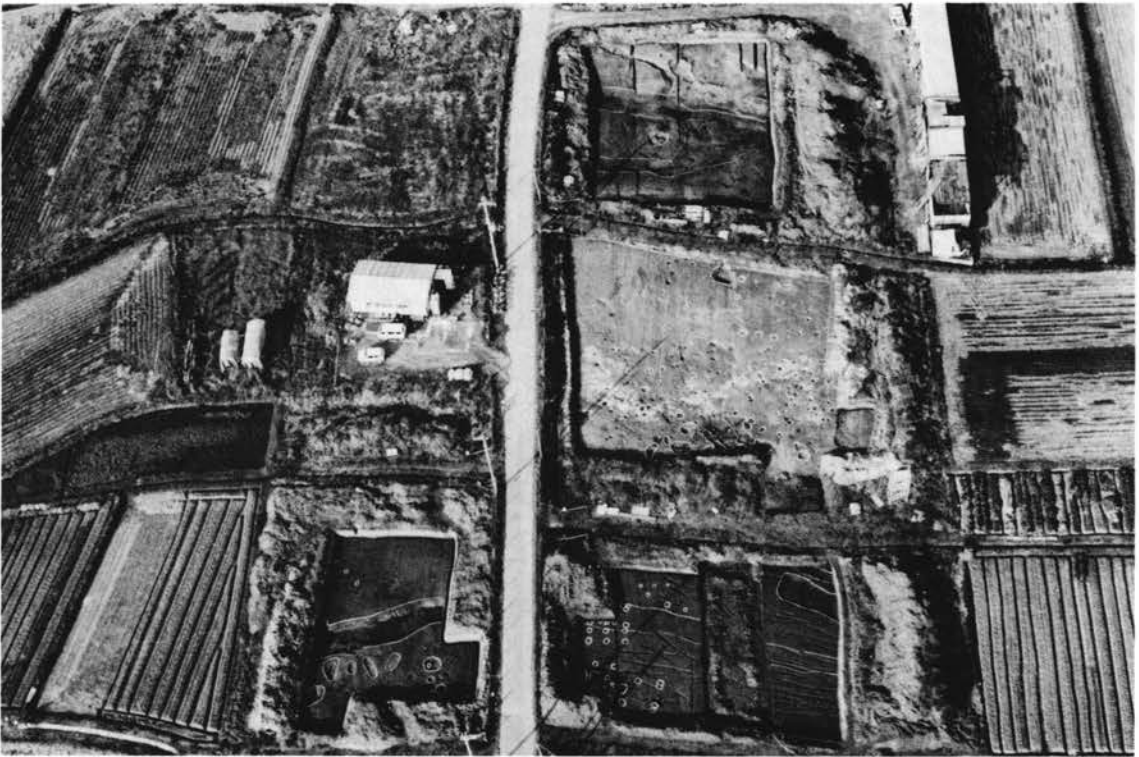
(1) 10次調査地全景（南からの空中写真）



(2) 同上（北からの空中写真）



(1) 12次調査地全景（東からの空中写真）



(2) 同上（南からの空中写真）



(1) 1区 全景 (北から)



(2) 1区 掘立柱建物跡SB10163完掘状況 (北から)



(1) 2区 全景 (南から)

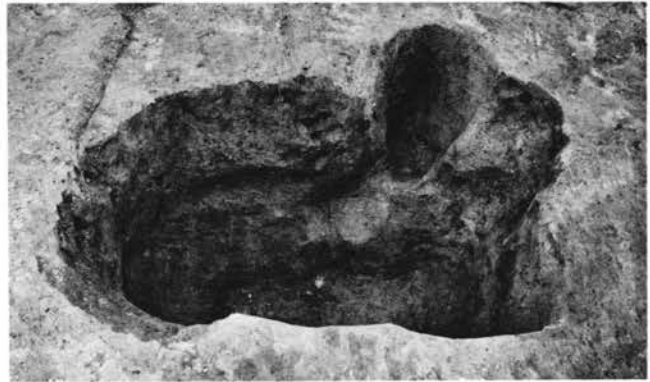


(2) 2区 溝S D10038遺物出土状況 (西から)



(1) 3区 全景 (南から)

(2) 3区 土坑S K10106完掘状況 (北から)



(3) 3区 土坑S K10087完掘状況 (北から)



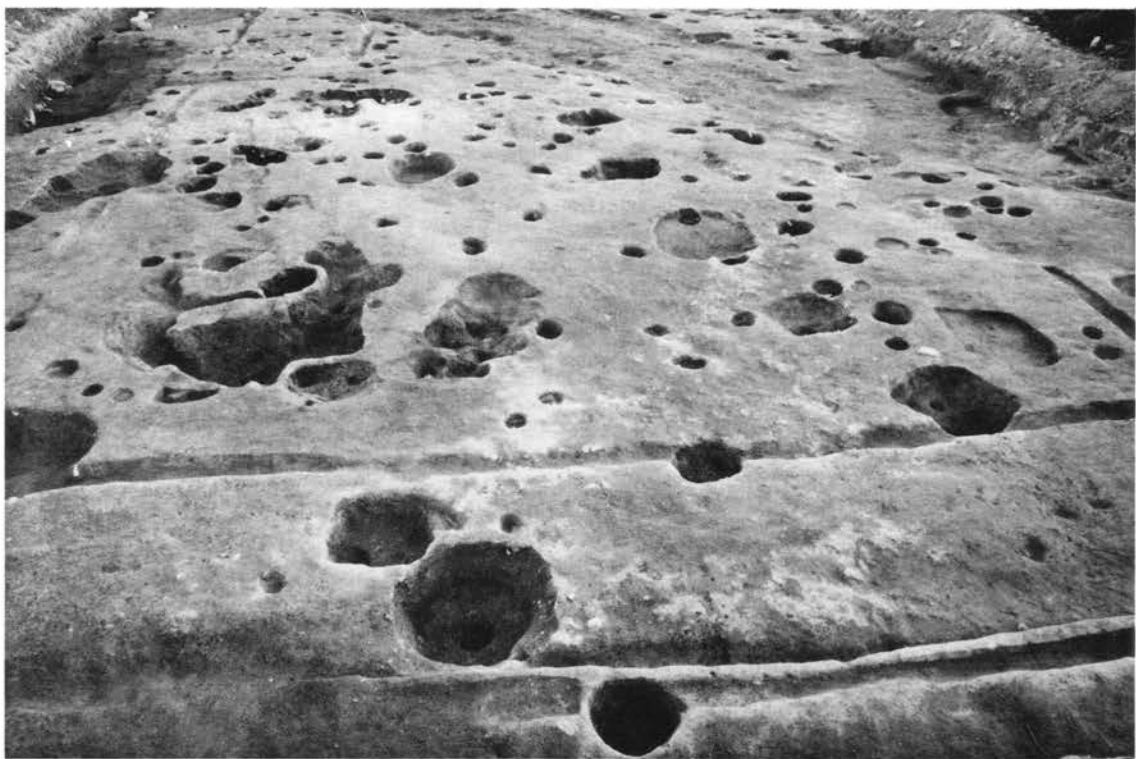
(1) 3区 竪穴式住居跡 S H10099遺物出土状況 (南から)



(2) 同上 完掘状況 (南から)



(1) 4区 全景 (北から)



(2) 4区 掘立柱建物跡 S B10169完掘状況 (北から)



(1) 4区 井戸跡S E10116完掘状況(北から)



(2) 4区 井戸跡S E10116瓦器碗出土状況(東から)



(1) 5区 弥生時代遺構面全景（東から）



(2) 5区 奈良時代遺構面全景（北東から）



(1) 5区 掘立柱建物跡 S B12074検出状況 (西から)



(2) 5区 掘立柱建物跡 S B12071・12072、柵列 S A12080検出状況 (西から)



(1) 6区 全景 (南東から)



(2) 6区 掘立柱建物跡 S B12107検出状況 (西から)



(1) 6区 掘立柱建物跡 S B12104検出状況 (南から)



(2) 6区 土坑 S K12087~12098検出状況 (南から)



(1) 6区 土坑S K12076検出状況(北から)



(2) 6区 土坑S K12076完掘状況(西から)



(1) 7区 全景 (南から)



(2) 7区 溝 S D12119・12123、土坑 S K12084 検出状況 (南東から)



(1) 7区 溝 S D 12123完掘状況 (西から)



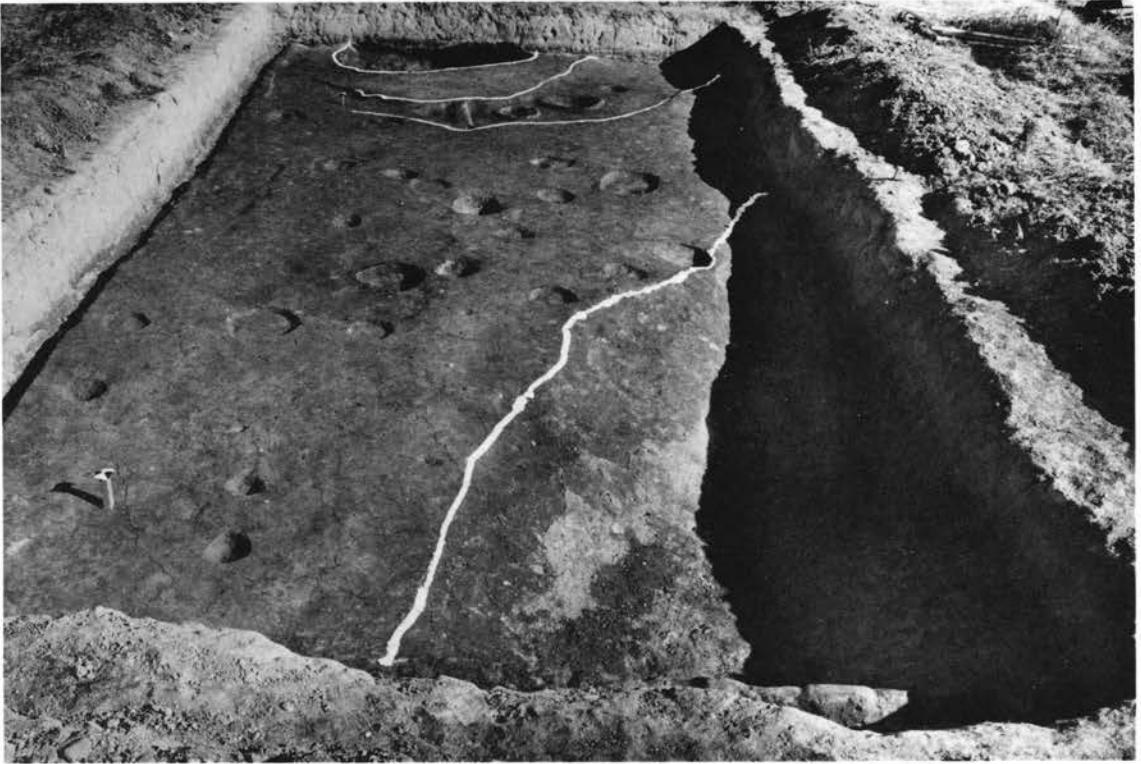
(2) 7区 溝 S D 12121遺物出土状況 (西から)



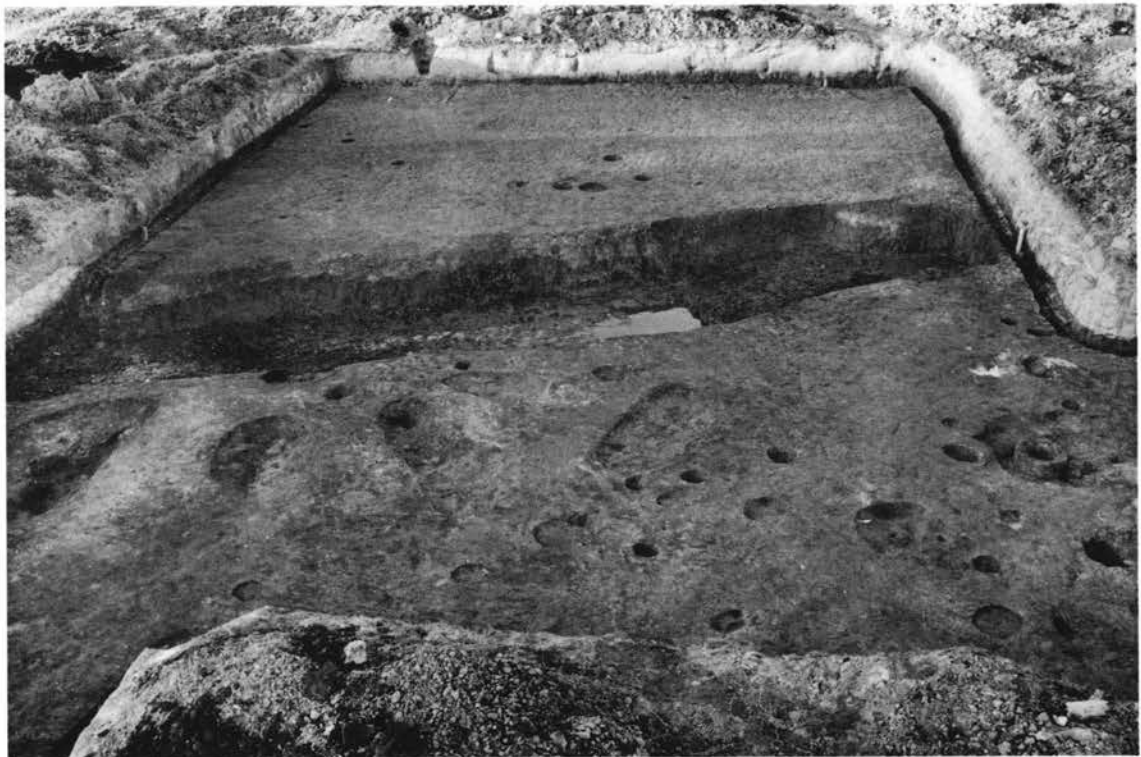
(1) 7区 土坑S K12118検出状況 (南から)



(2) 同上 完掘状況 (南から)



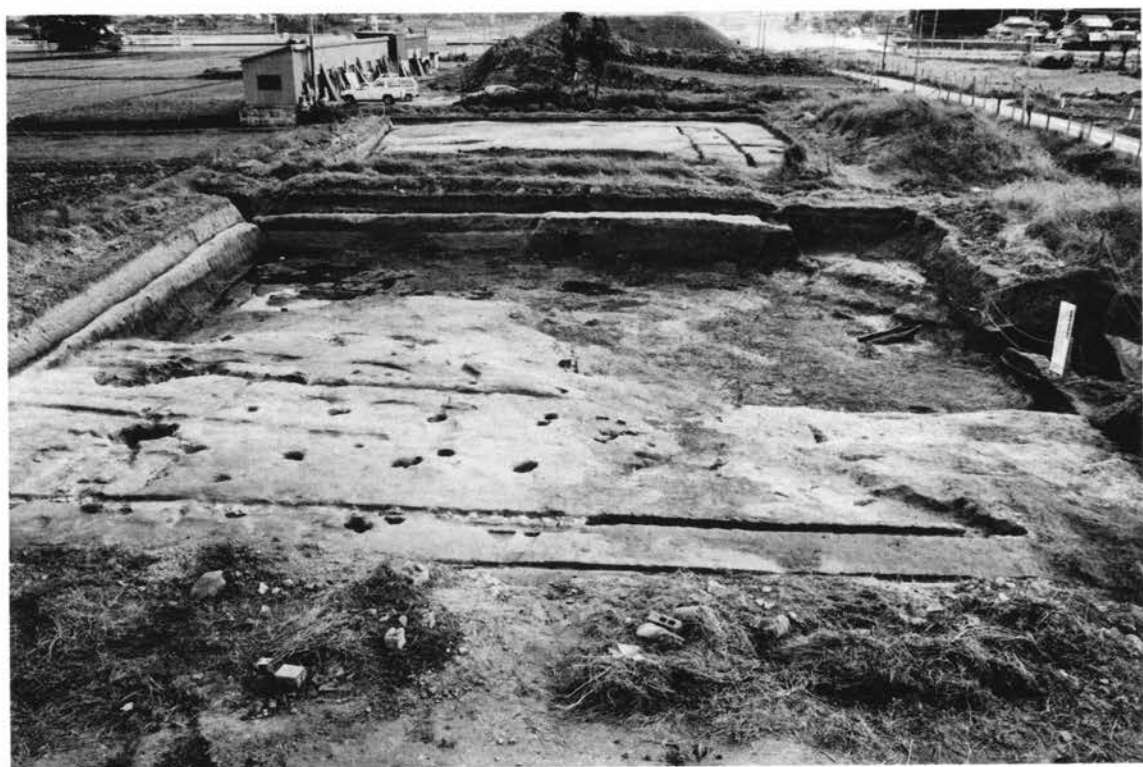
(1) 8区 全景 (西から)



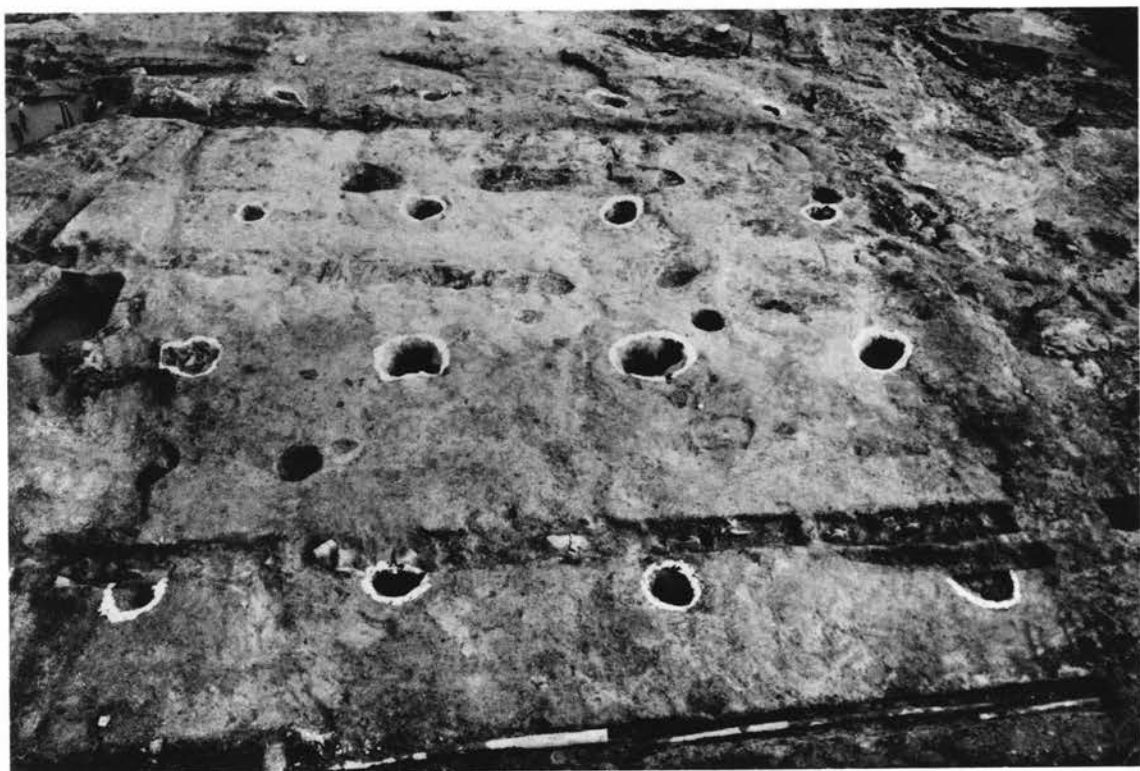
(2) 9区 全景 (南から)



(1) 10・11区 全景 (上方が西；空中写真)



(2) 11区 全景 (北から)



(1) 11区 掘立柱建物跡 S B11001完掘状況 (北から)



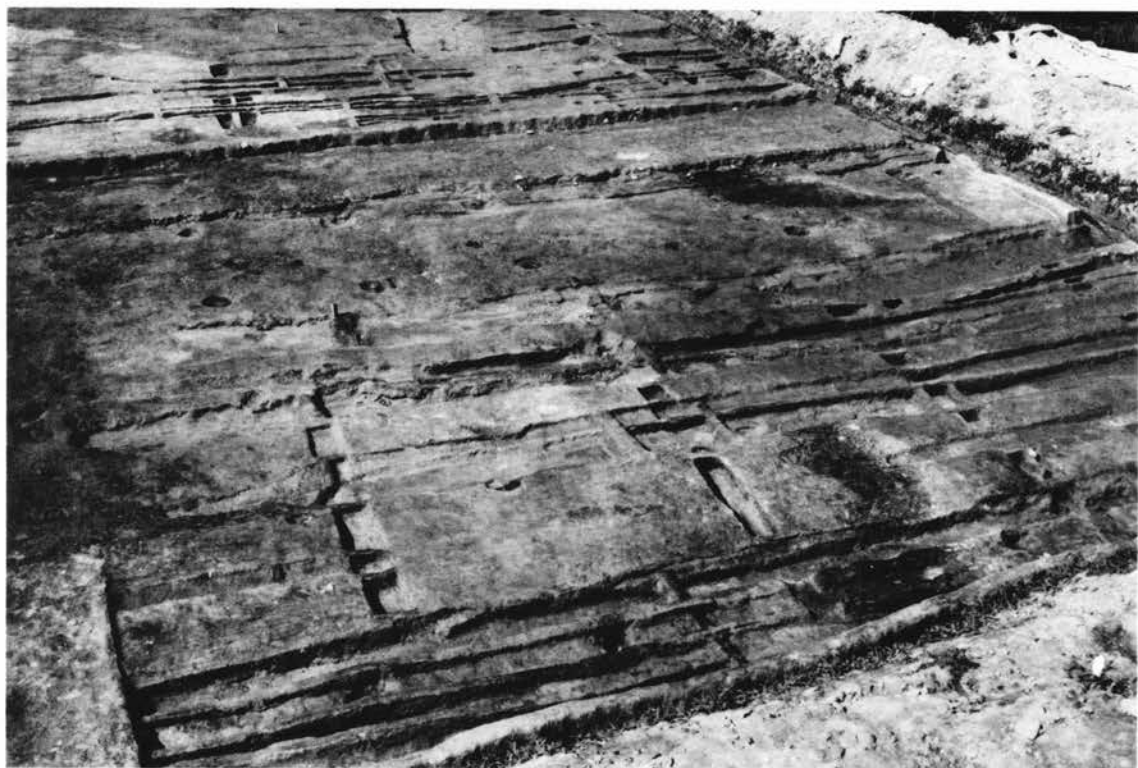
(2) 11区 木製鐵出土状況



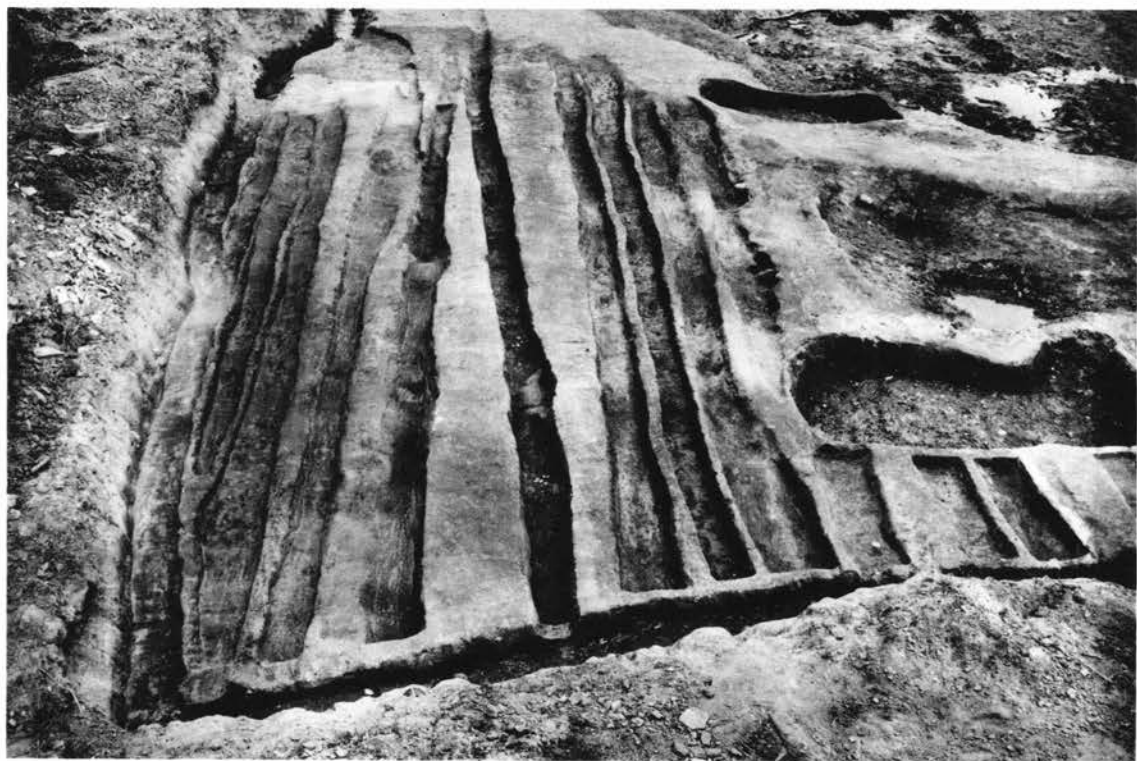
(1) 11区 井戸跡 S E11019全景 (北から)



(2) 11区 井戸跡 S E11019遺物出土状況 (南から)



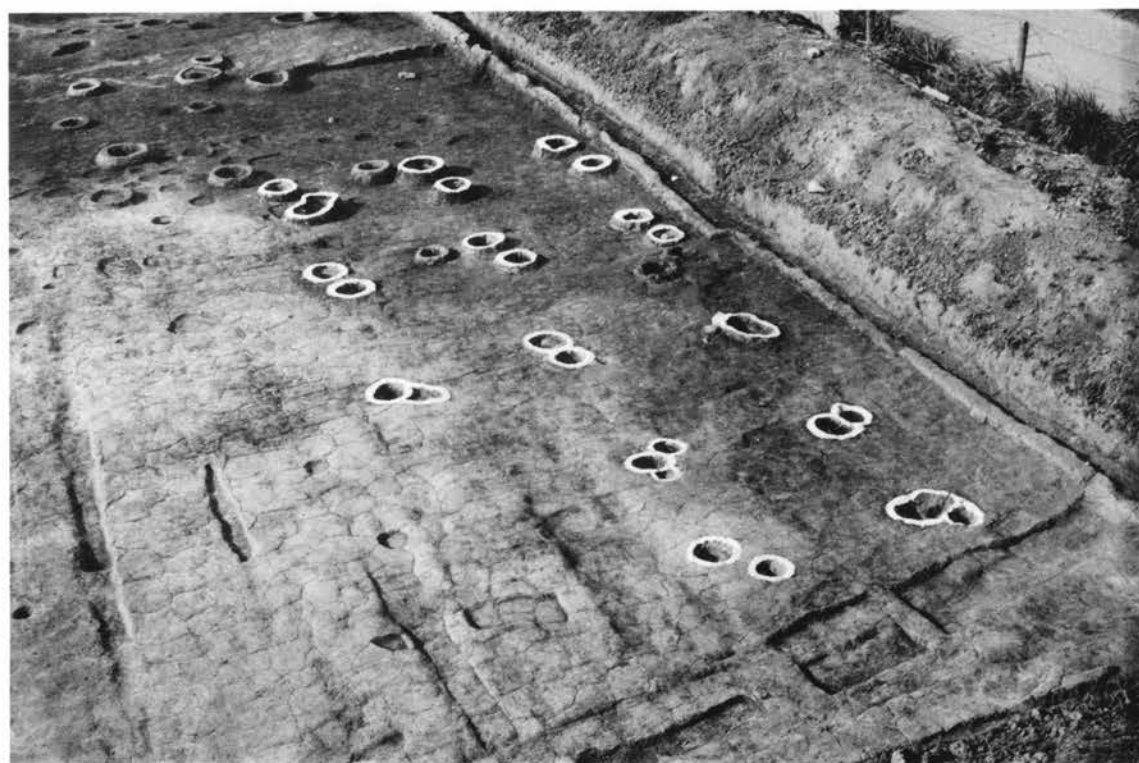
(1) 12区 掘立柱建物跡 S B12001検出状況 (南から)



(2) 13区 素掘り溝完掘状況 (北から)



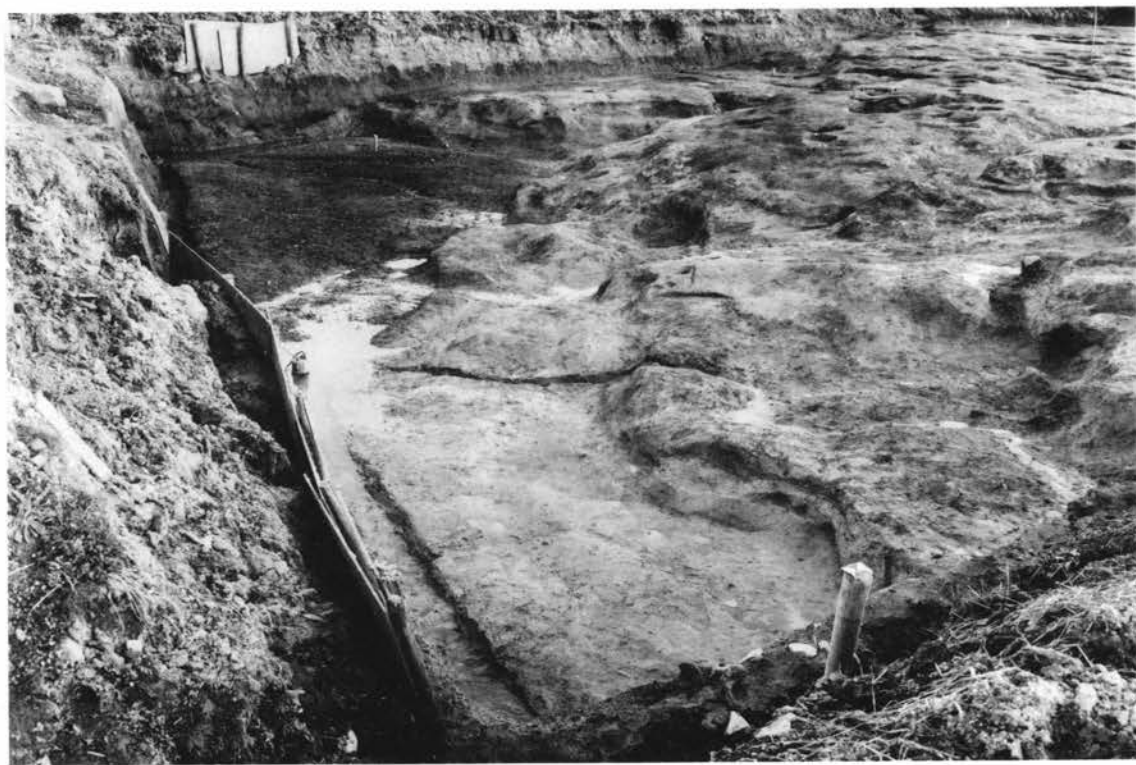
(1) 14区 掘立柱建物跡 S B14001検出状況 (南東から)



(2) 15区 掘立柱建物跡 S B15002・15003検出状況 (南西から)



(1) 15区 掘立柱建物跡 S B15005・15006検出状況 (北から)



(2) 16区 自然流路跡 S R16001完掘状況 (西から)



(1) 18区 全景 (北から)



(2) 21区 S D21001完掘状況 (東から; 13次)



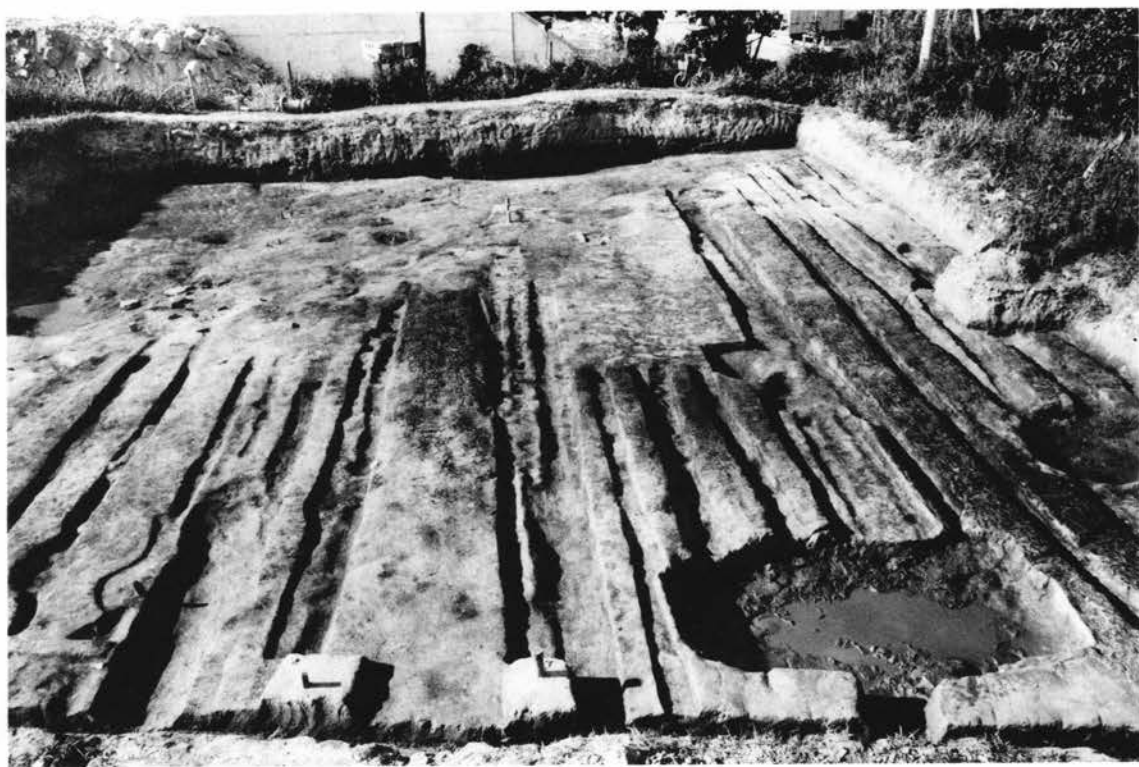
(1) 21区 溝 S D21001完掘状況 (西から; 14次)



(2) 22区 井戸跡 S E22001遺物出土状況 (東から)



(1) 23区 全景 (北から)



(2) 29区 全景 (南から)



(1) 30区 全景（上方が西；空中写真）



(2) 30区 断ち割り部土層堆積状況（西から）



(1) 32区 全景 (南から)



(2) 32区 掘立柱建物跡 S B 32001~32003完掘状況 (北から)



(1) 32区 島状部分南端完掘状況（東から）



(2) 32区 石帯出土状況



(1) 33区 溝完掘状況 (西から)



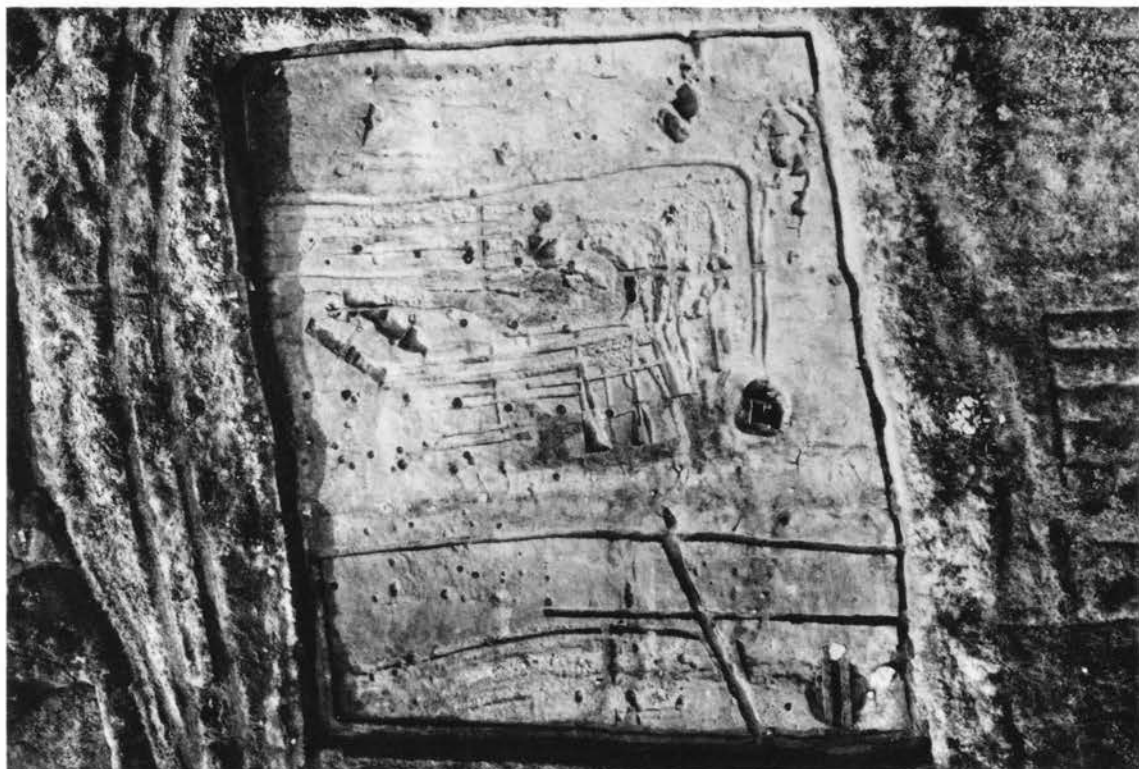
(2) 34区 全景 (上方が北; 空中写真)



(1) 34区 掘立柱建物跡群完掘状況（北から）



(2) 34区 柱穴柱根・礎石配置状況（南から）



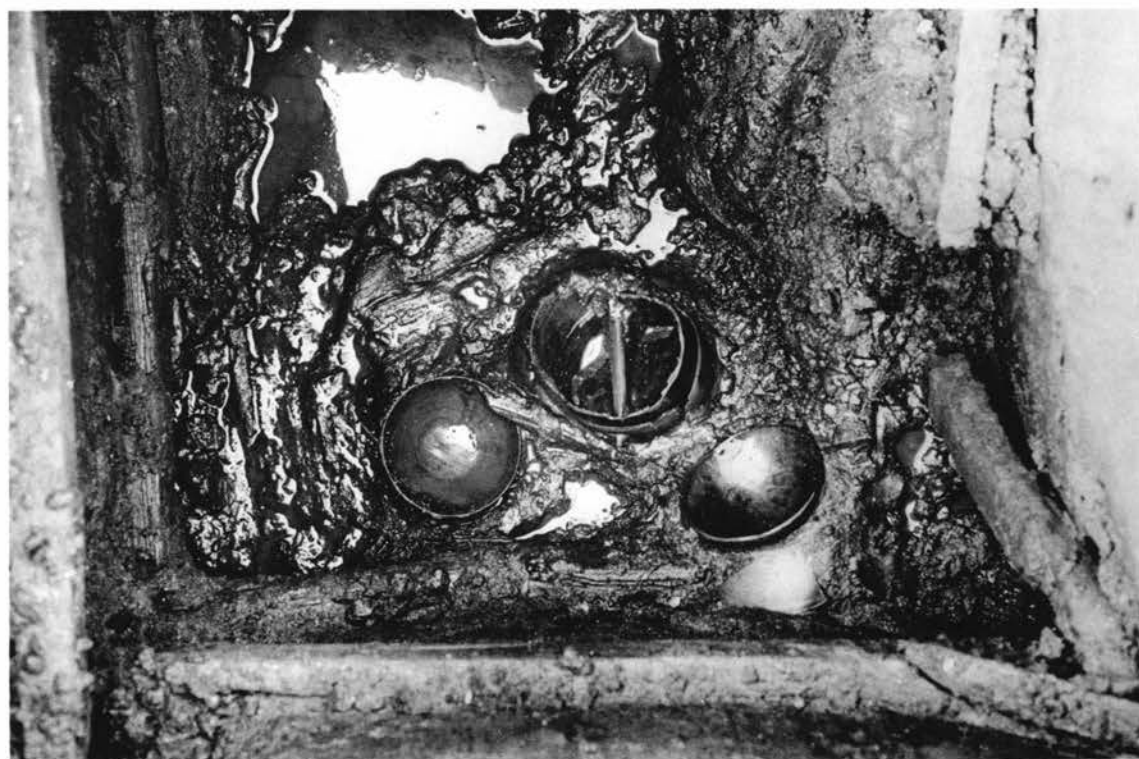
(1) 35区 全景 (上方が北; 空中写真)



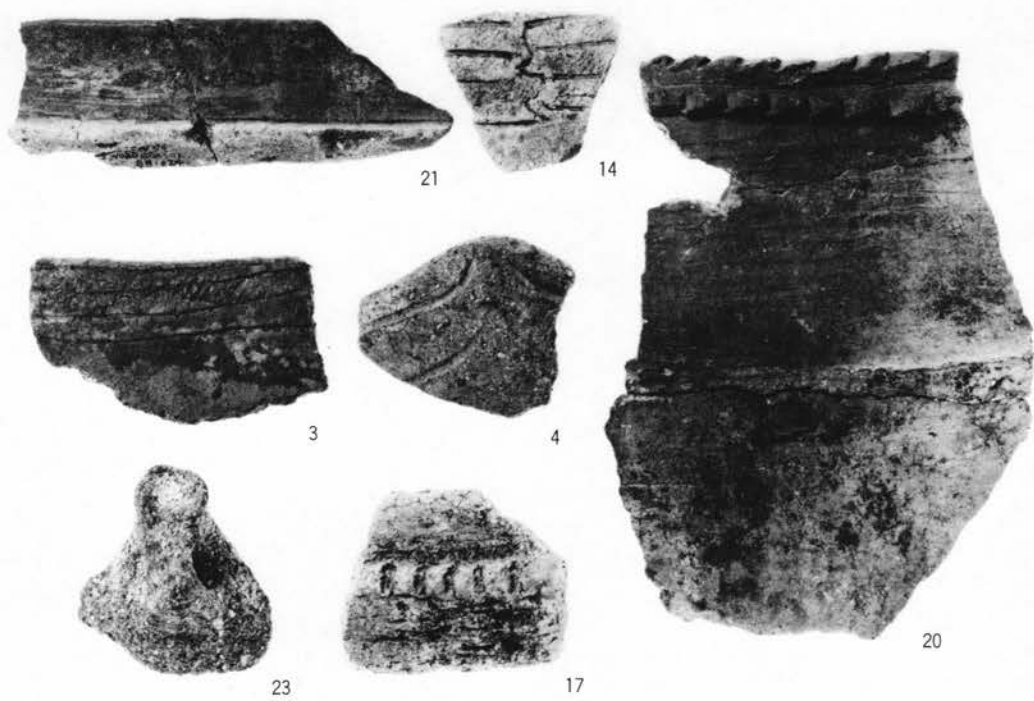
(2) 35区 掘立柱建物跡 S B 35003完掘状況 (南から)



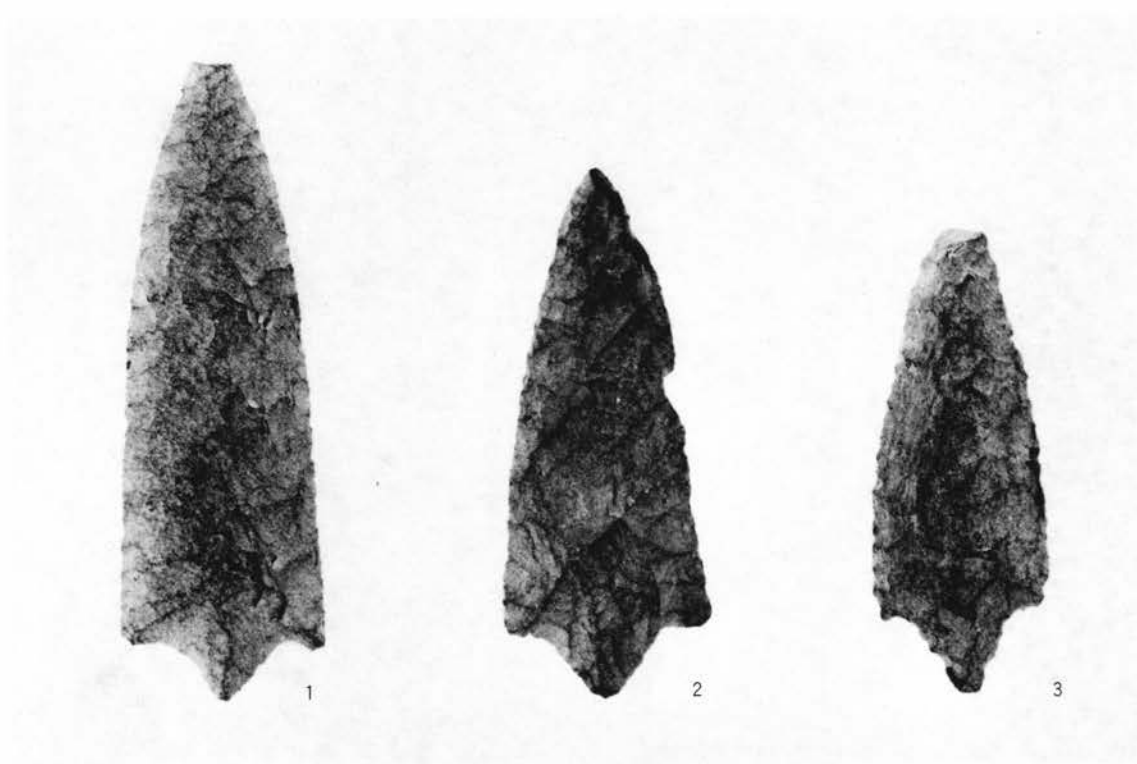
(1) 35区 井戸跡 S E 35040検出状況 (北から)



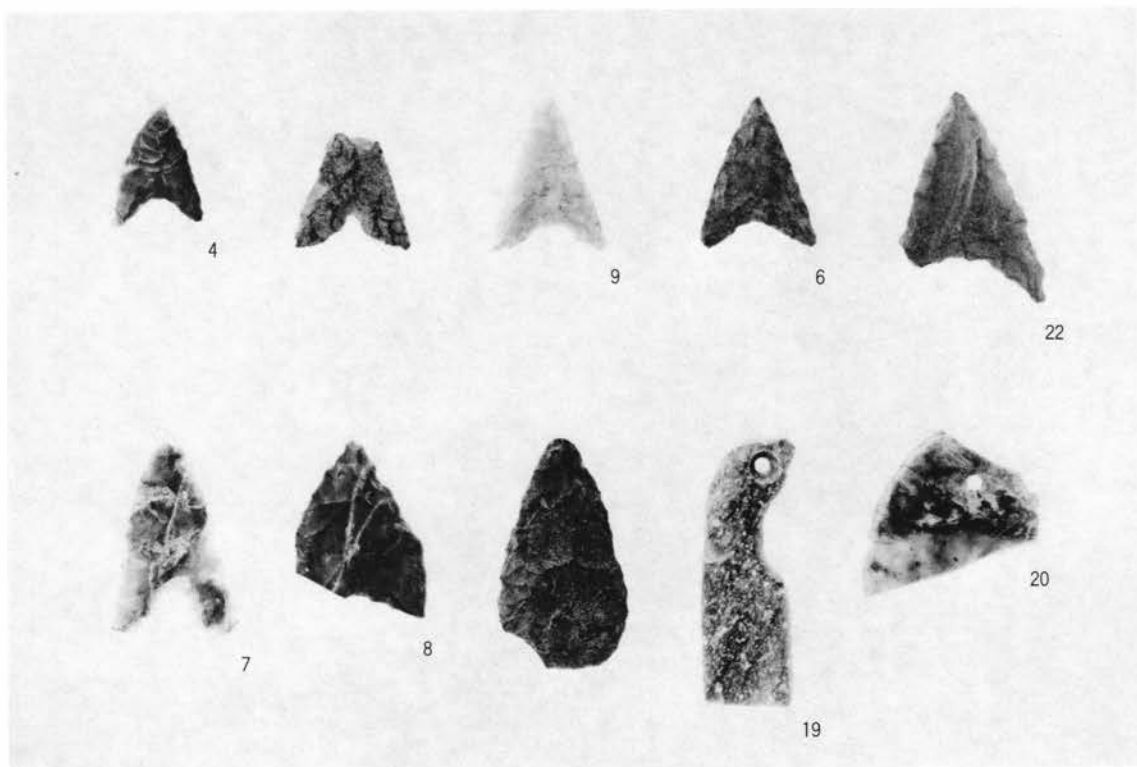
(2) 35区 井戸跡 S E 35040遺物出土状況 (南から)



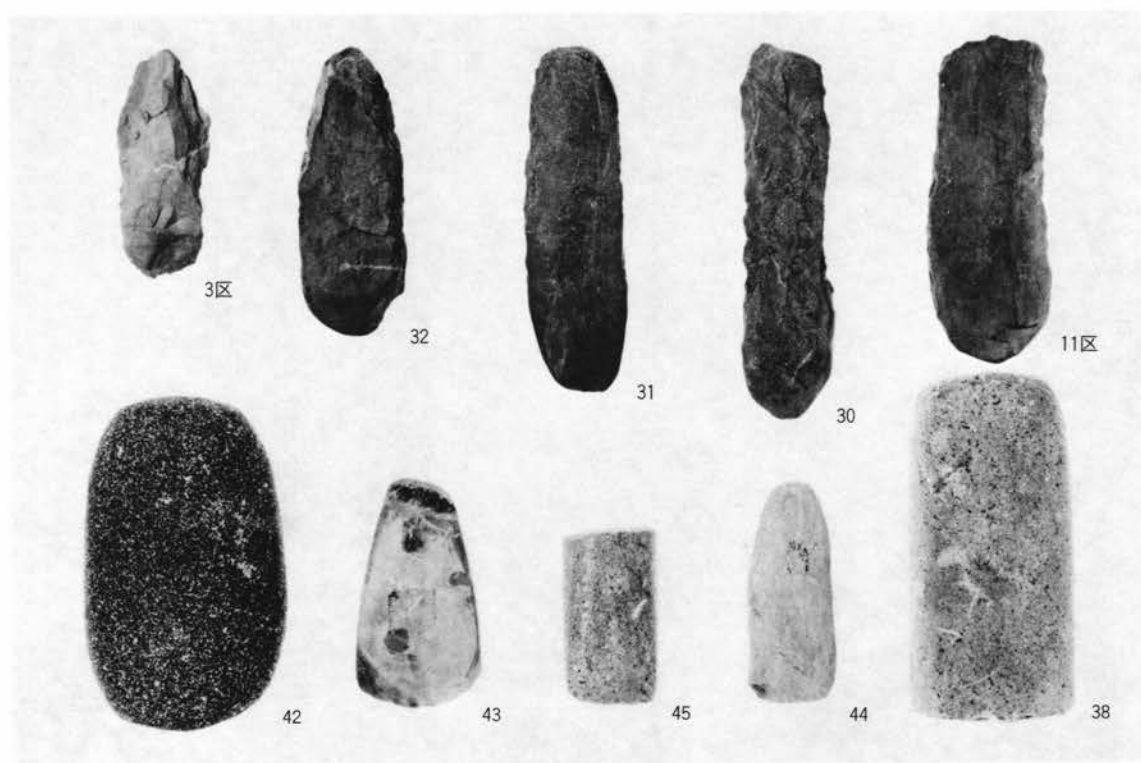
(1) 縄文土器



(2) 有舌尖頭器

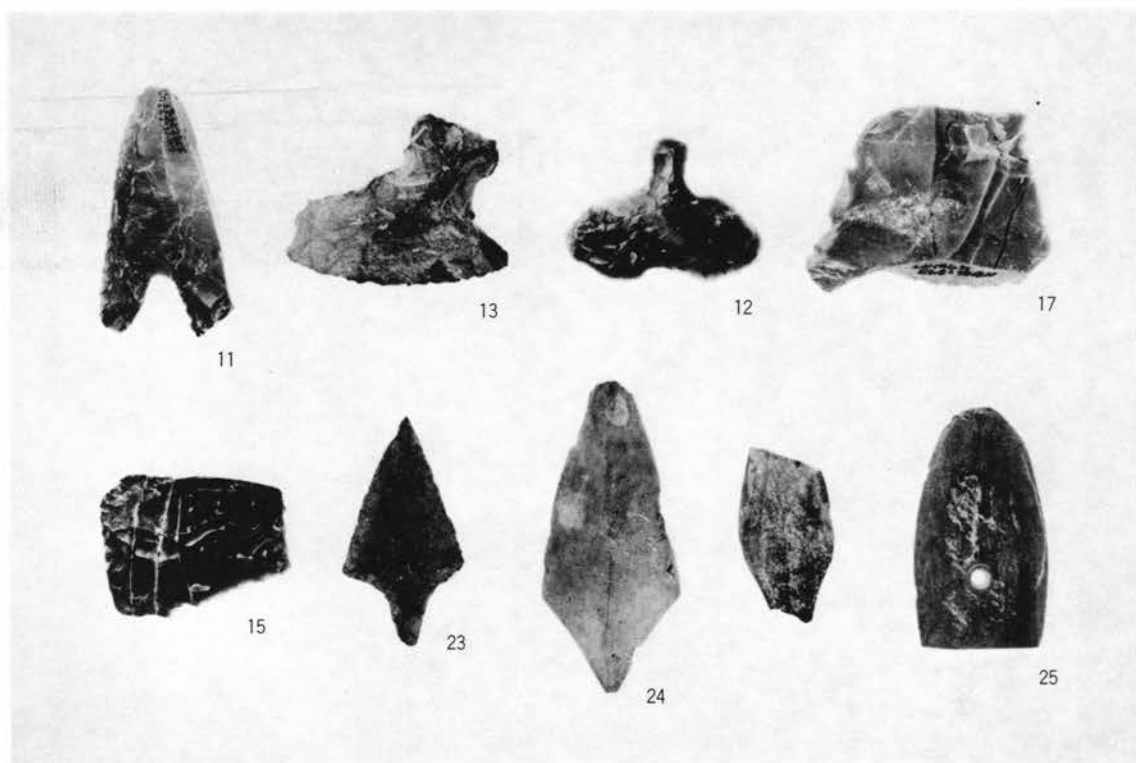


(1) 石器(1) 石鏃・块状耳飾り

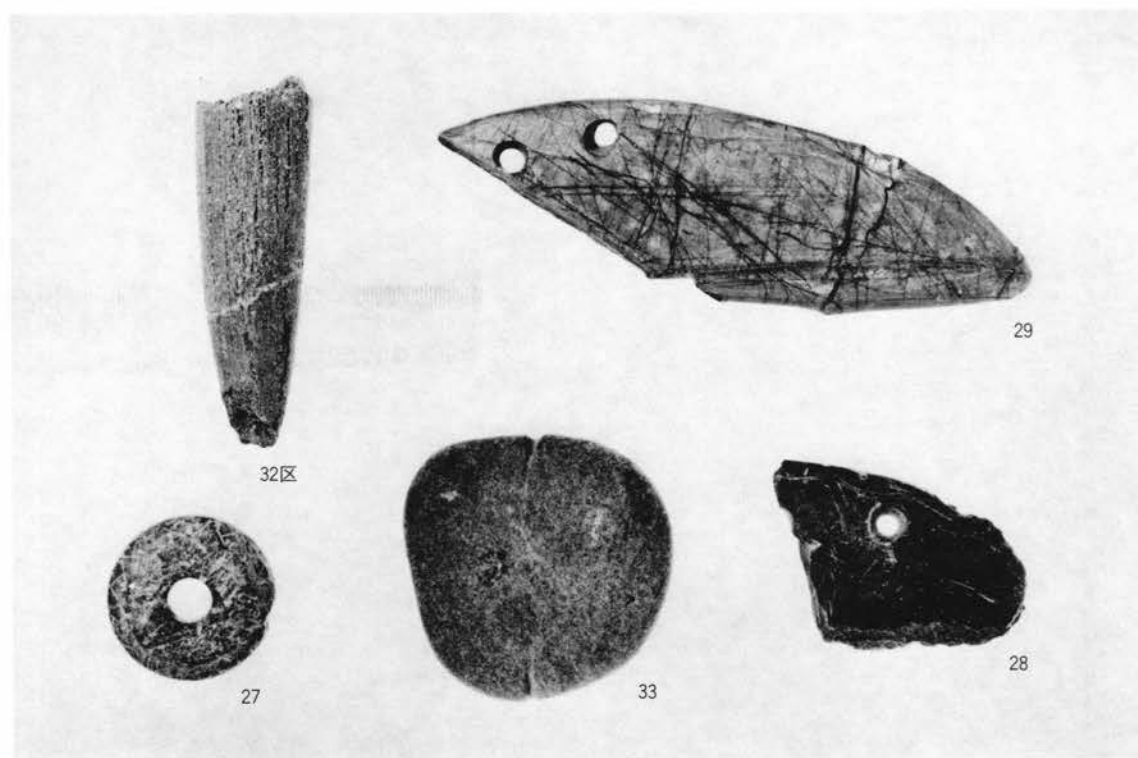


(2) 石器(2) 石斧・敲石





(I) 石器(3) 石鏃・石匙・剥片・鏃形石製品ほか



(2) 石器(4) 石棒・石庖丁・石錘・紡錘車





14



41



45



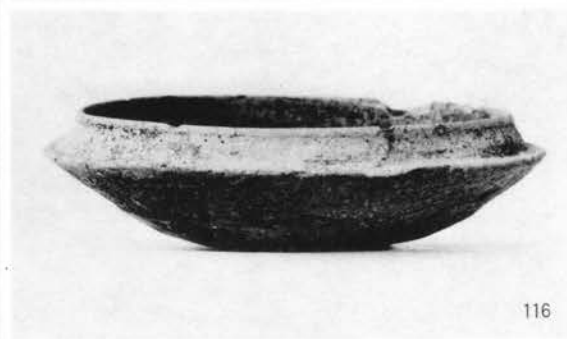
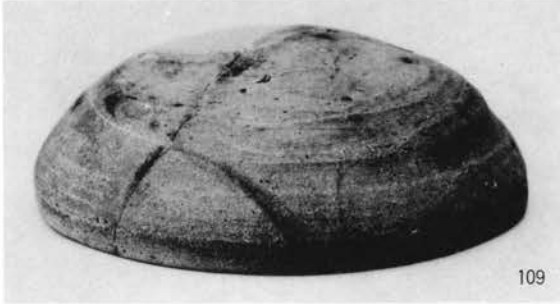
24



19



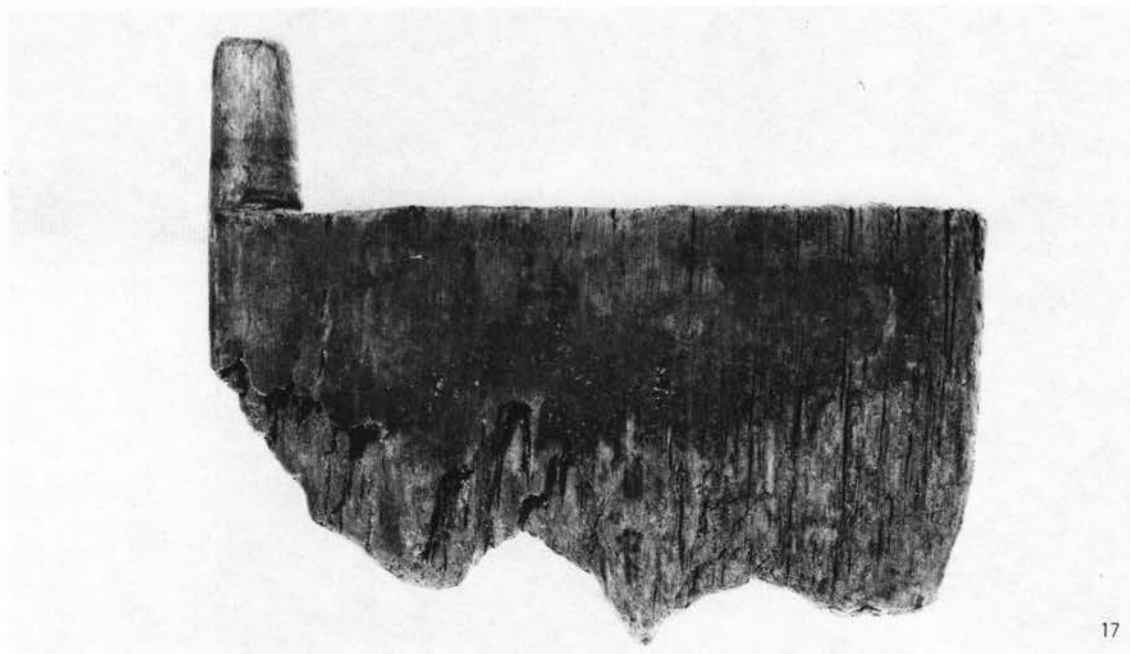
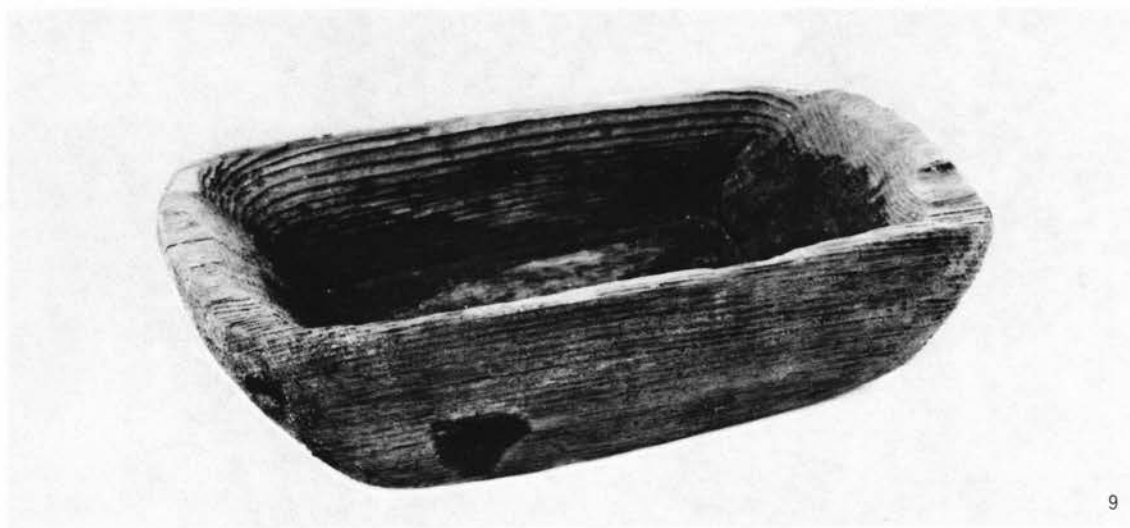
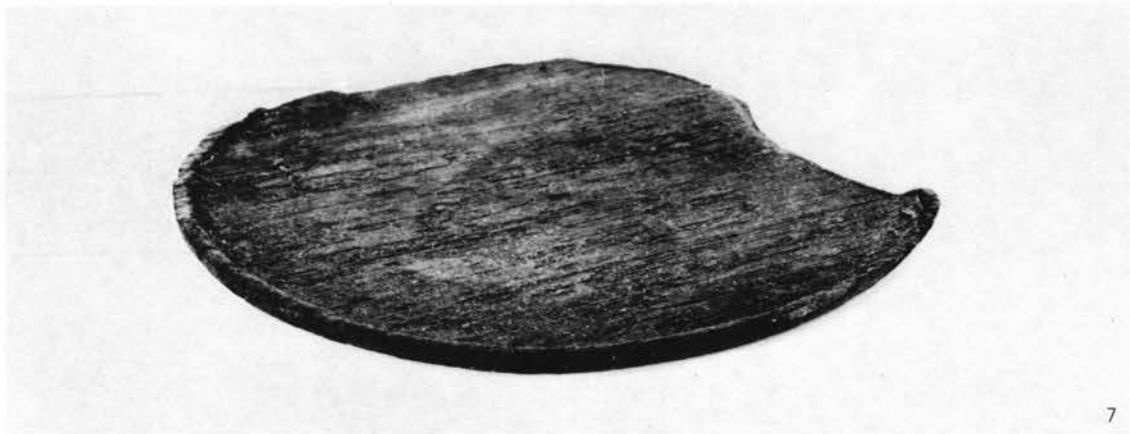
26

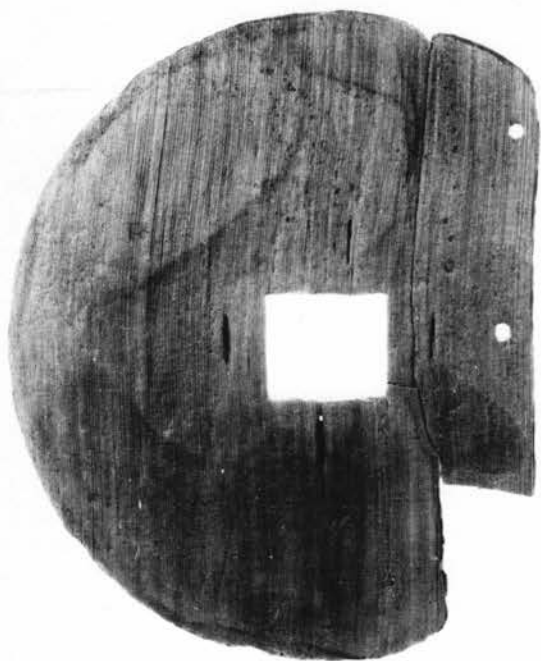


6区 土坑群出土遺物 (1)

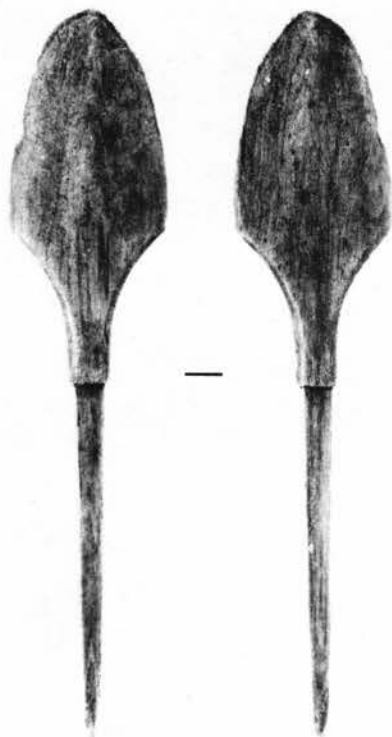


6区 土坑群出土遺物 (2)





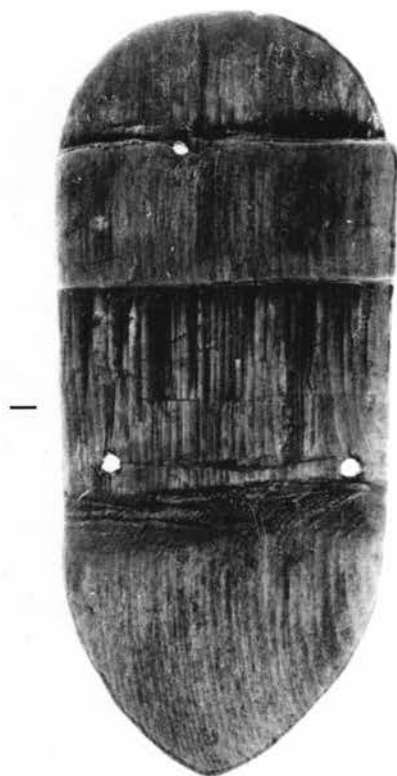
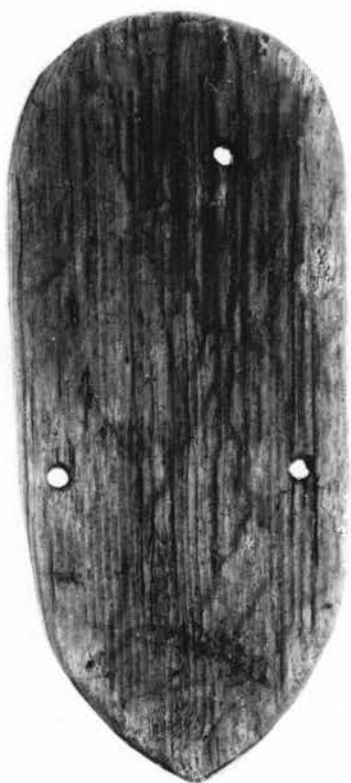
8



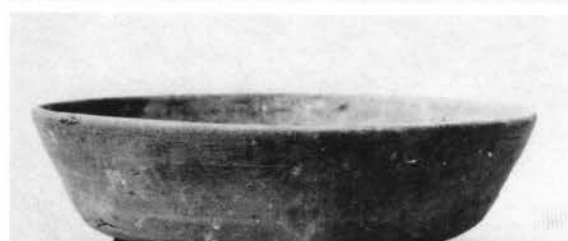
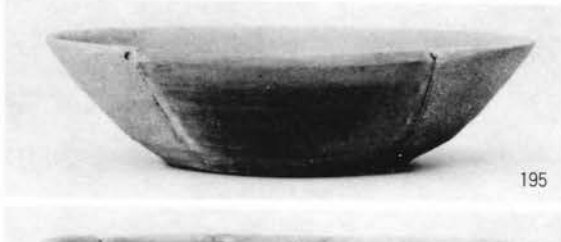
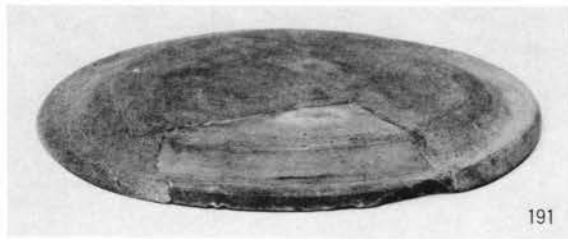
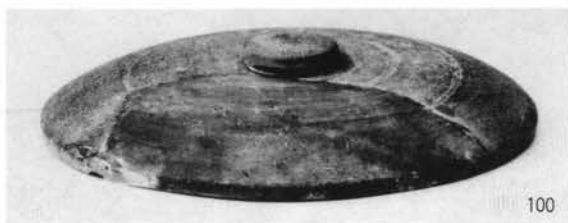
11



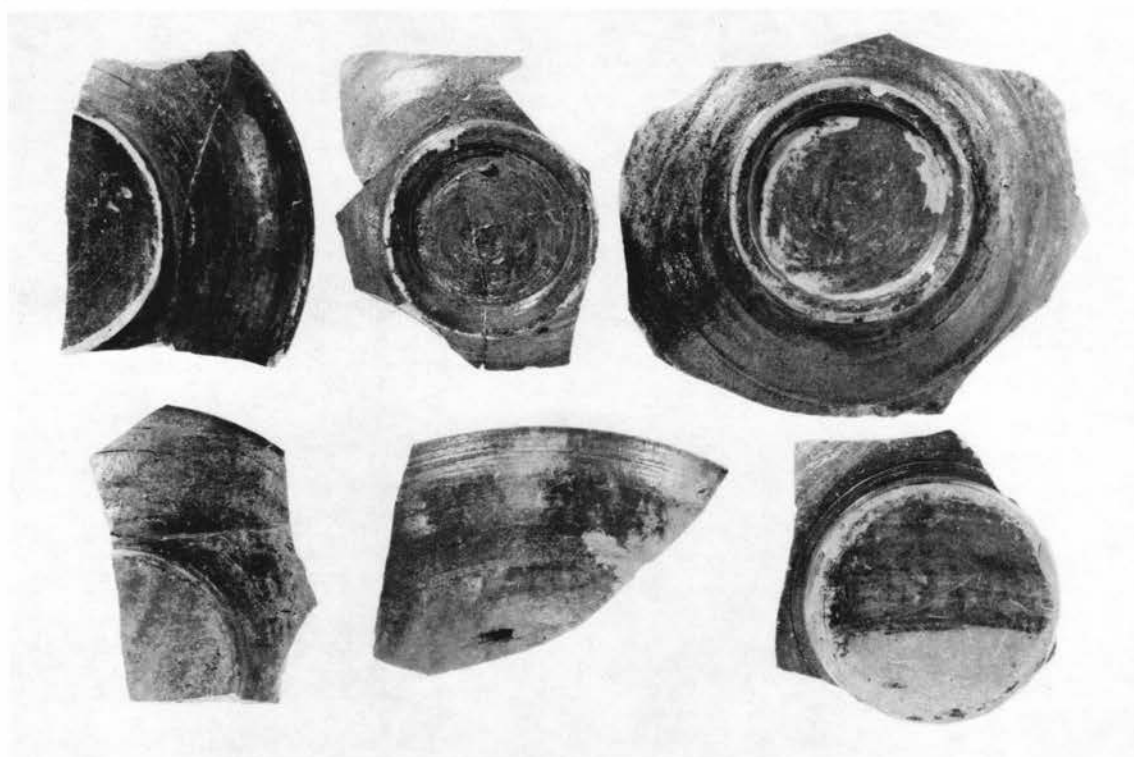
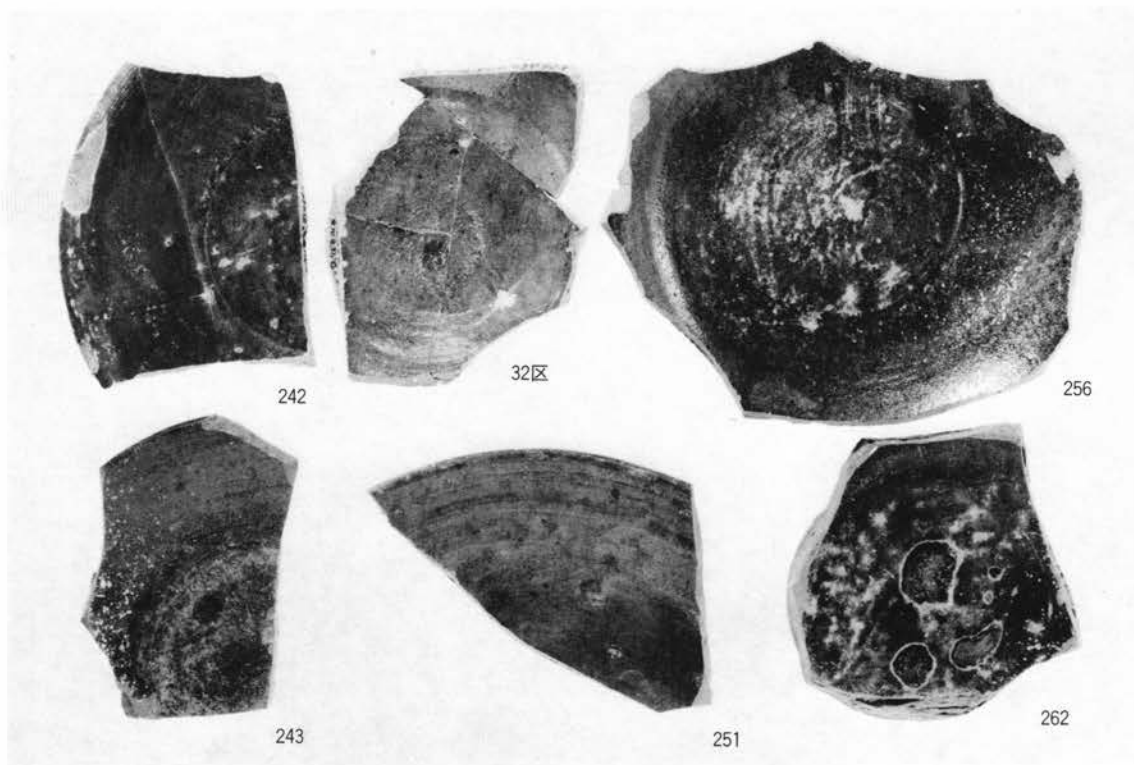
12



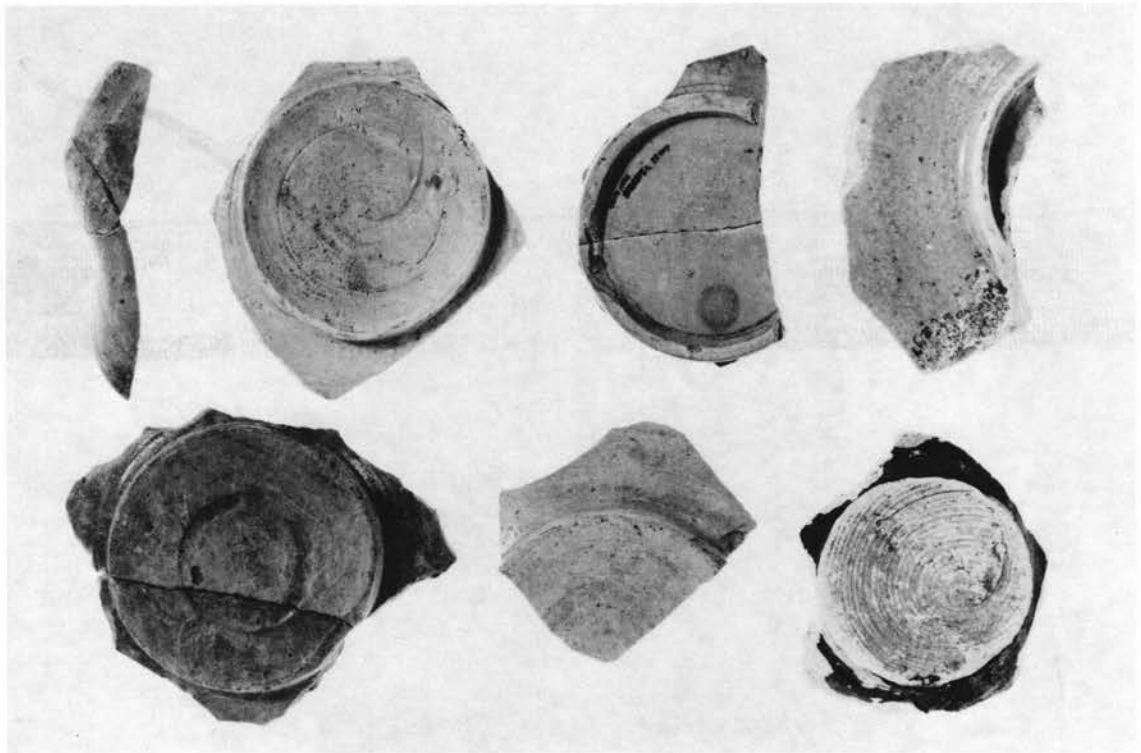
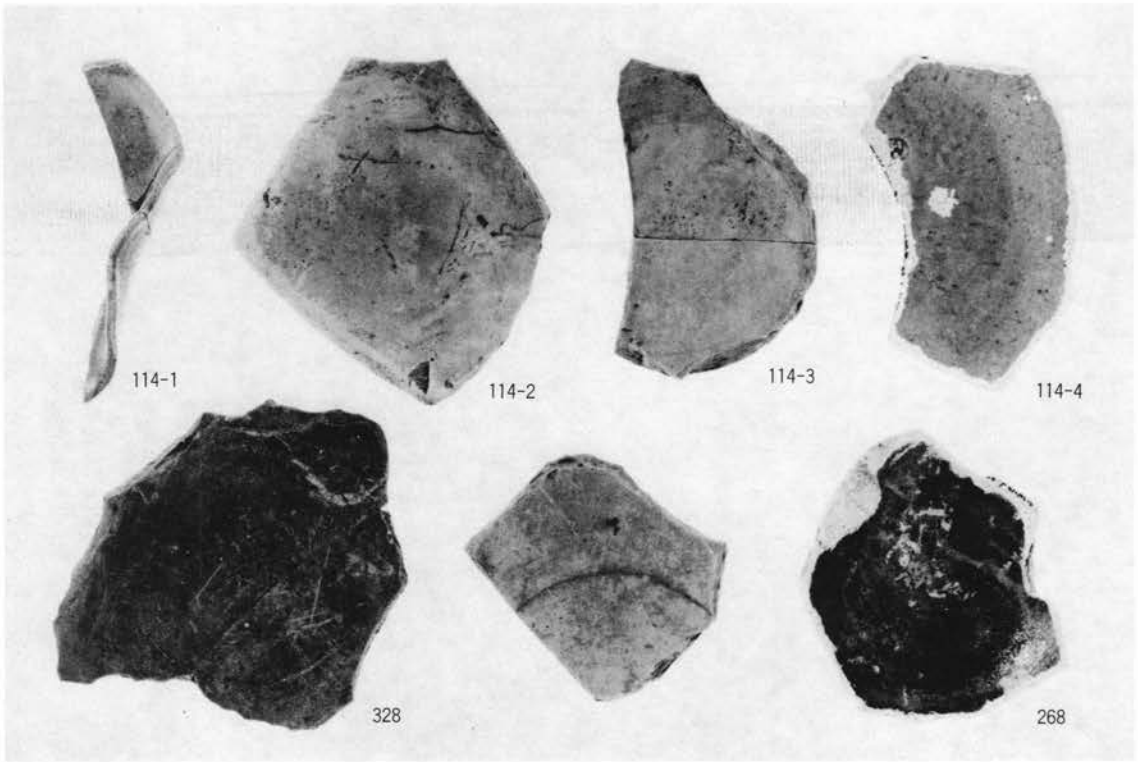
25



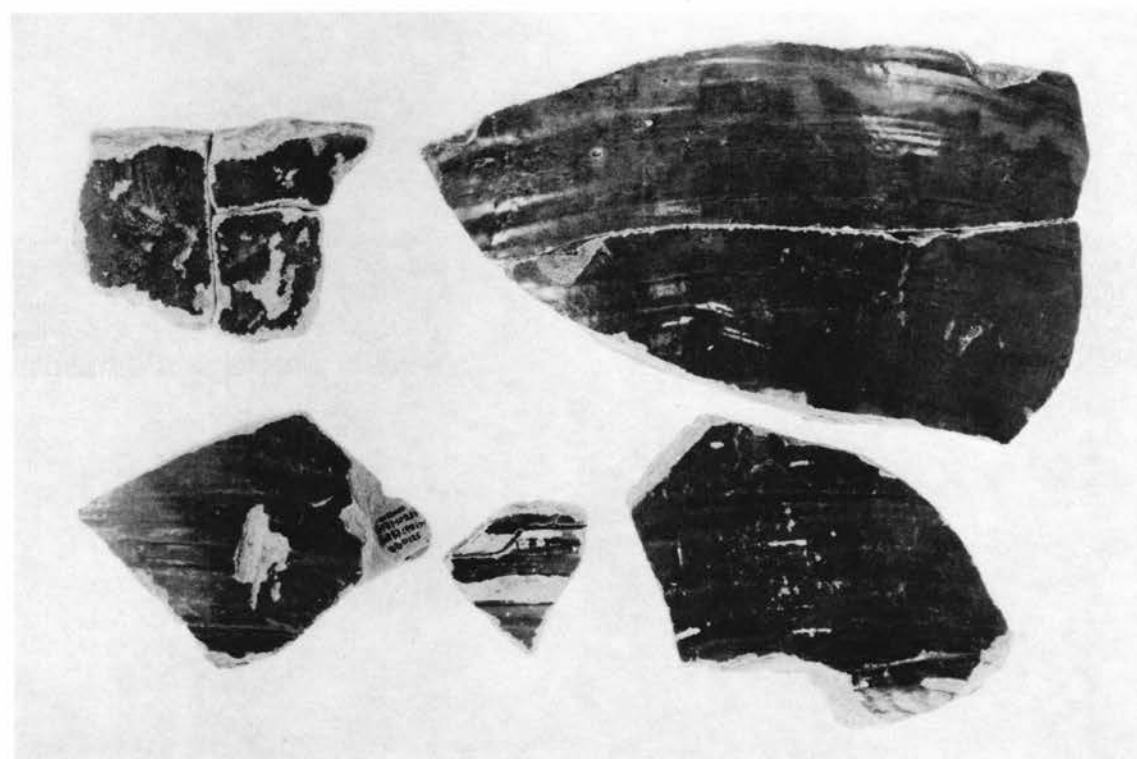
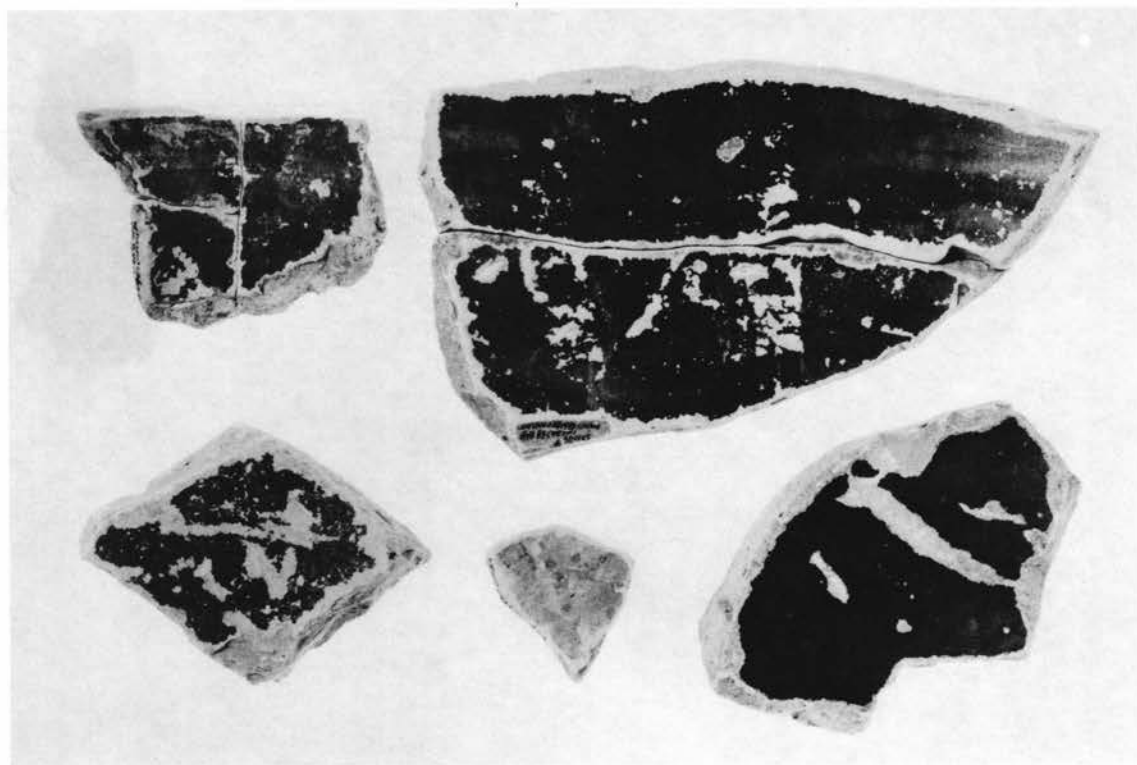
須恵器・緑釉陶器 (奈良・平安時代)



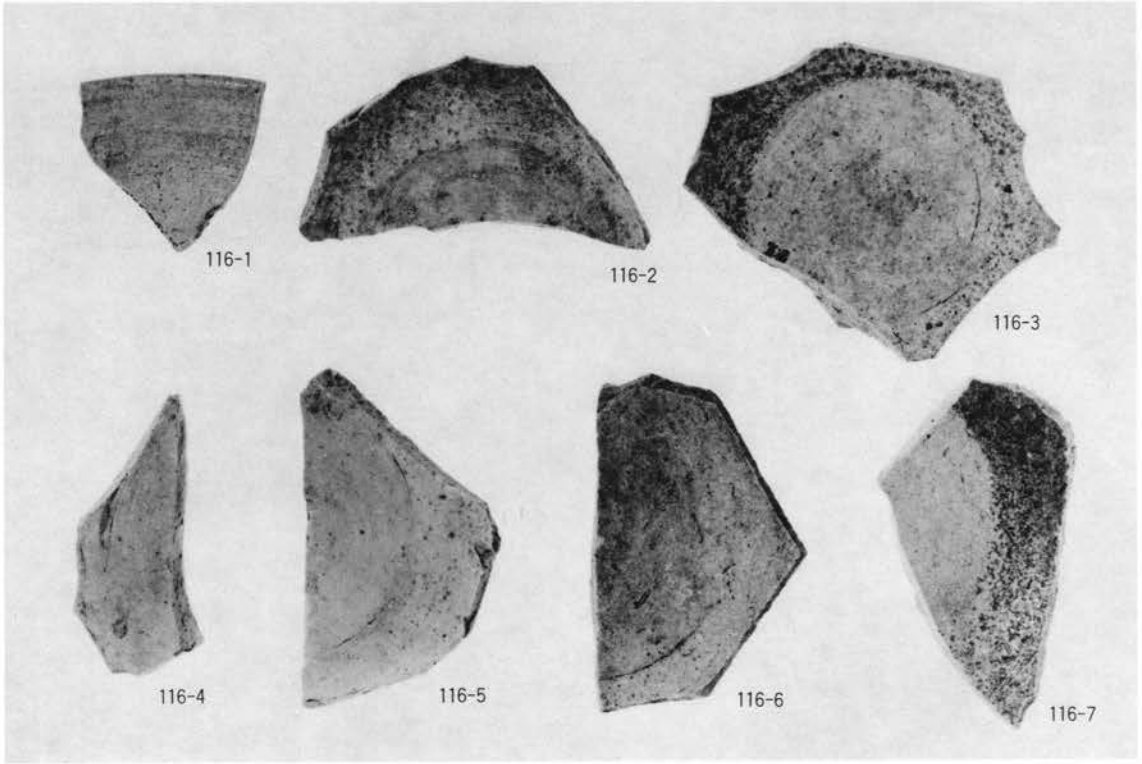
緑釉陶器 (1)



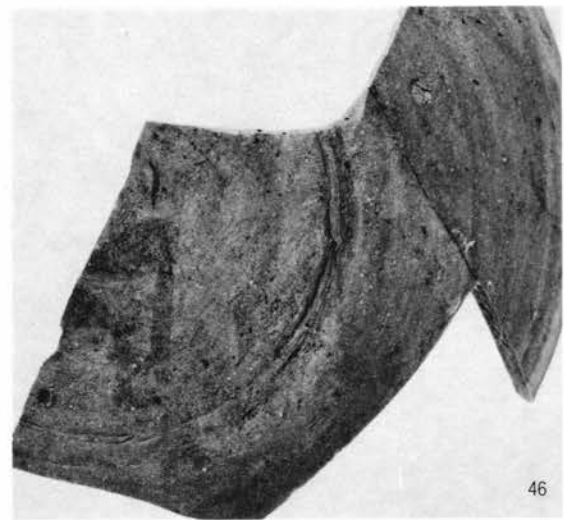
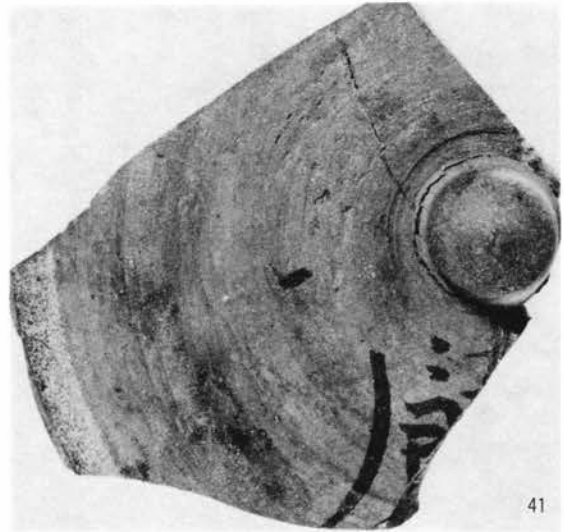
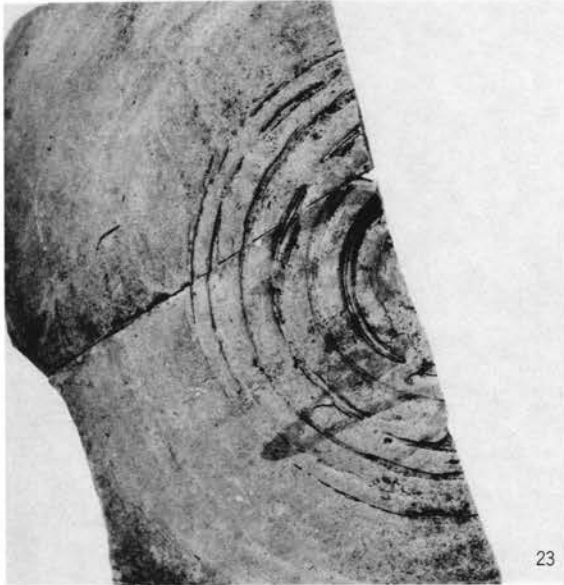
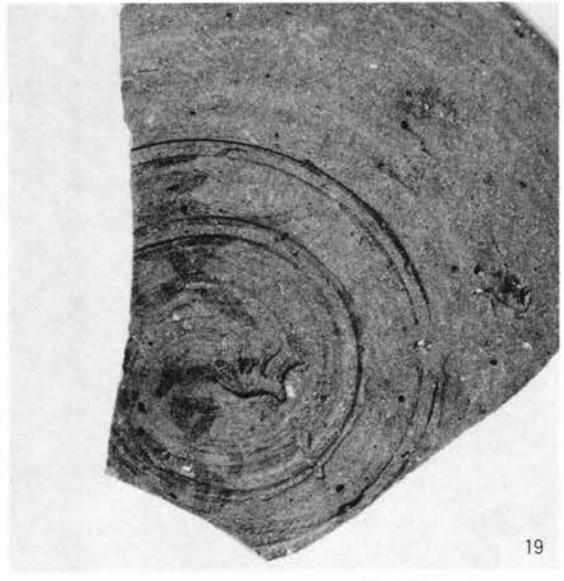
緑釉陶器 (2)

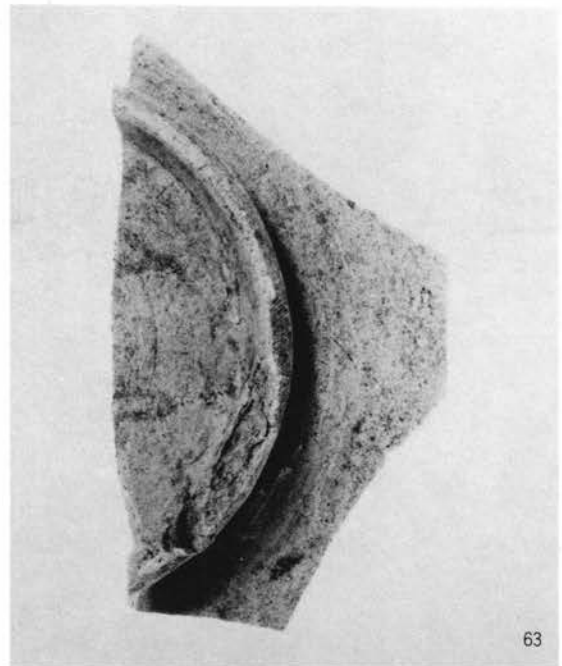
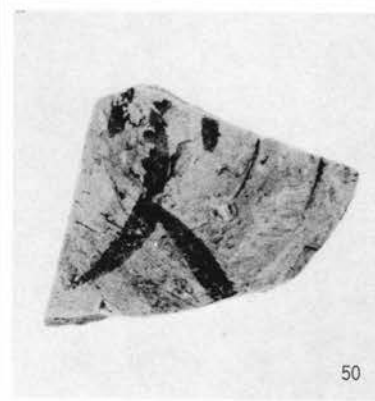
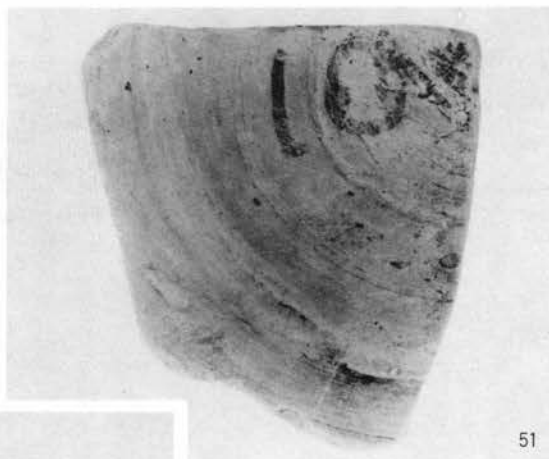


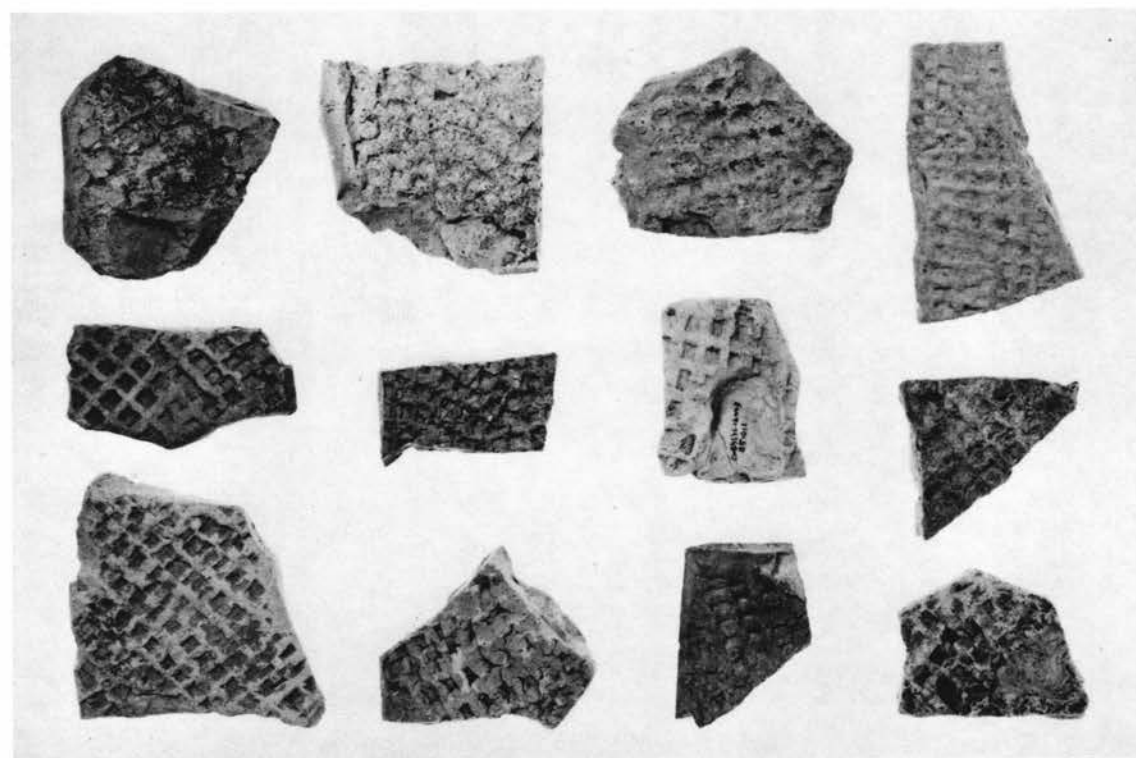
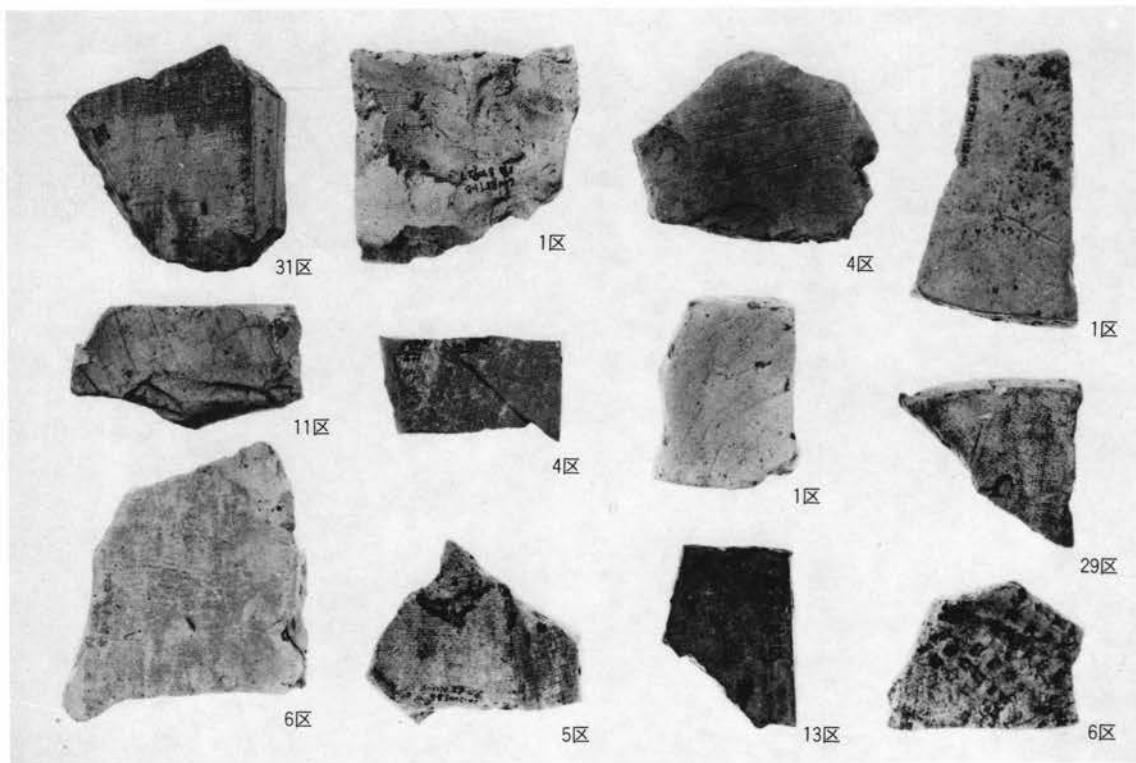
緑釉陶器 (3)

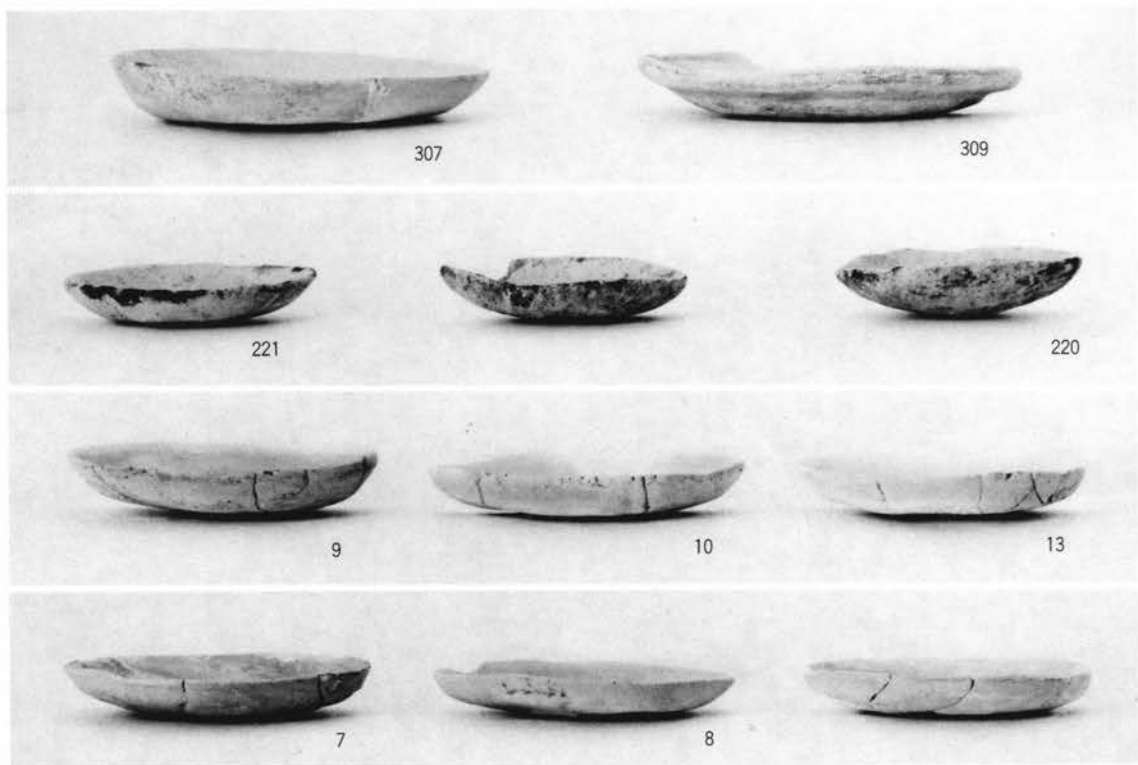


灰釉陶器

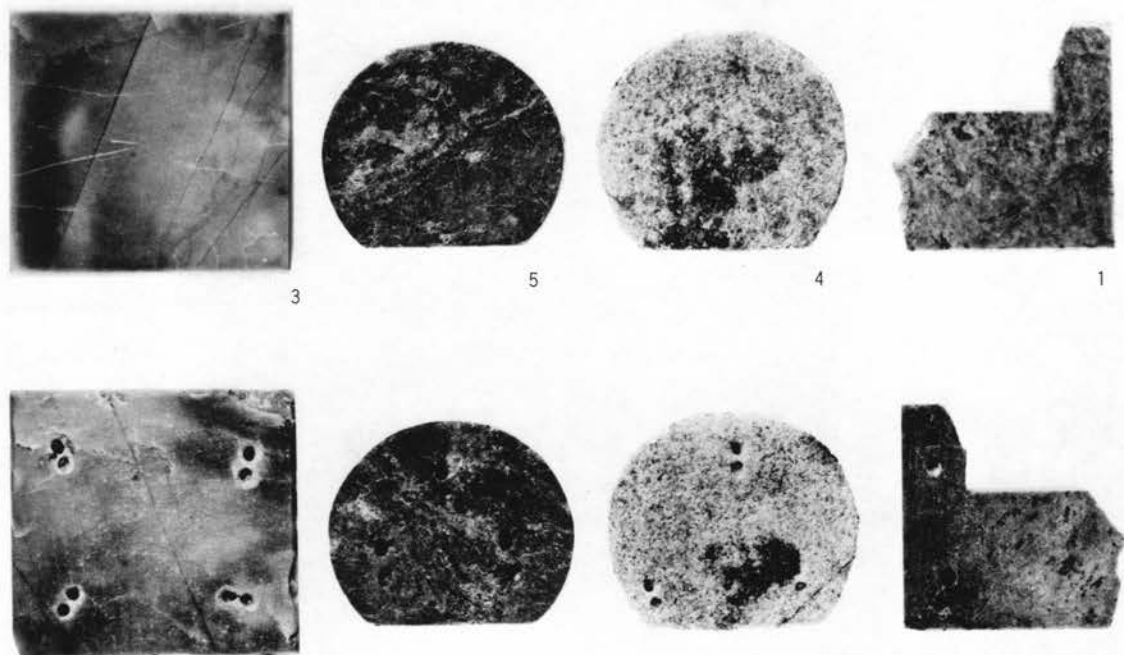




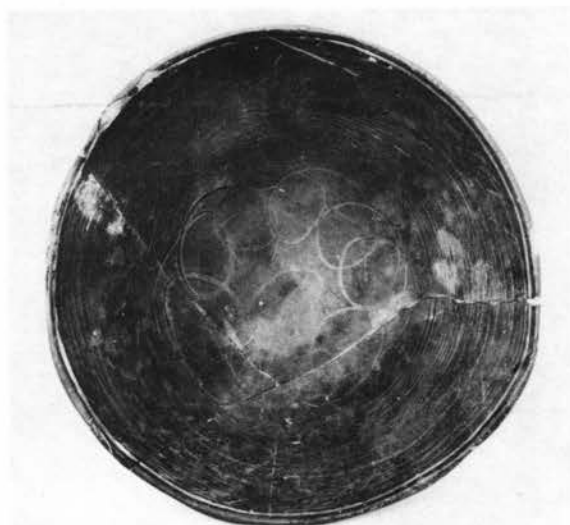




(1) 土師器皿



(2) 石 帶



1



165



235



195



243



144



173



179



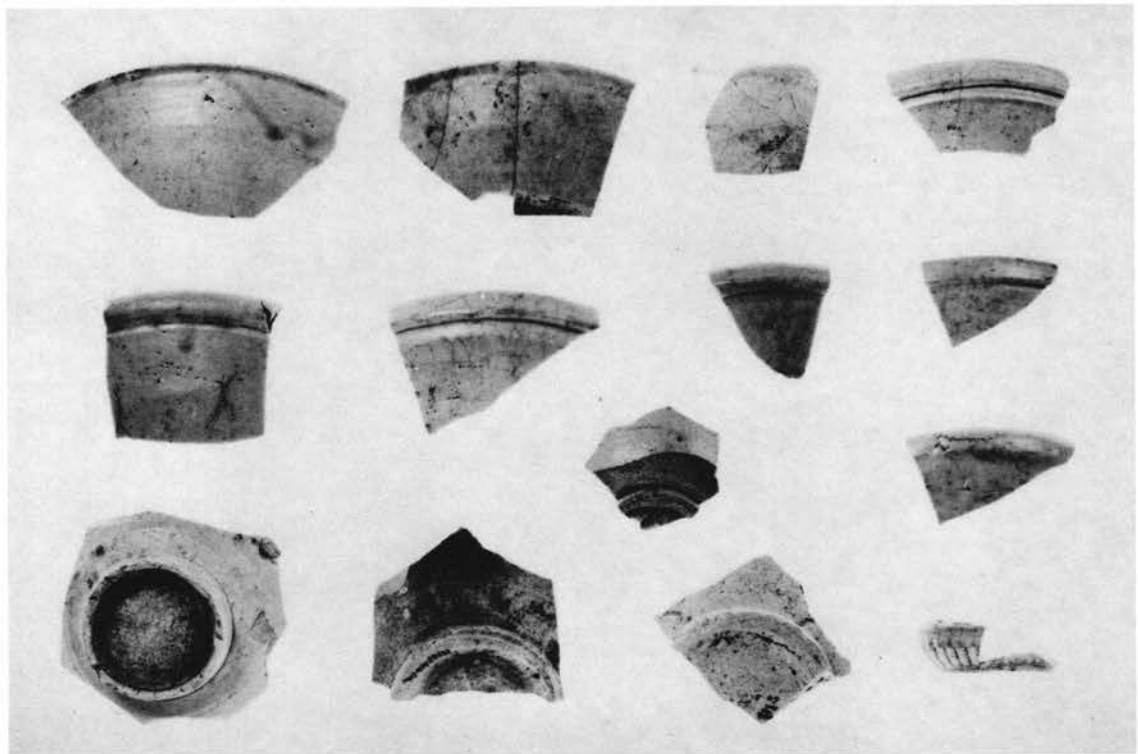
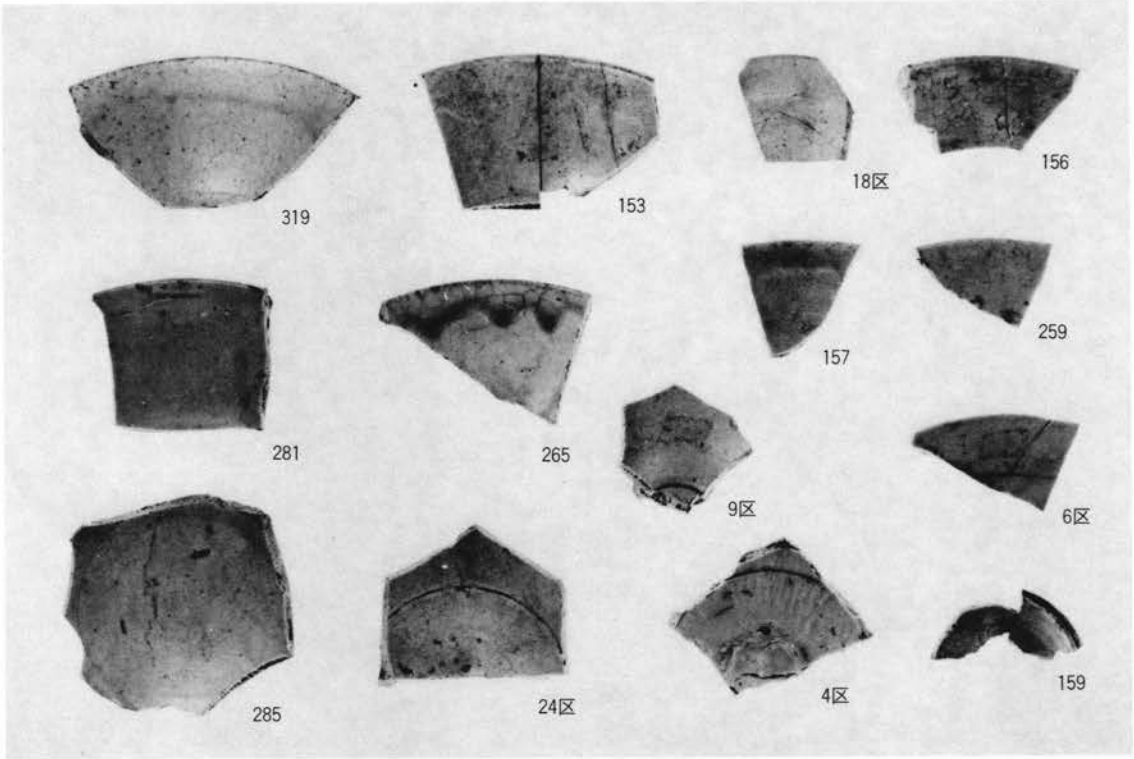
307



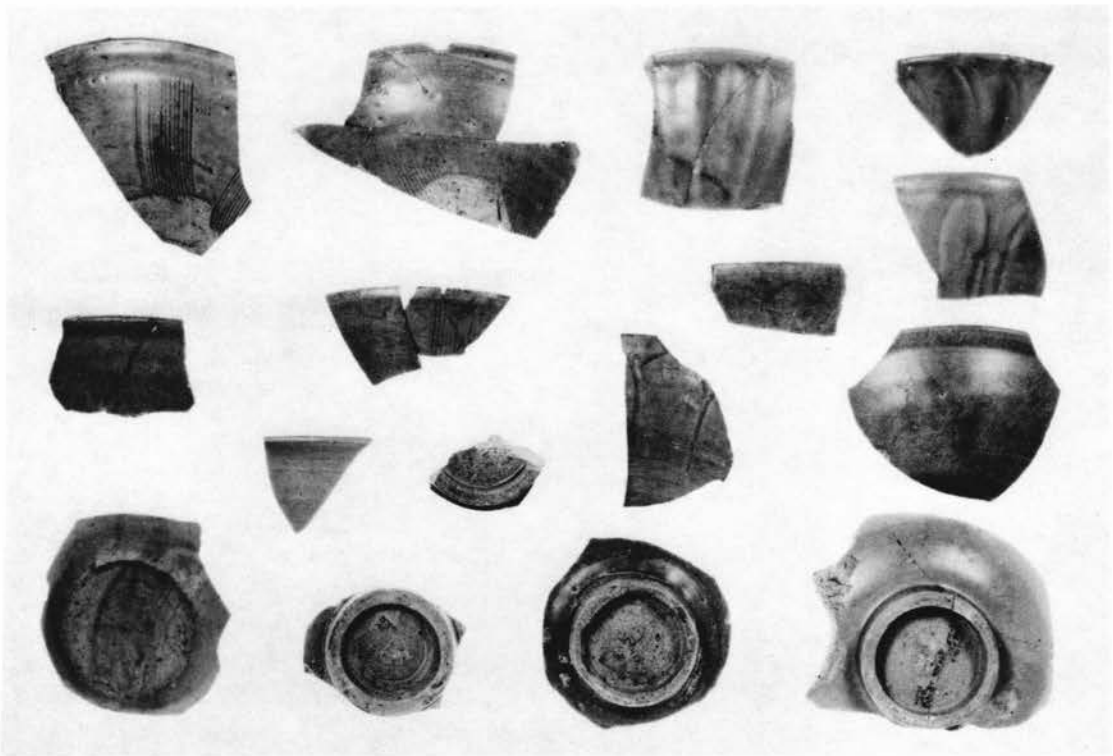
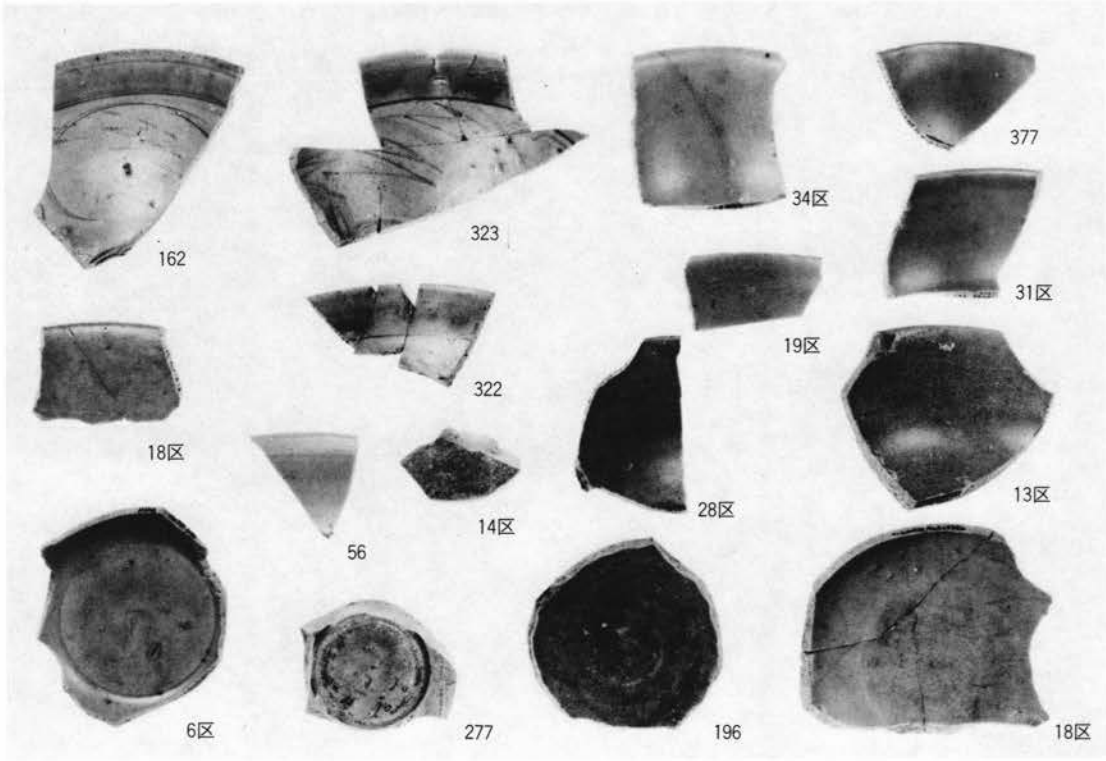
244



249



白磁



青磁

京都府遺跡調査報告書 第16冊

平成4年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3

Tel(075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

Tel(075)441-3155 (代)